B2 類：体部が直立または軽く外反し、頸部でくびれ、口縁部が外反して開く。

B3 類：体部が膨らみ、頸部でくびれ、口縁部が外反して開く。

深鉢 C 類：口縁部が内彎する。

C1 類：体部から口縁部にかけて内彎する。

C2 類：体部が外傾もしくは外反し、口縁部が内彎する。

C3 類：頸部でくびれ、口縁部が内彎する。

〔鉢の器形〕

口縁部から底部付近の断面形状に見られる違いに着目して、以下のように分類した。

鉢 A 類：底部付近から口縁部にかけて直線的に外傾する。

鉢 B 類：底部付近から口縁部にかけて外反して開く。

鉢 C 類：底部付近から口縁部にかけて内彎して立ち上がり、口縁部が直立する。

〔浅鉢の器形〕

口縁部から底部付近の断面形状に見られる違いに着目して、以下のように分類した。

浅鉢 A 類：底部付近から口縁部が直線的で、強く外傾する。

浅鉢 B 類：底部付近から口縁部にかけて強く内彎しながら外に開く。

②胎土及び装飾・器面調整

出土した土器には、胎土に植物繊維の痕跡が確認できるものと、確認できないものがある。土器の胎土に混和材として植物繊維を混入する状況は、早期末から大木３式までの間でみられる（白鳥 1989）ことから、ある程度の時期を特定する際に重要な要素である。そのため、まずそれらの有無について分類をおこなう。含まれている繊維がわずかな場合や、器面の状態により観察が困難なものもあるが、繊維の痕跡を確認できたものはⅠ類とし観察表に「含」、確認できなかったものはⅡ類とし観察表に「無」と記載している。

出土土器の装飾には、様々な施文具や粘土紐を用いた手法（要素）により、様々な意匠が表現されている。本来は、展開している文様は土器全体を見て判断する必要があるが、破片資料が多いため、施文具とそれを用いた手法により装飾を分類することとした。複数の要素により文様を構成するものが多いが、構成要素の中で主要と考えられるものや、先行研究により特定の時期にみられるとされているものを優先して分類する。なお、出土量がきわめて少なかった装飾（晩期）については分類をおこなわなかった。

Ⅰ A 類

〔主文様〕棒状工具やヘラ状工具を用いた 1 条単位の沈線文。

〔意匠〕口縁部に縦位・横位に引かれる。

〔地文〕斜行縄文、非結束羽状縄文。

Ⅰ B 類

〔主文様〕半截竹管状工具を用いた 2 条単位の平行沈線文、押引文、刺突文。

〔意匠〕口縁部から体部上半にかけて横位・波状・鋸歯状平行沈線文が引かれる。意匠は異なるが、口縁部に縦位平行沈線文が巡るもの（図版 21-10）、刺突文とそれに沿う沈線文で意匠を描くもの（図版 21-11）も共通した施文具のためここに含めた。

〔地文〕結節縄文、木目状撚糸文、葺瓦状撚糸文、撚糸文（単軸絡条体 1 類）。

Ⅰ C 類

〔主文様〕櫛歯状工具を用いた 3 条以上 1 単位の平行沈線文、押引文、刺突文。

〔意匠〕口縁部から体部に横位・波状・鋸歯状平行沈線文、コンパス文、刺突文が交互に施文される。口縁部に平行沈線文をめぐらせ、体部に撚糸文を施文するものもある。

〔地文〕撚糸文（単軸絡条体 1 類）。

Ⅰ D 類

〔主文様〕竹管状工具を用いた円形刺突文。

〔意匠〕口縁部から体部に施文され、平行沈線文が伴う場合もある。

〔地文〕斜行縄文、結節縄文。

Ⅰ E 類

〔主文様〕絡条体や縄文原体の側面を器面に押し付ける、押圧縄文。

〔意匠〕口縁部に沿う横位の押圧や、渦巻を描くもの、絡条体を押し付け意匠を描き、その間を撚糸文で埋めるものなどがある。

〔地文〕斜行縄文、非結束羽状縄文、結節縄文、組紐回転文、撚糸文（単軸絡条体 1 類）。

Ⅰ F 類

回転押捺施文の縄文を主体とするもの。施文される縄文の種類により細分される。一個体が複数の縄文により構成される場合は、口縁部を中心に文様帯のような装飾的役割をはたす縄文で分類している。また、回転押捺施文の縄文以外の装飾が施される土器があるが、装飾が限定的な使用の場合はⅠ F 類に、装飾が面的に広がるものはその装飾に分類した。

F1 類

〔主文様〕斜行縄文。原体の撚りは、単節が最も多く複節もみられる。０段多条となるものが多い。

〔意匠〕無文帯を作らず、口縁部上端から施文される。

F2 類

〔主文様〕末端ループ文。末端環部のみを施文する、重層末端ループ文が主体である。

〔意匠〕口縁部に重層末端ループ文を施文するものが多い。非結束羽状縄文や側面ループ文が伴う

場合がある。

F3 類

〔主文様〕側面ループ文。

〔意匠〕口縁部上端から体部にかけて施文するもの、その一部を磨消し意匠を描くもの、口縁部に施文され、斜行縄文や非結束羽状縄文が伴うものなどがある。

F4 類

〔主文様〕羽状縄文。ほとんどが非結束羽状縄文だが、わずかに結束第 1 種羽状縄文も含む。原体は、単節が最も多く複節もみられる。０段多条となるものが多い。

〔意匠〕無文帯を作らず、口縁部上端から施文される。

F5 類

〔主文様〕斜行縄文に結節回転文が伴うもの。

〔意匠〕無文帯を作らず、口縁部上端から施文される。

F6 類

〔主文様〕斜行縄文に附加条が伴うもの。

〔意匠〕無文帯を作らず、口縁部上端から施文される。

F7 類

〔主文様〕組紐回転文。

〔意匠〕無文帯を作らず、口縁部上端から施文される。

F8 類

〔主文様〕撚糸文（単軸絡条体 1 類）。

〔意匠〕口縁部上端から無文帯を作らずに施文するもの、横位施文と無文帯部分を交互につくるもの、施文方向を変えることで一部ひし形をつくるものなどがある。

F9 類

〔主文様〕木目状撚糸文。

〔意匠〕無文帯を作らず、口縁部上端から施文される。

F10 類

〔主文様〕結節縄文。

〔意匠〕口縁部に、横位に施文される場合が多い。

F11 類

〔主文様〕葺瓦状撚糸文。

〔意匠〕無文帯を作らず、口縁部上端から施文される。

F12 類

〔主文様〕網目状撚糸文。

〔意匠〕口縁部上端から施文される。口縁部に施文され、結節縄文や組紐回転文が伴う場合もある。また、口縁部形態が波状縁のものについて、波頂部下に縦位や J 字状の粘土紐貼付文が施されるも

のもある。

F13 類：原体不明。

Ⅰ G 類

〔主文様〕ナデやミガキ等の調整で無文に仕上げられるもの。

Ⅱ A 類

粘土紐貼付文や隆線文を用いて意匠を描くものを主体とする。刺突文や刻目文、押圧縄文などの加飾を行う場合もある。粘土紐の幅、描かれる意匠やその施文範囲、貼付け後の調整方法などに着目して細分する。

A1 類

〔意匠〕口縁部に加飾された横位貼付文が沿うもの。加飾は刻目文や円形刺突文により施される。横位貼付文の下に円形貼付文が付く場合もある。

〔地文〕斜行縄文。

A2 類

〔意匠〕波状、渦巻、梯子状、格子状やそれらを組み合わせて幾何学的意匠を描く粘土紐貼付文が主体となるもの。一個体内で貼付文の太さを明瞭に分ける場合や加飾を行う場合もある。施文は口縁部内面や口唇部、体部の広範囲で全面に施されることが多い。体部は地文のみで、口縁部に波状や渦巻状の突起が伴うものもある。

〔地文〕斜行縄文、斜行縄文に結節回転文が伴うもの、撚糸文（単軸絡条体 1 類）。

A3 類

〔意匠〕鋸歯状、梯子状、電光状を描く粘土紐貼付文が主体となるもの。体部の広範囲で全面に施文されることが多く、口縁部に鋸歯状突起が付くことがある。A2 類に比べ、貼付文に角がある場合が多い。

〔地文〕斜行縄文、撚糸文（単軸絡条体 1 類）。

A4 類

〔意匠〕鋸歯状、横位貼付文が主体となるもの。施文範囲は口縁部付近で収まり、鋸歯状貼付文の上下に横位貼付文がめぐり区画するものや、鋸歯状と横位貼付文が交互に施文されるものがある。口縁部に鋸歯状隆帯が巡る場合がある。

〔地文〕斜行縄文、縦走縄文、撚糸文（単軸絡条体 1 類）。

A5 類

〔意匠〕他の A 類に比べて、粘土紐の幅が 2mm 程度と細い貼付文で幾何学的な意匠を描く（ソーメン状浮線文）。その貼付文上を半截竹管状工具により刻目文を施す場合（結節浮線文）もある。

〔地文〕斜行縄文、非結束羽状縄文。

A6 類

〔意匠〕口縁部を四単位に区画する貼付文が施されるものが主体である。縦位の貼付文が多く、貼付文上に刻目文や刺突文、指頭押圧などの加飾が施されることが多い。また、口縁部が折返されるものや、口縁部文様帯に短沈線文が描かれる場合がある。これらの要素が必ずしも全て揃うわけではないが、複数伴う場合が多いため分類上同一とした。

〔地文〕斜行縄文、斜行縄文に結節回転文が伴うもの、結節回転文のみが施文されるもの、結束第１種羽状縄文。

A7 類

〔意匠〕隆沈線文で体部をＹ字などに区画するもの。押引文が伴う場合がある。

〔地文〕斜行縄文。

A8 類

〔意匠〕口縁部に空洞を持つ立体突起やＳ字状突起を持つものや、それらに縦位の押圧縄文が伴うもの。これらの要素が必ずしも全て揃うわけではないが、伴う場合が多いため施文方法は異なるが分類上同一とした。

〔地文〕斜行縄文。

A9 類

〔意匠〕口縁部文様帯に隆線文・隆沈線文で横位渦巻を描くもの。

〔地文〕斜行縄文。

A10 類

〔意匠〕隆線文に刺突文が伴うものや、ヒレ状隆線文に沈線文が伴うもの。

〔地文〕斜行縄文。

Ⅱ B 類

１条単位の沈線文が主体となるもの。棒状工具やヘラ状工具を用いて、１条単位の沈線文を施す。棒状工具には、先端が丸いものや平坦なものなどが認められる。

B1 類

〔意匠〕体部上半に鋸歯状の沈線文が描かれる。１条が多いが、２～３条のものもこれに含めた。

〔地文〕斜行縄文、撚糸文（単軸絡条体１類）。

B2 類

〔意匠〕体部に電光状の沈線文が描かれるもの。

〔地文〕無し。

B3 類

〔意匠〕体部上半に渦巻や縦位弧状などの幾何学的意匠を描く。

〔地文〕斜行縄文。

B4 類

〔意匠〕沈線文で弧状などの区画を描き、その中あるいはその周りに斜行縄文を施文する。斜行縄

文は沈線文で描いた後充填する場合と、描く前に施文する場合がある。無文部はミガキにより調整されていることが多い。

〔地文〕斜行縄文。

Ⅱ C 類

半截竹管状工具を用いた平行沈線文や押引文、刺突文が主体となるもの。先端が２つに分かれる半截竹管状工具の内側を用いて、２条１組の沈線文や半月状の刺突文。一個体の中で、これら複数の手法を併用することが多くあるため、分類上は一括する。

C1 類

〔意匠〕体部上半に交互弧文が描かれる。口縁部に鋸歯状隆帯が巡る場合がある。

〔地文〕斜行縄文。

C2 類

〔意匠〕体部下半まで直線的な横位、縦位、斜位の組み合わせによる意匠が描かれる。直交する部分にボタン状貼付文が伴う場合が多い。口縁部は肥厚し、体部とは異なる意匠が描かれる。破片資料で平行沈線文が無い場合でも、口縁部の肥厚やボタン状貼付文が共通するものはここに含める。

〔地文〕斜行縄文、撚糸文（単軸絡条体１類）。

Ⅱ D 類

〔主文様〕短沈線文、三角状刻目文、交互刺突文。

〔意匠〕隆線文や沈線文等で区画された範囲内を短沈線文で充填するものが多く、そこに三角状刻目文や交互刺突文が伴うことが多い。

〔地文〕斜行縄文、結節回転文、斜行縄文に結節回転文が伴うもの。

Ⅱ E 類

回転押捺施文の縄文が主体となるもの。一部の原体は、一括して分類している。

E1 類

〔主文様〕縄文（斜行・横走・縦走縄文）、羽状縄文、斜行縄文に結節回転文が伴うもの、斜行縄文に附加条が伴うもの、撚糸文（単軸絡条体１類）。ほとんどが斜行縄文である。

〔意匠〕口縁部上端から施文される。

E2 類

〔主文様〕S 字状連鎖撚糸文。

〔意匠〕口縁部上端から施文される。

E3 類：原体不明

表 61　器形・装飾分類組み合わせ

胎土	装飾	器種・器形																				
		深鉢												鉢			浅鉢			口縁部形態		
		A	A1	A2	A3	B	B1	B2	B3	C	C1	C2	C3	A	B	C	A	B	C	平縁	波状縁	小波状縁
I	A	○																		○		
	B	○			○					○		○								○	○	
	C	○			○					○										○	○	
	D	○																		○		
	E	○				○				○		○								○	○	
	F1	○		○						○							○			○	○	
	F2	○		○						○		○	○							○	○	
	F3	○		○	○	○				○										○	○	
	F4	○		○													○			○	○	
	F5	○		○																○	○	
	F6	○			○					○										○	○	
	F7	○		○	○					○										○	○	
	F8	○	○	○																○	○	
	F9	○								○										○	○	
	F10	○		○	○	○				○		○		○			○			○	○	
	F11	○																		○	○	
	F12	○								○										○	○	
	F13																					
	G													○			○				○	
Ⅱ	A1	○			○	○														○		○
	A2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○	○			○	○	
	A3	○		○		○	○	○					○							○	○	
	A4	○			○	○	○	○	○						○					○	○	
	A5	○			○					○			○							○	○	
	A6	○	○		○	○	○	○		○			○					○		○	○	
	A7			○			○						○							○	○	
	A8	○			○	○				○			○					○		○	○	
	A9					○		○		○		○								○	○	
	A10	○				○		○		○										○	○	
	B1	○		○		○		○		○										○	○	
	B2									○										○		
	B3				○								○							○	○	
	B4	○			○	○		○												○	○	
	C1					○			○											○	○	
	C2	○		○	○	○	○	○	○	○		○	○							○	○	
	D	○								○			○							○	○	
	E1	○	○	○	○		○	○	○	○	○									○	○	○
	E2									○										○		
	E3																					
	F1	○		○													○	○		○	○	
	F2	○				○														○		○

Ⅱ F 類

無文

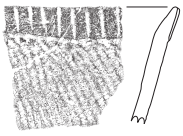
F1 類

〔主文様〕ナデやミガキ等の調整で無文に仕上げられるもの。

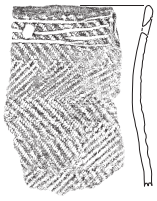
F2 類

〔主文様〕粘土紐積上痕跡を明瞭に残すもの。

装飾ＩA類

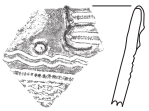


1：深鉢 A
（No.7741）
21-9

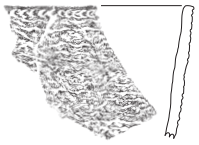


2：深鉢 A
（No.9231）
31-14

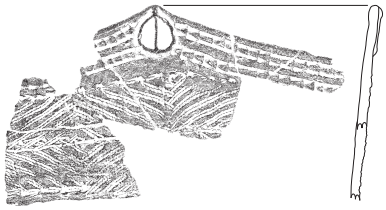
装飾ＩB類



3：深鉢 A
（No.4164）
22-8



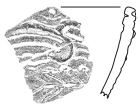
4：深鉢 A
（No.1529）
31-15



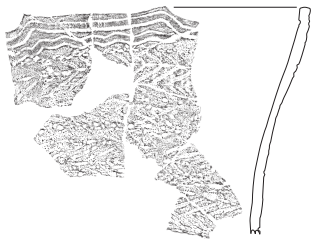
5：深鉢 A
（No.8443）
124-1

6：深鉢 A3
（No.9888）
127-8

7：深鉢 C
（No.7990）
21-11

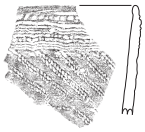


8：深鉢 C
（No.6667）
21-12



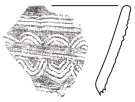
9：深鉢 C2
（No.6013）
22-1

装飾ＩC類

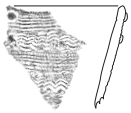


10：深鉢 A
（No.8993）
22-9

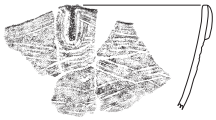
11：深鉢 A
（No.9646）
124-3



12：深鉢 A3
（No.6696）
22-12



13：深鉢 A3
（No.6715）
32-2



14：深鉢 C
（No.8080）
127-10

装飾ＩD類

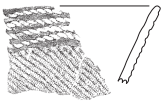
15：深鉢 A
（No.1566）
32-5

16：深鉢
（No.6521）
23-6

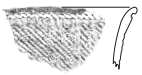
17：深鉢 A
（No.9890）
127-11

装飾ＩE類

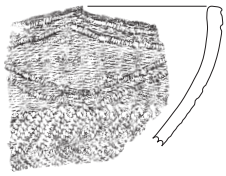
18：深鉢 A
（No.9853）
23-1



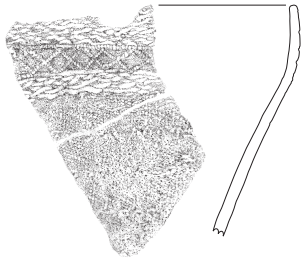
19：深鉢 A
（No.2838）
23-2



20：深鉢 B
（No.9148）
32-3



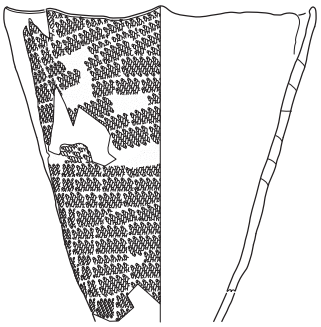
21：深鉢 C
（No.9845）
23-4



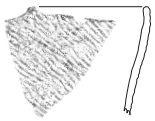
22：深鉢 C2
（No.9504）
23-5

装飾ＩF1類

23：深鉢 A
（No.1460）
17-1



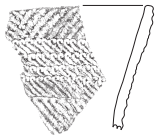
24：深鉢 A2
（No.8433）
122-1



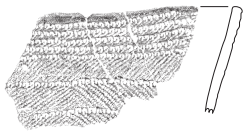
25：深鉢 C
（No.9872）
117-1

26：浅鉢 A
（No.8032）
122-2

装飾ＩF2類



27：深鉢 A
（No.9858）
17-3

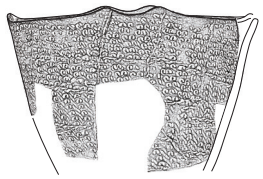


28：深鉢 A
（No.8506）
122-3

0　20cm
(S=1/6)

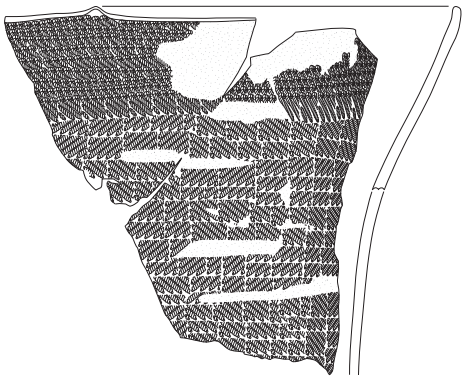
図版 194　器形・装飾分類図（1）

装飾ⅠF2類

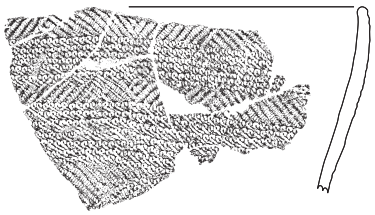


1：深鉢 A2
（№8325）
126-5

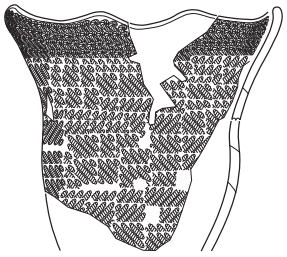
2：深鉢 C
（№8311）
122-4



5：深鉢 C2
（№7594）
56-1

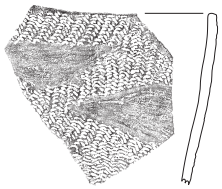


3：深鉢 C
（№5735）
17-5

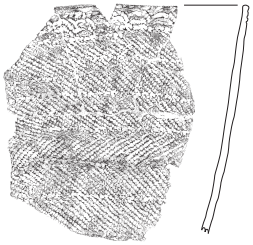


4：深鉢 C3
（№2380）
17-4

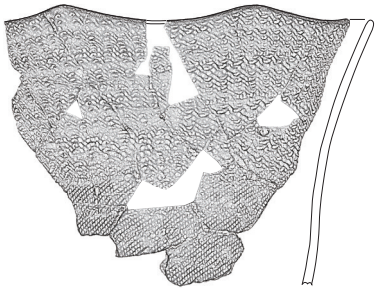
装飾ⅠF3類



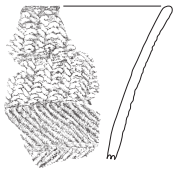
6：深鉢 A
（№8793）
17-8



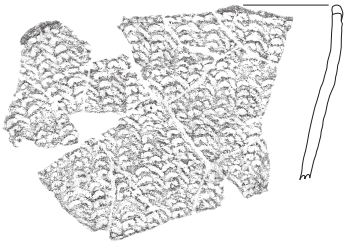
7：深鉢 A2
（№8051）
122-5



8：深鉢 A3
（№8018）
122-7

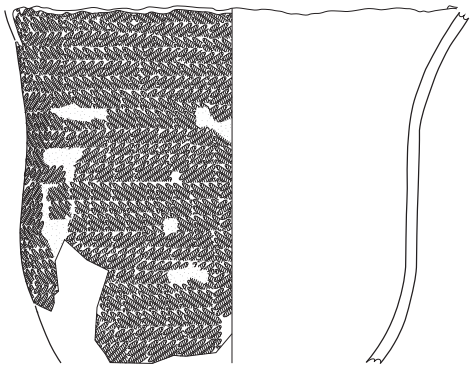


9：深鉢 B
（№8064）
122-6

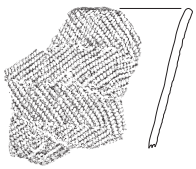


10：深鉢 C
（№2975）
17-7

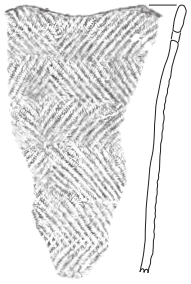
装飾ⅠF4類



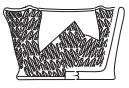
11：深鉢
（№1031）
18-1



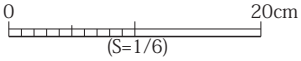
12：深鉢 A
（№8303）
123-1



13：深鉢 A2
（№1363）
18-2

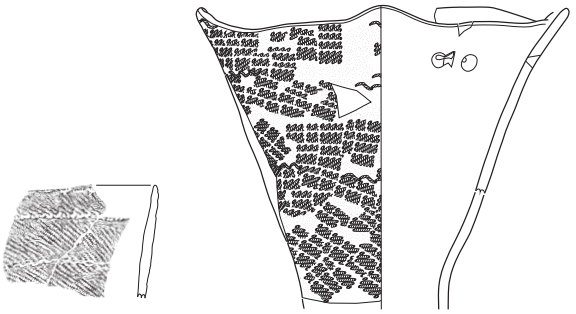


14：浅鉢 A
（№9721）
31-4



図版 195　器形・装飾分類図（2）

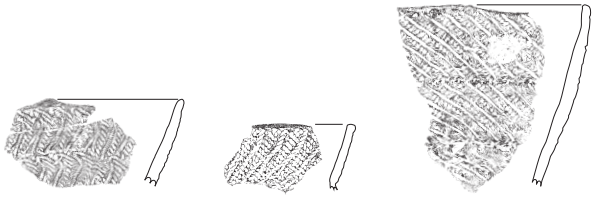
装飾 I F5 類



1：深鉢 A
（№1632）
31-5

2：深鉢 A2
（№8034）
126-7

装飾 I F6 類

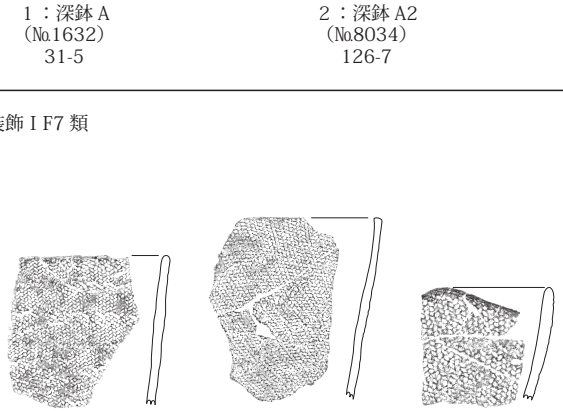


3：深鉢 A
（№6625）
56-4

4：深鉢 A3
（№3675）
18-6

5：深鉢 C
（№8053）
127-1

装飾 I F7 類



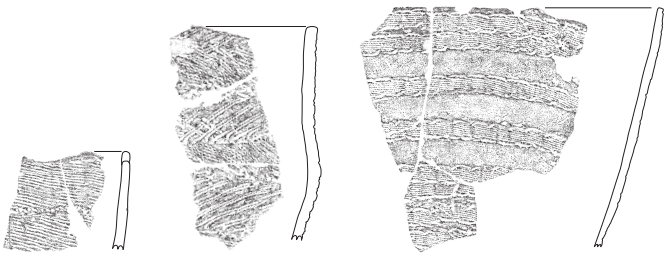
6：深鉢 A
（№8330）
123-2

7：深鉢 A2
（№3859）
18-8

8：深鉢 C
（№87）
18-7

9：深鉢 A3
（№7415）
19-1

装飾 I F8 類

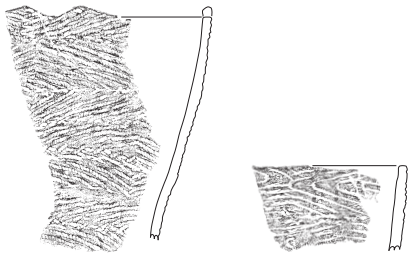


10：深鉢 A
№1988）
19-2

11：鉢 A1
（№6663）
31-7

12：深鉢 A2
（№1087）
19-4

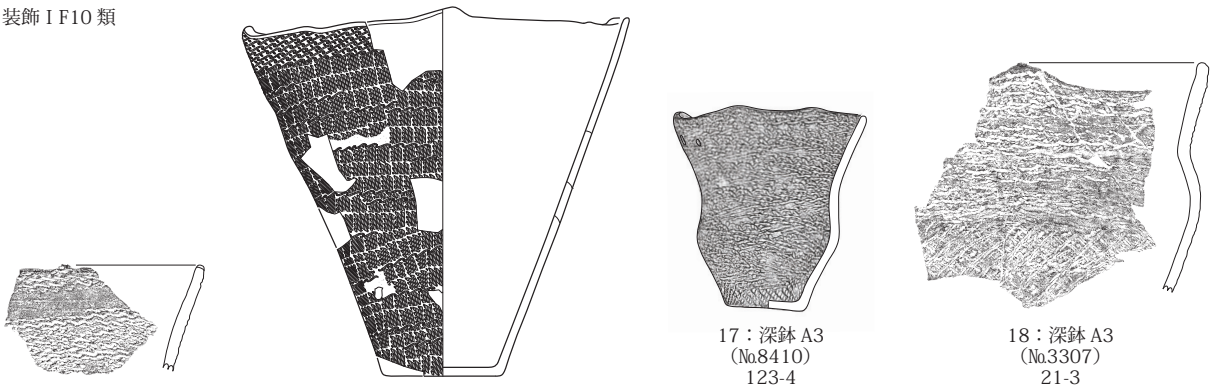
装飾 I F9 類



13：深鉢 C
（№8431）
127-4

14：深鉢 A
（№7358）
19-6

装飾 I F10 類



15：深鉢 A
（№8824）
21-1

16：深鉢 A2
（№8487）
123-5

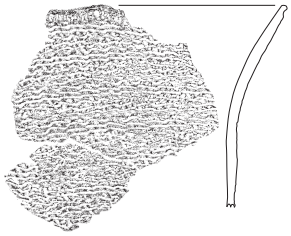
17：深鉢 A3
（№8410）
123-4

18：深鉢 A3
（№3307）
21-3

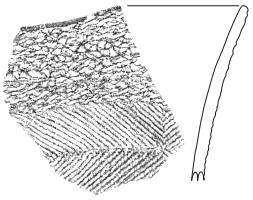
0 20cm
(S=1/6)

図版 196　器形・装飾分類図（3）

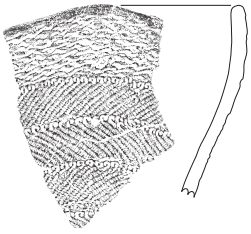
装飾ⅠF10類



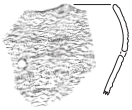
1：深鉢B
（№6494）
21-2



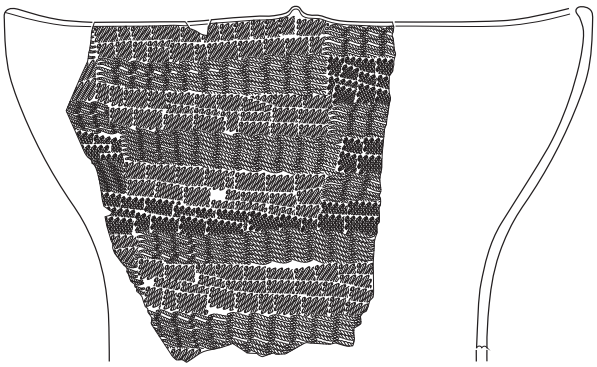
2：深鉢B
（№8331）
123-8



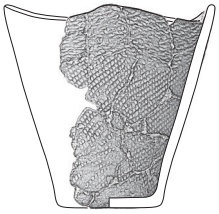
3：深鉢C
（№6671）
20-3



4：深鉢C
（№9905）
125-5

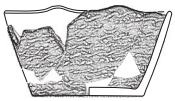


5：深鉢C2
（№7430）
20-1



6：鉢A
（№7379）
19-7

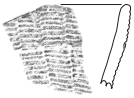
7：浅鉢A
（№1455）
20-6



8：浅鉢A
（№1940）
31-10

装飾ⅠF11類

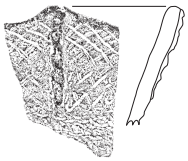
9：深鉢A
（№6835）
31-11



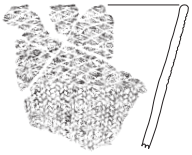
10：深鉢A
（№6713）
21-4

装飾ⅠF12類

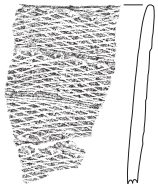
11：深鉢C
（№9873）
117-9



12：深鉢A
（№7989）
21-5

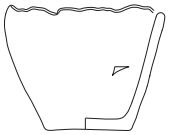


13：深鉢A
（№5538）
21-6

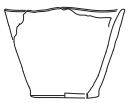


14：深鉢A
（№8458）
123-10

装飾ⅠG類

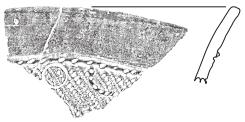


15：鉢A
（№8045）
127-12

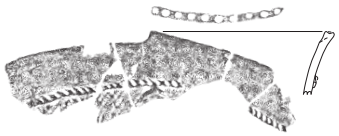


16：浅鉢A
（№6622）
23-7

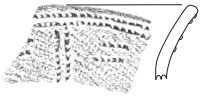
装飾ⅡA1類



17：深鉢A
（№1396）
23-8

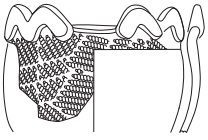


18：深鉢B
（№1365）
32-6

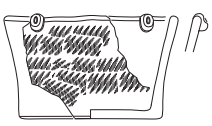


19：深鉢A3
（№7965）
23-9

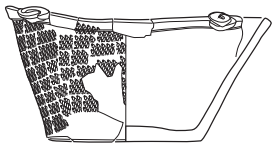
装飾ⅡA2類



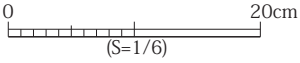
20：鉢C
（№5459）
34-4



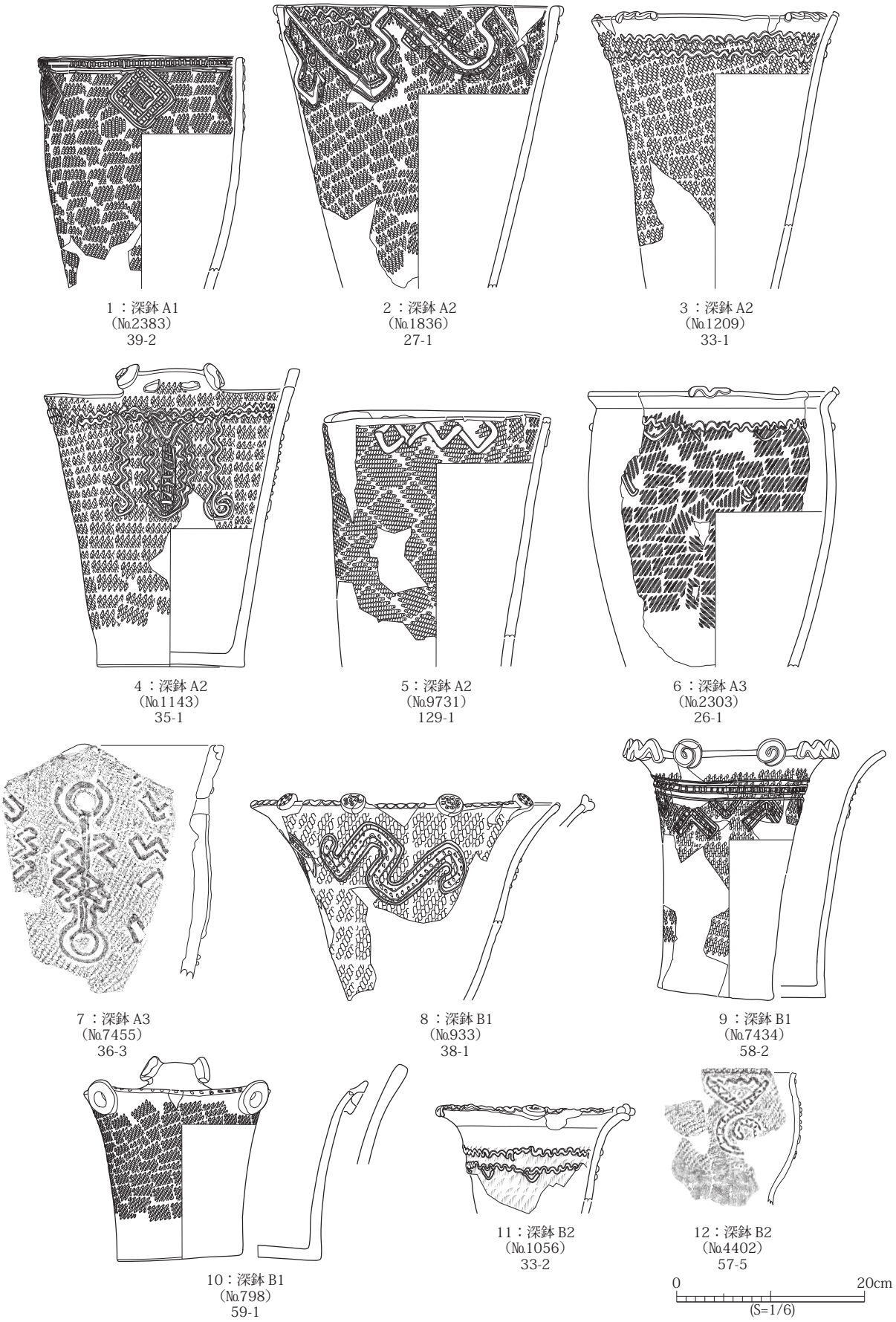
21：浅鉢A
（№1683）
37-3



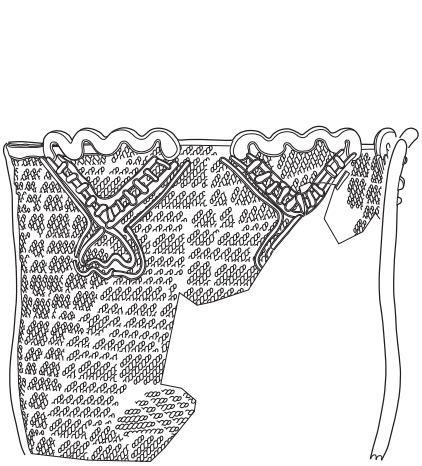
22：浅鉢A
（№1100）
58-4



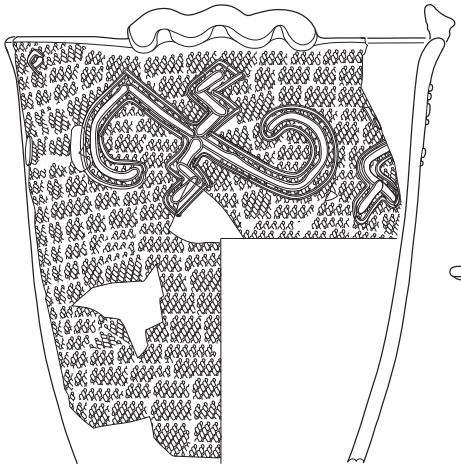
図版197　器形・装飾分類図（4）



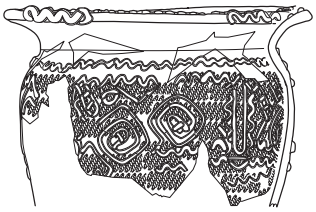
図版 198　器形・装飾分類図（5）



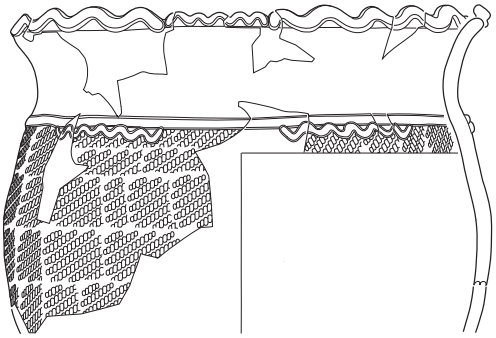
1：深鉢 B2
（№8601）
37-4



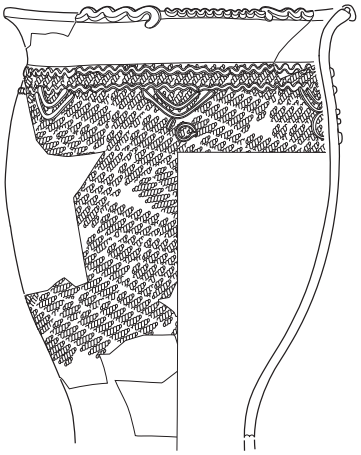
2：深鉢 B2
（№9732）
128-4



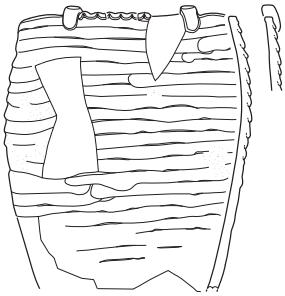
3：深鉢 B3
（№2100）
24-1



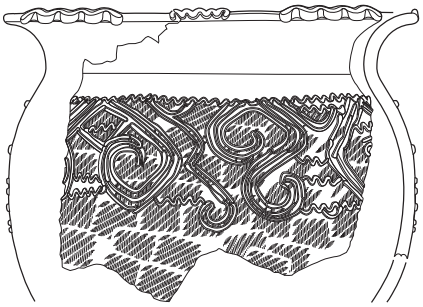
4：深鉢 B3
（№879）
32-7



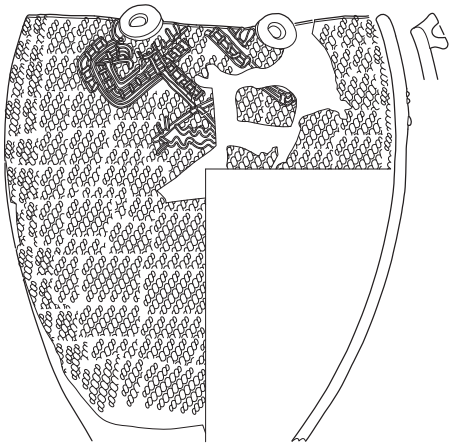
5：深鉢 B3
（№924）
34-1



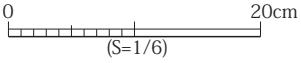
6：深鉢 C1
（№7729）
34-3



7：深鉢 B3
（№8565）
128-1

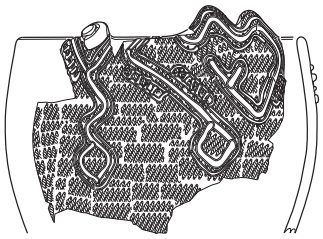


8：深鉢 C1
（№1067）
36-1

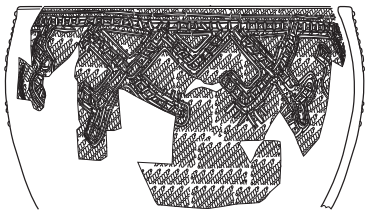


図版 199　器形・装飾分類図（6）

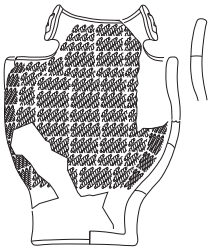
装飾Ⅱ A2 類



1：深鉢 C1
（No.945）
38-2

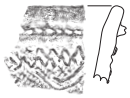


2：深鉢 C1
（No.2255）
39-4



3：深鉢 C2
（No.8169）
129-3

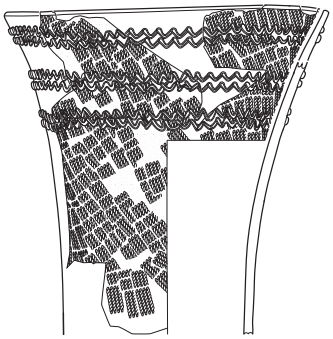
装飾Ⅱ A3 類



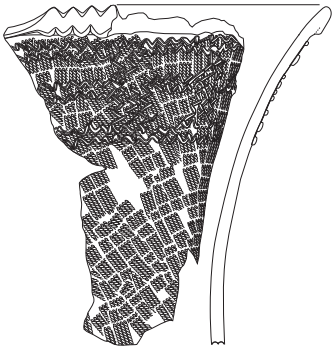
4：深鉢 A
（No.6453）
27-4

5：深鉢 A
（No.3635）
59-2

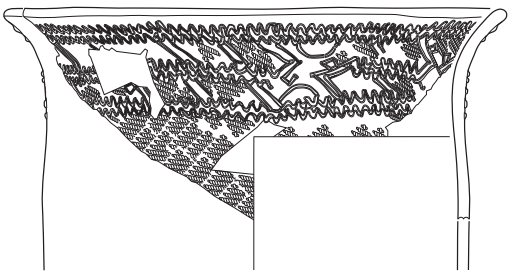
6：深鉢 A2
（No.1939）
41-6



7：深鉢 B1
（No.7466）
41-4

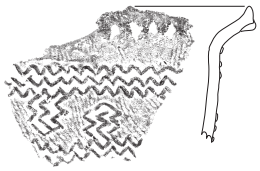


8：深鉢 B1
（No.7417）
60-1



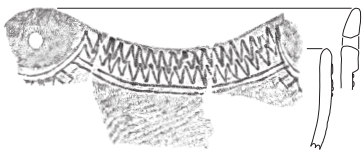
9：深鉢 B2
（No.6072）
42-1

10：深鉢 B2
（No.3264）
59-4

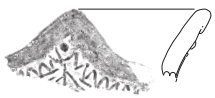


11：深鉢 C3
（No.5097）
41-5

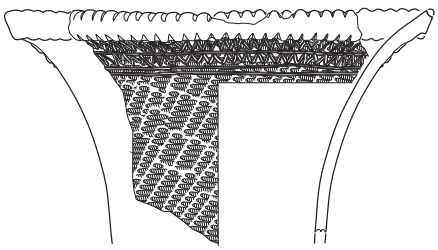
装飾Ⅱ A4 類



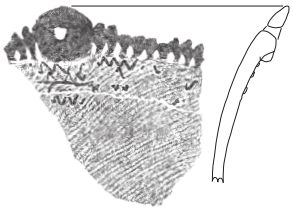
12：深鉢 A
（No.9199）
43-1



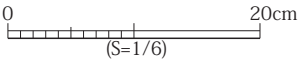
13：深鉢 A3
（No.7934）
27-10



14：深鉢 B1
（No.4689）
42-2

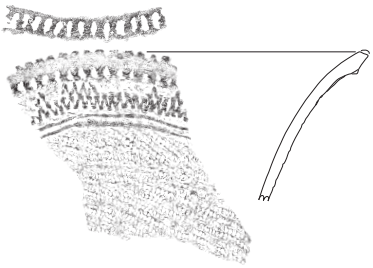


15：深鉢 B1
（No.2851）
61-2

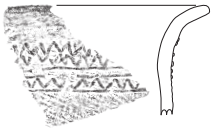


図版 200　器形・装飾分類図（7）

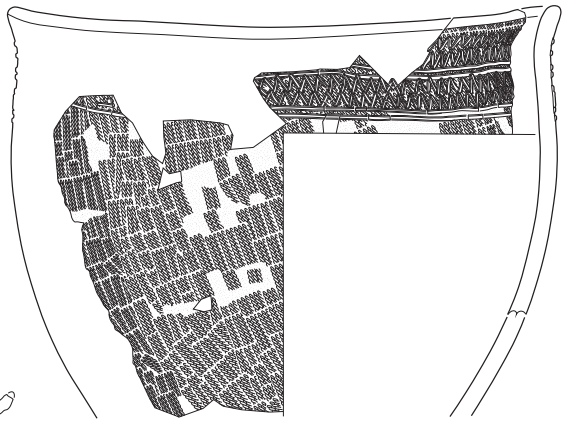
装飾ⅡA4 類



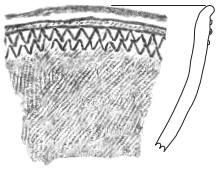
1：深鉢 B1
（No.9642）
129-5



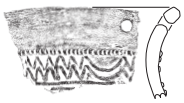
2：深鉢 B2
（No.9896）
129-4



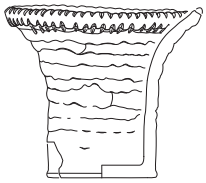
3：深鉢 B2
（No.8162）
125-8



4：深鉢 B3
（No.9296）
60-3

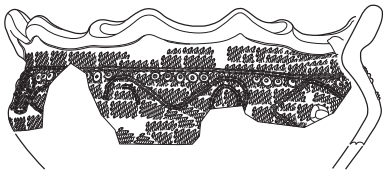


5：深鉢 B3
（No.7926）
60-4

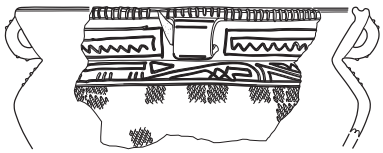


6：鉢 B
（No.2261）
43-2

装飾ⅡA5 類

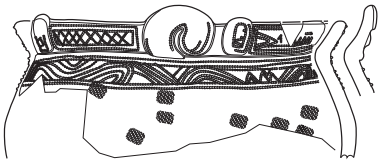


7：深鉢 A3
（No.2222）
29-3

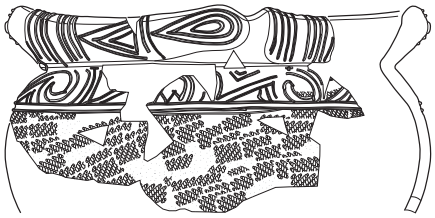


8：深鉢 C3
（No.5438）
50-5

9：深鉢 C3
（No.9348）
64-3

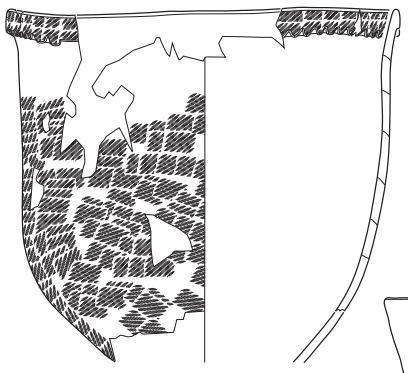


10：深鉢 C3
（No.4304）
64-2

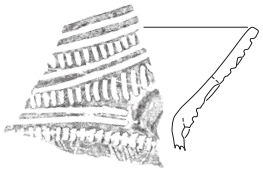


11：深鉢 C3
（No.8203）
130-4

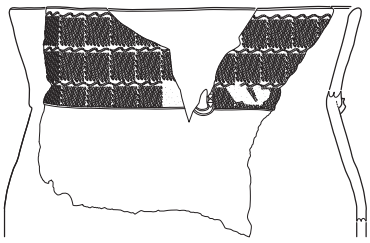
装飾ⅡA6 類



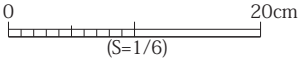
12：深鉢 A1
（No.6956）
29-9



13：深鉢 A3
（No.9186）
51-4

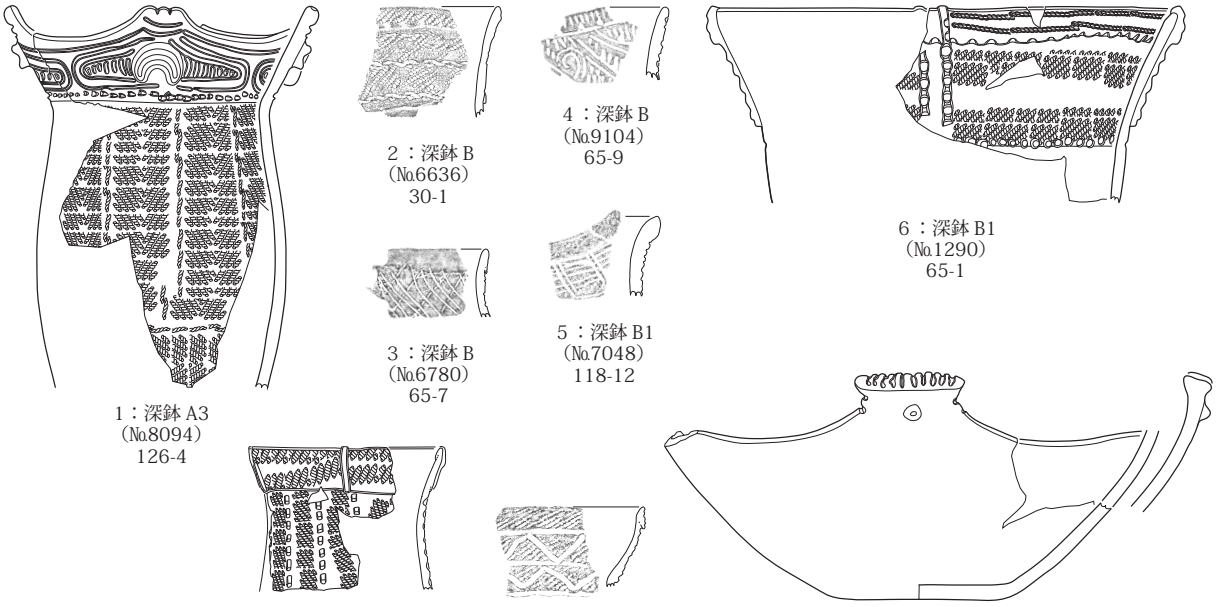


14：深鉢 A3
（No.2169）
64-9



図版 201　器形・装飾分類図（8）

装飾Ⅱ A6 類



1：深鉢 A3
（№8094）
126-4

2：深鉢 B
（№6636）
30-1

3：深鉢 B
（№6780）
65-7

4：深鉢 B
（№9104）
65-9

5：深鉢 B1
（№7048）
118-12

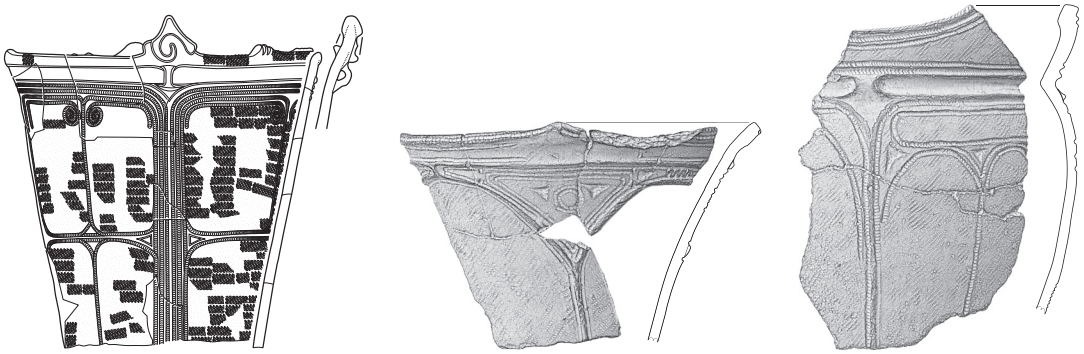
6：深鉢 B1
（№1290）
65-1

7：深鉢 B2
（№7726）
51-5

8：深鉢 C3
（№9868）
29-8

9：浅鉢 B
（№2623）
52-8

装飾Ⅱ A7 類

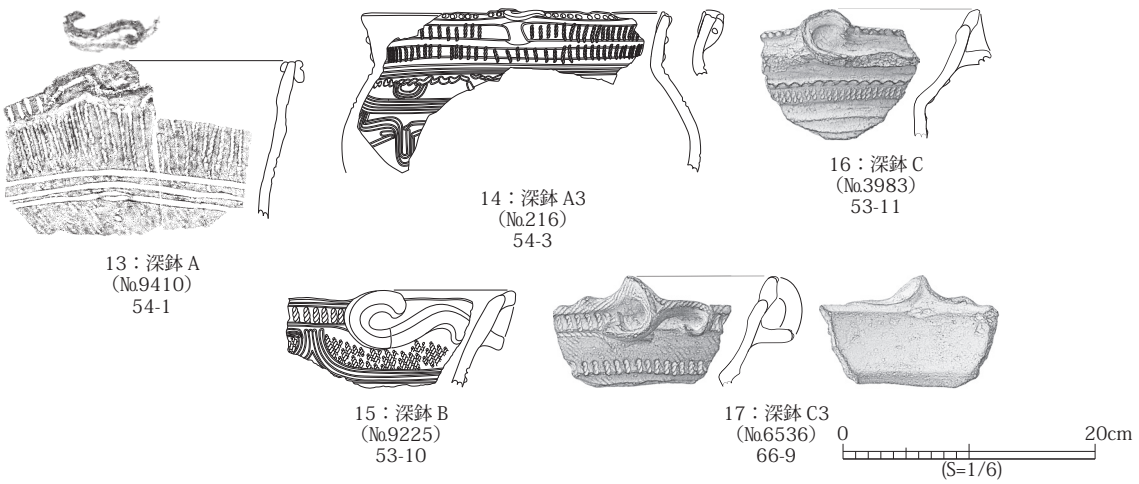


10：深鉢 A2
（№2308）
52-6

11：深鉢 B1
（№6156）
53-1

12：深鉢 C3
（№987）
65-11

装飾Ⅱ A8 類



13：深鉢 A
（№9410）
54-1

14：深鉢 A3
（№216）
54-3

16：深鉢 C
（№3983）
53-11

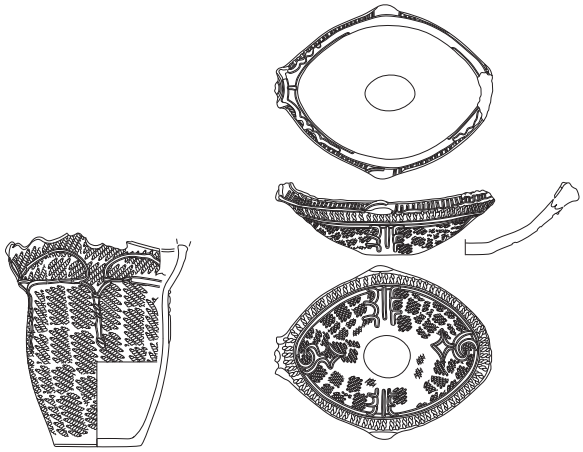
15：深鉢 B
（№9225）
53-10

17：深鉢 C3
（№6536）
66-9

0 20cm
(S=1/6)

図版 202　器形・装飾分類図（9）

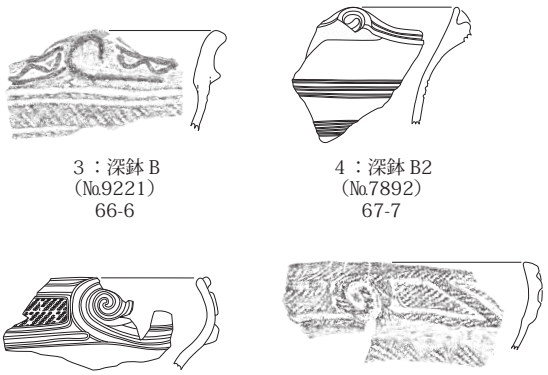
装飾ⅡA8類



1：深鉢C3
（№6135）
53-2

2：浅鉢B
（№8605）
54-5

装飾ⅡA9類



3：深鉢B
（№9221）
66-6

4：深鉢B2
（№7892）
67-7

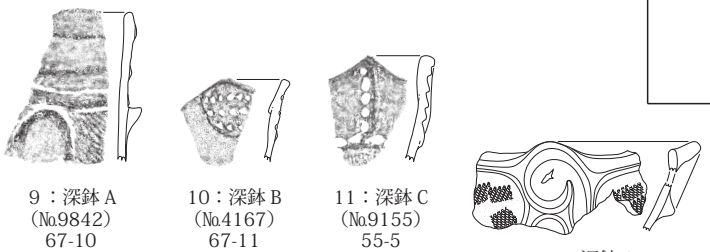
5：深鉢C
（№8138）
133-3

6：深鉢C
（№8166）
133-4

7：深鉢C2
（№208）
55-1

8：深鉢C2
（№4995）
55-2

装飾ⅡA10類

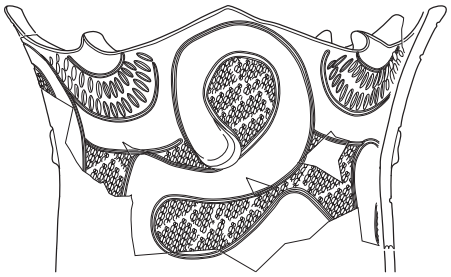


9：深鉢A
（№9842）
67-10

10：深鉢B
（№4167）
67-11

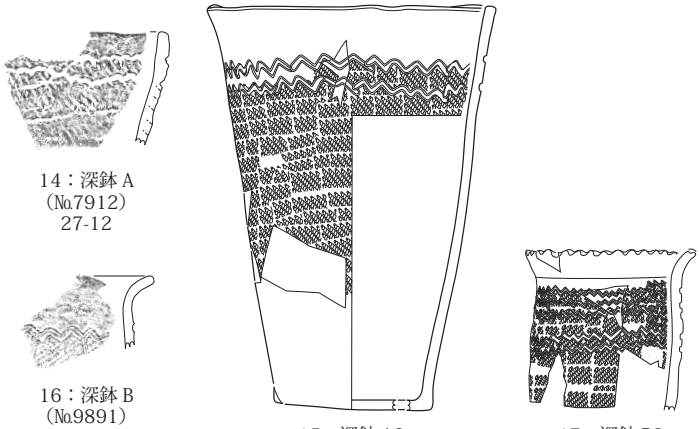
11：深鉢C
（№9155）
55-5

12：深鉢C
（№7187）
118-14



13：深鉢B2
（№9339）
30-6

装飾ⅡB1類



14：深鉢A
（№7912）
27-12

15：深鉢A2
（№9189）
28-1

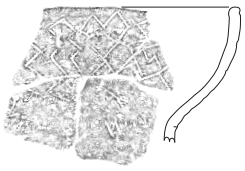
16：深鉢B
（№9891）
130-1

17：深鉢B2
（№2642）
43-5

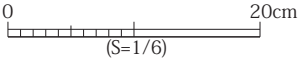
18：深鉢B2
（№3768）
61-4

19：深鉢C
（№4744）
27-13

装飾ⅡB2類

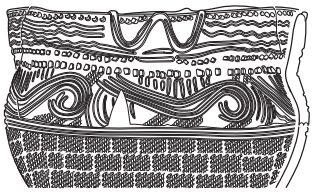


20：深鉢C
（№6303）
43-6



図版203　器形・装飾分類図（10）

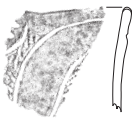
装飾ⅡB3 類



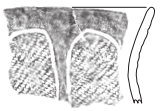
1：深鉢 A3
（№2212）
64-8

2：深鉢 C3
（№9678）
126-2

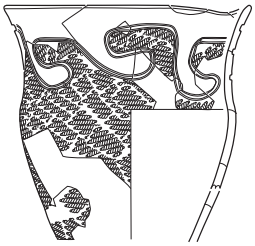
装飾ⅡB4 類



3：深鉢 A
（№9856）
30-7

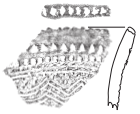


4：深鉢 A3
（№283）
55-4



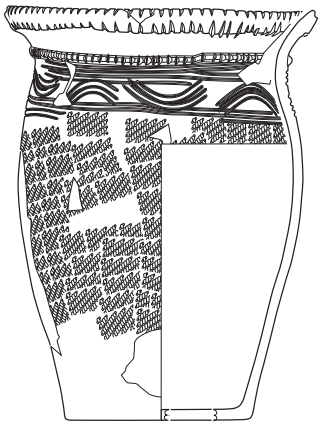
5：深鉢 B2
（№735）
55-3

装飾ⅡC1 類



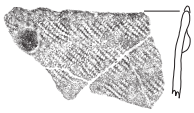
6：深鉢 B
（№7826）
43-7

7：深鉢 B3
（№7984）
28-3

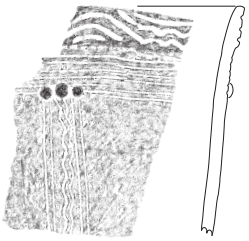


8：深鉢 B3
（№8347）
130-3

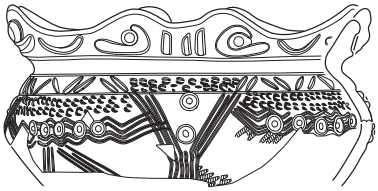
装飾ⅡC2 類



9：深鉢 A
（№5055）
62-2

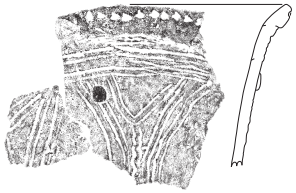


10：深鉢 A2
（№3037）
48-2

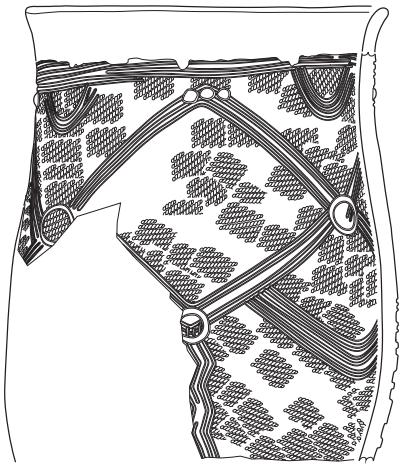


11：深鉢 A3
（№2588）
29-2

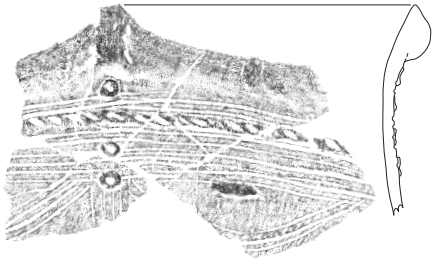
12：深鉢 A3
（№6114）
46-5



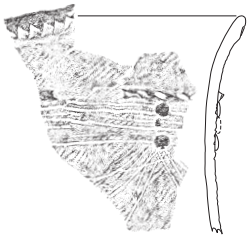
13：深鉢 B1
（№571）
63-6



14：深鉢 B2
（№865）
47-1



15：深鉢 B2
（№2710）
48-3

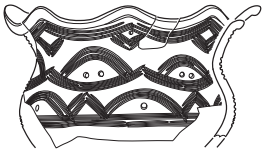


16：深鉢 B2
（№2355）
28-7

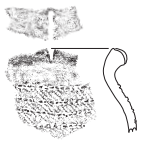
0 20cm
(S=1/6)

図版 204　器形・装飾分類図（11）

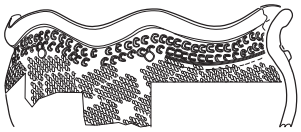
装飾ⅡC2 類



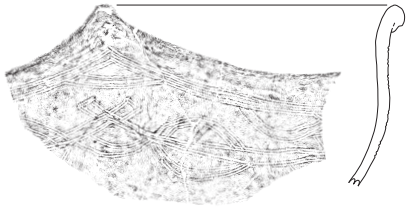
1：深鉢 B3
（№2393）
28-5



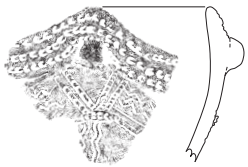
2：深鉢 B3
（№9850）
29-4



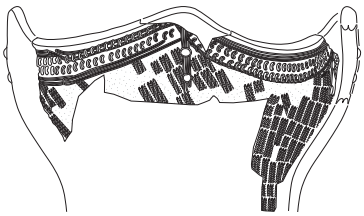
3：深鉢 B3
（№3116）
44-6



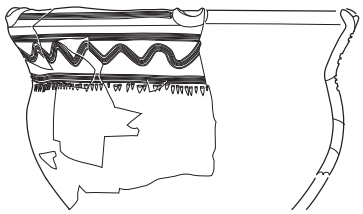
4：深鉢 B3
（№8349）
131-2



5：深鉢 C
（№4147）
44-3

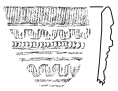


6：深鉢 C2
（№3425）
44-5

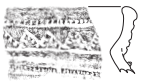


7：深鉢 C3
（№833）
62-6

装飾ⅡD 類



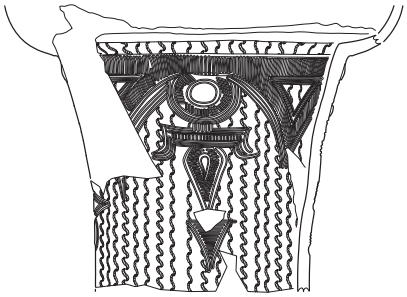
8：深鉢 A
（№8774）
52-4



9：深鉢 C3
（№8805）
52-2

10：深鉢 C3
（№7464）
52-5

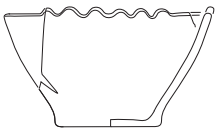
11：深鉢 C3
（№8231）
132-2



12：深鉢
（№8200）
132-1

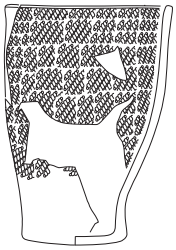
装飾ⅡF1 類

15：深鉢 A2（小型）
（№6483）
55-7



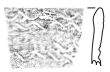
16：浅鉢 A
（№1012）
30-9

装飾ⅡE1 類



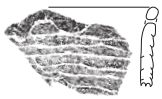
13：深鉢 A1
（№4441）
55-6

装飾ⅡE2 類

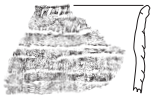


14：深鉢 C
（№9840）
56-14

装飾ⅡF2 類



17：深鉢 A
（№6284）
67-12



18：深鉢 B
（№9169）
67-13

0　20cm
(S=1/6)

図版 205　器形・装飾分類図（12）

表 62　分類対象土器点数表

分類		SX1			SX2	SX3		
胎土	装飾	Ⅲc 層	Ⅲb 層	Ⅲa 層	Ⅲ層	Ⅲc 層	Ⅲb 層	Ⅲa 層
Ⅰ	A	2	2	0	0	0	0	0
	B	14	2	1	0	3	0	4
	C	14	2	2	1	1	1	2
	D	1	1	0	0	0	0	1
	E	6	3	0	0	0	0	0
	F1	51	9	2	3	16	2	5
	F2	17	2	3	1	5	1	3
	F3	10	1	2	1	4	1	1
	F4	126	33	11	7	42	2	2
	F5	6	4	1	1	2	0	3
	F6	3	0	1	0	0	0	1
	F7	4	2	0	1	2	0	1
	F8	13	8	2	1	3	1	1
	F9	4	1	1	1	1	0	2
	F10	48	10	5	2	10	2	4
	F11	3	4	1	0	1	0	0
	F12	7	5	1	1	5	0	2
	F13	1	1	0	0	0	0	0
	G	6	3	1	0	0	0	2
	小計	336	93	34	20	95	10	34
Ⅱ	A1	3	1	1	0	0	0	1
	A2	51	153	41	7	4	1	22
	A3	8	23	7	1	1	0	0
	A4	10	18	10	3	1	1	5
	A5	3	4	6	0	0	0	1
	A6	3	20	20	1	0	1	3
	A7	0	3	1	0	0	0	0
	A8	2	24	21	1	0	2	1
	A9	4	7	10	0	0	0	5
	A10	3	2	4	1	0	0	0
	B1	7	7	4	0	1	0	1
	B2	0	1	0	0	0	0	0
	B3	1	9	6	0	0	2	1
	B4	6	4	6	0	0	0	0
	C1	3	4	3	0	0	1	7
	C2	24	143	83	7	1	0	19
	D	0	8	2	0	0	0	2
	E1	64	266	91	4	3	2	22
	E2	0	0	1	0	0	0	0
	E3	0	1	0	0	0	0	0
	F1	52	250	119	5	2	2	12
	F2	2	6	3	0	0	0	0
	小計	246	954	439	30	13	12	102
分析対象合計		582	1047	473	50	108	22	136

※主に 10cm 以上の大型破片を中心とする。

表 63　時期検討対象土器点数表

分類		SX1		SX2	SX3		
胎土	装飾	Ⅲc 層	Ⅲb 層	Ⅲ層	Ⅲc 層	Ⅲb 層	Ⅲa 層
Ⅰ	A	1	1	0	0	0	0
	B	10	1	0	3	0	4
	C	5	2	1	1	1	2
	D	1	1	0	0	0	1
	E	3	0	0	0	0	0
	F1	32	4	3	16	2	5
	F2	13	0	1	5	1	3
	F3	6	0	1	4	1	1
	F4	96	18	7	42	2	2
	F5	6	3	1	2	0	3
	F6	2	0	0	0	0	1
	F7	2	1	1	2	0	1
	F8	11	3	1	3	1	1
	F9	4	1	1	1	0	2
	F10	24	7	2	10	2	4
	F11	2	4	0	1	0	0
	F12	3	4	1	5	0	2
	F13	0	1	0	0	0	0
	G	4	3	0	0	0	2
	小計	225	54	20	95	10	34
Ⅱ	A1	2	0	0	0	0	1
	A2	25	91	7	4	1	22
	A3	4	8	1	1	0	0
	A4	3	9	3	1	1	5
	A5	2	2	0	0	0	1
	A6	2	7	1	0	1	3
	A7	0	0	0	0	0	0
	A8	1	9	1	0	2	1
	A9	1	2	0	0	0	5
	A10	0	0	1	0	0	0
	B1	2	0	0	1	0	1
	B2	0	1	0	0	0	0
	B3	0	2	0	0	2	1
	B4	0	0	0	0	0	0
	C1	2	2	0	0	1	7
	C2	23	65	7	1	0	19
	D	0	4	0	0	0	2
	E1	44	145	4	3	2	22
	E2	0	0	0	0	0	0
	E3	0	0	0	0	0	0
	F1	32	114	5	2	2	12
	F2	2	5	0	0	0	0
	小計	145	466	30	13	12	102
時期検討対象合計		370	520	50	108	22	136

（2）遺物包含層出土土器

ここでは、分類対象土器と時期検討対象土器について器種・器形、胎土、装飾・器面調整などの特徴を記述する。

時期検討対象土器は分類対象土器の約 40％にとどまっているため、時期検討対象土器のみの分析では、本遺跡出土土器のすべての特徴を把握することは出来ない。そのため、細別層に帰属する土器の特徴を補足する意味を含めて、古代以降の撹乱の範囲に含まれる土器についても、分類対象土器として抽出したものについては詳述する必要があると考える。

上記のことから、記述の方法としては、本遺跡にみられる土器の特徴を全体的に把握することを目的として分類対象土器について詳述したのちに、その中で各細別層に帰属する土器の特徴を把握するために時期検討対象土器のみについてさらに詳述する。当然、分類対象土器と時期検討対象土器は重複しているため、記述内容も重複する部分が出てくるが、それぞれのレベルごとで捉えられる遺跡の情報を把握していくというプロセスをとることにより遺跡の実態を解明していくことが可能であると考える。そのため、あくまでも分類対象土器と時期検討対象土器の両者をそれぞれで詳述する方法をとる。

SX2・SX3 遺物包含層については、SX1 遺物包含層でみられたような古代以降の明確な改変の影響がみられないことから、分類対象土器＝時期検討対象土器として詳述し、それらを用いて遺物包含層の細別層に帰属する土器の特徴を捉える。

【SX1 遺物包含層】

SX1 遺物包含層は、分類対象土器は 2,097 点あり、そのうち時期検討対象点数は 918 点ある。

〔Ⅲ c 層：分類対象土器 582 点〕

器種は、深鉢（A・A1・A2・A3・B・B2・B3・C・C2・C3 類）、鉢（A 類）、浅鉢（A 類）があり、ほとんどが深鉢である。

胎土に繊維を含むⅠ類は 57.7%（336 点）あり、その中でも回転押捺施文の縄文が主体となるものが多い。最も多いものは、非結束羽状縄文（Ⅰ F4 類）で 21.6%（126 点）、次いで斜行縄文（Ⅰ F1 類）8.8%（51 点）、結節縄文（Ⅰ F10 類）8.2%（48 点）がある。このほか、1 条の沈線文（Ⅰ A 類）、半截竹管状工具を用いた平行沈線文（Ⅰ B 類）、櫛歯状工具を用いた平行沈線文（Ⅰ C 類）、竹管状工具による円形刺突文（Ⅰ D 類）、押圧縄文（Ⅰ E 類）、回転押捺施文の縄文を主体とするもの（Ⅰ F2・Ⅰ F3・Ⅰ F5・Ⅰ F6・Ⅰ F7・Ⅰ F8・Ⅰ F9・Ⅰ F11・Ⅰ F12・Ⅰ F13 類）、無文のもの（Ⅰ G 類）があり全て 5％未満（1 ～ 17 点）である。

胎土に繊維を含まないⅡ類は 42.3%（246 点）あり、その中でも回転押捺施文の縄文（Ⅱ E1 類）11.0%（64 点）、無文のもの（Ⅱ F1 類）8.9%（52 点）、粘土紐貼付文を用いて波状や梯子状を組み合わせた幾何学的意匠を描くもの（Ⅱ A2 類）8.8%（51 点）が多い。このほか、粘土紐貼付文を主体とするもの（Ⅱ A1・A3・A4・A5・A6・A8・A9・A10 類）、1 条の沈線文を主体とするもの（Ⅱ B1・B3・B4 類）、半截竹管状工具を用いた平行沈線文を主体とするもの（Ⅱ C1・C2 類）、粘土紐積

上痕跡を明瞭に残すもの（Ⅱ F2 類）があり全て 5％未満（1 ～ 24 点）である。

〔Ⅲ c 層：時期検討対象土器 370 点〕

器種は、深鉢（A・A1・A2・A3・B・B2・B3・C・C3 類）、鉢（A 類）、浅鉢（A 類）があり、ほとんどが深鉢である。

胎土に繊維を含むⅠ類は 60.8%（225 点）あり、その中でも回転押捺施文の縄文が装飾の主体となるものが多い。最も多いものは、非結束羽状縄文（Ⅰ F4 類）で 25.9%（96 点）、次いで斜行縄文（Ⅰ F1 類）8.6%（32 点）、結節縄文（Ⅰ F10 類）6.5%（24 点）がある。このほか、1 条の沈線文（Ⅰ A 類）、半截竹管状工具を用いた平行沈線文（Ⅰ B 類）、櫛歯状工具を用いた平行沈線文（Ⅰ C 類）、竹管状工具を用いた円形刺突文（Ⅰ D 類）、押圧縄文（Ⅰ E 類）、回転押捺施文の縄文が主体となるもの（Ⅰ F2・Ⅰ F3・Ⅰ F5・Ⅰ F6・Ⅰ F7・Ⅰ F8・Ⅰ F9・Ⅰ F11・Ⅰ F12 類）、無文のもの（Ⅰ G1 類）があり全て 5 ％未満（1 ～ 13 点）である。

胎土に繊維を含まないⅡ類は 39.2％（145 点）あり、その中でも回転押捺施文の縄文（Ⅱ E1 類）11％（44 点）、無文のもの（Ⅱ F1 類）8.6%（32 点）、粘土紐貼付文を用いて波状や梯子状を組み合わせた幾何学的意匠を描くもの（Ⅱ A2 類）6.8％（25 点）、半截竹管状工具を用いた平行沈線文（Ⅱ C2 類）6.2%（23 点）が多い。このほか粘土紐貼付文を主体とするもの（Ⅱ A1・Ⅱ A3・Ⅱ A4・Ⅱ A5・Ⅱ A6・Ⅱ A8・Ⅱ A9 類）、1 条の沈線文（Ⅱ B1 類）、半截竹管状工具を用いた平行沈線文（Ⅱ C1 類）、粘土紐積上痕跡を明瞭に残すもの（Ⅱ F2 類）があり、全て 5 ％未満（1 ～ 4 点）である。これらの土器は、SX1 遺物包含層が形成されている丘陵南斜面中部（Y24 ～ AD34 グリッド）に集中する傾向がある。

この層は、胎土に繊維を含むⅠ類が多く、中でも非結束羽状縄文が施されるもの（Ⅰ F4 類）が最も多い。実際、分類上で結節縄文（Ⅰ F10 類）・重層末端ループ文（Ⅰ F2 類）としたものでも、それらを口縁部に施文し、体部に非結束羽状縄文が施されるものも多くある。残存する底部外面には、非結束羽状縄文や斜行縄文が施されるものが多い。Ⅰ類の土器は、時期検討対象範囲全域から出土するが、SX1 遺物包含層が形成された丘陵南斜面の上部（U17 ～ X24）に比較的集中する傾向にある。

〔Ⅲ b 層：分類対象土器 1047 点〕

器種は、深鉢（A・A1・A2・A3・B・B1・B2・B3・C・C1・C2・C3 類）、鉢（B・C 類）、浅鉢（A・B 類）があり、ほとんどが深鉢である。

胎土に繊維を含むⅠ類は 8.9%（93 点）と少なく、最も多いものでも非結束羽状縄文（Ⅰ F4 類）3.2%（33 点）である。このほか、1 条の沈線文（Ⅰ A 類）、半截竹管状工具を用いた平行沈線文（Ⅰ B 類）、櫛歯状工具を用いた平行沈線文（Ⅰ C 類）、竹管状工具による円形刺突文（Ⅰ D 類）、押圧縄文（Ⅰ E 類）、回転押捺施文の縄文（Ⅰ F1・Ⅰ F2・Ⅰ F3・Ⅰ F5・Ⅰ F7・Ⅰ F8・Ⅰ F9・Ⅰ F10・Ⅰ F11・Ⅰ F12・Ⅰ F13 類）、無文のもの（Ⅰ G 類）があり全て 5％未満（1 ～ 10 点）である。

胎土に繊維を含まないⅡ類は 91.1%（954 点）であり、回転押捺施文の縄文（Ⅱ E1 類）25.4%（266 点）、無文のもの（Ⅱ F1 類）23.9%（250 点）、粘土紐貼付文を用いて波状や梯子状を組み合わせた

幾何学的意匠を描くもの（Ⅱ A2 類）14.6%（153 点）、半截竹管状工具を用いた平行沈線文（Ⅱ C2 類）13.7%（143 点）が多い。このほか、粘土紐貼付文を主体とするもの（Ⅱ A1・Ⅱ A3・Ⅱ A4・Ⅱ A5・Ⅱ A6・Ⅱ A7・Ⅱ A8・Ⅱ A9・Ⅱ A10 類）、１条の沈線文を主体とするもの（Ⅱ B1・Ⅱ B2・Ⅱ B3・Ⅱ B4 類）、半截竹管状工具を用いた平行沈線文（Ⅱ C1 類）、短沈線文や交互刺突文を施すもの（Ⅱ D 類）、原体不明の縄文（Ⅱ E3 類）、粘土紐積上痕跡を明瞭に残すもの（Ⅱ F2 類）があり全て５％未満（1 ～ 24 点）である。

〔Ⅲ b 層：時期検討対象土器 517 点〕

器種は、深鉢（A・A1・A2・A3・B・B1・B2・B3・C・C1・C2・C3 類）、鉢（B 類）、浅鉢（A・B 類）があり、ほとんどが深鉢である。

胎土に繊維を含むⅠ類は 10.4%（54 点）と少なく、最も多いものでも非結束羽状縄文（Ⅰ F4 類）3.5%（18 点）である。このほか、１条の沈線文（Ⅰ A1 類）、半截竹管状工具による平行沈線文（Ⅰ B1 類）、櫛歯状工具による平行沈線文（Ⅰ C1 類）、竹管状工具による円形刺突文（Ⅰ D1 類）、斜行縄文（Ⅰ F1 類）、斜行縄文に結節回転文が伴うもの（Ⅰ F5 類）、組紐回転文（Ⅰ F7 類）、撚糸文（Ⅰ F8 類）、木目状撚糸文（Ⅰ F9 類）、結節縄文（Ⅰ F10 類）、葺瓦状撚糸文（Ⅰ F11 類）、網目状撚糸文（Ⅰ F12 類）、原体不明の縄文（Ⅰ F13 類）、無文（Ⅰ G1 類）があるが、ほとんどが１％未満（1 ～ 7 点）である。

胎土に繊維を含まないⅡ類は 89.6%（466 点）あり、その中でも回転押捺施文の縄文（Ⅱ E1 類）が 27.9％（145 点）と最も多く、次いで無文（Ⅱ F1 類）21.9%（114 点）、粘土紐貼付文（Ⅱ A2 類）17.5%（91 点）、半截竹管状工具による平行沈線文（Ⅱ C2 類）12.5%（65 点）が多い。このほか、粘土紐貼付文（Ⅱ A3・Ⅱ A4・Ⅱ A5・Ⅱ A6・Ⅱ A8・Ⅱ A9 類）、１条の沈線文（Ⅱ B2・Ⅱ B3 類）、半截竹管状工具による平行沈線文（Ⅱ C1 類）、短沈線文や刺突文が主体となるもの（Ⅱ D 類）、無文（Ⅱ F2 類）があり全て５％未満（1 ～ 9 点）である。

この層は、胎土に繊維を含まないⅡ類が多く、時期が判断できる装飾として粘土紐貼付文（Ⅱ A2 類）、半截竹管状工具を用いた平行沈線文（Ⅱ C2 類）が多い。これらの土器は SX1 遺物包含層が形成されている丘陵南斜面中部（Y24 ～ AD34 グリッド）に集中する傾向がある。

〔Ⅲ a 層：分類対象土器 473 点〕

器種は、深鉢（A・A1・A2・A3・B・B1・B2・B3・C・C1・C2・C3 類）、鉢（A 類）、浅鉢（A 類）があり、ほとんどが深鉢である。

胎土に繊維を含むⅠ類は 7.2%（34 点）とわずかで、最も多いものでも非結束羽状縄文（Ⅰ F4 類）2.3%（11 点）である。このほか、半截竹管状工具を用いた平行沈線文（Ⅰ B 類）、櫛歯状工具を用いた平行沈線文（Ⅰ C 類）、回転押捺施文の縄文（Ⅰ F1・Ⅰ F2・Ⅰ F3・Ⅰ F5・Ⅰ F6・Ⅰ F8・Ⅰ F9・Ⅰ F10・Ⅰ F11・Ⅰ F12 類）、無文のもの（Ⅰ G 類）がある。

胎土に繊維を含まないⅡ類は 92.8%（439 点）あり、無文のもの（Ⅱ F1 類）25.2%（119 点）、回転押捺施文の縄文（Ⅱ E1 類）19.2%（91 点）、半截竹管状工具を用いた平行沈線文（Ⅱ C2 類）

17.5％（83 点）、粘土紐貼付文を用いて波状や梯子状を組み合わせた幾何学的意匠を描くもの（Ⅱ A2 類）8.7%（41 点）が多い。このほか粘土紐貼付文を主体とするもの（Ⅱ A1・Ⅱ A3・Ⅱ A4・Ⅱ A5・Ⅱ A6・Ⅱ A7・Ⅱ A8・Ⅱ A9・Ⅱ A10 類）、１条の沈線文を主体とするもの（Ⅱ B1・Ⅱ B3・Ⅱ B4 類）、半截竹管状工具を用いた平行沈線文（Ⅱ C1 類）、短沈線文や交互刺突文を施すもの（Ⅱ D 類）、S 字状連鎖撚糸文（Ⅱ E2 類）、粘土紐積上痕跡を明瞭に残すもの（Ⅱ F2 類）があり、全て５％未満（1 ～ 21 点）である。

【SX2 遺物包含層】

〔Ⅲ層：分類対象土器 50 点〕

器種は、深鉢（A・A1・A3・B・B1・C 類）のみである。

胎土に繊維を含むⅠ類は 40.0%（20 点）あり、非結束羽状縄文（Ⅰ F4 類）が 14.0%（７点）と最も多く、次いで斜行縄文（Ⅰ F1 類）6.0％（３点）が多い。このほか、櫛歯状工具による平行沈線文（Ⅰ C1 類）、重層末端ループ文（Ⅰ F2 類）、側面ループ文（Ⅰ F3 類）、斜行縄文に結節回転文が伴うもの（Ⅰ F5 類）、組紐回転文（Ⅰ F7 類）、撚糸文（Ⅰ F8 類）、木目状撚糸文（Ⅰ F9 類）、結節縄文（Ⅰ F10 類）、網目状撚糸文（Ⅰ F12 類）があり全て５％未満（1 ～２点）である。

胎土に繊維を含まないⅡ類は 60.0％（30 点）あり、粘土紐貼付文（Ⅱ A2 類）と半截竹管状工具による平行沈線文（Ⅱ C2 類）が 14.0%（７点）と多く、次いで無文（Ⅱ F1 類）10.0%（５点）、回転押捺施文の縄文（Ⅱ E1 類）8.0％（４点）、粘土紐貼付文（Ⅱ A4 類）6.0%（３点）が多い。このほか、粘土紐貼付文（Ⅱ A3・Ⅱ A6・Ⅱ A8・Ⅱ A10 類）があり全て５％未満（１点）である。

この層は、出土量が少なく、突出して多い装飾が無いため主体とする時期は判断できない。

【SX3 遺物包含層】

SX3 遺物包含層は、分類対象土器が 266 点である。

〔Ⅲ c 層：分類対象土器 108 点〕

器種は、深鉢（A・A2・A3・B・C 類）、浅鉢（A 類）があり、ほとんどが深鉢である。

胎土に繊維を含むⅠ類は 88.0%（95 点）あり、非結束羽状縄文（Ⅰ F4 類）が 38.9%（42 点）と最も多く、次いで斜行縄文（Ⅰ F1 類）14.8%（16 点）、結節縄文（Ⅰ F10 類）9.3％（10 点）が多い。このほか半截竹管状工具による平行沈線文（Ⅰ B 類）、櫛歯状工具による平行沈線文（Ⅰ C 類）、末端ループ文（Ⅰ F2 類）、側面ループ文（Ⅰ F3 類）、斜行縄文に結節回転文が伴うもの（Ⅰ F5 類）、組紐文回転文（Ⅰ F7 類）、撚糸文（Ⅰ F8 類）、木目状撚糸文（Ⅰ F9 類）、葺瓦状撚糸文（Ⅰ F11 類）、網目状撚糸文（Ⅰ F12 類）があるが、全て５％未満（1 ～５点）である。

胎土に繊維を含まないⅡ類は、12.0%（13 点）と少なく、粘土紐貼付文（Ⅱ A2・Ⅱ A3・Ⅱ A4 類）、１条の沈線文（Ⅱ B1 類）、半截竹管状工具による平行沈線文（Ⅱ C2 類）、回転押捺施文の縄文（Ⅱ E1 類）、無文（Ⅱ F1 類）がある。全て５％未満（1 ～４点）である。

この層は、胎土に繊維を含むⅠ類が多く、そのなかでも非結束羽状縄文（Ⅰ F4 類）が最も多い。

このほか分類上末端ループ文（Ⅰ F2 類）、側面ループ文（Ⅰ F3 類）、結節縄文（Ⅰ F10 類）としたものでも、それらを口縁部に施文し、体部に非結束羽状縄文を施すものもある。器形が復元できるような資料は、SX3 遺物包含層を形成している丘陵北斜面上部（B29 ～ B31 グリッド）に集中する傾向がある。

〔Ⅲ b 層：分類対象土器 22 点〕

器種は、深鉢（A・A3・B・B2・C・C3 類）のみである。

胎土に繊維を含むⅠ類は 45.5% あり、斜行縄文（Ⅰ F1 類）・非結束羽状縄文（Ⅰ F4 類）・結節縄文（Ⅰ F10 類）が 9.1％と多い。このほか、櫛歯状工具による平行沈線文（Ⅰ C1 類）、重層末端ループ文（Ⅰ F2 類）、側面ループ文（Ⅰ F3 類）、撚糸文（Ⅰ F8 類）があり、全て 5 ％未満である。

胎土に繊維を含まないⅡ類は 54.5% あり、粘土紐貼付文（Ⅱ A8 類）・ 1 条の沈線文（Ⅱ B3 類）・回転押捺施文の縄文（Ⅱ E1 類）・無文（Ⅱ F1 類）が 9.1% と多い。このほか、粘土紐貼付文（Ⅱ A2・Ⅱ A4・Ⅱ A6 類）、半截竹管状工具による平行沈線文（Ⅱ C1 類）があり、全て 5 ％未満である。

この層は、上下に堆積するⅢ c 層・Ⅲ a 層に比べ著しく点数が少ない。また、突出して多い装飾が無く主体となるものは不明である。

〔Ⅲ a 層：分類対象土器 136 点〕

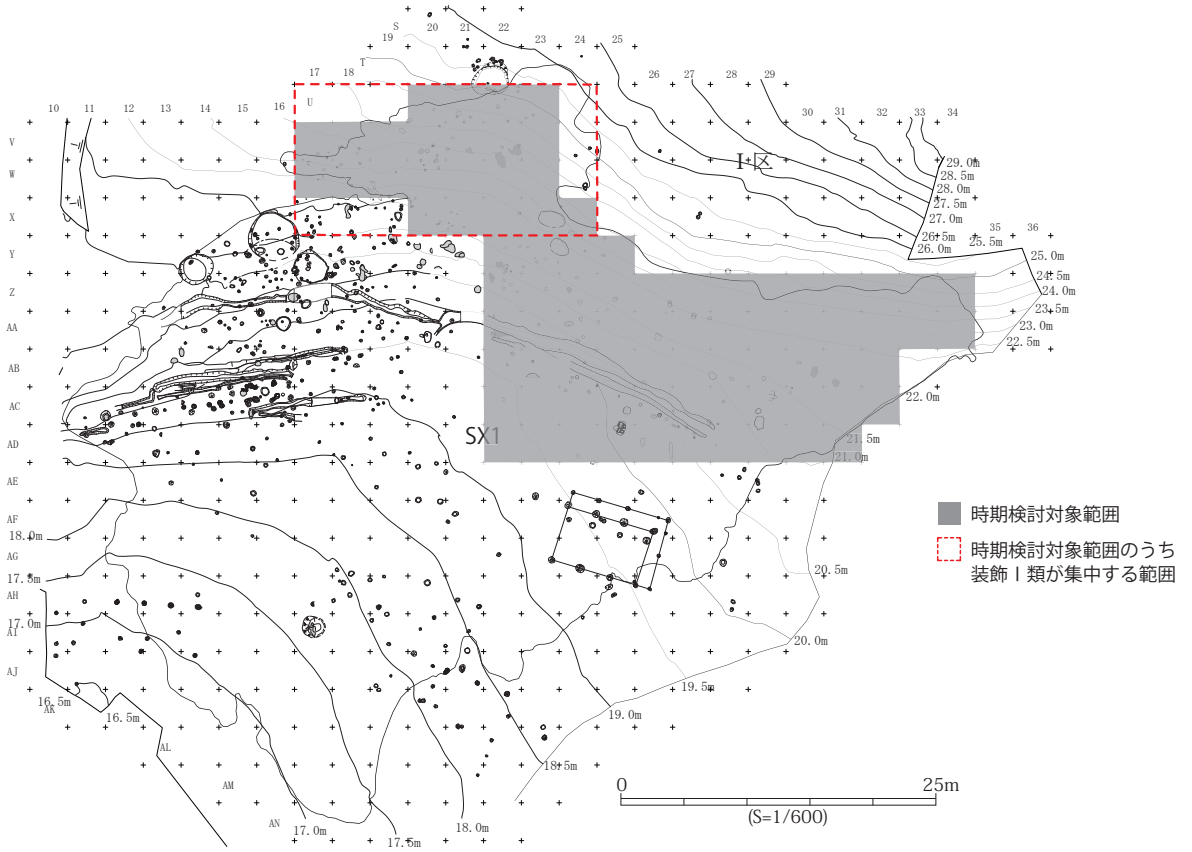
器種は、深鉢（A・A2・A3・B・B1・B2・B3・C・C2・C3 類）、鉢（A 類）、浅鉢（B 類）があり、ほとんどが深鉢である。

胎土に繊維を含むⅠ類は 25.0%（34 点）ある。半截竹管状工具による平行沈線文（Ⅰ B1 類）、櫛歯状工具による平行沈線文（Ⅰ C1 類）、竹管状工具による円形刺突文（Ⅰ D1 類）、斜行縄文（Ⅰ F1 類）、重層末端ループ文（Ⅰ F2 類）、側面ループ文（Ⅰ F3 類）、非結束羽状縄文（Ⅰ F4 類）、斜行縄文に結節回転文が伴うもの（Ⅰ F5 類）、斜行縄文に附加条が伴うもの（Ⅰ F6 類）、組紐回転文（Ⅰ F7 類）、撚糸文（Ⅰ F8 類）、木目状撚糸文（Ⅰ F9 類）、結節縄文（Ⅰ F10 類）、網目状撚糸文（Ⅰ F12 類）、無文（Ⅰ G1 類）があるが、全て 5 ％未満（1 ～ 5 点）である。

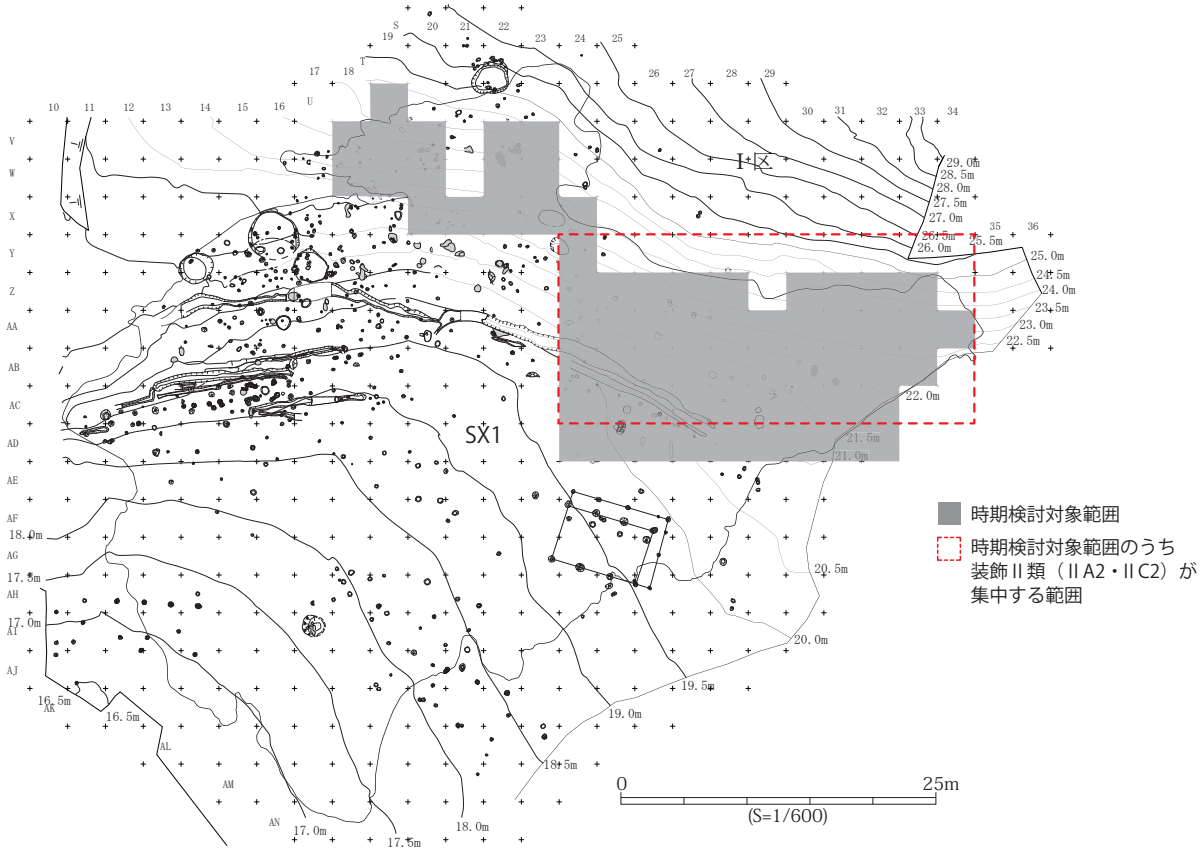
胎土に繊維を含まないⅡ類は 75.0%（102 点）あり、粘土紐貼付文（Ⅱ A2 類）・回転押捺施文の縄文（Ⅱ E1 類）が 16.2%（22 点）と最も多く、次いで半截竹管状工具による平行沈線文（Ⅱ C2 類）14.0%（19 点）、無文（Ⅱ F1 類）8.8%（12 点）、半截竹管状工具による平行沈線文（Ⅱ C1 類）5.1%（ 7 点）と多い。このほか、粘土紐貼付文（Ⅱ A1・Ⅱ A4・Ⅱ A5・Ⅱ A6・Ⅱ A8・Ⅱ A9 類）、 1 条の沈線文（Ⅱ B1・Ⅱ B3 類）、短沈線文や刺突文（Ⅱ D1 類）があるが、全て 5 ％未満（1 ～ 5 点）である。

この層は、胎土に繊維を含まないⅡ類が多く、時期を判断できる装飾では粘土紐貼付文（Ⅱ A2 類）、半截竹管状工具を用いた平行沈線文（Ⅱ C2 類）が多い。これらは分布状況に変わりがなく、SX3 遺物包含層が分布する範囲のうち 28 ラインから多く出土している。

SX1 Ⅲｃ層



SX1 Ⅲｂ層



図版 206　SX1 まとまりのある装飾類型

（3）類例とその年代

装飾Ⅰ類は、胎土に植物繊維を含む土器であり、その中には、1個体に対し複数の装飾類型が施文されるものが多い。おおむね大木1式～2a式に比定されるが、それらの土器型式で同一の装飾類型がみられるものもある。

装飾Ⅰ類のうち、装飾ⅠF2・ⅠF3類にⅠF1・ⅠF4類が伴うもの、ⅠF4類のみが施文されるものには、石巻市中沢遺跡Ⅱ群土器（石巻市教育委員会2018）、大崎市東要害貝塚第Ⅰ群土器（大崎市教育委員会2008）、東松島市里浜貝塚梨木東地点の貝層出土土器（東北歴史資料館1994）、七ヶ浜町大木囲貝塚（興野1967）、仙台市三神峯遺跡のⅡ層及び2b層（白鳥1974、仙台市教育委員会1980）、名取市今熊野遺跡第1群土器（宮城県教育委員会1986a）、泉遺跡第2群土器（名取市教育委員会2010）などに類例があり、大木1式に比定される。

また、装飾ⅠB・ⅠC・ⅠF8・ⅠF9・ⅠF10・ⅠF11・ⅠF12類が施文されるものは、石巻市中沢遺跡Ⅲ群土器（石巻市教育委員会2018）、大崎市東要害貝塚第Ⅱ群土器（大崎市教育委員会2008）、登米市糠塚貝塚（興野1981）、女川町浦宿B遺跡第1群土器（宮城県教育委員会2006b）、七ヶ浜町大木囲貝塚（興野1968a）、仙台市三神峯遺跡のⅠ層及び2a層（白鳥1974、仙台市教育委員会1980）、名取市今熊野遺跡第2群土器（宮城県教育委員会1986a）、泉遺跡第3群土器（名取市教育委員会2010等）、福島県会津美里町冑宮西遺跡（福島県会津高田町教育委員会1984）に類例があり、大木2a式に比定される。

装飾ⅠDの類例は、石巻市中沢遺跡Ⅳ群土器（石巻市教育委員会2018）に同様の装飾を持つものがあり、大木2b式に比定される。しかし、本遺跡では破片資料のみであり、詳細は不明である。

装飾Ⅱ類は、胎土に植物繊維を含まない土器であり、大木3式以降に比定される。

装飾ⅡA1類は、石巻市中沢遺跡Ⅴ・Ⅵ群土器（石巻市教育委員会2018）に同様の装飾を持つものがあり、大木3式に比定される。しかし、本遺跡では破片資料のみであり、詳細は不明である。

装飾ⅡA2・ⅡB1類は、石巻市中沢遺跡Ⅶ・Ⅷ群土器（石巻市教育委員会2018）、登米市糠塚貝塚（興野1981、相原2015）、七ヶ浜町大木囲貝塚（興野1968c、七ヶ浜町教育委員会1979、早瀬ほか2006）、仙台市北原街道B遺跡（仙台市教育委員会1994）、名取市宇賀崎貝塚C群土器（宮城県教育委員会1980）、山形県高畠町押出遺跡（山形県教育委員会1990、小林2007、山形県埋蔵文化財センター2017等）などに類例があり、大木4式に比定される。大木4式は、松田光太郎が縄文土器の文様帯による細別をおこなっており古段階と新段階に分けられている（松田2009・2017）。本遺跡からはそのどちらもが出土しており、出土層の違いや出土量にほとんど差はみられず、土器の文様帯について判断が難しい資料もある。そのため、松田による古段階と新段階の差を本遺跡では、時期差として捉えられないことから装飾類型においては主体となる施文方法で分類するのみに留めている。

装飾ⅡA3・ⅡA4・ⅡB2・ⅡC1類は、石巻市中沢遺跡Ⅸ群土器（石巻市教育委員会2018）、登米市糠塚貝塚（興野1981、相原2015）、長者原貝塚（興野1970）、栗原市嘉倉貝塚（宮城県教育委員会2003、千葉2007）、七ヶ浜町大木囲貝塚（興野1969、七ヶ浜町教育委員会1979、早瀬ほ

か 2006)、仙台市北原街道 B 遺跡（仙台市教育委員会 1994)、川崎町西林山遺跡（宮城県教育委員会 1987a）などに類例があり、大木 5 式に比定される。大木 5 式は、興野義一により細別が提唱されている（興野 1970)。本遺跡においては、装飾類型Ⅱ A3・Ⅱ B2 類が大木 5a 式、装飾類型Ⅱ A4・Ⅱ C1 類が大木 5b 式にあたると考えられる。

装飾Ⅱ A5・Ⅱ B3・Ⅱ C2 類は、栗原市嘉倉貝塚第 2 群土器（宮城県教育委員会 2003)、大崎市東要害貝塚Ⅲ群土器（大崎市教育委員会 2008)、涌谷町長根貝塚第一群土器（宮城県教育委員会 1969)、七ヶ宿町小梁川遺跡第Ⅰ群土器（宮城県教育委員会 1986b）などに類例があり、大木 6 式に比定される。このうち、装飾Ⅱ A5 類は、十三菩提系と考えられるものであり、宮城県内では、長根貝塚第一群土器第四類（宮城県教育委員会 1969）や小梁川遺跡第Ⅰ群土器（宮城県教育委員会 1986b）に類例がある。

装飾Ⅱ A6・Ⅱ A7・Ⅱ D 類は、栗原市嘉倉貝塚第 3 群土器（宮城県教育委員会 2003)、大崎市東要害貝塚Ⅳ～Ⅵ群土器（大崎市教育委員会 2008)、涌谷町長根貝塚第三群土器（宮城県教育委員会 1969)、七ヶ宿町小梁川遺跡第Ⅲ群土器（宮城県教育委員会 1986b)、川崎町中ノ内 A 遺跡第Ⅰ群土器（宮城県教育委員会 1987a）に類例があり、大木 7a 式に比定される。このうち、装飾Ⅱ D 類は五領ヶ台系と考えられるものも含まれる。十三菩提系や五領ヶ台系の土器は、今村啓爾（1985、2006)、松田光太郎（2003)、小林圭一（2016)、相原淳一（2018）により検討がおこなわれており、おおむね大木 6 式新段階から大木 7a 式古段階に比定されている。宮城県内では、長根貝塚（宮城県教育委員会 1969）や小梁川遺跡（宮城県教育委員会 1986b)、嘉倉貝塚（宮城県教育委員会 2003）に類例がある。

装飾Ⅱ A8・Ⅱ A9 類は、仙台市上野遺跡（仙台市教育委員会 2010)、高柳遺跡（仙台市教育委員会 1995）などに類例があり、大木 8 式に比定される。特にⅡ A8 類は仙台市上野遺跡、高柳遺跡にみられる大木 8a 式、Ⅱ A9 類は高柳遺跡Ⅱ群土器にみられる大木 8b 式に比定される。

装飾Ⅱ A10・Ⅱ B4 類（大木 9 ・10 式）は、石巻市中沢遺跡Ⅹ群土器（石巻市教育委員会 2018)、石巻市山居遺跡（宮城県教育委員会 2007)、仙台市山田上ノ台遺跡（仙台市教育委員会 1987)、大和町上深沢遺跡（宮城県教育委員会 1978)、七ヶ浜町大木囲貝塚（早瀬ほか 2006）などに類例があり、大木 9 ～ 10 式に比定される。

このほかⅡ E1・Ⅱ E2・Ⅱ F1・Ⅱ F2 類については、複数型式に施文される装飾であるため時期を特定することができなかった。

（4）遺物包含層の各細別層にみられる土器の編年的位置づけ

前項までの遺物包含層出土土器の特徴とそれらの類例と年代を考慮し、遺物包含層の細別層にみられる土器について編年的位置づけの検討をおこなう。

SX1 包含層では、細別層ごとに抽出した分類対象土器については繊維の有無や装飾類型からほぼ共通して大木 1 式～ 10 式に比定される土器がみられることがわかる。次に、時期検討対象土器をみると、Ⅲ c 層では、大木 1 式～ 2a 式、大木 4 式～ 6 式、大木 7a 式、大木 8 式に比定される土器が

みられる。そのうち、大木 1 式～ 2a 式に比定される土器が他型式よりも多く出土しており、復元個体は包含層の上部にまとまる傾向がみられる。Ⅲ b 層では大木 1 式～ 2a 式、大木 4 式～ 6 式、大木 7a 式、大木 8 式に比定される土器がみられる。ただし、復元個体が一括出土しているものは概ね大木 4 式から大木 6 式に比定される土器が主体であり、包含層の中間部の東側にまとまっている。Ⅲ a 層は、他の層とは異なり遺物包含層内での残存状態の良好な範囲を判断出来なかったことから、時期検討対象土器を抽出できておらず主体となる装飾類型などは検討出来ていない。

SX2 包含層では、分類対象土器には大木 1 式～ 9 式に比定される土器がみられる。ただし、この遺物包含層については大別層のⅢ層としてしか捉えることができず、出土している土器の量も少なく、それらは 10cm 未満の小破片がほとんどである。また、それらの土器片は全体的に摩滅している。このような出土状況であるため、SX1 包含層とは異なり主体となる装飾類型などを抽出することは出来ていない。

SX3 包含層では、分類対象土器をみるとⅢ c 層では大木 1 式～ 6 式、Ⅲ a 層では大木 1 式～ 8 式に比定される土器がみられる。Ⅲ b 層は 22 点であり他の層に比べて出土量が非常に少量ではあるが、大木 1 式～ 8 式に比定される土器がみられる。出土量が多いⅢ c 層とⅢ a 層についてその中でみられる各土器型式に比定される土器のそれぞれの出土傾向をみると、Ⅲ c 層では大木 1 式～ 2a 式に比定される土器が多数出土しており、Ⅲ a 層では大木 4 式～ 6 式に比定される土器が多数出土している。

（5）遺物包含層の時期について

上記はあくまでも各細別層にみられた類型別土器の編年的位置づけであり、それが遺物包含層の形成時期と一致するかについてはさらに検討が必要である。そこで、全面的な発掘調査を実施している SX1 包含層について、土器以外で層の堆積状況を示す要素について検討する。遺構についてみると、Ⅲ c 層やⅢ b 層の層中には炉跡が検出されていることから、Ⅲ c 層やⅢ b 層として一括して捉えられた中においても段階的に堆積していることがわかる。Ⅲ c 層やⅢ b 層については、図版 14 で示したように細別層よりもさらに細かな層が捉えられている。これらの細かな層は平面的な関係性を捉えられていないが、それらの層が各炉跡の形成時期と関係している可能性がある。また、そもそも各層内に遺構が残されていることから、古代以降による改変が明らかな範囲を除けば、堆積した後に大規模な土壌の移動などの大きな改変による撹乱の影響は受けていないと考えられる。次に、炉跡で年代が示されているものの一つにⅢ c 層上面でみられる炉跡があり、その年代値は 5,630 ± 30yrBP を示している。中沢遺跡での年代値を参考にすると、この炉跡が示す年代値は、前期前葉におさまってくる。また、Ⅲ c 層には十和田中掫火山灰がみられるが、その上層であるⅢ b 層にはみられない。中沢遺跡では十和田中掫火山灰は大木 3 式古段階に位置づけられていることから、少なくともⅢ c 層は大木 3 式古段階の時期以前に形成されていたことになる。一方で、Ⅲ b 層は十和田中掫火山灰の降灰後の大木 3 式古段階より新しい時期に堆積したことになる。

上記で示した土器以外で層の堆積状況を示す要素と土器の検討結果から、Ⅲ c 層では、どの要素においても土器の検討結果で示された大木 1 式～ 2a 式に比定される土器が主体的であることと整合

性がみられる。Ⅲｂ層においても大木４式～６式に比定される土器が主体的にみられることと齟齬はない。ただし、Ⅲｂ層では、土器以外の要素からは、時期幅を特定出来るようなものはみられず、時期検討対象土器をみても大木 7a 式～ 10 式に比定される土器がみられる。そのため、現時点ではⅢｂ層の形成時期としては大木 7a 式～ 10 式期までの時期を含む可能性があるが、Ⅲｂ層は厚さが最大で 60cm あり、層中に炉跡が検出されていることや部分的ではあるが細別層よりも細かな層が捉えられていることを考慮すると、少なくとも一気に形成されたのではなく段階的に形成されたと考えられる。そのように考えた場合に、土器の検討結果で示されたⅢｂ層において大木４式～６式に比定される土器が主体的にみられることは、その時期に形成された段階の残存状況が特に良好であったことを示している可能性がある。逆に、大木 7a 式～ 10 式に比定される土器はⅢｂ層とⅢａ層で同程度出土しているため、大木４式～６式の時期に形成された段階よりも上部が後に改変を受けており、そのため大木 7a 式～ 10 式の土器の多くがⅢａ層に混入している可能性がある。

少なくとも、現時点で認識できるⅢｂ層が大木４式～６式が主体であると捉えることに大きな問題はないと考える。

（６）他地域から搬入された土器

Ⅰ区の基本層Ⅱ層から、イノシシの顔を模した口縁部突起１点（図版 153-1）が出土している。立体的な形状で、頭部と鼻部まで一体をなし、頂部が丸みを帯びている。耳、目、鼻が表現され、目と鼻孔は刺突により描かれている。

本遺跡出土のものは、出土層位から時期を判断することはできないが、このような獣面突起は諸磯ｂ式における特有の突起であることが指摘されている（近江 2015）。さらに、近江は獣面突起の分類とその変遷について検討をおこなっており、その分類案を参考にすると、立体化に富み、頭部表現が現れて、頭部と鼻部までが一体をなし、頂部が丸みを帯びるC1類に分類されると考えられる。C1類は、諸磯ｂ2 式段階に帰属すると想定されているため、東北地方南部の土器編年との対応関係では、大木４式古段階に併行する（松田 2017）。

獣面突起の出現は、出土量が豊富な群馬県域と考えられており（近江 2015）、本遺跡のものも、確認されているものが１点のみであることを考慮すると搬入品の可能性が高い。また、これまで諸磯ｂ式期における出土例では山形県押出遺跡が北限とされていたこと（近江 2015）から、本遺跡のものが当該期の最北の出土事例と考えられる。しかし、秋田県坂の上Ｅ遺跡で大木６式と平行する時期と考えられるものがみられ、それは諸磯ｃ式以外の型式の系統に含まれる可能性が指摘されている（近江 2015）ことから、本遺跡のものも大木４式古段階より新しい時期の可能性があり、諸磯式とは異なる系統に含まれる可能性がある。

（７）土製品

本調査で出土した土製品のうち、SX1 遺物包含層 14 点、SX2 遺物包含層１点、SX3 遺物包含層３点の 16 点を掲載した。種類としては、袖珍土器、土偶、イチジク形土製品、土製装身具、円盤状土

製品がある。円盤状土製品以外は、各種類に分類できるもののうち大部分を掲載している。

①袖珍土器

袖珍土器は、可能性があるものを含めてSX1のⅢa層から2点（図版68-12・13）出土した。どちらも時期を特定できるような出土状況を示していないが、施文されている装飾から大木4・5式に収まると考えられる。

②土偶

土偶は可能性のあるものを含めてSX1から4点、SX3から1点出土している。全て板状土偶の破片資料で、全体の形状を把握できるものは無い。

胎土に繊維を含むものにはSX1のⅢc層から出土した図版68-2があり、上半部が残存している。山形の頭部、膨らんだ乳房、短い腕が表現される。類例には、大木囲貝塚（藤沼1992）や三神峯遺跡（仙台市教育委員会1980）が挙げられる。これらの資料は、表面採集資料であり共伴土器は不明であるが、胎土に繊維を含み大木2式に伴う土偶より形態的に古くみて矛盾しないことなどから、大木1式に伴うと考えられることが指摘されており（藤沼1992）、図版68-2についても同時期と考えられる。

胎土に繊維を含まないものには、SX1の細別層から出土した体部破片とSX3のⅢa層から出土した脚部破片（図版133-7）がある。体部破片では膨らむ乳房及び乳房上部にリング状の高まりあるいは円形の凹みが表現されるもの（図版68-3・10）と、胸部中央に円形の凹みが表現されるもの（図版68-5）がある。これらの土偶は、形態以外に沈線文や半截竹管状工具による平行沈線文、刺突文により装飾が施される。図版8604の類例は、糠塚貝塚（佐藤2012）、嘉倉貝塚（宮城県教育委員会2003）、東要害貝塚（大崎市教育委員会2008）で確認できる。ただし、これらとは、胸部にリング状の高まりを持つ特徴は共通するが、膨らんだ乳房が表現される点が異なっている。糠塚貝塚、嘉倉貝塚、東要害貝塚から出土している土偶は、大木3式～5式に比定されているが、共伴土器が明確なものは少ない。嘉倉貝塚では、リング状の高まりが施されるものが大木5式に比定される住居跡の床面直上から出土している（宮城県教育委員会2003）。図版68-5は、胸部中央に円形の凹みを持ち、装飾は半截竹管状工具による平行沈線文や刺突文が施される。三神峯遺跡（仙台市教育委員会1980）に類例がみられ、それについては大木6式に比定される（藤沼1992）。図版68-10は、胸部に円形の凹みと膨らんだ乳房が表現され、押圧縄文により装飾が施されている。形態や装飾的特徴で図版68-3と大きく差はないため、大木4式～7b式に収まると考えられる。これらのことから胎土に繊維を含まない土偶については、おおむね前期中葉から中期前葉に該当すると考えられる。

③イチジク形土製品

イチジク形土製品は、SX1のⅢa層から図版68-8の1点のみ出土した。半分以上が欠損しているが、残存部から先端部は前面に刺突文が施されており、基部に向かって無文でミガキが施されていると考えられる。本遺跡では時期を特定できるような出土状況を示していない。本遺跡と近接する中沢遺跡

でも、無文のものが報告されているが、本遺跡と同様に時期を特定できるような出土状況を示していない（石巻市教育委員会 2018）。一方で、嘉倉貝塚では、まとまって出土しており、他遺跡の資料を含めた検討から、北上川中流域に分布し、大木 4 式～ 7 式頃の時間幅に収まることが指摘されている（宮城県教育委員会 2003）。

④土製装身具

土製装身具は、SX1 のⅢ c 層から 1 点（図版 68-1）、Ⅲ a 層から 1 点（図版 68-9）出土している。

図版 68-1 は土製垂飾類であり、勾玉の形状を呈しており、装飾はなくミガキが施されている。時期を特定できるような出土状況を示していない。

図版 68-9 は、土製栓状耳飾である。土製栓状耳飾については吉田（2003）によって研究がおこなわれており、吉田による分類に本遺跡のものをあてはめると、A Ⅳ類 1 種サイズⅢに該当し、その類型については、縄文時代中期後半から後期前半のもので大木式文化圏に分布の中心があるとされている（吉田 2003）。県内の類例としては、蔵王町二屋敷遺跡（宮城県教育委員会 1984）でみられる。

⑤円盤状土製品

円盤状土製品は、SX1 から 260 点、SX2 から 10 点、SX3 から 14 点出土している。大きさは、最大径 30mm ～ 70mm のものが多いが、一部 200mm を超えるものもある。大部分は、土器の体部破片を利用したものと考えられ、周辺を打ち欠き研磨して成形している。遺物包含層のどの層からも出土しており、転用前の土器の装飾をみると、時期を判断できるものには大木 1 式～ 6 式があり年代幅が広い。羽黒下遺跡では少なくとも大木 1 式～ 6 式の時期幅において製作されていたと考えられる。

第２節　石器・石製品

石器･石製品は、調査区全体で 7,553 点出土している。それぞれの調査区ごとの出土点数の内訳は、表 64 に示す通りである。

はじめに、各器種の特徴をもとにそれぞれの形態や製作・使用状況により類型化をおこない、類型ごとにそれぞれさらに細分した。なお、各包含層における各器種の類型別の出現頻度を表 66 ～ 69 に示した。本遺跡における石材の獲得から石器・石製品の製作、それらの使用、廃棄に至る過程と、各時期における石器・石製品の特徴とそれらの時間的な変化をとらえていくことを目的とする。

（１）出土石器・石製品の分類

①石器

ｉ）石鏃

二次加工により作出した尖頭部を有し、扁平で弓矢の鏃としての用途を想定しえるもの。尖頭器としたものに比べ小型である。基部の形態により、Ⅰ～Ⅴ類、未成品に大別した。各類型はそれぞれ形状によりさらに細分した（図版 207）。

Ⅰ類：基部に抉りを入れ、2 個の逆刺を作出しているもの（凹基）。

ａ：基部の抉りの長さと最大長の比率が 0.1 未満で、U 字状を呈するもの。

１：両側縁が外湾するもの。

表 64　石器の層別器種組成

調査区	遺構	層	石鏃	尖頭器	石錐	石匙	箆状石器	打製石斧	礫器	磨製石斧	板状石器	楔形石器	不定形石器	磨石・敲石類	砥石	石皿・台石類	剥片	石核	総計
Ⅰ	Ⅱ層		15	1	1	2		1	2	4		12	23	99	2	2	143	10	317
	SX1	Ⅲ		2		1		1		5		9	10	90	1	4	155	9	287
		Ⅲａ	89	12	11	13	4	7	5	17	1	105	108	513	5	26	1170	44	2130
		Ⅲｂ	92	17	12	20	1	6	1	28	3	66	84	785	10	29	918	49	2121
		Ⅲｃ	54	18	7	16	4	19	4	10		42	80	392	14	23	581	38	1302
	その他の遺構		7			1		3				5	3	22		1	63		105
	撹乱					1				1				4			1		7
	表土		3		2	3			1	3		5	5	45	1	1	34	6	109
	不明		12	2	3	3	4	6	1	7		19	30	139	1	6	110	2	345
Ⅱ	Ⅱ層									1		3	2	21			18		45
	SX2	Ⅲ	2	4	1			1	1	1		1	6	88	1	2	13	2	123
	その他の遺構																1		1
	表土		2		1					2		1		13			2		21
	不明											2		6			3		11
Ⅲ	Ⅱ層		1			1		1						7			2		12
	SX3	Ⅲａ	3	2	1		1			1		1	4	4	1	3	10	1	32
		Ⅲｂ	2					1					2				2		7
		Ⅲｃ	4			2			1				1	2			2		12
	その他の遺構											2					2		4
	表土		1		1							4	5	16			5		32
	不明		1			1								19			10	1	32
不明			5							1		1	2	42		3	12		66
総計			293	58	40	64	14	46	16	81	4	278	365	2307	36	100	3257	162	7121

表 65　石製品の層別器種組成

調査区	遺構	層位	石錘	玦状耳飾	扁平円形状石製品	有孔石製品	ヘラ状石製品	男根状石製品	石棒・石剣類	線刻礫	異形石器	石器模造品	L字状石製品	柄付石製品	棒状石製品	その他の石製品	総計
Ⅰ	Ⅱ層			2	1	1			10						1	1	16
	SX1	Ⅲ層	1		5				13					1		1	21
		Ⅲa層	2	2	12	5		3	43	3	1	1	1		11	7	91
		Ⅲb層	8	8	20	7	1	2	83	3		1	5	3	15	11	167
		Ⅲc層	6	2	10	4			22	1	1			2	6	2	56
	その他の遺構		1		1	1			1	1					1	1	7
	撹乱								1								1
	表土		1	1	2				6					1	1		12
	不明		1	1	3			1	15				1		4	2	28
Ⅱ	Ⅱ層		1						3								4
	SX2	Ⅲ層	1		3				4	1			1		3	1	14
	表土		1						1								2
	不明				1				1						1		3
Ⅲ	Ⅱ層														1		1
	SX3	Ⅲa層						1								1	2
		Ⅲc層														2	2
不明				1		1			1						1	1	5
総計			23	17	58	19	1	7	204	9	2	2	8	7	45	30	432

2：両側縁が直線的なもの。

3：両側縁が内湾するもの。

b：基部の抉りの長さと最大長の比率が 0.1 未満で、V 字状を呈するもの。

1：両側縁が直線的なもの。

2：両側縁が内湾するもの。

c：基部の抉りの長さと最大長の比率が 0.1 以上 0.3 未満で、U 字状を呈するもの。

1：両側縁が外湾するもの。

2：両側縁が直線的なもの。

3：両側縁が内湾するもの。

4：両側縁に肩部があるもの。

d：基部の抉りの長さと最大長の比率が 0.1 以上 0.3 未満で、V 字状を呈するもの。

1：両側縁が外湾するもの。

2：両側縁が直線的なもの。

3：両側縁が内湾するもの。

e：基部の抉りの長さと最大長の比率が 0.3 以上で、U 字状を呈するもの。

1：両側縁が外湾するもの。

2：両側縁が直線的なもの。

f：基部の抉りの長さと最大長の比率が 0.3 以上で、V 字状を呈するもの。

1：両側縁が外湾するもの。

2：両側縁が直線的なもの。

表 66　石器・石製品の類型別出現頻度（1）

石鏃			Ⅰ 1A	Ⅰ a1A	Ⅰ a1B	Ⅰ a1C	Ⅰ a1D	Ⅰ a2A	Ⅰ a2B	Ⅰ a2D	Ⅰ a3A	Ⅰ b1A	Ⅰ b1B	Ⅰ b2B	Ⅰ b2C	計
Ⅰ	Ⅱ層						1									1
	SX1	Ⅲ a 層		1		1	1	3	1			1	1		1	10
		Ⅲ b 層	1	1	2	1		4	2	1	1	2		1		16
		Ⅲ c 層			1	1	1	2	2		1	1				9
	その他の遺構															0
	表土															0
	不明															0
Ⅱ	SX2	Ⅲ層														0
	表土							1								1
Ⅲ	Ⅱ層								1							1
	SX3	Ⅲ a 層														0
		Ⅲ b 層						1								1
		Ⅲ c 層						1								1
	表土															0
	不明															0
不明					1											1
総計			1	2	4	3	3	12	6	1	2	4	1	1	1	41

石鏃			Ⅰ c	Ⅰ c1A	Ⅰ c1B	Ⅰ c1C	Ⅰ c1D	Ⅰ c2	Ⅰ c2A	Ⅰ c2B	Ⅰ c2C	Ⅰ c2D	Ⅰ c3A	Ⅰ c4C	Ⅰ d1A	Ⅰ d2A	Ⅰ d2B	Ⅰ d2C	Ⅰ d3A	Ⅰ e1A	Ⅰ e2A	Ⅰ f1A	Ⅰ f2A	計
Ⅰ	Ⅱ層			2					2		1				1	1				1				8
	SX1	Ⅲ a 層	1	6	4	1	1		9	4	1		1	1		1	2			2	5		1	40
		Ⅲ b 層		9	5	1	1		13	9	2	1					1	1		2		1		46
		Ⅲ c 層			1	1		1	6		2					1		1	1					14
	その他の遺構				1				2	1										1				5
	表土			1					1															2
	不明								2		1									1				4
Ⅱ	SX2	Ⅲ層														1								1
	表土																							0
Ⅲ	Ⅱ層																							0
	SX3	Ⅲ a 層		1					1															2
		Ⅲ b 層															1							1
		Ⅲ c 層							2							1								3
	表土									1														1
	不明			1																				1
不明											1										1			2
総計			1	20	11	3	2	1	38	15	8	1	1	1	1	5	4	2	1	7	6	1	1	130

石鏃			Ⅱ 1A	Ⅱ 1B	Ⅱ 1C	Ⅱ 1D	Ⅱ 2A	Ⅱ 2B	Ⅱ 2C	Ⅱ 2D	Ⅱ 3A	Ⅱ 3B	Ⅲ 1B	Ⅲ 1C	Ⅲ 1D	Ⅲ 2A	Ⅲ 2C	Ⅲ 2D	Ⅲ c1C	計
Ⅰ	Ⅱ層		1			1									1	1	1			5
	SX1	Ⅲ a 層					3		2			1	1		2			2	1	12
		Ⅲ b 層	1	1			2	2	2	1				1	2	1	1			14
		Ⅲ c 層	2		1		9	2			1	1	1			1				18
	その他の遺構		1										1							1
	表土																			0
	不明			2			2													4
Ⅱ	SX2	Ⅲ層																		0
	表土																			0
Ⅲ	Ⅱ層																			0
	SX3	Ⅲ a 層													1					1
		Ⅲ b 層																		0
		Ⅲ c 層																		0
	表土																			0
	不明																			0
不明																				0
総計			5	3	1	1	16	4	4	1	1	2	3	1	6	3	2	2	1	56

石鏃			Ⅳ a1A	Ⅳ a1C	Ⅳ b1A	Ⅳ b1B	Ⅳ b2A	Ⅳ c1A	Ⅳ c1C	Ⅳ c2C	Ⅴ a	未成品	不明	計
Ⅰ	Ⅱ層				1									1
	SX1	Ⅲ a 層	2	1	3	1	3	1		1	2	6	7	28
		Ⅲ b 層			1		1					5	9	16
		Ⅲ c 層			1		1		1			4	6	13
	その他の遺構													0
	表土											1		1
	不明											3	1	4
Ⅱ	SX2	Ⅲ層	1											1
	表土				1									1
Ⅲ	Ⅱ層													0
	SX3	Ⅲ a 層												0
		Ⅲ b 層												0
		Ⅲ c 層												0
	表土													0
	不明													0
不明												1	1	2
総計			3	1	7	1	5	1	1	1	2	20	24	67

表 67　石器・石製品の類型別出現頻度（2）

尖頭器			Ⅰ	Ⅰa2	Ⅰb	Ⅰb1	Ⅰb2	Ⅰb3	Ⅱ1	Ⅱ2	Ⅱb	Ⅱb1	Ⅱb2	Ⅲa2	Ⅲa3	Ⅳ1	Ⅳ2	Ⅴ1	Ⅴ2	1	4	未成品	不明	計
Ⅰ	Ⅱ層															1								1
	SX1	Ⅲ層	1																				1	2
		Ⅲa層	1		2		1	2					1						1				4	12
		Ⅲb層		1		3	1				2	1	1					1				1	6	17
		Ⅲc層	1		1	5			1	1		1		1	1		1		1				4	18
	不明															1	1							2
Ⅱ	SX2	Ⅲ層				2														1	1			4
Ⅲ	SX3	Ⅲa層				1																	1	2
総計			3	1	3	11	2	2	1	1	2	2	2	1	1	2	2	1	2	1	1	1	16	58

石錐			Ⅰa	Ⅰb	Ⅱa	Ⅱa1	Ⅱa2	Ⅱb1	Ⅱb2	Ⅱc1	Ⅱc 1	Ⅱc2	計
Ⅰ	Ⅱ層							1					1
	SX1	Ⅲa層				1	2	1	3	2	1	1	11
		Ⅲb層		1	1		3	3	1			3	12
		Ⅲc層		1			1	1		3		1	7
	表土				1							1	2
	不明		1	1						1			3
Ⅱ	SX2	Ⅲ層								1			1
	表土			1									1
Ⅲ	SX3	Ⅲa層										1	1
	表土									1			1
総計			1	4	2	1	6	6	4	8	1	7	40

篦状石器			Ⅰa	Ⅰb	Ⅱ	未成品	不明	総計
Ⅰ	SX1	Ⅲa層	2		1		1	4
		Ⅲb層		1				1
		Ⅲc層	3		1			4
	不明		1	1	1	1		4
Ⅲ	SX3	Ⅲa層			1			1
総計			6	2	4	1	1	14

石匙			Ⅰ	Ⅰ2	Ⅰ6	Ⅰa2	Ⅰa4	Ⅰa5	Ⅰa6	Ⅰa7	Ⅰb	Ⅰb4	Ⅰc4	Ⅰd5	Ⅰe1	Ⅱa1	Ⅱa5	Ⅱa6	Ⅱb2	Ⅱb5	Ⅱb6	Ⅲa4	Ⅲa5	Ⅲa6	Ⅲb1	Ⅲb2	Ⅲb3	4	未成品	不明	計
Ⅰ	Ⅱ層															1								1						2
	SX1	Ⅲ層	1																											1
		Ⅲa層		1	1	3		2			1	1		1						1			1							13
		Ⅲb層	1					1	1	1			1		1		1	1			3	1		1		1	1	1	1	3	20
		Ⅲc層				3	1				1	4							1			3						1	1	1	16
	その他の遺構											1																			1
	撹乱																						1								1
	表土											1																		2	3
	不明					1						1								1											3
Ⅲ	Ⅱ層							1																							1
	SX3	Ⅲc層										1								1											2
	不明																												1		1
総計			2	1	1	7	1	4	1	1	2	9	1	1	1	1	1	1	1	3	3	4	2	1	1	2	1	2	3	6	64

打製石斧			Ⅰa	Ⅰa2	Ⅰa3	Ⅱ1	Ⅱ2	Ⅱ3	Ⅲ2	Ⅲ3	Ⅳ2	不明	計
Ⅰ	Ⅱ層							1					1
	SX1	Ⅲ層										1	1
		Ⅲa層		1	1		2	1		1		1	7
		Ⅲb層		2			2				1	1	6
		Ⅲc層		2		1	8	3			1	4	19
	その他の遺構							1	1			1	3
	不明		1	2			2				1		6
Ⅱ	SX2	Ⅲ層						1					1
Ⅲ	Ⅱ層							1					1
	SX3	Ⅲb層					1						1
総計			1	7	1	1	15	8	1	1	3	8	46

礫器			Ⅰa1	Ⅰa2	Ⅰa3	Ⅰb1	Ⅰb2	Ⅰb3	Ⅱb1	Ⅱb2	計
Ⅰ	Ⅱ層				2						2
	SX1	Ⅲa層	1	1		2	1				5
		Ⅲb層						1			1
		Ⅲc層	1	1	1		1				4
	表土						1				1
	不明									1	1
Ⅱ	SX2	Ⅲ層				1					1
Ⅲ	SX3	Ⅲc層							1		1
総計			2	2	3	3	3	1	1	1	16

磨製石斧			Ⅰ	Ⅰa	Ⅰa1	Ⅰa2	ⅠaB	Ⅰb	Ⅰb1	Ⅰb1A	Ⅰb2	Ⅰc	Ⅱ	Ⅱa	Ⅱb	Ⅲ	ⅢA	ⅣA	Va	Vb	未成品	不明	計
Ⅰ	Ⅱ層			1					2	1													4
	SX1	Ⅲ層		3		1																1	5
		Ⅲa層	1	5		1	1		4									1			2	2	17
		Ⅲb層	1	6	1	4			6	1	1		2	1	1	1	1					2	28
		Ⅲc層				2						1	1		2			1		1	1	1	10
	撹乱																1						1
	表土		1					1	1														3
	不明			1						2					1	1	1		1				7
Ⅱ	Ⅱ層			1																			1
	SX2	Ⅲ層									1												1
	表土								1		1												2
Ⅲ	SX3	Ⅲa層																				1	1
不明																						1	1
総計			3	17	1	8	1	1	14	4	3	1	3	1	4	2	3	2	1	1	3	8	81

表 68　石器・石製品の類型別出現頻度（3）

不定形石器			Ⅰ	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	ⅢA	Ⅲb	Ⅲc	Ⅲd	不明	計
Ⅰ	Ⅱ層				1			4	5	13		23
	SX1	Ⅲ層		2	1	2		1	1	3		10
		Ⅲa層	8	6	10	10	6	12	22	33	1	108
		Ⅲb層	3	7	2	3	3	4	13	48	1	84
		Ⅲc層	4	2	4	6	6	5	18	35		80
	その他の遺構								2	1		3
	表土					1			1	3		5
	不明		2		1	1		4	7	14	1	30
Ⅱ	Ⅱ層								1	1		2
	SX2	Ⅲ層							3	3		6
Ⅲ	SX3	Ⅲa層	1	1		1				1		4
		Ⅲb層								2		2
		Ⅲc層								1		1
	表土							1	1	3		5
不明									1	1		2
総計			18	18	19	24	15	31	75	162	3	365

楔形石器			Ⅰa	Ⅰaa	Ⅰb	Ⅰc	Ⅰd	Ⅰe	Ⅰf	Ⅱa	Ⅱaa	Ⅱab	Ⅲc	不明	計
Ⅰ	Ⅱ層		3		4	3		2							12
	SX1	Ⅲ層	3		3	1			1					1	9
		Ⅲa層	52	1	17	24	1	2	3			3		2	105
		Ⅲb層	30		16	14		1	1	1		2	1		66
		Ⅲc層	24		6	9		1	1	1					42
	その他の遺構		2		2			1							5
	表土		1		3	1									5
	不明		6		4	4			2	1	1	1			19
Ⅱ	Ⅱ層		2		1										3
	SX2	Ⅲ層			1										1
	表土		1												1
	不明		1		1										2
Ⅲ	SX3	Ⅲa層			1										1
	その他の遺構		2												2
	表土		1		3										4
不明					1										1
総計			128	1	63	56	1	7	8	3	1	6	1	3	278

磨石・敲石類			Ⅰ	Ⅰa	ⅠaC	Ⅰb	Ⅰc	Ⅰc	Ⅰd	Ⅰd	Ⅰe	Ⅰf	Ⅰf	Ⅰg	Ⅰh	Ⅰi	Ⅰj	Ⅰk	Ⅰl	Ⅰl	Ⅰm	Ⅰn	計
Ⅰ	Ⅱ層		1	41		3	5		3		1	1		1	2	2	1						61
	SX1	Ⅲ層		35	1	2	8	1	2			1				4	1	1				1	57
		Ⅲa層		191		16	74		8		2	8	3	1	2	5					3	3	316
		Ⅲb層		334		32	43	2	13	1	2	10		1	2	4	1		4	1		1	451
		Ⅲc層	1	147		11	30	1	2		1	7	2	2	8	1	1		2		1		217
	その他の遺構			12		2	2																16
	撹乱			2			1																3
	表土			20		2	1									1							24
	不明			56		7	14		2			1				4			3				87
Ⅱ	Ⅱ層			12											1	1							14
	SX2	Ⅲ層		36		3	7		2						1	2			1				52
	表土			6		1	2								1								10
	不明																						0
Ⅲ	Ⅱ層			1		1	2																4
	SX3	Ⅲa層																					0
		Ⅲc層					1								1								2
	表土			6		1	1																8
	不明			11			2					2											15
不明				19		1	3									1							24
総計			2	929	1	82	196	4	32	1	6	30	5	5	18	25	4	1	10	1	4	5	1361

磨石・敲石類			Ⅱ	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅱd	Ⅱe	Ⅱf	Ⅱf	Ⅱh	Ⅲ	ⅢA	Ⅲb	Ⅲc	Ⅲd	Ⅲh	Ⅳ	Va	Vb	Vc	Vc	Vd	Vn	不明	計
Ⅰ	Ⅱ層			4	1	3					1		2					16							11	38
	SX1	Ⅲ層	1	1														7							24	33
		Ⅲa層		45	13	12	7	1	2			1	7					63	2						44	197
		Ⅲb層	5	40	7	7	4		5				12	1	1	2	1	141	5	1					102	334
		Ⅲc層	1	31	7	5	1	1	5	1			2		1			52	2				1		65	175
	その他の遺構			2														1							3	6
	撹乱			1																						1
	表土			5		3			1				1					5							6	21
	不明			13		3			1		2		1					13						1	18	52
Ⅱ	Ⅱ層			1														2							4	7
	SX2	Ⅲ層	2	1									1			1		21							10	36
	表土					2							1													3
	不明																	5							1	6
Ⅲ	Ⅱ層			2														1								3
	SX3	Ⅲa層				1												1							2	4
		Ⅲc層																								0
	表土				1	1		2					1						1		1				1	8
	不明			1					1									1				1				4
不明				2	1	1			1		1							3							9	18
総計			9	149	30	38	12	4	16	1	4	1	28	1	2	3	1	332	10	1	1	1	1	1	300	946

石皿・台石類			Ⅰ	Ⅰa	Ⅰb	Ⅰc	Ⅱ	Ⅱb	—	計
Ⅰ	Ⅱ層				1				1	2
	SX1	Ⅲ層			1				3	4
		Ⅲa層		1	17	4			4	26
		Ⅲb層		2	15	2	1	1	8	29
		Ⅲc層	1		12	7		1	2	23
	その他の遺構				1					1
	表土					1				1
	不明				4	1		1		6
Ⅱ	SX2	Ⅲ層			1				1	2
Ⅲ	SX3	Ⅲa層			2				1	3
不明						3				3
総計			1	3	54	18	1	3	20	100

石錘			Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	計
Ⅰ	SX1	Ⅲ層	1			1
		Ⅲa層	1		1	2
		Ⅲb層	3	4	1	8
		Ⅲc層	3		3	6
	その他の遺構			1		1
	表土			1		1
	不明		1			1
Ⅱ	Ⅱ層				1	1
	SX2	Ⅲ層			1	1
	表土				1	1
総計			9	6	8	23

玦状耳飾			Ⅰ	Ⅱ	不明	計
Ⅰ	Ⅱ層			1	1	2
	SX1	Ⅲa層	1		1	2
		Ⅲb層	2	5	1	8
		Ⅲc層	2			2
	表土		1			1
	不明				1	1
不明					1	1
総計			6	6	5	17

表 69　石器・石製品の類型別出現頻度（4）

扁平円形状石製品			Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	計
Ⅰ	Ⅱ層				1	1
	SX1	Ⅲ層	4		1	5
		Ⅲa層	2	2	8	12
		Ⅲb層	12	2	6	20
		Ⅲc層	4	2	4	10
	その他の遺構			1		1
	表土		2			2
	不明		3			3
Ⅱ	SX2	Ⅲ層	1		2	3
	不明		1			1
総計			29	7	22	58

石棒・石剣類			Ⅰ	Ⅰb	Ⅱ	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	ⅢA	Ⅲb	Ⅲc	Ⅳ	ⅣA	Ⅳa	Ⅳb	Ⅳc	不明	計
Ⅰ	Ⅱ層					1	4							1	3		1	10
	SX1	Ⅲ層		2			4	1							5		1	13
		Ⅲa層		3	1	1	12		1			2	5		13	2	3	43
		Ⅲb層	1	12	1	2	21	1	2	5		2	5		21	1	9	83
		Ⅲc層		1			10						3		5	1	2	22
	その他の遺構																1	1
	撹乱														1			1
	表土					1		1			1		1		2			6
	不明					1	1					1	4		6		2	15
Ⅱ	Ⅱ層												1		2			3
	SX2	Ⅲ層		1		1							1		1			4
	表土								1									1
	不明			1														1
不明				1														1
総計			1	21	2	7	52	3	4	5	1	5	20	1	59	4	19	204

Ⅱ類：基部を直線的に調整しているもの（平基）。

1：両側縁が外湾するもの。

2：両側縁が直線的なもの。

3：両側縁に肩部があるもの。

Ⅲ類：基部を半円形に調整しているもの（円基）。

1：両側縁が外湾するもの。

2：両側縁が直線的なもの。

Ⅳ類：基部が突出するもの。

a：基部の両側辺に深い抉りを入れ、茎を作出しているもの。

b：基部の両側辺に浅い抉りを入れ、茎を作出しているもの。

1：鏃身が茎より長いもの。

2：鏃身が茎とほぼ同じ長さか短いもの。

c：基部に抉りを入れないもの。

1：幅広のもの。

2：細身のもの。

Ⅴ類：基部に両側から抉りが入れられるもの。

未成品：製作途中にあると考えられるもの。基部や鏃身が非対称、一部が極端に厚みをもつなどの特徴を有する。

また、Ⅰ～Ⅲ類については加工調整の状況により以下の 4 類に細分する。

A：両面に面的な二次加工が施されるもの。

B：両面に加工がみられるが、片面には主要剥離面が残っているもの。

C：両面共に縁辺のみに二次加工が施されているもの。

D：片面のみの縁辺に二次加工がみられるもの。

石鏃は本遺跡では 293 点出土している。包含層別にみると、SX1 で 262 点、SX2 で 2 点、SX3 で

表 70　石器・石製品の器種別石材組成

器種	砂岩	泥岩	珪質頁岩	頁岩	チャート	珪質凝灰岩	珪化凝灰岩	流紋岩質凝灰岩	緑色凝灰岩	凝灰岩	碧玉A	碧玉B	碧玉C	碧玉D	メノウ	黒曜石	玄武岩質安山岩	安山岩	ひん岩	花崗岩	細粒閃緑岩	閃緑岩	玄武岩	緑色岩	細粒ハンレイ岩	ハンレイ岩	蛇紋岩	粘板岩A1	粘板岩A2	粘板岩A3	粘板岩B	粘板岩	千枚岩	ホルンフェルス	石英	玉髄	総計
石鏃			133	37		21	45	11		3	4			19		9														1				4	6	293
尖頭器			42	9		1	5			1																										58
石錐			16	7		4	5	2				1		5																						40
石匙			44	8		3	2			1		2		1													1							1	1	64
篦状石器			6			1	2	1	1	1		1		1																						14
打製石斧									2	2								33	7			1										1				46
礫器			1				1											6	4				1									1	2			16
磨製石斧				1					23	1								36	12			3		1		1	1	1						1		81
板状石器																												2	1		1					4
楔形石器			71	25		48	58	11		4	1	1	5	38	2	1																		8	5	278
不定形石器			172	54	1	32	29	8		1	3	4	4	33		8																		8	8	365
磨石・敲石類	151	6		2	1	1	28	3	5	65				1				1543	72	253	1	74	36		1	30		1	2				3	18	10		2307
砥石	14																	19		1						1							1				36
石皿・台石類	5																	87		6						1			1							100
石錘	1									2							1	17														1	1			23
玦状耳飾									1																	3	4	3			6				17
扁平円形状石製品										2																	40	11		5						58
有孔石製品				1			1			3								8									2	2		2						19
ヘラ状石製品																														1						1
男根状石製品										1								4									2									7
石棒・石剣類										2								3									112	52	3	26	2	4				204
線刻礫																		2									4	1		1		1				9
異形石器			2																																	2
石器模造品																											1			1						2
L字状石製品										1								7																		8
柄付石製品																											5	2								7
棒状石製品							3			1								8									19	7	1	1		2	3			45
その他の石製品										3								8									7	2	1	6		3				30
総計	171	6	487	144	2	111	179	36	32	94	8	9	9	98	2	18	1	1781	95	260	1	78	37	1	1	33	4	201	84	5	45	2	23	25	31	20	4134

10 点である。なお、石鏃の詳細については次項で検討する。

ii）尖頭器

両面加工の器体を持ち尖頭部を有するもの。石鏃から尖頭器への大きさの変遷は連続的であり、形態も類似するものがあるため、両者の間に明確な境界線を引くことはできないが、最大長 4 cm を境にそれ以下について点数にまとまりが認められることから、4 cm 未満のものを石鏃とし、未成品以外で長さ 4 cm 以上のものを便宜的に尖頭器とした。長さ 4 cm 未満のものについては、破損品であること、幅広で厚みをもつこと、二次加工が石鏃とは異なる様相をもつことなどの要素があれば尖頭器として分類している。基部の形態により、Ⅰ～Ⅴ類、未成品に大別した。各類型はそれぞれ形状によりさらに細分した（図版 207・208）。

Ⅰ類：基部が突出するもの。

a：基部の両側辺に抉りを入れ、茎を作出しているもの。

b：基部に抉りを入れないもの。

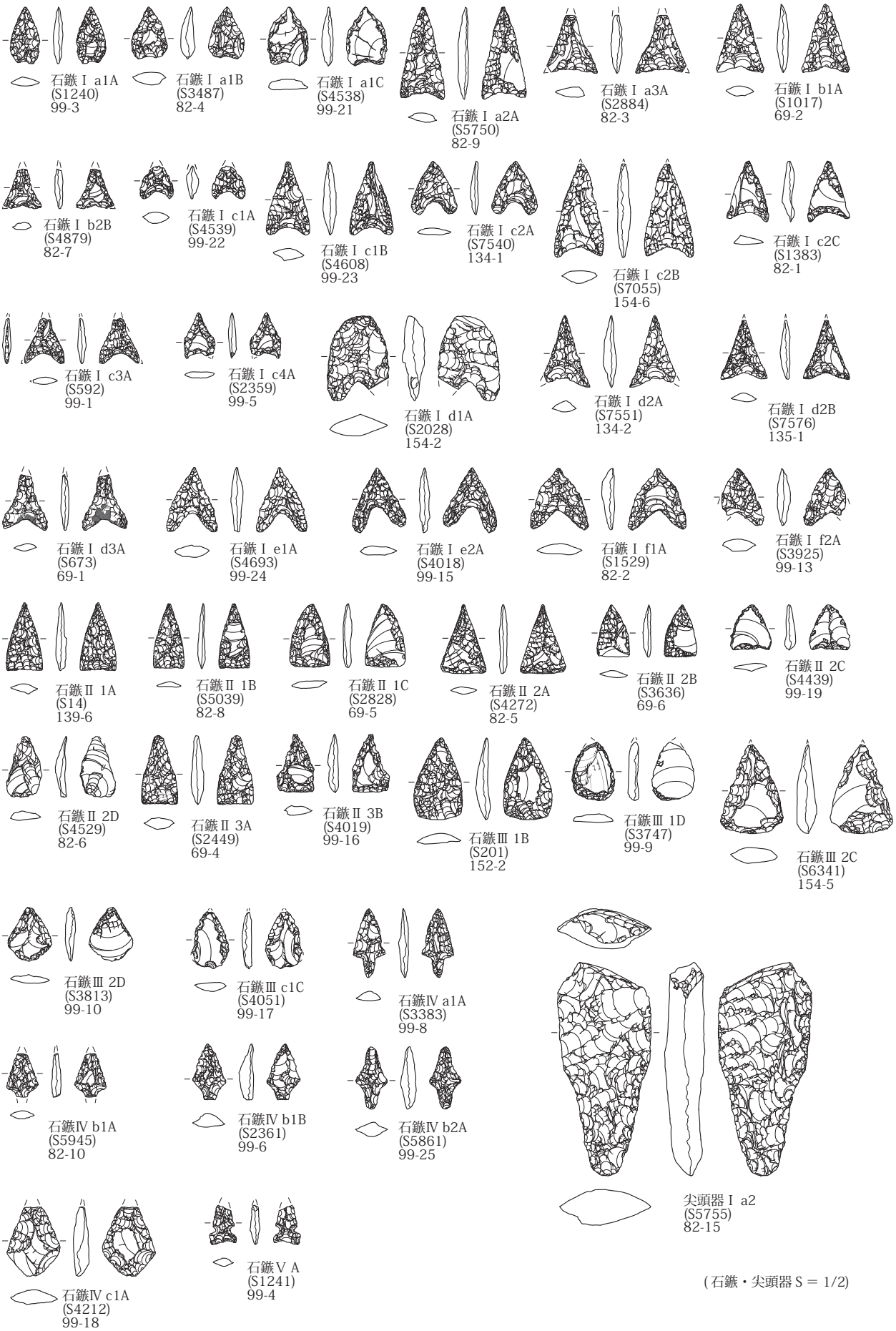
Ⅱ類：基部に両側から抉りを入れてつまみ部を作出しているもの。

Ⅲ類：基部を半円形に調整しているもので、器体が長く、細身のもの。

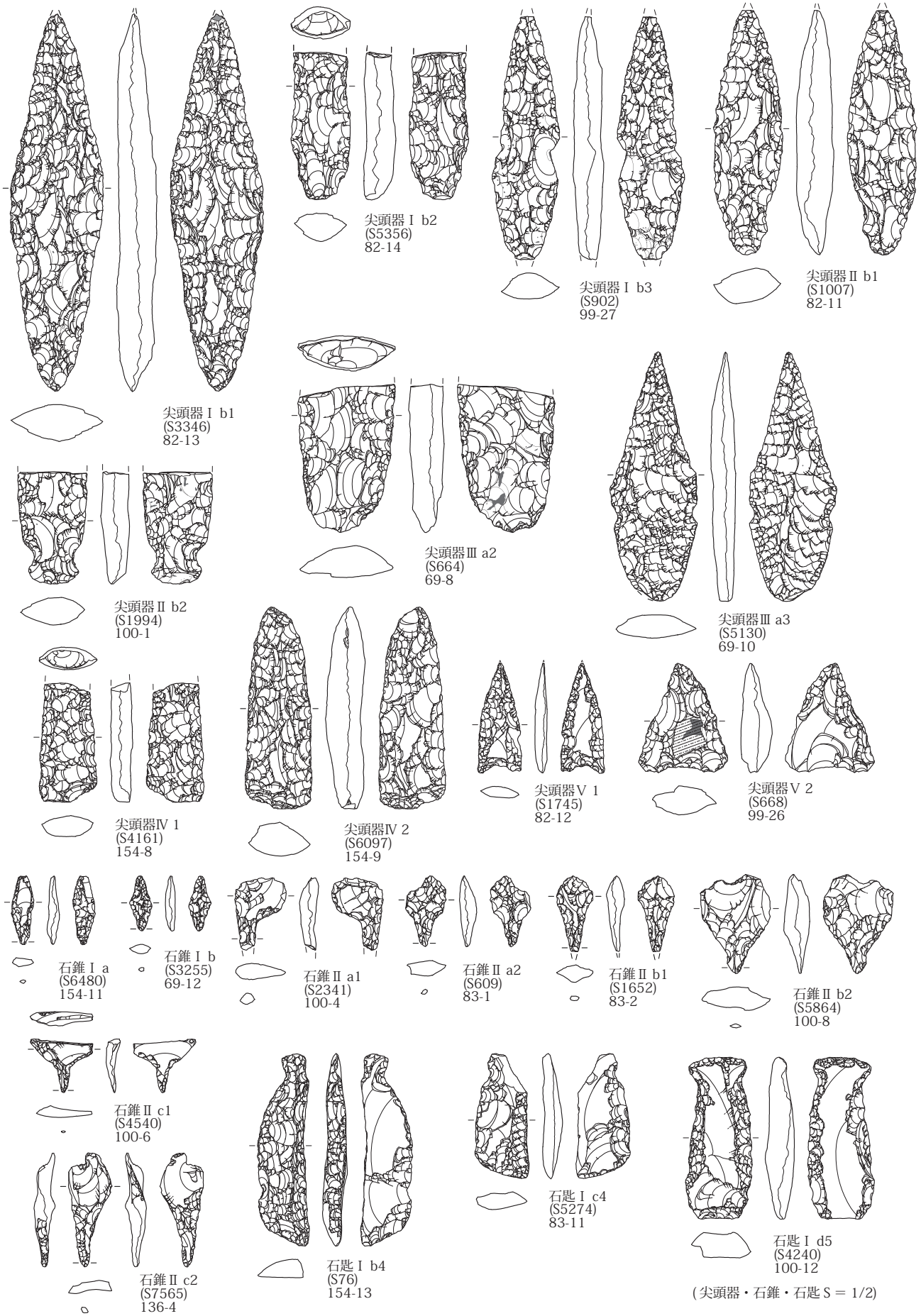
Ⅳ類：基部を直線的に調整しているもの。

Ⅴ類：基部に浅い抉りを入れ、２個の逆刺を作出しているもの。

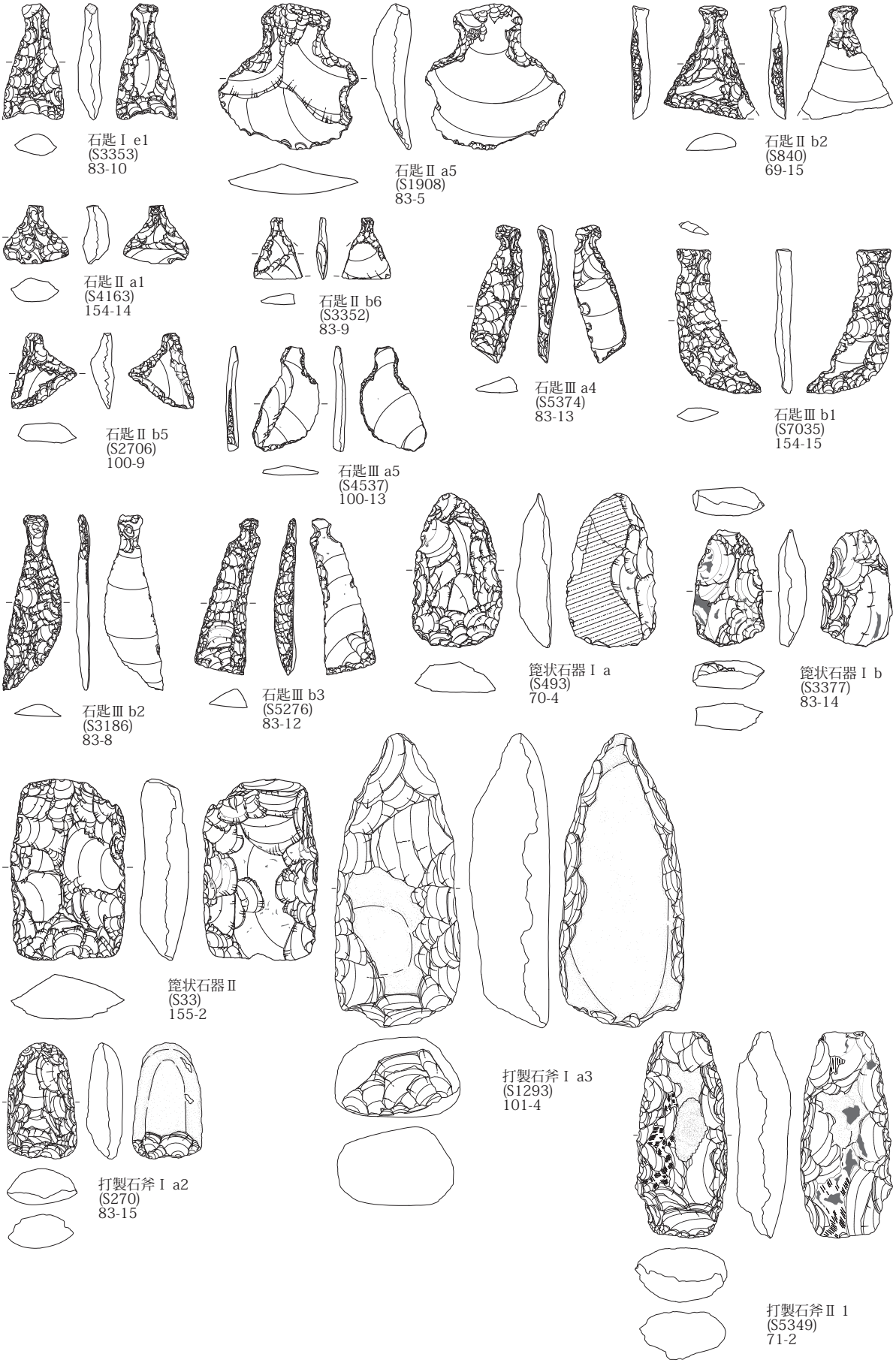
未成品：製作途中にあると考えられるもの。両側辺が非対称、一部が極端に厚みをもつなどの



図版 207　石器・石製品の分類基準図（1）

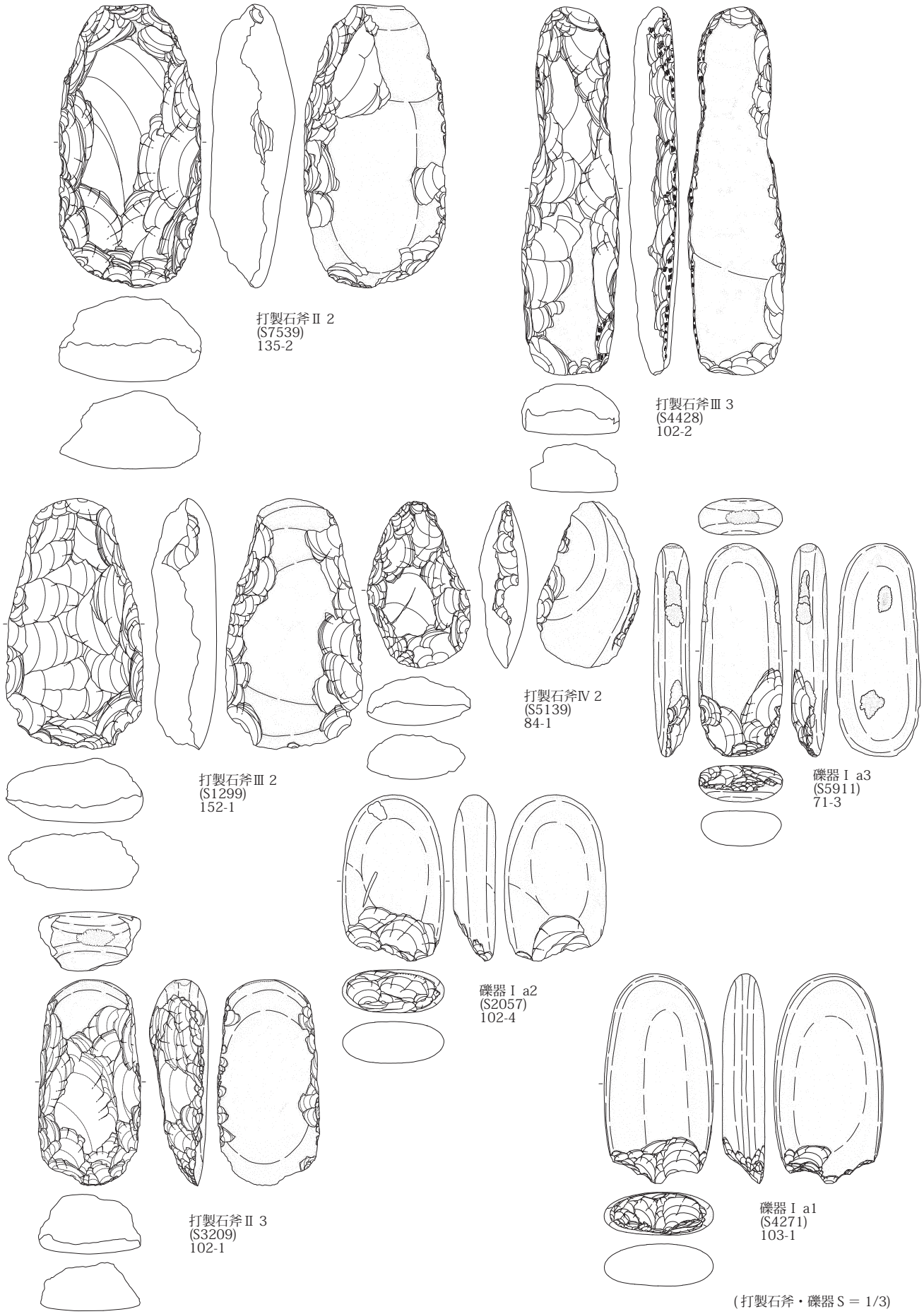


図版 208　石器・石製品の分類基準図（2）

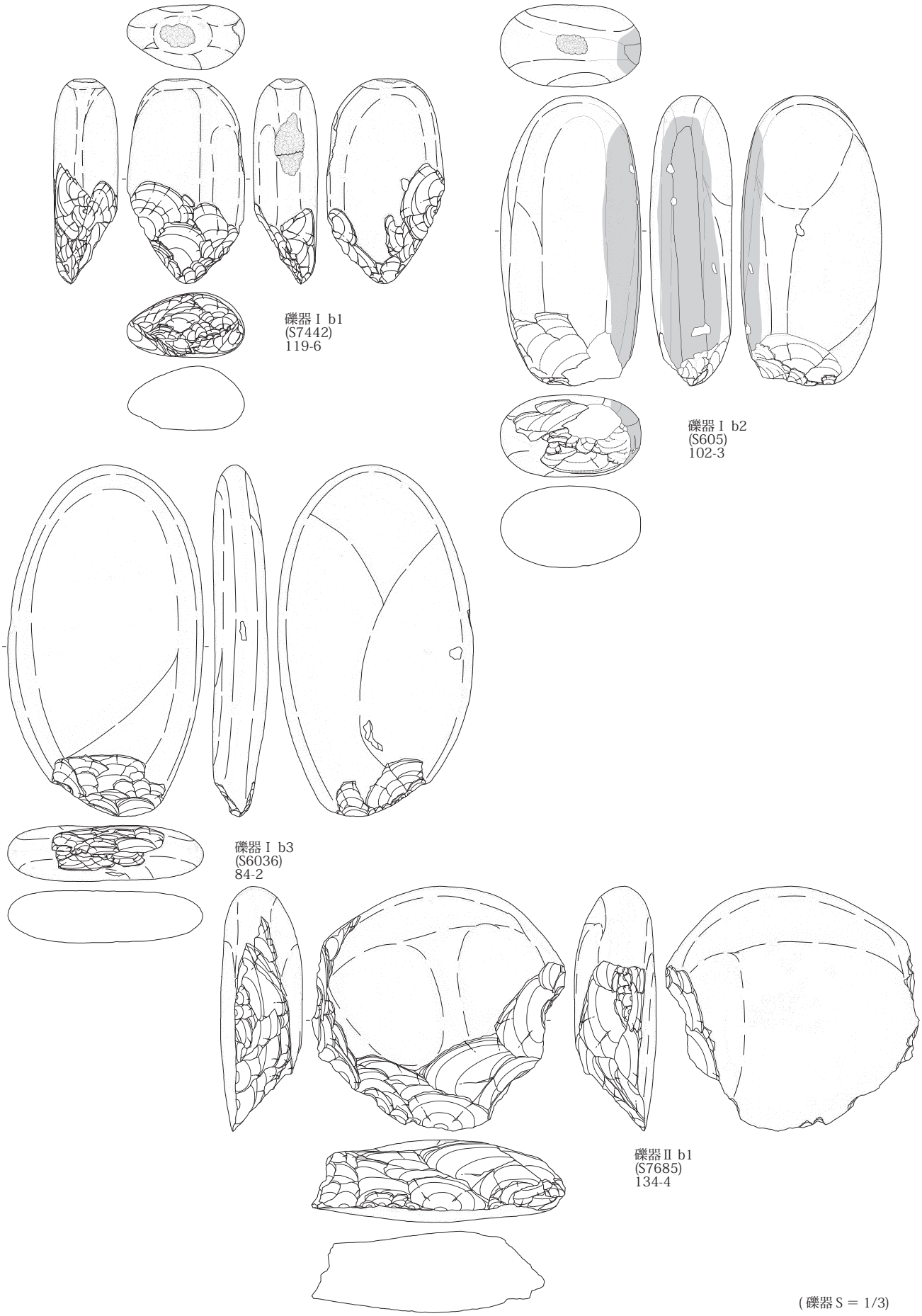


（石匙・篦状石器 S ＝ 1/2、打製石斧 S ＝ 1/3）

図版 209　石器・石製品の分類基準図（3）



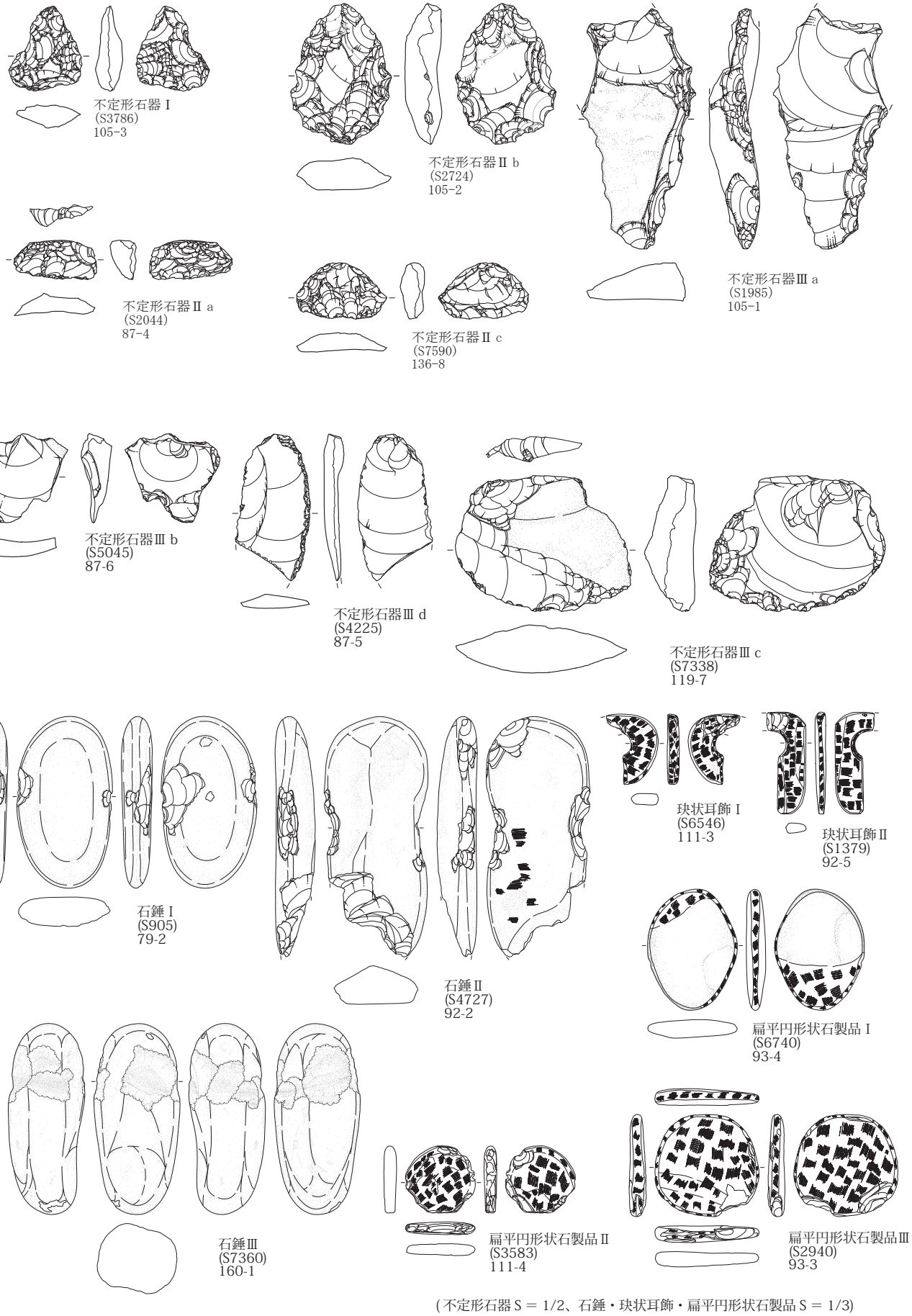
図版 210　石器・石製品の分類基準図（4）



図版 211　石器・石製品の分類基準図（5）

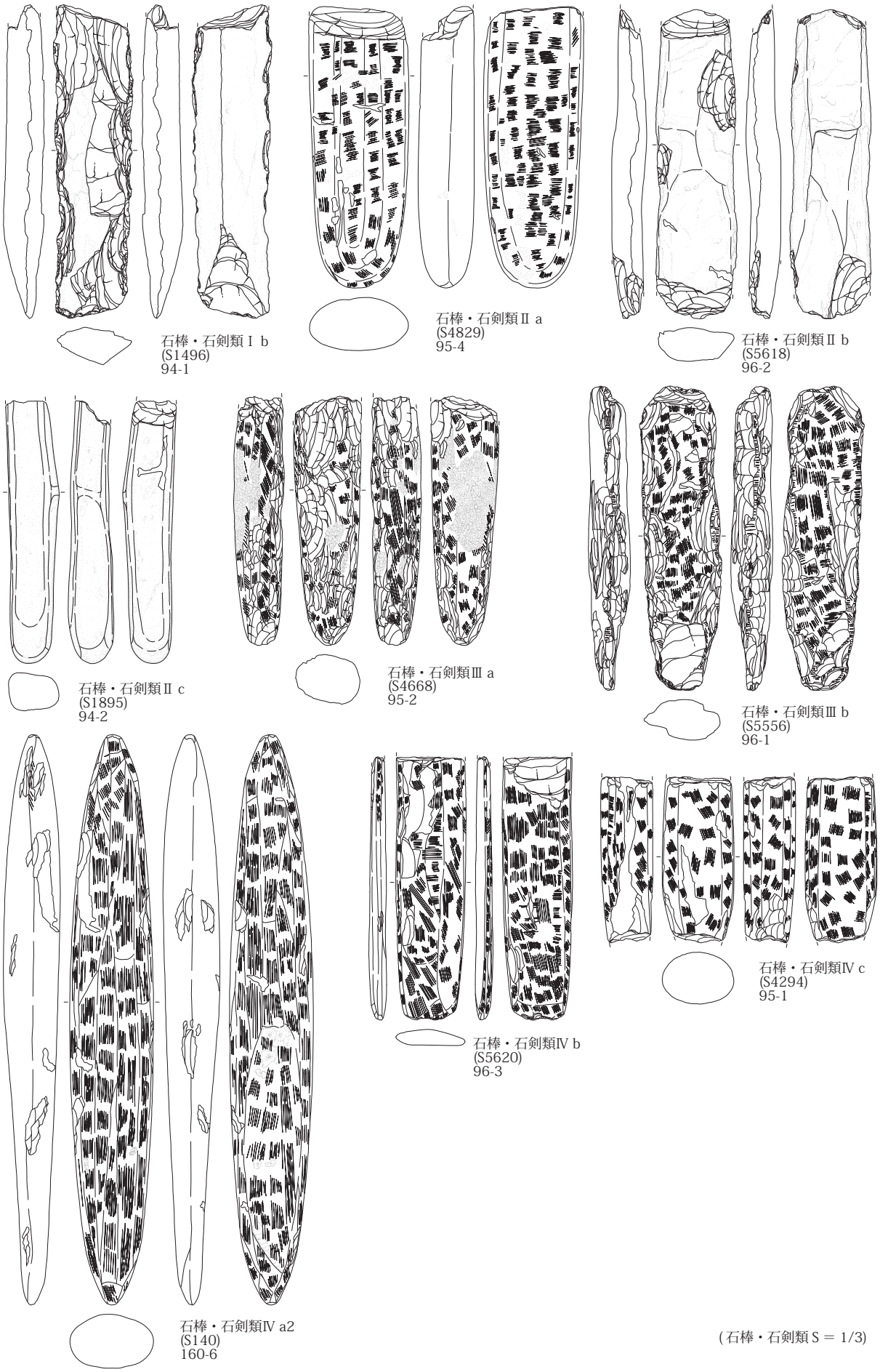
(磨製石斧 S = 1/3、楔形石器 S = 1/2)

図版 212　石器・石製品の分類基準図（6）



(不定形石器 S = 1/2、石錘・玦状耳飾・扁平円形状石製品 S = 1/3)

図版 213　石器・石製品の分類基準図（7）



図版 214　石器・石製品の分類基準図（8）

特徴がみられる。

また、Ⅰ～Ⅴ類については鏃身の形状により以下１～３に細分する。

１：両側辺が外湾するもの。

２：両側辺が直線的になるもの。

３：両側辺の中間部一か所に深い抉りが入るもの。

尖頭器は本遺跡では 58 点出土している。包含層別にみると、SX1 で 49 点、SX2 で４点、SX3 で２点である。なお、尖頭器の詳細については次項で検討する。

ⅲ）石錐

二次加工により作出した尖頭部をもち、その先端が厚みをもつもの。断面形が三角形もしくは四角形を呈し、厚みをもつ尖頭部（錐部）は回転穿孔の機能を有していたと考えられる。先頭部の数によりⅠ～Ⅱ類、未成品に大別した（図版 208）。各類型はそれぞれ形状によりさらに細分される。

Ⅰ類：両端に尖頭部を有するもの（棒状）。

a：全体がほぼ同じ幅のもの。

b：中央部が幅広になるもの。

Ⅱ類：尖頭部の一端のみで、いわゆる「つまみ部」（基部）をもつもの。

a：つまみ部との境界に抉りを入れて、錐部を明瞭に作出しているもの。

1：錐部がつまみ部より長いもの。

2：錐部がつまみ部より短いもの。

b：つまみ部との境界が不明瞭なもの。

1：錐部がつまみ部より長いもの。

2：錐部がつまみ部より短いもの。

c：剥片の一端を加工して錐部を作出しているもの。

1：抉りを入れて明瞭な錐部を作出しているもの。

2：抉りを入れないもの。

未成品：製作途中にあると考えられるもの。一部が極端に厚みをもつなどの特徴が見られる。

石錐は本遺跡では 40 点出土している。包含層別にみると、SX1 で 30 点、SX2 で１点、SX3 で１点である。なお、石錐の詳細については次項で検討する。

ⅳ）石匙

両側辺に抉りを入れて作出したつまみ部を有するもの。先端部の形態によりⅠ～Ⅲ類、未成品に

大別した（図版 208・209）。各類型はそれぞれ細分される。

Ⅰ類：つまみ部に対して先端部が縦方向に長いもの（縦型）

a：左右対称で先端が突出するもの。

b：左右非対称で先端部片側縁が弓状に外湾し、逆側縁が直線的になるもの。

c：左右非対称で先端部片側縁がくの字状を呈し、逆側縁が直線的もしくは外湾するもの。

d：左右対称で先端が直線的になるもの。

e：左右対処で先端が内湾するもの。

Ⅱ類：つまみ部に対して先端部が横方向に長いもの（横型）

a：先端部が外湾するもの。

b：先端部が直線的になるもの。

Ⅲ類：つまみ部に対して先端部が斜方向に長いもの（斜刃）

a：先端にかけて片側縁が緩やかに外湾するもので、先端が突出するもの。

b：先端にかけて片側縁がくの字状を呈するもので、先端が突出するもの。

未成品：製作途中にあると考えられるもの。刃部の作出が明瞭でないなどの特徴がみられる。

また、Ⅰ～Ⅲ類については二次剥離調整の及ぶ範囲により以下 1 ～ 7 に細分する。

1：両面に面的な二次加工を施し、素材面をほとんど残さないもの。

2：両面に面的な二次加工を施すものの、片面はつまみ部など一部もしくは縁辺部のみに加工を施すもの。

3：両面に面的な二次加工を施すものの、片面はつまみ部など一部のみに加工を施すもの。面的な二次加工は片側縁からの剥離が逆側縁からの剥離よりも急角度になるもの。

4：両面に面的な二次加工を施すものの、片面は片側縁にのみ連続的な二次加工を施すもの。面的な二次加工は片側縁からの剥離が逆側縁からの剥離よりも急角度になるもの。

5：縁辺部のみで、その大半に二次加工を施すもの。

6：縁辺部のみで、その一部のみに二次加工を施すもの。

7：片面のみに面的な二次加工を施すもの。

石匙は本遺跡では 64 点出土している。包含層別にみると、SX1 で 50 点、SX3 で 2 点である。なお、石匙の詳細については次項で検討する。

ｖ）箆状石器

縦長で、一端に長軸と直交する刃部が作出された石器。平面形によりⅠ～Ⅱ類、未成品に大別した（図版 209）。各類型はそれぞれ形状によりさらに細分される。

Ⅰ類：左右対称のもの。

a：両側辺が直線的で、刃部がやや開くもの。

1：基部が尖り、全体の形状が三角形を呈するもの。

2：基部が尖らないもの。

b：両側縁が外湾もしくは直線的で、基部が尖らず全体の形状が楕円形を呈するもの。

Ⅱ類：左右非対象のもの。

未成品：刃部の加工がない、あるいはわずかのもの。

篦状石器は本遺跡では14点出土している。包含層別にみると、SX1で9点、SX3で1点である。なお、篦状石器の詳細については次項で検討する。

vi）打製石斧

長軸と直交する縁辺に刃部が作出されたもの。形態上、篦状石器に類似するものもあるが、おもに粗粒の石材を利用し、調整が全体的にやや粗いという点に差異がある。素材の特徴によりⅠ～Ⅳ類、未成品に大別した（図版209・210）。

Ⅰ類：左右対称で両側辺が直線的で刃部がやや開くもの。

Ⅱ類：左右対称で両側辺が外湾し、全体の形状が楕円形を呈するもの

Ⅲ類：左右対称で分銅型を呈しているもの。

Ⅳ類：左右非対称のもの。

未成品：製作途中にあると考えられるもの。刃部の作出が明瞭でないなどの特徴がみられる。

また、Ⅰ～Ⅵ類について素材の形状により以下の3類に細分した。

1：剥片を素材としているもの。

2：裏面に自然面を残したもので、素材は分割礫・剥片を素材としているもの。

3：小礫を素材としているもの。

打製石斧は本遺跡では46点出土している。包含層別にみると、SX1で33点、SX2で1点、SX3で1点である。なお、打製石斧の詳細については次項で検討する。

vii）礫器

礫の一部に連続的な剥離によって、刃部を作出したもの。二次加工の状況によりⅠ～Ⅱ類に大別し、各類型はそれぞれ形状によりさらに細分した（図版210・211）。

Ⅰ類：主に長楕円形もしくは撥形の礫を素材とし、長軸端部を中心に二次加工が施されているもの。

a：片側のみに二次加工がみられるもの。

1：尖鋭部を作出しているもの。

2：直線状に作出しているもの。

3：半円形状に調整しているもの。

b：両側に二次加工がみられるもの。

1：尖鋭部を作出しているもの。

2：直線状に作出しているもの。

3：半円形状に調整しているもの。

Ⅱ類：素材礫の周縁の大半に二次加工が施されているもの。

礫器は本遺跡では 16 点出土している。包含層別にみると、SX1 で 10 点、SX2 で 1 点、SX3 で 1 点である。なお、礫器の詳細については次項で検討する。

ⅷ）磨製石斧

末端に刃部を有する石器で、器体の成形に研磨を用いるもの。小形のものをⅣ類とし、それ以外について製作方法で大別した。各類型はそれぞれ基部形状で細分した（図版 212）。

Ⅰ類：全体を研磨と敲打で整形しているもの。

a：基部が尖るもの。

1：基部を真上から見ると、基部の稜線が器体両面の外形線と直交に近い角度となるもの。

2：基部を真上から見ると、基部の稜線が器体両面の外形線と並行に近い角度となるもの。

b：基部が尖らないもの。

1：平面形が方形もしくは長方形をなすもの。

2：平面形が円形もしくは楕円形をなすもの。

c：基部が丸みを帯びるもの。

Ⅱ類：研磨による整形は一部のみで、剥離による整形の痕跡を大きく残すもの。

Ⅲ類：板状の素材を分割したのち、剥離や敲打・研磨で整形しているもの（擦切技法）。

Ⅳ類：小形で、基部が尖るもの。

Ⅴ類：刃部のみ研磨により作出し、器体の大部分は自然面の形状をほぼ使用しているもの。

未成品：刃部の加工がない、あるいはわずかのもの。

また、Ⅰ～Ⅳ類については刃部の形状により以下の 2 類に細分する。

a：刃部が直線的もしくは若干外湾するもの。

b：刃部が半円形に調整されているもの。

磨製石斧は本遺跡では 81 点出土している。包含層別にみると、SX1 で 60 点、SX2 で 1 点、SX3 で 1 点である。なお、磨製石斧の詳細については次項で検討する。

ix）板状石器

主に粘板岩の剥片の周縁に二次加工を施し、薄い板状に成形したもの。

板状石器は本遺跡では 4 点出土しており、いずれも SX1 で出土している。

x）楔形石器

両極打法による剥離面を有するもの。対向する縁辺に末端がステップ状の剥離痕が多くみられ、縁辺の潰れや、器体の破損がみられるものもある。両極剥離が施された縁辺の数によりⅠ～Ⅱ類に大別した（図版 212）。各類型はそれぞれ形状によりさらに細分される。

Ⅰ類：対になる 2 辺 1 組（2 辺 1 対）に両極剥離痕が観察されるもの。縁辺の形状によりさらに細分される。

a：線状 - 線状。

b：線状 - 平坦面。

c：線状 - 点状。

d：平坦面 - 平坦面。

e：平坦面 - 点状。

f：点状 - 点状。

Ⅱ類：対になる 2 辺 2 組（4 辺 2 対）に両極剥離痕が観察されるもの。対になる各縁辺の形状の細分はⅠ類に準ずる。なお、本類は上下の対を先、左右の対を後とし、Ⅱ ab 等と表記する。

楔形石器は本遺跡では 278 点出土している。包含層別にみると、SX1 で 222 点、SX2 で 1 点、SX3 で 1 点である。

xi）不定形石器

二次加工が施された打製石器のなかで、上記の定形的な石器（未成品も含む）の分類に該当しないものを不定形石器として一括した。二次加工の状況によりⅠ～Ⅲ類に大別した（図版 213）。Ⅱ・Ⅲ類はそれぞれ二次加工の状況によりさらに細分した。

Ⅰ類：二次加工により尖頭部を作出しているもの（尖頭状石器）。尖頭器に比べて尖頭部の作出があまり明瞭でなく、刺突具としての機能は推定しにくい。

Ⅱ類：剥片等に面的な二次加工が施されるもの。具体的には、器体内部まで調整がおよんでいるものをいう。面的調整加工後に、縁辺部に連続的な加工が施されているものも含まれる。

a：両面に二次加工を施し、素材面をほとんど残さないもの（両面加工石器）。

b：両面に二次加工を施すものの、片面は素材面を大きく残すもの（半両面加工石器）。

c：片面のみに二次加工を施すもの（片面加工石器）。

Ⅲ類：剥片等の縁辺に二次加工を施すもの。素材面は両面とも大きく残る。二次加工の状況により細分した。

a：鋸歯状の二次加工を施すもの（鋸歯縁石器）。

b：深い抉りを入れるもの（抉入石器）。

c：縁辺の大半に連続的な二次加工を施すもの（周縁加工石器）。

d：縁辺の一部に二次加工を施すもの（二次加工のある剥片）。

不定形石器は本遺跡では 365 点出土している。包含層別にみると、SX1 で 282 点、SX2 で 6 点、SX3 で 7 点である。

xii）磨石・敲石類

いわゆる磨石、凹石、敲石とされる礫石器で、ある程度形状の整った自然礫を素材とし、基本的には重量的には持ち上げが可能で、手で保持しやすく、それを反復運動させることによって加工対象物に一定の変化を起こさせる機能と仕組みを有するもの。ただし、重量的に持ち上げが困難もしくは可能であったとしても握って動作するには困難なものでも形状と使用痕が磨石、凹石、敲石に分類可能なものについても認定し、これについては別類（Ⅴ類）として扱う。素材の形状で大別し、使用痕で細分した。

Ⅰ類：円礫や楕円礫などを素材としたⅡ～Ⅳ類以外のもの。

a：磨面。

b：磨面＋敲打痕。

c：磨面＋凹み。

d：磨面＋剥落痕。

e：磨面＋敲打痕＋剥落痕＋凹み。

f：磨面＋敲打痕＋凹み。

g：磨面＋剥落痕＋凹み。

h：磨面＋剥落痕＋敲打痕。

i：凹み。

j：凹み＋敲打痕。

k：凹み＋剥落痕。

l：敲打痕。

m：敲打痕＋剥落痕。

n：剥落痕。

Ⅱ類：断面が楕円形・方形・三角形を呈する縦長の礫を素材とし、側面稜部に幅が狭い磨面もしくはやや粗い磨面が認められるもの。この磨面を挟んだ二側面も磨面となるものも多く 、端部や平坦部に敲打痕や凹痕を有するものもある。使用痕による細分はⅠ類に準じる。

Ⅲ類：楕円形の両端もしくは片端の両側面の対になる箇所に平坦でやや粗い磨面が認められるもの。使用痕による細分はⅠ類に準じる。

Ⅳ類：平面形が楕円形～円形で、断面が扁平～球形を呈する 70.00mm 以下の小形の礫を素材とし、両面もしくは側面に磨面を有するもの。

Ⅴ類：平面形が楕円形で、断面が楕円形から球形を呈する 280.00mm 以上の大形の礫を素材としているもの。重量的に持ち上げが不可能かもしくは可能であっても握って動作することが困難なもので、石皿のように平坦あるいは緩やかな凹みは有していない。使用痕による細分はⅠ類に準じる。

磨石･敲石類は本遺跡では 2,307 点出土している。包含層別にみると、SX1 で 1,041 点、SX2 で 52 点、SX3 で 2 点である。なお、磨石・敲石類の詳細については次項で検討する。

ｘⅲ）砥石

溝状の凹みを有するもの。多条となるものが多く、両面に溝状の凹みがみられるものも多い。

砥石は本遺跡では 36 点出土している。包含層別にみると、SX1 で 30 点、SX2 で 1 点、SX3 で 1 点である。

ｘⅳ）石皿・台石類

持ち上げによる使用が困難で、対象物の下で据え置かれる機能と仕組みを有し、かつ使用痕跡である平坦あるいは緩やかに凹む磨面のあるもの。ただし、形態的に地面に据え置いたほうが安定性が高いなど、地面に置いて使用されたと推定されるものについては小型のものも石皿として認定した。

Ⅰ類：採集礫をそのまま使用（無縁）。

a：断面が外湾するもの。

b：平坦なもの。

c：内湾するもの。

Ⅱ類：凹部の整形があるもの（有縁）。

石皿・台石類は本遺跡では 100 点出土している。包含層別にみると、SX1 で 82 点、SX2 で 2 点、SX3 で 3 点である。なお、石皿・台石類の詳細については次項で検討する。

ｘⅴ）剥片・石核

石器を製作する際の石材の残滓。製作目的等の有無に関わらず、便宜的に、最終剥離面がポジティブな面となるものを剥片、ネガティブな面となるものを石核と呼称する。本遺跡では剥片 3257 点、石核が 162 点出土している。包含層別にみると、SX1 で剥片 2,824 点、石核 140 点、SX2 で剥片 13 点、石核 2 点、SX3 で剥片 14 点、石核 1 点である。

②石製品

上記の石器以外の石製の人工遺物を石製品として分類した。以下に、分類の基準を示す。

ⅰ）石錘

扁平な礫の両端をほぼ対になるように打ち欠かれたかもしくは、凹部を作出するように研磨されたもの。その形状から、紐状のものをひっかけて使用されたと想定される。二次加工の状況により大別した（図版 213）。

Ⅰ類：両縁辺の対になる箇所に主に剥離が施されているもの。

Ⅱ類：両側辺の対になる箇所に主に研磨による凹部が作出されているもの。

Ⅲ類：両側辺の対になる箇所に主に敲打による凹部が作出されているもの。

石錘は本遺跡では 23 点出土している。包含層別にみると、SX1 で 17 点、SX2 で 1 点である。なお、石錘の詳細については次項で検討する。

ⅱ）玦状耳飾

扁平な円礫に円形の穴を穿孔し、その孔に向かって外縁から一条の切れ目が入れられたもの。凝灰岩、粘板岩など加工しやすい石材を用いるが、碧玉や蛇紋岩を素材とするものも少数ある。平面形で大別し、断面形で細分した（図版 213）。

Ⅰ類：平面形が円形のもので中央孔は孔側の長さより小さく、厚さは扁平なもの。

Ⅱ類：平面形が長方形を呈するもの。

未成品：明確な切れ目がないもしくは入れる過程で破損したと考えられるもの。

玦状耳飾は本遺跡では 17 点出土しているが、全て欠損資料である。包含層別にみると、SX1 で 12 点である。なお、玦状耳飾の詳細については次項で検討する。

ⅲ）扁平円形状石製品

主に粘板岩製で、平面形が円形から楕円形を呈し、扁平な形状をしているもの。玦状耳飾や有孔石製品の素材になったと考えられる。二次加工の状況により、Ⅰ～Ⅲ類に大別した（図版 213）。

Ⅰ類：研磨痕などを有するが、全体的には自然面が残存しているもの。

Ⅱ類：周縁の全面もしくは一部に剥離を有するもの。

Ⅲ類：周縁部に研磨による成形がみられるもの。

扁平円形状石製品は本遺跡では 58 点出土している。包含層別にみると、SX1 で 47 点、SX2 で 3 点である。なお、石製品素材の詳細については次項で検討する。

ⅳ）有孔石製品

扁平な円礫等に貫通孔が穿たれているもので、上記の孔のある石製品以外を有孔石製品とした。有孔石製品は本遺跡では 19 点出土している。包含層別にみると、SX1 が 16 点である。

ⅴ）ヘラ状石製品

断面は薄い長方形で、粘板岩を素材とし、全体を研磨し、長軸両端はやや丸みをもっている。ヘラ状石製品は本遺跡では SX1 から 1 点出土している。

ⅵ）男根状石製品

男性器を模倣したと考えられ、主に敲打や研磨により頭部をもつもの。形態は、下膨れ形のものや長い棒状の一旦あるいは両端に成形された有頭をもつものなど多様である。主に敲打・研磨によって男性器の形状に整形したもの。

男根状石製品は本遺跡では 7 点出土している。包含層別にみると､SX1 で 5 点､SX3 で 1 点である。

ⅶ）石棒・石剣類

主に粘板岩製で、剥離や敲打、研磨により棒状あるいは刀剣状に成形したもの。断面円形のものを石棒、断面扁平と楕円形になるものを石剣とした。二次加工の状況により大別し、さらに、断面形状により細分した（図版 214）。

Ⅰ類：剥離により角棒状にしたもの。
Ⅱ類：角棒状を呈し、一部に剥離や敲打、研磨がみられるものがあるが、素材面が多く残存するもの。
Ⅲ類：剥離や敲打と研磨により整形されているが、研磨が一部のみに限られているもの。
Ⅳ類：剥離や敲打ののちに、ほぼ全面研磨により成形されているもの。

断面形状により細分する。
a：断面形が楕円形のもの（石剣）。
b：断面形が扁平のもの（石剣）。
c：断面形が円形に近いもの（石棒）。

石棒・石剣類は本遺跡では 204 点出土している。包含層別にみると、SX1 で 161 点、SX2 で 4 点である。

ⅷ）線刻礫

礫の全面もしくは一部に断面 V 字形の細い線刻を入れ、文様を描いたもの。線刻礫は本遺跡では

9 点出土している。包含層別にみると、SX1 で 7 点、SX2 で 1 点である。

ix）異形石器

剝片を素材として剥離により不定形に成形している石器のうち、その平面形から実用的でないとみられるものを異形石器として分類した。本遺跡では、石匙に類似する形状のものが 2 点出土した。包含層別にみると、SX1 が 2 点である。

x）石器模造品

石器の形状を有するが、刃部が無く、粘板岩を主に用いるなど実用品としての機能を有していたとは考えられないもの。石器模造品は本遺跡では SX1 から 2 点出土している。

xi）L 字状石製品

L 字状を呈している礫の底面に平滑面がみられるもの。側面に敲打による成形がみられるものもある。このような石製品は、児玉（2002）により「くびれ石」と総称されるものに類似している。児玉は、縄文時代後晩期にみられる「くびれ石」は加工痕や使用痕がない自然石で、呪術具や願懸けの道具から、趣向的に収集されたものまで含まれていると指摘している。本遺跡のものは、敲打や平滑面がみられるため、加工痕や使用痕は全くないものではないが、形状などが意図的に作出されたような痕跡がないことから、本遺跡のものも児玉が指摘するような奇妙な形状をした自然石として収集されたものが使用されている可能性がある。

L 字状石製品は本遺跡では 8 点出土しており、SX1 から 6 点、SX2 から 1 点出土している。

xii）柄付石製品

全面に研磨が施されており、浅い抉りを入れて柄部分を作出しているもの。

柄付石製品は本遺跡では 7 点出土しており、SX1 から 6 点出土している。

x iii）棒状石製品

主に研磨により棒状に成形されたもの。石棒・石剣類よりも幅が狭く、幅が 30mm 以下のものを棒状石製品とした。

棒状石製品は本遺跡では 7 点出土しており、SX1 から 6 点出土している。

x iv）その他の石製品

上記以外の石製品を総称してその他の石製品とした。本遺跡では 30 点出土した。包含層別にみると、SX1 が 21 点、SX2 が 1 点、SX3 が 3 点である。

（2）剥片石器の製作・使用

大部分の石器・石製品は、前期前葉から中期中葉の時期におさまり、前期前葉から前期後葉が主体を占めている。

その中で、土器の検討結果を考慮し、特に時期別のまとまりとして捉えることが可能と考えられる条件の良いものは、Ⅲc層でU21～X24グリッド、Ⅲb層でY24～AC32から出土したもので、それらのグリッドから出土したものについては時期別の分析対象とする。Ⅲa層については、大木7式以降と考えられるが混ざりが大きく、Ⅲc層やⅢb層のような時期別のまとまりが捉えられなかったため、今回の分析からは除外し、参考として掲載する。時期については、土器の検討からおおむねⅢc層が大木1式～大木2a式、Ⅲb層が大木4式～大木6式である。

①石鏃

各包含層における出土点数をみると（表64）、SX1包含層のⅢb層が最も多く92点であり、次にSX1包含層のⅢa層が89点で多い。SX1包含層以外では、SX2包含層で2点、SX3包含層で9点である。

類型別の出現頻度をある程度の出土量がみられるSX1包含層でみると（表66・71）、Ⅰ類（凹基）が最も多く60.3%（44点）である。層別にみると、Ⅲa層とⅢb層はともにⅠc類（凹基）が最も多くみられる。Ⅲa層では、次にⅣa類（基部が突出するもの）が4点で多くなっており、Ⅲb層ではⅠa類（凹基）が8点で多い。

石材は、珪質頁岩が最も多く45.4%（133点）みられ、次に珪化凝灰岩が15.4%（45点）で多い（表70・72）。それ以外には、頁岩や凝灰岩以外では碧玉が7.8%（23点）みられるほか、玉髄、黒曜石や石英なども4～9点みられる。

類型別の大きさ・形状の分布を比較すると（図版216）、Ⅰ類（凹基）ではⅠa類がより縦長・薄手の傾向がみられる。それ以外の類型は縦長からやや幅広・薄手からやや厚手の範囲に広く分布している。Ⅱ類（平基）は縦長・薄手の傾向がみられる。Ⅲ類（円基）は幅広・厚手が主体になる。Ⅳ類（基部が突出するもの）は縦長からやや幅広・薄手からやや厚手の範囲に広く分布している。

類型別の残存状況をみると（図版215）、一部欠損が51.5%（151点）みられるのに対して、完形のものも48.1%（141点）みられる。類型別にみると、Ⅰc類、Ⅰe類（凹基）、Ⅱ類（平基）、Ⅲ類（円基）では、完形のものが多い傾向を示している。

以上から、本遺跡ではⅠ類（凹基）、Ⅳ類（基部が突出するもの）では多様な形態がみられる一方で、Ⅱ類（平基）では幅広・厚手のものが主体であることがわかる。また、残存状況では、全資料で完形のものが48%みられる一方で、一部欠損と破片のものも52%程度みられた。

石鏃に分類されるものの用途は狩猟用投射具と考えられ、その種類には弓矢や投槍器などが想定され、それらは狩猟方法や狩猟対象の違いを反映していると考えられている（田村2011）。本遺跡においても形態の違いと狩猟用投射具としての用途の関係性を検討するために、民俗資料の検討から狩猟具の違いを反映することが明らかにされている指標として資料の横断面・最大面積であるTCSA値（Shea2006など）を求めた。TCSA値は、最大幅×最大厚×1/2によって求められる。田村隆（2011）

は、この方法を用いて日本全国の遺跡にみられる石鏃を分析し、縄文時代の狩猟具の具体的な復元をおこなっている。分析結果をもとに、田村による TCSA 値を利用した石鏃の機能的分類（TCSA 分類）を参考とし、本遺跡の石鏃の用途を求めた（図版 217）。その結果、鏃（Ⅰa）が最も多く 78.8％、ダーツ（Ⅰb）が 19.2％、突き槍（Ⅱ）が 1.9％である。類型別にみると、Ⅰ類（凹基）ではⅠa2D 類、Ⅰb1A 類、Ⅰf1A 類でダーツ（Ⅰb）がみられ、Ⅰd1A 類で突き槍（Ⅱ）がみられ、それ以外は全て鏃に分類される。Ⅱ類（平基）ではⅡ 2C 類でダーツ（Ⅰb）がみられ、それ以外は鏃（Ⅰa）である。Ⅲ類（円基）は、Ⅲ 1D 類、Ⅲ 2D 類で鏃（Ⅰa）がみられる以外は、ダーツ（Ⅰb）に分類される。Ⅳ類（基部が突出するもの）はⅣ c1A 類、Ⅳ c2C 類でダーツ（Ⅰb）がみられる以外は、全て鏃（Ⅰa）である。このことから、基部の形態が円基のもの（Ⅲ類）でダーツ（Ⅰb）に分類される形態のものが多い傾向になっていることがわかる。それ以外の加工調整や形状と TCSA 値に明確な相関関係は認められなかった。

表 71　石鏃の SX1 包含層の類型別出現頻度

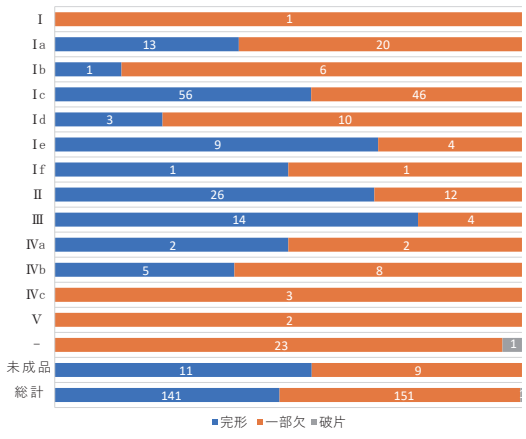
SX1 包含層の層	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	未成品	総計
Ⅱ	9	2	3	1			15
Ⅲa	50	6	6	12	2	6	82
Ⅲb	62	9	5	2		5	83
Ⅲc	23	16	2	3		4	48
不明	4	4				3	11
総計	148	37	16	18	2	18	239

時期的な検討に有効なまとまりのあるグリッドごとに各類型の出現頻度をみると（表 73）、前期前葉に位置づけられるⅢc層ではⅠ類（凹基）、Ⅱ類（平基）、Ⅳ類（基部が突出するもの）が同程度みられる。前期中葉から末葉に位置づけられるⅢb層ではⅠ類(凹基)が 64.4％（29 点）を占めており、その中でもⅠc類が 37.8％（17 点）みられ最も多くなっている。Ⅲa層ではⅣ類（基部が突出するもの）が一定数みられる。

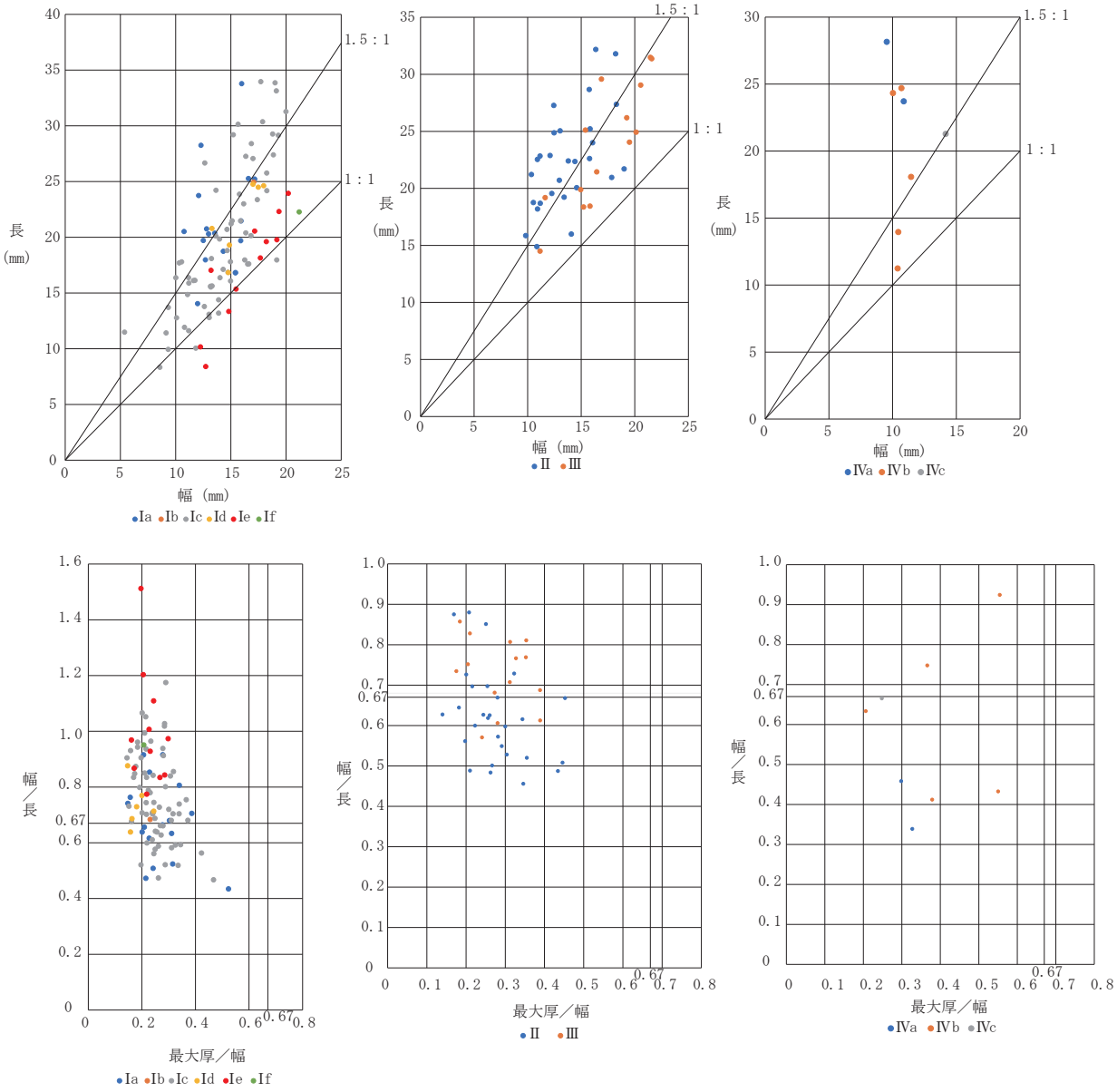
表 72　石鏃の類型別石材組成

類型	珪質頁岩	頁岩	珪質凝灰岩	珪化凝灰岩	流紋岩質凝灰岩	凝灰岩	碧玉A	碧玉D	黒曜石	粘板岩	石英	玉髄	総計
Ⅰ					1								1
Ⅰa	14	4	3	7	2	1			1		1		33
Ⅰb	4	1		1	1								7
Ⅰc	45	14	6	18	4	1	1	8	3	1		1	102
Ⅰd	9	2	1	1									13
Ⅰe	8	1		2					1			1	13
Ⅰf	2												2
Ⅱ	19	6	3	6	1				1		1	1	38
Ⅲ	6		2	5	1	1	1	1			1		18
Ⅳa	1	1	1					1					4
Ⅳb	4	3	1				1	2				2	13
Ⅳc	2							1					3
Ⅴ								2					2
未成品	11	1	2	2				3			1		20
不明	8	4	2	3	1		1	1	3			1	24
総計	133	37	21	45	11	3	4	19	9	1	4	6	293

さらに、時期別の加工調整の出現状況についてみると（表 74）、Ⅲb層、Ⅲc層を通して両面に面的な二次加工を施すものが最も多くみられ、次いで片面に主要剥離面が残るもの（B）が多くなっている。二次加工が縁辺のみにみられるもの（C）はⅢa層、Ⅲb層でみられる。



図版 215　石鏃の残存状況



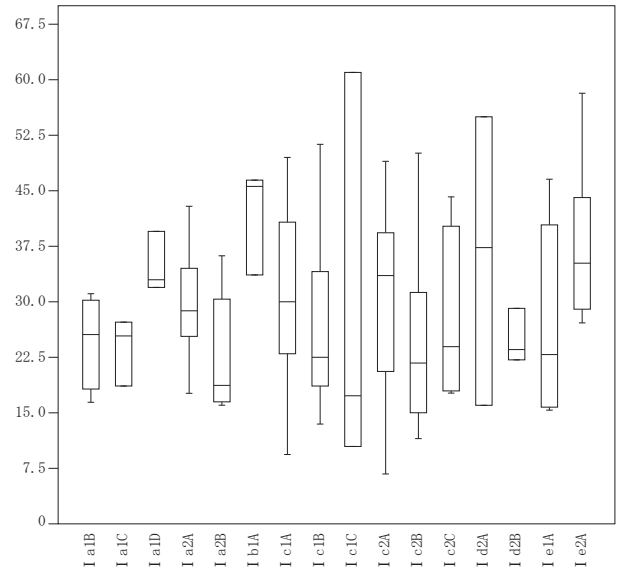
図版 216　石鏃の大きさ・形状

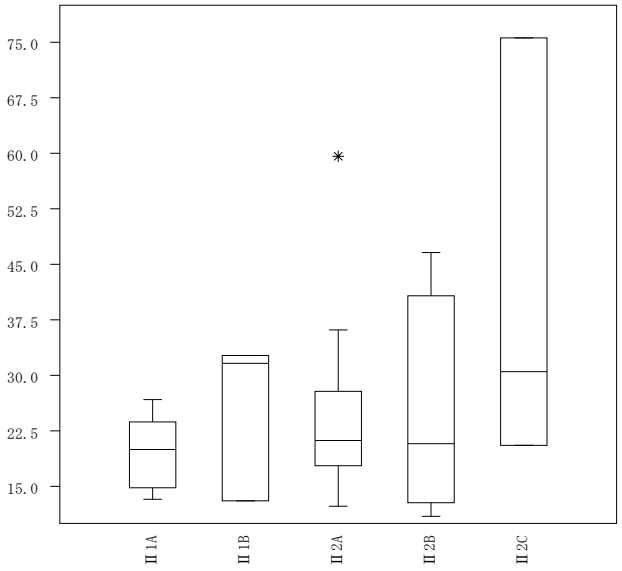
時期ごとの類型別の TCSA 分類をみてみると（表 75、図版 218）、どの層でも約 80％以上が鏃（Ⅰ a）が占めていることから、層位ごとで石鏃の機能の明確な違いはみられない。このことから、本遺跡における石鏃の用途の主体は弓矢であったことがわかる。

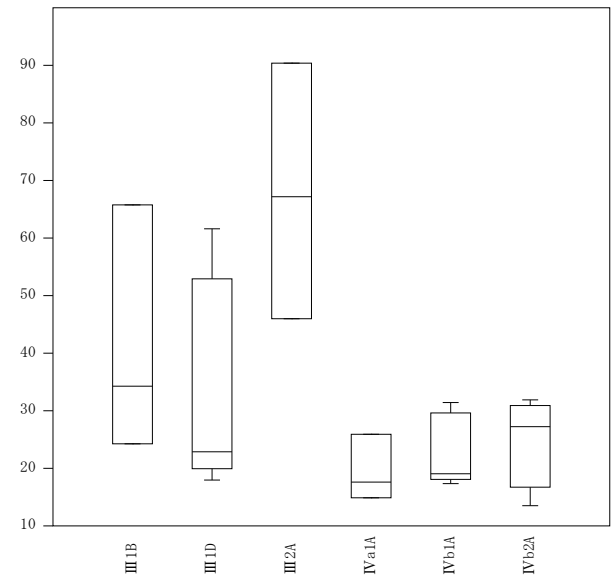
ここまでの分析結果を総合すると、石鏃の技術形態的な分類にみられる特徴は、Ⅲ類（円基）では用途の差を示している一方で、Ⅰ類（凹基）、Ⅱ類（平基）、Ⅳ類（基部が突出するもの）にみられる違いは用途を反映したものではないことが考えられる。その要因については、今後さらに検討していく必要がある。

②尖頭器

各包含層における出土点数をみると（表 64）、SX1 包含層のⅢ c 層が最も多く 18 点であり、次に SX1 包含層のⅢ b 層が 17 点で多い。また、SX1 包含層のⅢ a 層も 12 点みられる。







細分	平均値	標準偏差	最小値	最大値	標本数	TCSA 分類（田村 2011）
Ⅰa1A	31.4	13.2	44.6	18.2	2	Ⅰa
Ⅰa1B	24.7	5.5	16.4	31.1	4	Ⅰa
Ⅰa1C	23.8	3.7	18.6	27.2	3	Ⅰa
Ⅰa1D	34.8	3.4	31.9	39.5	3	Ⅰa
Ⅰa2A	30.4	7.0	17.6	42.9	11	Ⅰa
Ⅰa2B	22.5	7.5	16.0	36.2	5	Ⅰa
Ⅰa2D	55.5	0	55.5	55.5	1	Ⅰb
Ⅰa3A	34.9	9.2	25.8	44.1	2	Ⅰa
Ⅰb1A	41.9	5.8	33.6	46.4	3	Ⅰb
Ⅰb2B	15.3	0	15.3	15.3	1	Ⅰa
Ⅰb2C	20.1	0	20.1	20.1	1	Ⅰa
Ⅰc1A	30.6	10.7	9.4	49.5	16	Ⅰa
Ⅰc1B	25.6	10.2	13.5	51.3	11	Ⅰa
Ⅰc1C	29.6	22.4	10.5	61.0	3	Ⅰa
Ⅰc1D	14.7	0	14.7	14.7	1	Ⅰa
Ⅰc2A	30.4	12.1	6.7	49.0	33	Ⅰa
Ⅰc2B	24.4	11.1	11.5	50.1	14	Ⅰa
Ⅰc2C	27.4	10.4	17.7	44.2	8	Ⅰa
Ⅰc2D	20.9	0	20.9	20.9	1	Ⅰa
Ⅰc4C	12.0	0	12.0	12.0	1	Ⅰa
Ⅰd1A	93.6	0	93.6	93.6	1	Ⅱ
Ⅰd2A	36.1	15.9	16.0	55.0	3	Ⅰa
Ⅰd2B	24.9	3.0	22.2	29.1	3	Ⅰa
Ⅰd2C	13.9	0	13.9	13.9	1	Ⅰa
Ⅰd3A	21.4	0	21.4	21.4	1	Ⅰa
Ⅰe1A	27.0	11.8	15.4	46.6	6	Ⅰa
Ⅰe2A	37.5	10.3	27.1	58.2	6	Ⅰa
Ⅰf1A	46.5	0	46.5	46.5	1	Ⅰb
Ⅱ1A	19.4	4.5	13.3	26.7	5	Ⅰa
Ⅱ1B	25.8	9.0	13.0	32.7	3	Ⅰa
Ⅱ1C	18.9	0	18.9	18.9	1	Ⅰa
Ⅱ1D	39.9	0	39.9	39.9	1	Ⅰa
Ⅱ2A	24.6	11.1	12.3	59.6	16	Ⅰa
Ⅱ2B	24.8	13.3	11.0	46.6	4	Ⅰa
Ⅱ2C	42.2	24.0	20.5	75.6	3	Ⅰb
Ⅱ3A	30.1	0	30.1	30.1	1	Ⅰa
Ⅱ3B	20.4	1.4	19.0	21.8	2	Ⅰa
Ⅲ1B	41.4	17.7	24.3	65.8	3	Ⅰb
Ⅲ1C	41.1	22.1	19.0	63.2	2	Ⅰb
Ⅲ1D	33.7	16.7	18.0	61.6	5	Ⅰa
Ⅲ2A	67.8	18.1	46.0	90.4	3	Ⅰb
Ⅲ2C	62.7	0	62.7	62.7	1	Ⅰb
Ⅲ2D	27.7	4.7	23.0	32.4	2	Ⅰa
Ⅳa1A	19.5	4.7	14.9	25.9	3	Ⅰa
Ⅳa1C	22.7	0	22.7	22.7	1	Ⅰa
Ⅳb1A	22.9	5.6	17.3	31.4	5	Ⅰa
Ⅳb1B	30.5	0	30.5	30.5	1	Ⅰa
Ⅳb2A	24.5	6.8	13.5	31.9	5	Ⅰa
Ⅳc1A	52.7	0	52.7	52.7	1	Ⅰb
Ⅳc1C	24.9	0	24.9	24.9	1	Ⅰa
Ⅳc2C	41.6	0	41.6	41.6	1	Ⅰb
ⅤA	15.2	0	15.2	15.2	1	Ⅰa

図版 217　石鏃の類型別 TCSA 値

表 73　石鏃の時期別出現頻度

層	Ⅰa	Ⅰb	Ⅰc	Ⅰd	Ⅰe	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳa	Ⅳb	Ⅳc	未成品	不明	総計
Ⅲa	1		6	1	2	2		1	4	1	2	1	21
Ⅲb	7	2	17	2	1	3	5		1		3	4	45
Ⅲc	2					2			1		3	2	10
総計	10	2	23	3	3	7	5	1	6	1	8	7	76

表 74　石鏃の時期別加工調整出現頻度

層	A	B	C	D	総計
Ⅲa	11	3	4		18
Ⅲb	19	11	4	4	38
Ⅲc	4	1			5
総計	34	15	8	4	61

表 75　石鏃の時期別 TCSA 値

（Ⅲ a 層）

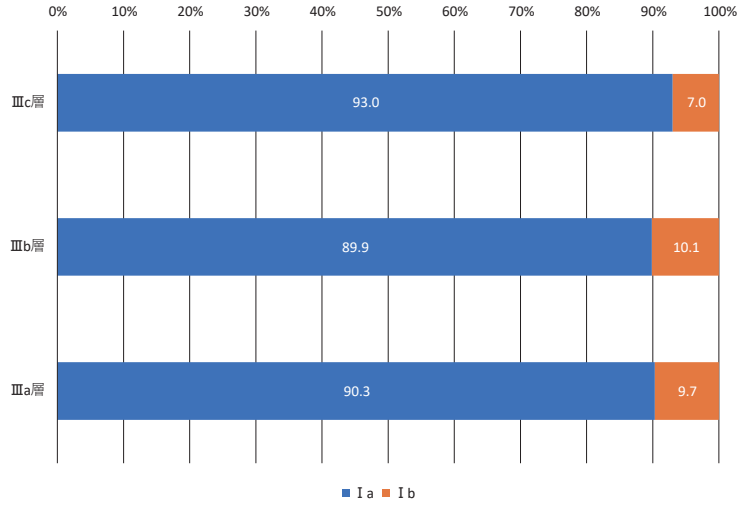
細分	平均値	標準偏差	最小値	最大値	標本数	TCSA 分類
Ⅰa1A	18.2	0.0	18.2	18.2	1	Ⅰa
Ⅰa1C	25.4	0.0	25.4	25.4	1	Ⅰa
Ⅰa1D	33.0	0.0	33.0	33.0	1	Ⅰa
Ⅰa2A	29.0	7.1	24.3	32.0	3	Ⅰa
Ⅰb2C	20.1	0.0	20.1	20.1	1	Ⅰa
Ⅰc1A	30.8	11.0	19.2	44.2	4	Ⅰa
Ⅰc1B	26.8	10.0	19.8	34.7	4	Ⅰa
Ⅰc1C	17.3	0.0	17.3	17.3	1	Ⅰa
Ⅰc1D	14.7	0.0	14.7	14.7	1	Ⅰa
Ⅰc2A	31.7	12.2	8.0	44.1	8	Ⅰa
Ⅰc2B	23.9	11.2	15.0	50.1	3	Ⅰa
Ⅰc2C	17.7	0.0	17.7	17.7	1	Ⅰa
Ⅰc4C	12.0	0.0	12.0	12.0	1	Ⅰa
Ⅰd2A	55.0	0.0	55.0	55.0	1	Ⅰb
Ⅰd2B	23.5	0.0	23.5	23.5	1	Ⅰa
Ⅰe1A	38.3	0.0	38.3	38.3	1	Ⅰa
Ⅰe2A	33.3	4.8	27.1	39.4	5	Ⅰa
Ⅱ 2A	21.5	8.2	12.3	36.1	3	Ⅰa
Ⅱ 2C	42.2	24.0	20.5	75.6	2	Ⅰa
Ⅱ 3B	21.8	0.0	21.8	21.8	1	Ⅰa
Ⅲ 1B	65.8	0.0	65.8	65.8	1	Ⅰb
Ⅲ 1C	19.0	0.0	19.0	19.0	1	Ⅰa
Ⅲ 1D	42.2	19.4	22.9	61.6	2	Ⅰb
Ⅲ 2D	27.7	4.7	23.0	32.4	2	Ⅰa
Ⅳa1A	21.8	4.2	17.6	25.9	2	Ⅰa
Ⅳa1C	22.7	0.0	22.7	22.7	1	Ⅰa
Ⅳb1A	18.9	0.1	18.8	19.1	2	Ⅰa
Ⅳb1B	30.5	0.0	30.5	30.5	1	Ⅰa
Ⅳb2A	23.8	7.5	13.5	31.9	3	Ⅰa
Ⅳc1A	52.7	0.0	52.7	52.7	1	Ⅰb
Ⅳc2C	41.6	0.0	41.6	41.6	1	Ⅰb
Ⅴ A	15.2	0.0	15.2	15.2	1	Ⅰa

（Ⅲ b 層）

細分	平均値	標準偏差	最小値	最大値	標本数	TCSA 分類
Ⅰa1A	44.6	0.0	44.6	44.6	1	Ⅰb
Ⅰa1B	27.3	3.8	23.6	31.1	2	Ⅰa
Ⅰa1C	27.2	0.0	27.2	27.2	1	Ⅰa
Ⅰa2A	29.1	7.9	17.6	42.9	4	Ⅰa
Ⅰa2B	23.9	7.8	24.5	36.2	2	Ⅰa
Ⅰa2D	55.5	0.0	55.5	55.5	1	Ⅰb
Ⅰa3A	25.8	0.0	25.8	25.8	1	Ⅰa
Ⅰb1A	46.0	0.4	45.6	46.4	2	Ⅰb
Ⅰb2B	15.3	0.0	15.3	15.3	1	Ⅰa
Ⅰc1A	29.8	10.0	9.4	41.1	8	Ⅰa
Ⅰc1B	26.7	10.5	16.6	51.3	5	Ⅰa
Ⅰc1C	10.5	0.0	10.5	10.5	1	Ⅰa
Ⅰc2A	31.2	12.2	6.7	49.0	11	Ⅰa
Ⅰc2B	23.7	10.8	11.5	30.8	9	Ⅰa
Ⅰc2C	28.7	10.5	27.4	30.1	2	Ⅰa
Ⅰc2D	20.9	0.0	20.9	20.9	1	Ⅰa
Ⅰd2B	25.6	3.5	22.2	29.1	1	Ⅰa
Ⅰe1A	17.5	1.6	15.9	19.0	2	Ⅰa
Ⅰf1A	46.5	0.0	46.5	46.5	1	Ⅰb
Ⅱ 1A	13.3	0.0	13.3	13.3	1	Ⅰa
Ⅱ 1B	13.0	0.0	13.0	13.0	1	Ⅰa
Ⅱ 2A	31.2	17.0	17.5	59.6	2	Ⅰa
Ⅱ 2B	29.4	12.3	18.3	46.6	2	Ⅰa
Ⅱ 2C	30.5	0.0	30.5	30.5	1	Ⅰa
Ⅲ 1C	63.2	0.0	63.2	63.2	1	Ⅰb
Ⅲ 1D	31.1	13.1	18.0	44.2	2	Ⅰa
Ⅲ 2A	46.0	0.0	46.0	46.0	1	Ⅰb
Ⅳb1A	17.3	0.0	17.3	17.3	1	Ⅰa
Ⅳb2A	27.2	0.0	27.2	27.2	1	Ⅰa

（Ⅲ c 層）

細分	平均値	標準偏差	最小値	最大値	標本数	TCSA 分類
Ⅰa1B	16.4	0.0	16.4	16.4	1	Ⅰa
Ⅰa1C	18.6	0.0	18.6	18.6	1	Ⅰa
Ⅰa1D	39.5	0.0	39.5	39.5	1	Ⅰa
Ⅰa2A	27.0	5.5	32.4	34.5	2	Ⅰa
Ⅰa2B	23.1	9.3	16.0	16.9	2	Ⅰa
Ⅰa3A	44.1	0.0	44.1	44.1	1	Ⅰb
Ⅰb1A	33.6	0.0	33.6	33.6	1	Ⅰa
Ⅰc1B	22.5	0.0	22.5	22.5	1	Ⅰa
Ⅰc1C	61.0	0.0	61.0	61.0	1	Ⅰb
Ⅰc2A	31.2	12.0	11.4	38.8	6	Ⅰa
Ⅰc2C	27.4	11.1	18.3	20.4	2	Ⅰa
Ⅰd2A	37.3	0.0	37.3	37.3	1	Ⅰa
Ⅰd2C	13.9	0.0	13.9	13.9	1	Ⅰa
Ⅰd3A	21.4	0.0	21.4	21.4	1	Ⅰa
Ⅱ 1A	21.0	4.3	20.0	26.7	2	Ⅰa
Ⅱ 1C	18.9	0.0	18.9	18.9	1	Ⅰa
Ⅱ 2A	24.6	11.4	15.6	29.0	9	Ⅰa
Ⅱ 2B	26.9	14.8	11.0	23.2	2	Ⅰa
Ⅱ 3A	30.1	0.0	30.1	30.1	1	Ⅰa
Ⅱ 3B	19.0	0.0	19.0	19.0	1	Ⅰa
Ⅲ 1B	24.3	0.0	24.3	24.3	1	Ⅰa
Ⅲ 2A	67.2	0.0	67.2	67.2	1	Ⅰb
Ⅳb1A	31.4	0.0	31.4	31.4	1	Ⅰa
Ⅳb2A	29.9	0.0	29.9	29.9	1	Ⅰa
Ⅳc1C	24.9	0.0	24.9	24.9	1	Ⅰa



図版 218　石鏃の時期別 TCSA 分類の出現頻度

類型別の出現頻度をみると（表67）、Ⅰ類（基部が突出するもの）が最も多く37.9％（22点）みられる。包含層別にみると、SX2包含層の4点、SX3包含層の2点を除くと、SX1包含層においてⅠb1類が8点で最も多い。

石材は、珪質頁岩が最も多く72.4％（42点）みられ、次に頁岩が15.5％（9点）で多くなっている（表70、76）。それ以外には、珪質凝灰岩や珪化凝灰岩、凝灰岩が合わせて7点みられる。

類型別の大きさ・形状の分布を比較すると（図版219）、全ての類型で縦長・薄手である。

類型別の残存状況をみると（表77）、一部欠損が58.6％（34点）で最も多くみられる。次に多いのは破片で22.4％（13点）である。また、完形も19.0％（11点）みられる。類型別にみると、Ⅱ1類、Ⅱb1類（つまみ部を作出しているもの）、Ⅲa3類（基部が半円形のもの）、Ⅳ2類（基部が直線的なもの）は、完形である。

石鏃と同様に、形態の違いと狩猟具としての用途の関係性を検討するために、TCSA値を求めた（表78）。その結果、突き槍（Ⅱ）が73.3％（27点）で最も多い。それ以外には、Ⅴ1類（2個の逆刺を作出しているもの）が鏃（Ⅰa）、Ⅱ2類、Ⅱb類（つまみ部を作出しているもの）でダーツ（Ⅰb）がみられる。また、Ⅰa2類（基部が突出するもの）は、田村（2011）がディスプレーと定義している実用的な狩猟具としてはみられないⅢに分類された。ただし、本遺跡ではⅢに分類されたものでも先端部の欠損がみられることから、使用されていた可能性があるが、使用以外による偶発的な欠損の可能性も排除できないため、実用的でない機能を持っているかについてはさらに検討の必要がある。

時期的な検討に有効なまとまりのあるグリッドの資料をみると（表79）、Ⅲb層のみで出土が確認でき、基部が突出するもの（Ⅰ類）とつまみ部を作出しているもの（Ⅱ類）が3点ずつみられる。Ⅱ類（つまみ部を作出しているもの）については使用されている石材は全て珪質頁岩であり、それらは本州では青森県から山形県などの日本海側で採取されることが知られている（秦2007）。また、Ⅱ類（つまみ部を作出しているもの）に分類できる石器は中沢遺跡でも前期前葉から中葉に多く確認できる。それらは、いわゆる山形県高畠町押出遺跡（山形県教育委員会1990）で型式設定されている「押出型ポイント」に分類される。

時期ごとの類型別のTCSA値をみると（表78）、前期中葉から末葉に位置づけられるⅢb層では、突き槍は10点中6点で、鏃（Ⅰa）やダーツ（Ⅰb）、実用的な狩猟具としては認められないもの（Ⅲ）もみられる。前期中葉から末葉に位置づけられるⅢc層では、突き槍（Ⅱ）は11点中7点であり、ダーツ（Ⅰb）が11点中3点で、鏃も1点みられた。以上の結果から、本遺跡では全体的な傾向としては、尖頭器が突き槍の機能を有していたことが想定されるが、層ごとの単位でみると、下層ほど尖頭器に分類できるもので鏃やダーツの用途と考えられるものの割合が増えていることがわかる。

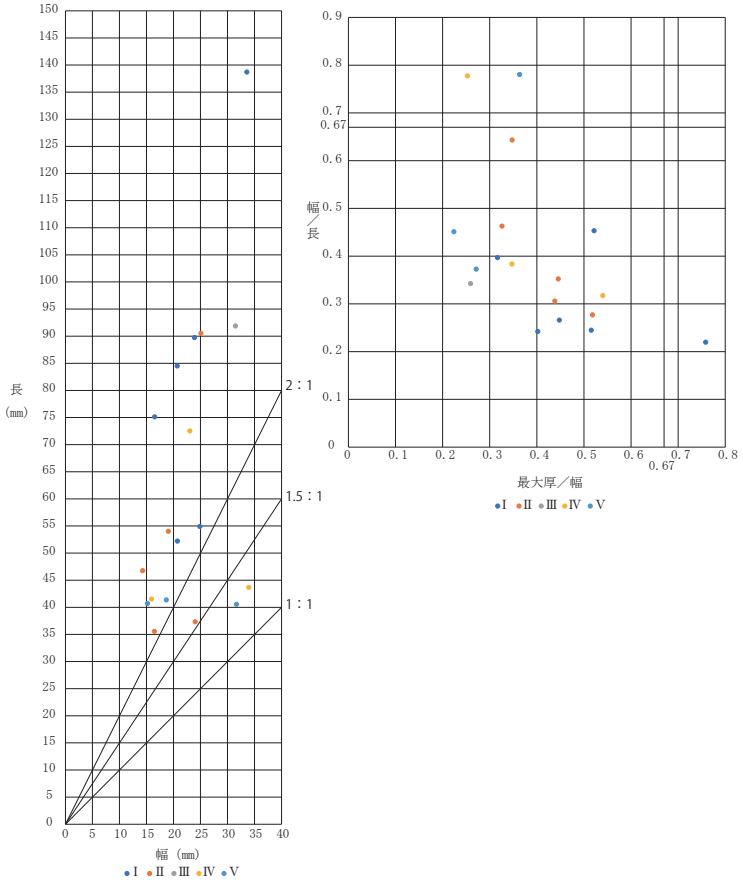
完形のみが確認されている類型については、破損した際の予備としての意味合いがあると考えられるが、狩猟具とは異なる用途があった可能性がある。完形でみつかっているものの中には、Ⅱ類（つまみ部を作出しているもの）があり、その石器の機能については使用痕の観察からイネ科植物などの切断に使用した可能性が指摘されている（鹿又2009、鹿又・木暮2018）。

表 76　尖頭器の類型別石材組成

分類	珪質頁岩	頁岩	珪質凝灰岩	珪化凝灰岩	凝灰岩	総計
Ⅰ	3					3
Ⅰa2	1					1
Ⅰb	2				1	3
Ⅰb1	6	4		1		11
Ⅰb2	1			1		2
Ⅰb3	1			1		2
Ⅱ1	1					1
Ⅱ2	1					1
Ⅱb	2					2
Ⅱb1	2					2
Ⅱb2	2					2
Ⅲa2	1					1
Ⅲa3	1					1
Ⅳ1	1		1			2
Ⅳ2	2					2
Ⅴ1	1					1
Ⅴ2	1			1		2
1	1					1
4		1				1
未成品		1				1
不明	12	3		1		16
総計	42	9	1	5	1	58

表 77　尖頭器の残存状況

分類	完形	一部欠	破片	総計
Ⅰ			3	3
Ⅰa2		1		1
Ⅰb		1	2	3
Ⅰb1	3	8		11
Ⅰb2		2		2
Ⅰb3		2		2
Ⅱ1	1			1
Ⅱ2		1		1
Ⅱb		2		2
Ⅱb1	2			2
Ⅱb2		2		2
Ⅲa2		1		1
Ⅲa3	1			1
Ⅳ1	1	1		2
Ⅳ2	2			2
Ⅴ1		1		1
Ⅴ2	1	1		2
1		1		1
4		1		1
未成品		1		1
不明		8	8	16
総計	11	34	13	58



図版 219　尖頭器の大きさ・形状

図版 99-27（S902）は、両側縁の中間部に抉りが入れられているものであるが、抉りを作出している剥離面が尖頭器の加工調整の際の剥離面を切っており、他の剥離面と製作技術が異なっている。また、両者で剥離面の風化の度合いも異なっている。このことから、もともとは抉りのない状態で製作されたものが、製作時から時間的にある程度経過した段階で抉りが入れられたと考えられ、剥離の様相からそれらには技術的な差がみられる。このような傾向は、図版 69-10（S5130）と図版 82-13（S3346）でも確認できる。図版 69-10（S5130）と図版 82-13（S3346）は、先端部と基部側で剥離の特徴が異なっている。先端部が連続的に内部まで及ぶような右肩上がりの斜行剥離により規則的な加工調整がなされているのに対して、基部側にはそのような規則性はみられない。

表 78　尖頭器の TCSA 値

〔全資料〕

細分	平均値	標準偏差	最小値	最大値	標本数	TCSA 分類
Ⅰa2	229.3	0.0	229.3	229.3	1	Ⅲ
Ⅰb1	142.7	51.8	68.0	226.7	10	Ⅱ
Ⅰb2	89.3	21.5	67.8	110.7	2	Ⅱ
Ⅰb3	124.4	3.3	121.1	127.6	2	Ⅱ
Ⅱ1	80.7	0.0	80.7	80.7	1	Ⅱ
Ⅱ2	53.0	0.0	53.0	53.0	1	Ⅰb
Ⅱb	72.3	28.0	44.2	100.3	2	Ⅰb
Ⅱb1	103.9	59.1	44.9	163.0	2	Ⅱ
Ⅱb2	106.7	20.3	86.4	127.0	2	Ⅱ
Ⅲa2	197.7	0.0	197.7	197.7	1	Ⅱ
Ⅲa3	128.4	0.0	128.4	128.4	1	Ⅱ
Ⅳ1	109.6	36.0	73.6	145.7	2	Ⅱ
Ⅳ2	93.6	49.6	44.0	143.2	2	Ⅱ
Ⅴ1	31.3	0.0	31.3	31.3	1	Ⅰa
Ⅴ2	110.6	71.6	39.0	182.3	2	Ⅱ

〔時期別〕

（Ⅲa層）

細分	平均値	標準偏差	最小値	最大値	標本数	TCSA 分類
Ⅰb2	67.8	0.0	67.8	67.8	1	Ⅰb
Ⅰb3	124.4	3.3	121.1	127.6	2	Ⅱ
Ⅱb2	127.0	0.0	127.0	127.0	1	Ⅱ
Ⅴ2	182.3	0.0	182.3	182.3	1	Ⅱ

（Ⅲb層）

細分	平均値	標準偏差	最小値	最大値	標本数	TCSA 分類
Ⅰa2	229.3	0.0	229.3	229.3	1	Ⅲ
Ⅰb1	150.2	49.8	99.4	226.7	3	Ⅱ
Ⅰb2	110.7	0.0	110.7	110.7	1	Ⅱ
Ⅱb	72.3	28.0	44.2	100.3	2	Ⅰb
Ⅱb1	163.0	0.0	163.0	163.0	1	Ⅱ
Ⅱb2	86.4	0.0	86.4	86.4	1	Ⅱ
Ⅴ1	31.3	0.0	31.3	31.3	1	Ⅰa

（Ⅲc層）

細分	平均値	標準偏差	最小値	最大値	標本数	TCSA 分類
Ⅰb1	155.7	47.5	110.4	197.8	4	Ⅱ
Ⅱ1	80.7	0.0	80.7	80.7	1	Ⅱ
Ⅱ2	53.0	0.0	53.0	53.0	1	Ⅰb
Ⅱb1	44.9	0.0	44.9	44.9	1	Ⅰb
Ⅲa2	197.7	0.0	197.7	197.7	1	Ⅱ
Ⅲa3	128.4	0.0	128.4	128.4	1	Ⅱ
Ⅳ2	44.0	0.0	44.0	44.0	1	Ⅰb
Ⅴ2	39.0	0.0	39.0	39.0	1	Ⅰa

表 79　尖頭器の時期別出現頻度

層	Ⅰa2	Ⅰb	Ⅰb1	Ⅰb2	Ⅰb3	Ⅱb	Ⅱb2	総計
Ⅲa		1			2		1	4
Ⅲb	1		1	1		2	1	6
総計	1	1	1	1	2	2	2	10

③石錐

各包含層における出土点数をみると（表 64）、SX1 のⅢb層が 12 点で最も多く、SX1 のⅢa層が 11 点、SX1 のⅢc層でも 7 点確認している。

類型別の出現頻度をみると（表 67）、Ⅱ類（つまみ部をもつもの）が最も多く 87.5%（35 点）を占めている。Ⅱ類の中ではⅡc類が 45.7%（16 点）で最も多くなっており、Ⅱa類とⅡb類はほぼ同じ割合である。包含層別にみると、SX2 の 1 点、SX3 の 1 点を除くと、SX1 のⅢa層とⅢb層でともにⅡa類、Ⅱb類、Ⅱc類がほぼ同じ割合で確認されている。それに対して、Ⅲc層ではⅡc類の割合が最も高くなっている。

石材は、珪質頁岩が最も多く 40%（16 点）みられ、次に頁岩が 17.5%（7 点）で多い（表 70、80）。それ以外には、珪化凝灰岩や珪質凝灰岩、碧玉 D なども一定数みられる。

類型別の大きさ・形状の分布を比較すると（図版 220）、Ⅰb類（両端に尖頭部を有するもの）、Ⅱa類、Ⅱb類（つまみ部をもつもの）では縦長・薄手の傾向があり、Ⅱc類はこれらに比べて縦長からやや幅広・薄手からやや厚手の範囲に広く分布している。

残存状況をみると（表 81）、完形が 80%を占めている。

図版 83-3（S2456）は、基部側に石鏃の投射実験により特徴的に表れてくる彫器状剥離（佐野・大場 2014、御堂島 1991 など）に類似する剥離痕がみられる。このことから、もともと石鏃であったものが破損したのちに、石錐に転用されたものと考えられる。

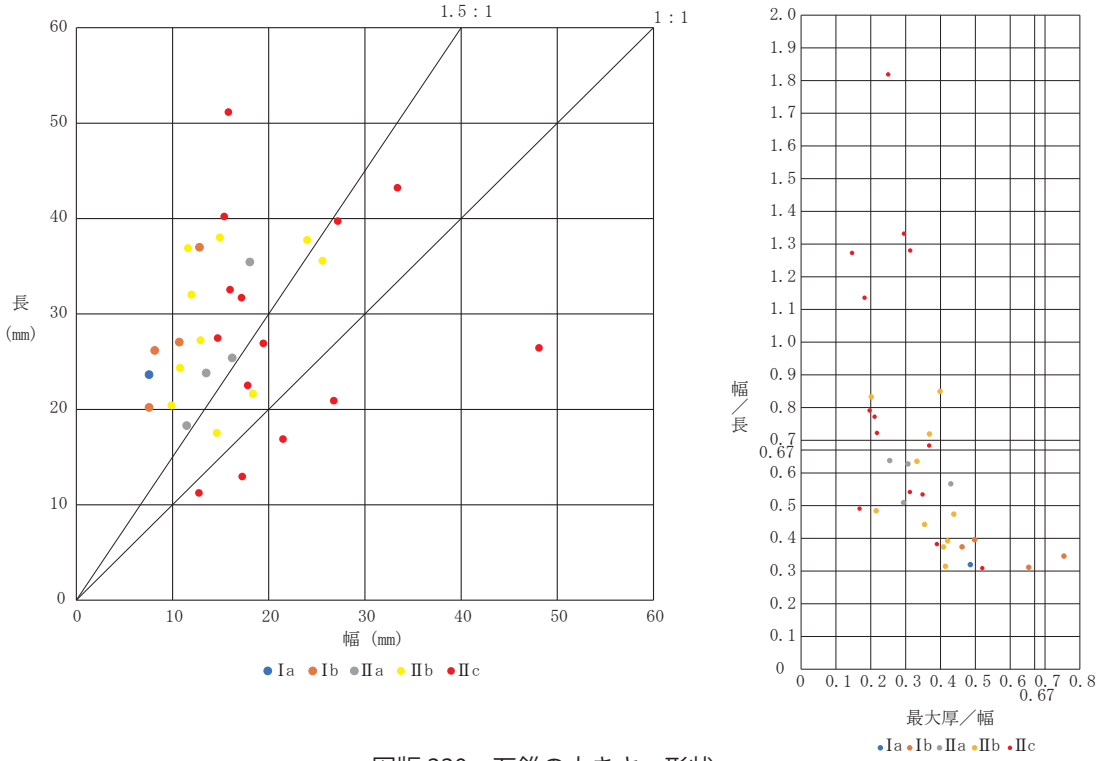
時期的な検討に有効なまとまりのあるグリッドの資料は非常に少ないため傾向性を見出すことは難しいが、Ⅲb層でみられるのはつまみ部との境界が不明瞭なもの（Ⅱb類）である（表 82）。

表 80　石錐の類型別石材組成

分類	珪質頁岩	頁岩	珪質凝灰岩	珪化凝灰岩	流紋岩質凝灰岩	碧玉 B	碧玉 D	計
Ⅰa	1							1
Ⅰb	3		1					4
Ⅱa		1		1				2
Ⅱa1		1						1
Ⅱa2	4	1			1			6
Ⅱb1	2	2	1	1				6
Ⅱb2	1	2		1				4
Ⅱc1	4		2				3	9
Ⅱc2	1			2	1	1	2	7
総計	16	7	4	5	2	1	5	40

表 81　石錐の残存状況

分類	一部欠	完形	計
Ⅰa		1	1
Ⅰb	1	3	4
Ⅱa	1	1	2
Ⅱa1	1		1
Ⅱa2	2	4	6
Ⅱb1	1	5	6
Ⅱb2		4	4
Ⅱc1	2	7	9
Ⅱc2		7	7
総計	8	32	40



図版 220　石錐の大きさ・形状

表 82　石錐の時期別出現頻度

層	Ⅱa2	Ⅱb1	Ⅱb2	Ⅱc1	Ⅱc2	計
Ⅲa	1	1		2	1	5
Ⅲb		1	1			2
総計	1	2	1	2	1	7

④石匙

各包含層における出土点数をみると（表 64）、SX1 包含層のⅢb 層で最も多く 20 点（41％）、次いでⅢc 層で 16 点（32％）、Ⅲa 層で 13 点（26％）である。

類型別の出現頻度をみると（表 67）、Ⅰ類（縦型）が最も多く 59.2％（32 点）であり、Ⅱ類（横型）とⅢ類（斜刃）は同じ割合である。

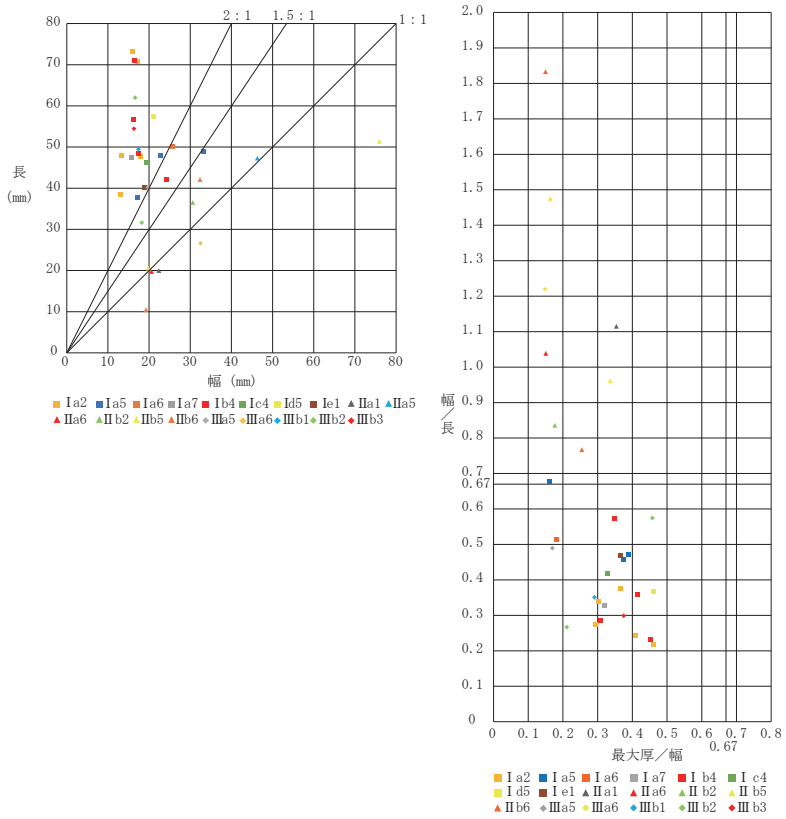
二次剥離調整の及ぶ範囲の傾向をみると（表 85）、4（片側縁からの剥離が急角度になるもの）に分類したものはⅢc 層で 64.3％（9 点）で最も多い傾向を示しており、5（縁辺部のみで大半に二次加工を施すもの）はⅢa 層で 62.5％（5 点）で最も多くなっている。また、6（縁辺部のみで一部に二次加工を施すもの）はⅢb 層で最も多く 85.7％（6 点）を占めている。

表 83　石匙の類型別石材組成

分類	珪質頁岩	頁岩	珪質凝灰岩	珪化凝灰岩	凝灰岩	碧玉 B	碧玉 D	粘板岩	石英	玉髄	計
Ⅰ	1	1									2
Ⅰ 2	1										1
Ⅰ 6			1								1
Ⅰ a2	4	3									7
Ⅰ a4									1		1
Ⅰ a5	2			2							4
Ⅰ a6	1										1
Ⅰ a7	1										1
Ⅰ b	1				1						2
Ⅰ b4	9										9
Ⅰ c4	1										1
Ⅰ d5	1										1
Ⅰ e1						1					1
Ⅱ a1	1										1
Ⅱ a5										1	1
Ⅱ a6	1										1
Ⅱ b2	1										1
Ⅱ b5	1	2									3
Ⅱ b6		1	2								3
Ⅲ a4	4										4
Ⅲ a5	2										2
Ⅲ a6								1			1
Ⅲ b1	1										1
Ⅲ b2	1					1					2
Ⅲ b3	1										1
4	1	1									2
未成品	2						1				3
-	6										6
総計	44	8	3	2	1	2	1	1	1	1	64

表 84　石匙の残存状況

分類	完形	一部欠	破片	計
Ⅰ		2		2
Ⅰ 2		1		1
Ⅰ 6	1			1
Ⅰ a2	3	4		7
Ⅰ a4		1		1
Ⅰ a5	3	1		4
Ⅰ a6	1			1
Ⅰ a7	1			1
Ⅰ b		2		2
Ⅰ b4	4	5		9
Ⅰ c4		1		1
Ⅰ d5	1			1
Ⅰ e1	1			1
Ⅱ a1	1			1
Ⅱ a5	1			1
Ⅱ a6	1			1
Ⅱ b2	1			1
Ⅱ b5	2	1		3
Ⅱ b6	2	1		3
Ⅲ a4		4		4
Ⅲ a5	1	1		2
Ⅲ a6	1			1
Ⅲ b1	1			1
Ⅲ b2	2			2
Ⅲ b3	1			1
4		1	1	2
未成品	3			3
-		2	4	6
総計	32	27	5	64



図版 221　石匙の大きさ・形状

表 85　石匙の加工調整出現頻度

包含層・層		1	2	3	4	5	6	7	-	総計
SX1	Ⅱ	2								2
	Ⅲ a		5		1	5	1		1	13
	Ⅲ b	1	1	1	3	2	6	1	5	20
	Ⅲ c		4		9				3	16
	不明				1	1			1	3
SX3	Ⅱ					1				1
	Ⅲ c				1	1				2
総計		3	10	1	15	10	7	1	10	57

表 86　石匙の時期別出現頻度

層	Ⅰ	Ⅰ a2	Ⅰ a5	Ⅰ a7	Ⅰ b	Ⅰ c4	Ⅰ e1	Ⅱ a5	Ⅱ b6	Ⅲ a4	Ⅲ a5	Ⅲ a6	Ⅲ b2	Ⅲ b3	不明	計
Ⅲ a		3	1								1		1			6
Ⅲ b	1		1	1		1	1	1	2	1		1	1	1	1	13
Ⅲ c					1										1	2
総計	1	3	2	1	1	1	1	1	2	1	1	1	2	1	2	21

表 87　石匙の時期別加工調整出現頻度

層	1	2	3	4	5	6	7	総計
Ⅲ a		4			2			6
Ⅲ b	1	1	1	2	2	3	1	11
総計	1	5	1	2	4	3	1	17

石材は、珪質頁岩が最も多く 68.8%（44 点）みられ、頁岩も含めると 81.3%（52 点）を占めている（表 70、83）。それ以外には、珪質凝灰岩、珪化凝灰岩、凝灰岩、碧玉、粘板岩、石英、玉髄が 1 ～ 2 点みられる。

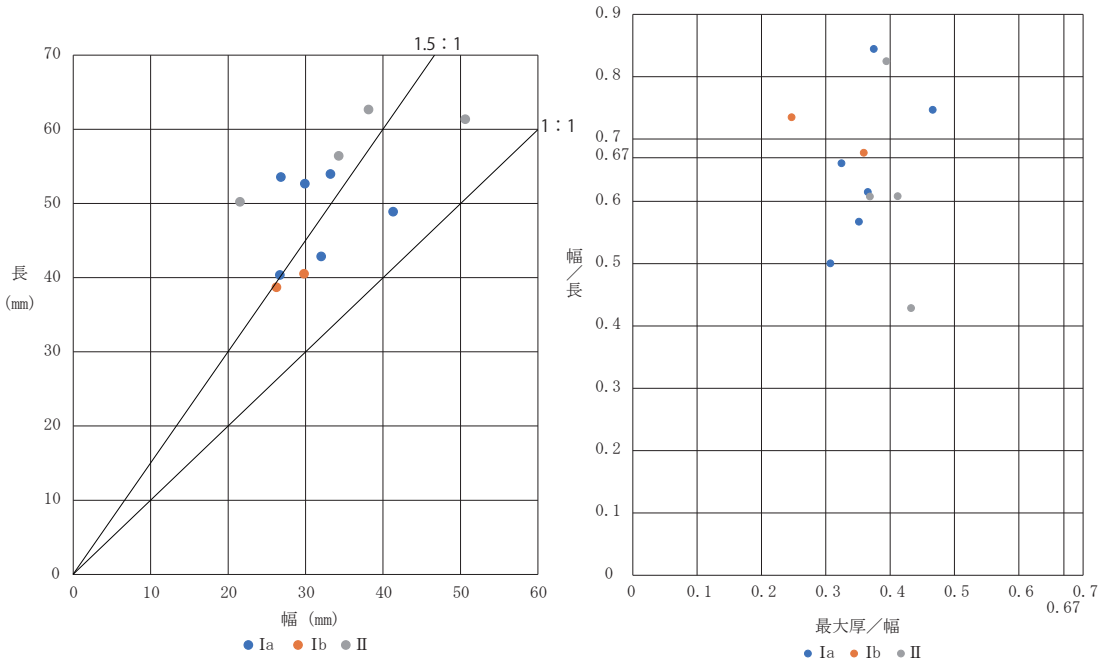
類型別の大きさ・形状の分布を比較すると（図版 221）、Ⅰ類（縦型）は縦長からやや幅広・薄手、Ⅱ類（横型）は幅広・薄手から厚手、Ⅲ類（斜刃）は縦長から幅広・薄手からやや厚手に分布する傾向がある。

残存状況をみると（表 84）、完形のものが最も多く 50.0%（32 点）みられ、その次に一部欠損のものが 42.2%（27 点）みられる。

時期的な検討に有効なまとまりのあるグリッドの資料をみると（表 86）、Ⅲ b 層ではⅠ類～Ⅲ類まではほぼ同程度の点数がみられる。

さらに、時期別の二次剥離調整については（表 87）、6（縁辺部のみで一部に二次加工を施すもの）としたものが 3 点みられ、4（片側縁からの剥離が急角度になるもの）や 5（縁辺部のみで大半に二次加工を施すもの）としたものが 2 点ずつみられる。

二次剥離調整の及ぶ範囲で 4（片側縁からの剥離が急角度になるもの）としたものはいわゆる「松原型石匙」（秦 1991）とされるものであり、中沢遺跡においても特に前期初頭から前葉を中心に主



図版 222　篦状石器の大きさ・形状

表 88　篦状石器の石材組成

分類	珪質頁岩	珪質凝灰岩	珪化凝灰岩	流紋岩質凝灰岩	緑色凝灰岩	凝灰岩	碧玉 B	碧玉 D	計
Ⅰ a1	3			1		1		1	6
Ⅰ a2					1		1		2
Ⅰ b2	3	1							4
未成品			1						1
不明			1						1
総計	6	1	2	1	1	1	1	1	14

表 89　篦状石器の残存状況

分類	完形	一部欠	計
Ⅰ a1	6		6
Ⅰ a2	2		2
Ⅰ b2	4		4
未成品	1		1
-		1	1
総計	13	1	14

体的に出土が確認している。また、3（片面はつまみ部のみに加工を施し、片側縁からの剥離が急角度になるもの）は「松原型石匙」に特徴的な腹面の片側縁の連続する二次加工はみられないが、背面の加工は「松原型石匙」と非常に類似しているため、その範疇に含まれると考えられる。そのような石器は中沢遺跡でも多く確認でき、前期初頭の時期を中心にみられる。本遺跡では、時期別の検討資料が少なく、傾向性を導き出すことは難しいが、加工調整で4（片側縁からの剥離が急角度になるもの）としたものがⅢc層で最も多くなっている傾向をあえて考慮すると、中沢遺跡の出土傾向から、本遺跡のものも前期前葉に位置づけられる可能性がある。

⑤箆状石器

各包含層における出土点数をみると（表64）、SX1のⅢa層とⅢc層で4点ずつ出土している。

類型別の出現頻度をみると（表67）、Ⅰa類（刃部がやや開くもの）が最も多く6点であるが、Ⅱ類（左右非対称のもの）も4点出土している。各包含層における層位別の出現頻度では、Ⅰb類（楕円形を呈するもの）はSX1のⅢb層で確認され、それ以外の類型はⅢa層とⅢc層で確認される。また、Ⅱ類は、SX3のⅢa層でも確認できる。

石材は、珪質頁岩が6点で最も多くみられる（表70、88）。それ以外には、珪質凝灰岩、珪化凝灰岩、流紋岩質凝灰岩、緑色凝灰岩、凝灰岩、碧玉が1～2点みられる。

類型別の大きさ・形状の分布を比較すると（図版222）、Ⅰa類は縦長からやや幅広・薄手からやや厚手の範囲に広く分布している。Ⅰb類はやや幅広・やや厚手の範囲にみられ、Ⅱ類は縦長・薄手からやや厚手の範囲にみられる。

類型別の残存状況をみると（表89）、一部欠損が1点みられる以外は全て完形である。

（3）打製石斧

各包含層における出土点数をみると（表64）、SX1のⅢc層が最も多く41.3%（19点）みられ、次にSX1のⅢa層とⅢb層がほぼ同程度出土している。

類型別の出現頻度をみると（表67）、Ⅱ2類（楕円形を呈するもの）が最も多く32.6%（15点）みられる。その次にⅡ3類（楕円形を呈するもの）とⅠa2類（刃部がやや開くもの）がほぼ同程度みられる。

石材は、安山岩が最も多く71.7%（33点）みられ、その次にひん岩が15.2%（7点）で多くなっている（表70、90）。それ以外には、緑色凝灰岩、凝灰岩、閃緑岩、千枚岩が1～2点ずつみられる。

類型別の大きさ・形状の分布をみると（図版224）、全ての類型で縦長・薄手の傾向がみられる。その中では、Ⅱ2類（分割礫・剥片を素材としているもの）が比較的小形であり、Ⅱ3類（小礫を素材としているもの）が大形な傾向がみられた。

類型別の重量を比較すると（図版223）、Ⅱ3類が最も重く中央値は342.5gである。次にⅣ2類（左右非対称のもの）が重く中央値は166.3gである。

残存状況をみると（表91）、完形が65.2%（30点）であり最も多く、次に一部欠損資料が32.6%（15

表 90　打製石斧の石材組成

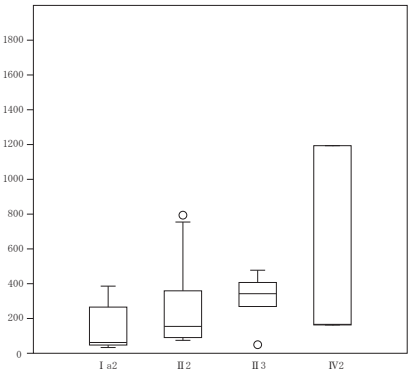
分類	緑色凝灰岩	凝灰岩	安山岩	ひん岩	閃緑岩	千枚岩	計
Ⅰa			1				1
Ⅰa2		1	5	1			7
Ⅰa3			1				1
Ⅱ1			1				1
Ⅱ2			10	3	1	1	15
Ⅱ3		1	6	1			8
Ⅲ2				1			1
Ⅲ3			1				1
Ⅳ2			2	1			3
-	2		6				8
総計	2	2	33	7	1	1	46

表 91　打製石斧の残存状況

分類	完形	一部欠	破片	計
Ⅰa	1			1
Ⅰa2	5	2		7
Ⅰa3	1			1
Ⅱ1	1			1
Ⅱ2	10	5		15
Ⅱ3	7	1		8
Ⅲ2	1			1
Ⅲ3	1			1
Ⅳ2	3			3
-		7	1	8
総計	30	15	1	46

表 92　打製石斧の素材形状

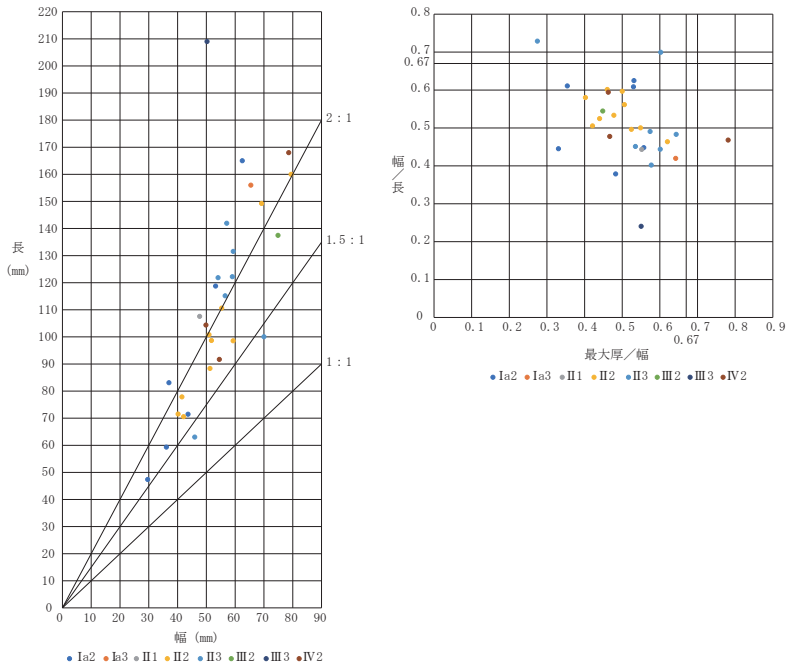
包含層	層	素材形状			計
		1	2	3	
SX1	Ⅱ			3	3
	Ⅲa		2	6	8
	Ⅲb		8		8
	Ⅲc	1	16	9	26
	不明		8		8
SX2	Ⅲc			3	3
SX3	Ⅱ			3	3
	Ⅲb		2		2
総計		1	36	24	61



図版 223　打製石斧の重量

表 93　打製石斧の時期別出現頻度

層	Ⅰa2	Ⅱ2	Ⅱ3	Ⅲ3	計
Ⅲa	1	1	1	1	4
Ⅲb		1			1
Ⅲc	1	1			2
総計	2	3	1	1	7



図版 224　打製石斧の大きさ・形状

点）みられる。

素材形状の出現頻度をみると（表 92）、裏面に大きく自然面が残存しているもの（2）は、SX1 のⅢc 層で最も多く 47.1％（16 点）みられる。次にⅢb 層で多く 23.5％（8 点）みられる。小礫を素材としているもの（3）は、Ⅲc 層で最も多く 37.5％（9 点）みられ、次にⅢa 層で 25.0％（6 点）みられる。

時期別な検討に有効なまとまりのあるグリッドの資料をみると（表 93）、Ⅲb 層ではⅡ2 類がみられ、Ⅲc 層ではⅠa2 類とⅡ2 類がみられるが、検討対象資料が少なく、明確な傾向性はみられない。

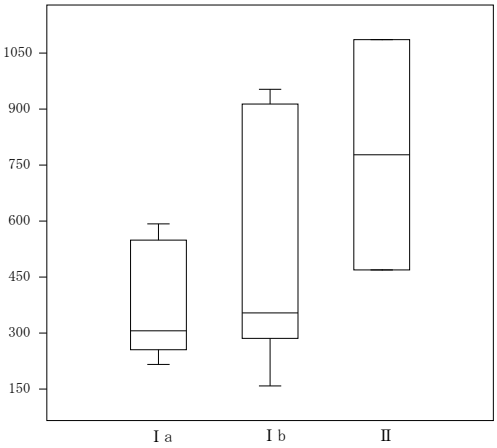
片面に自然面が残存し、平面形が楕円形を呈するもの（Ⅱ3 類）は早期末葉から前期前葉に特徴的に確認されることが指摘されており（中島 2002）、中沢遺跡でも前期初頭から前葉の時期に主体的にみられる。

（4）礫器

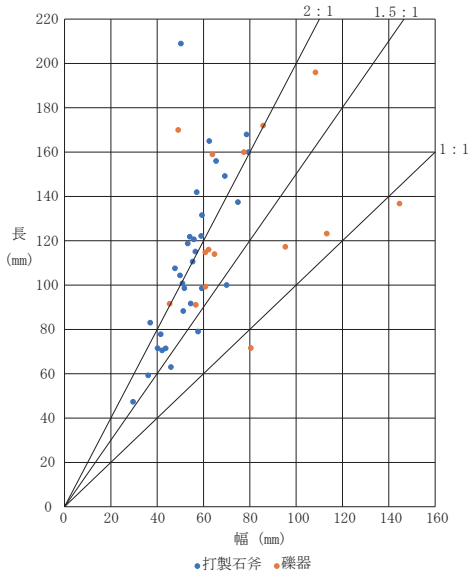
各包含層における出土点数をみると（表 64）、SX1 のⅢa 層が最も多く 5 点であり、次にⅢc 層

表 94　礫器の石材組成

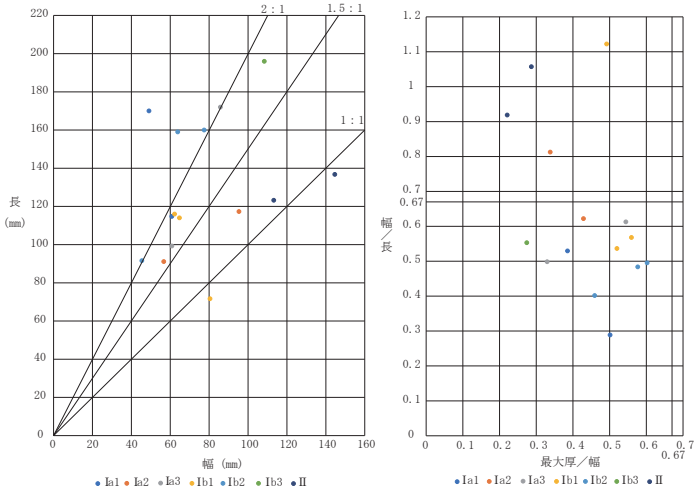
類型	珪質頁岩	珪化凝灰岩	安山岩	玄武岩	ひん岩	千枚岩	ホルンフェルス	計
Ⅰa1			1	1				2
Ⅰa2					1		1	2
Ⅰa3			1		1	1		3
Ⅰb1		1	1		1			3
Ⅰb2	1				1		1	3
Ⅰb3			1					1
Ⅱ			2					2
総計	1	1	6	1	4	1	2	16



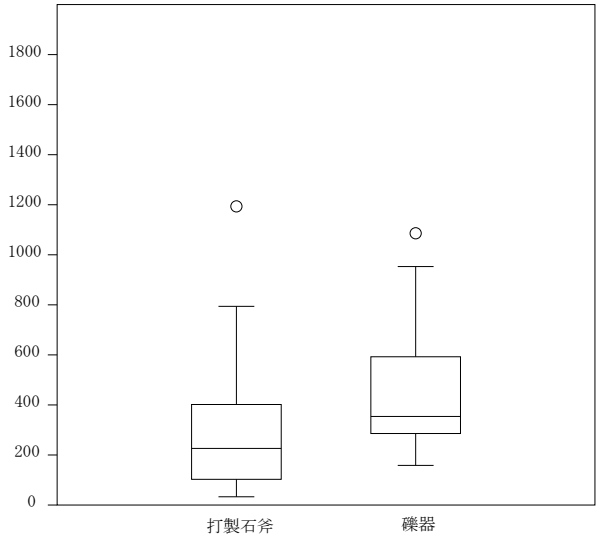
図版 226　礫器の重量



図版 227　打製石斧・礫器の大きさ



図版 225　礫器の大きさ・形状



図版 228　打製石斧・礫器の重量

が 4 点で多い。それ以外の層からは 1 ～ 2 点の出土である。

類型別の出現頻度をみると（表 67）、Ⅰa 類（長軸端部の片側に二次加工を施すもの）とⅠb 類（長軸端部の両側に二次加工を施すもの）が同点数で 7 点みられる。

石材は、安山岩が最も多く 6 点みられ、その次にひん岩が 4 点で多くなっている（表 70・94）。それ以外には、珪質頁岩、珪化凝灰岩、玄武岩、千枚岩、ホルンフェルスが 1 ～ 2 点ずつみられる。

類型別の大きさ・形状の分布をみると（図版 225）、全てのⅠa1 類、Ⅰa3 類、Ⅰb3 類が縦長・

薄手の傾向がみられる。Ⅰa2類、Ⅰb1類、Ⅰb2類、Ⅱ類（周縁の大半に二次加工を施すもの）は、縦長からやや幅広・薄手からやや厚手の範囲に広く分布している傾向がみられる。

類型別の重量を比較すると（図版226）、Ⅱ類が最も重く中央値は777.6gである。Ⅰa類とⅠb類はほぼ同じでⅠa類の中央値は306.1g、Ⅰb類の中央値は354.0gである。

上記の大きさ・重量から、Ⅱ類としたものがⅠ類よりも大形で重量感のある石器であることがわかる。

礫器については、中沢遺跡でも前期初頭から前葉の時期に主体的に確認されており、縄文時代早期から前期の東日本で広範囲にわたって認められている（石巻市教育委員会2018）。そのため、当時の生業を考える上で重要な石器と捉えられている（山元町教育委員会2010）。

石材や加工調整で比較的類似性のある礫器と打製石斧について比較すると、大きさの分布では、打製石斧はまとまっているのに対して、礫器は分布範囲が広くなっている（図版227）。ただし、ほぼ同じ範囲に分布しているものもみられる。重量では、打製石斧の重量の中央値が226.3gであるのに対して、礫器は354gであり、礫器の方が重い（図版228）。

（5）磨製石斧

各包含層における出土点数をみると（表64）、SX1のⅢb層が最も多く37.1％（28点）である。次に多いのがSX1のⅢa層で18.6％（17点）である。ただし、SX1のⅢc層でも11.4％（8点）出土している。

表95　磨製石斧の類型別石材組成

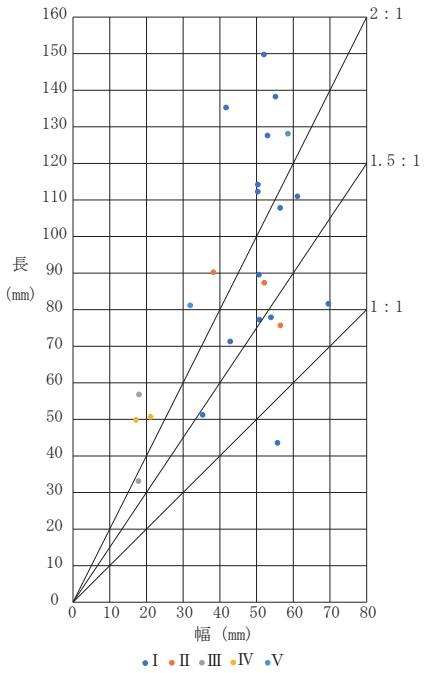
分類	頁岩	緑色凝灰岩	凝灰岩	安山岩	ひん岩	閃緑岩	ハンレイ岩	蛇紋岩	粘板岩	ホルンフェルス	緑色岩	計
Ⅰ		14	1	24	9	2		1		1	1	53
Ⅱ		3		4	1							8
Ⅲ	1	3							1			5
Ⅳ		1		1								2
Ⅴ					1		1					2
未成品				1	1	1						3
不明		2		6								8
総計	1	23	1	36	12	3	1	1	1	1	1	81

表96　磨製石斧の類型別残存状況

分類	完形	一部欠	破片	計
Ⅰ	4	47	2	53
Ⅱ	2	6		8
Ⅲ	2	3		5
Ⅳ	1	1		2
Ⅴ	2			2
未成品	1	2		3
-		1	7	8
総計	12	60	9	81

表97　磨製石斧の時期別出現頻度

層	ⅠA	Ⅰa2	Ⅰb1	Ⅰb2	Ⅰc	Ⅱ	ⅡA	ⅡB	ⅣA	計
Ⅲa	2		1						1	4
Ⅲb	4	2	4	1		1	1	1		14
Ⅲc					1				1	2
総計	6	2	5	1	1	1	1	1	2	20



図版229　磨製石斧の大きさ

類型別の出現頻度をみると（表 67）、Ⅰ類（全体を研磨と敲打で調整しているもの）が最も多く 75.7％（53 点）である。次に多いのがⅡ類（一部のみに研磨がみられるもの）で 11.4％（8 点）である。遺構別の出現頻度をみると、Ⅰ類は、SX1 のⅢｂ層で最も多く 20 点出土している。ただし、Ⅲａ層においても 12 点出土している。Ⅲ類（板状の素材を分割しているもの）は SX1 のⅢｂ層でのみ出土している。Ⅳ類（小形のもの）は、Ⅲａ層とⅢｃ層で確認でき、Ⅴ類（刃部のみ研磨により作出しているもの）はⅢｃ層でみられる。

石材は、安山岩が最も多く 44.4％（36 点）みられる（表 70、95）。次に多いのが緑色凝灰岩で 28.4％（23 点）である。ただし､ひん岩も 14.8％（12 点）でそれらについで多くなっていることから、多様な石材を使用している様子がみられる。

類型別の大きさの分布をみると（図版 229）、全ての類型において縦長のものが主体を占めている。その中で、Ⅰ類のものが比較的大形であるのに対して、Ⅱ類、Ⅲ類、Ⅳ類のものがそれよりも小形である。

類型別の残存状況をみると（表 96）、Ⅰ類では一部欠損が 88.7％（47 点）みられ、破片とあわせると 92.5％（49 点）みられる。Ⅱ類においては一部欠損が 74.1％（60 点）みられる。

時期別な検討に有効なまとまりのあるグリッドの資料をみると（表 97）、Ⅲｃ層では、Ⅰｃ類（基部が丸みを帯び､全体を研磨と敲打で調整しているもの）とⅣＡ類（小形で基部が尖るもの）がみられ、Ⅲｂ層ではⅢｃ層ではその類型をのぞく類型がみられる。

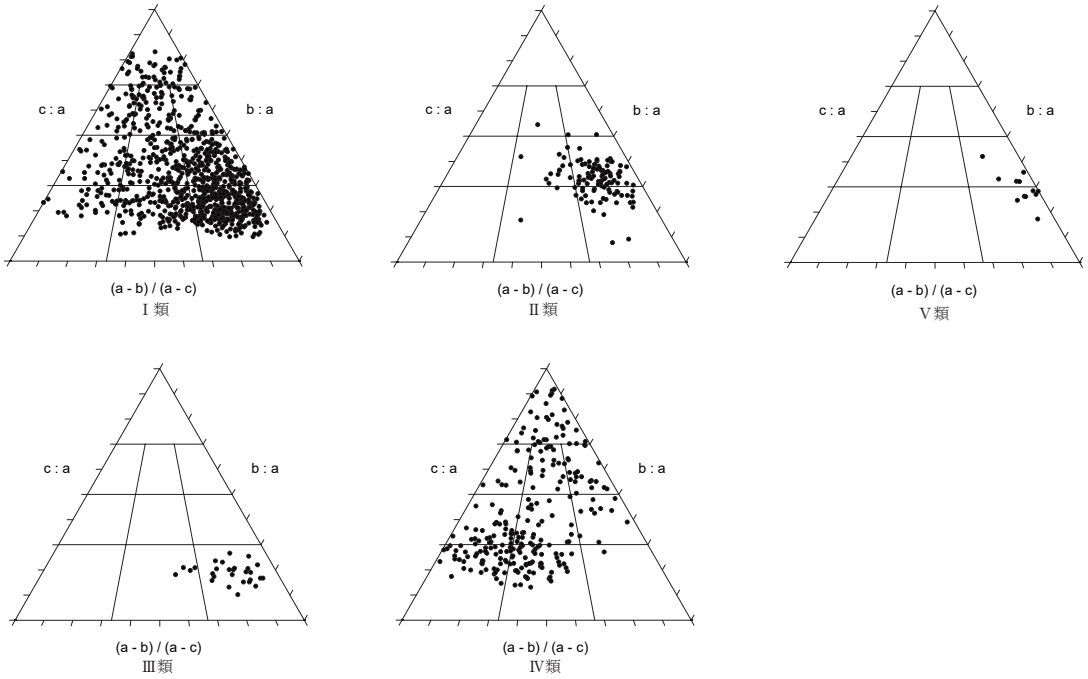
（6）礫石器

①磨石・敲石類の素材形状

素材礫の形態的特徴を明らかにするために、礫の統計指標値を求めた。統計指数値としては、長軸（a）、中間軸（b）、短軸（c）を用いた粒形特性を示すために、粒形三角ダイアグラムを作成した（図版 230）。

本遺跡における磨石・敲石類は、使用による若干の変化はあるものの、採集時の石材の形態を大きく変化させてはいないため、これらの形態的特徴は、採集時の形態をある程度反映していると考えられる。粒形三角ダイアグラムをみると、Ⅰ類（円形や楕円礫を素材としたもの）では右下の領域を中心に広く分布していることから、細長い礫から方形に近い礫まで多様であることがわかる。Ⅱ類（側面稜部に幅が狭い磨面がみられるもの）では、中央の右側の領域に非常にまとまって分布していることから、細長さや厚みがほぼ同じで形状特性が非常に均一であることがわかる。Ⅲ類（楕円形の端の両側面に平坦な磨面がみられるもの）は、右下の領域に非常にまとまって分布していることから、細長さや厚みがほぼ同じで形状特性が非常に均一であることがわかる。Ⅳ類（70mm 以下の小形のもの）は、比較的方形に近く、厚みもまとまる傾向がみられる。ただし、厚みについては広く分布している様子がみられる。Ⅴ類（280mm の大形のもの）は、細長く比較的扁平なものが多いことがわかる。

以上の結果を踏まえると、各類型に利用している自然礫には、ある程度選択性が働いていることがわかる。特に、Ⅱ類・Ⅴ類では、細長く球形率（Pp）の高い礫を選択している一方、Ⅲ類は細長



図版 230　磨石・敲石類の形状特性

いが球形率の低い礫を選択している。Ⅳ類は扁平で比較的円形に近い礫を選択する傾向にあるが、形状は多様である。Ⅰ類は、全体的に細長く扁平な礫が多いことがわかる。

このような傾向は、中沢遺跡の磨石・敲石類にもみられ、両遺跡間で素材礫の選択傾向に共通性があることが言える。

②磨石・敲石類と石皿の特徴

【磨石・敲石類】

各包含層における出土点数をみると（表 64）、SX1 のⅢｂ層が最も多く 34.0％（683 点）であり、次いでⅢａ層の 23.4％（469 点）である。

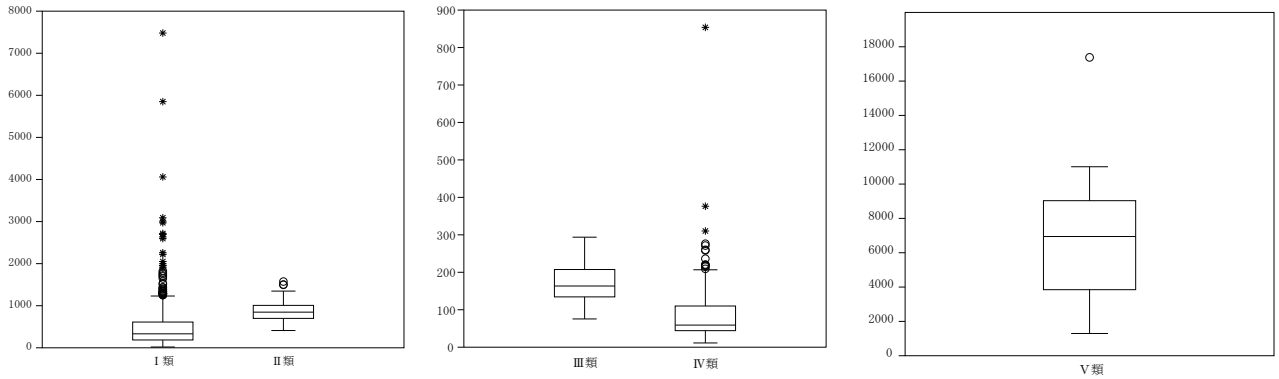
類型別の出現頻度をみると（表 68）、Ⅰ類（円形や楕円礫を素材としたもの）が最も多く 67.8％（1361 点）みられ、次にⅣ類（70mm 以下の小形のもの）の 16.5％（332 点）、Ⅱ類（側面稜部に幅が狭い磨面がみられるもの）の 13.1％（263 点）となる。各包含層の層別の出現頻度をみると、Ⅰ類は SX1 のⅢｂ層で最も多く 33.1％（451 点）を占めている。次に SX1 のⅢａ層が 23.2％（316 点）で多い。Ⅱ類は、SX1 のⅢａ層で最も多く 30.4％（80 点）を占めており、次に SX1 のⅢｂ層が 25.9％（68 点）を占めている。ただし、SX1 のⅢｃ層においても 19.8％（52 点）みられる。

石材は、安山岩が最も多く 66.5％（1534 点）を占めている（表 70、98）。次に花崗岩が 11.0％（253 点）、砂岩 6.5％（151 点）とつづく。ただし、器種の中では素材となっている石材の種類は最も多く、多様な石材を利用していることがわかる。

大別した類型別の重量をみると（図版 231）、Ⅰ類は 18.9 ～ 7,480.0 ｇの範囲にみられ中央値は 464.7 ｇである。Ⅱ類は 410.5 ｇ～ 1,574.0 ｇの範囲にみられ中央値は 855.4 ｇである。Ⅲ類

表 98　磨石・台石類の類型別石材組成

類型	砂岩	泥岩	頁岩	チャート	珪質凝灰岩	珪化凝灰岩	流紋岩質凝灰岩	緑色凝灰岩	凝灰岩	碧玉 D	安山岩	ひん岩	花崗岩	細粒閃緑岩	閃緑岩	玄武岩	細粒ハンレイ岩	ハンレイ岩	粘板岩	千枚岩	ホルンフェルス	石英	計
Ⅰ	84	3	1			10	2	1	40		945	44	136	1	48	21	1	9	6	1	6	2	1361
Ⅱ	15					1			2		174	15	34		11	4		7					263
Ⅲ	1	1							1		31		1						1				36
Ⅳ	10		1		1	16		3	12	1	193	8	46		8	4		10	5	2	5	7	332
Ⅴ	1										14												15
-	40	2		1		1	1	1	9		177	5	36		7	6		4	2		7	1	300
総計	151	6	2	1	1	28	3	5	64	1	1534	72	253	1	74	35	1	30	14	3	18	10	2307

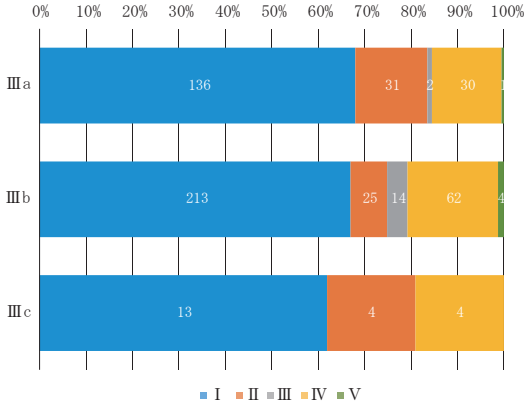


図版 231　磨石・台石類の類型別の重量

表 99　磨石・台石類の類型別の残存状況

分類	完形	一部欠	破片	計
Ⅰ	888（65.2）	466（34.2）	7（0.5）	1361
Ⅱ	110（41.8）	148（56.3）	5（1.9）	263
Ⅲ	28（77.8）	8（22.2）		36
Ⅳ	318（95.8）	14（4.2）		332
Ⅴ	12（80.0）	3（20.0）		15
不明	43	97	160	300
総計	1399	736	172	2307

（　）の％は不明を除いた割合



図版 232　磨石・台石類の時期別出現頻度

（楕円形の端の両側面に平坦な磨面がみられるもの）は 75.5 g ～ 293.7 g の範囲にみられ中央値は 172.1 g である。Ⅳ類は 11.35 g ～ 853.8 g の範囲にみられ中央値は 84.7 g である。Ⅴ類（280mm の大形のもの）は 1295.5 g ～ 17,380.0 g の範囲にみられ中央値は 7045.8 g である。また、75 パーセンタイル値はⅠ類が 612.1 g であるのに対して、Ⅱ類は 1,007.9 g、Ⅲ類は 207.4 g である。このことから、Ⅱ類は、Ⅰ類やⅢ類に比べて重量が重い傾向にあることがわかる。

類型別の残存状況をみると（表 99）、Ⅰ類は完形 65.2％（888 点）、一部欠損 34.2％（466 点）、破片 0.5％（7 点）、Ⅱ類は完形 41.8％（110 点）、一部欠損 56.3％（148 点）、破片 1.9％（5 点）、Ⅲ類は完形 77.8％（28 点）、一部欠損 22.2％（8 点）、Ⅳ類は完形 95.8％（318 点）、一部欠損 4.2％（14 点）、Ⅴ類は完形 80.0％（12 点）、一部欠損 20.0％（3 点）である。Ⅱ類以外については完形が 60％以上を占めているのに対して、Ⅱ類は 40％程度であり、一部欠損が 50％以上みられ、破

片も他の類型に比べると高くなっている。このことから、Ⅱ類に分類できるものは相対的に破損している割合が高いことが言える。本遺跡でⅡ類としたものはいわゆる「特殊磨石」（米山・森嶋 1964）と呼称されるものであり、中沢遺跡においても破損している割合が高いことが指摘されている。この要因としては、別な石器に転用している可能性や使用による衝撃の累積的な結果による偶発的な破損の可能性が指摘されている（中村 1965、八木 1976、神村 1999）。

時期的な検討に有効なまとまりのあるグリッドの資料ごとに各類型の出現頻度をみると（図版 232）、Ⅰ類の割合はⅢｂ層で高く、Ⅲｃ層では若干低くなっている。一方で、Ⅱ類ではⅢｃ層で割合が高くなっている一方で、Ⅲｂ層では割合が低くなっている傾向がみられる。Ⅱ類としたいわゆる「特殊磨石」は、早期後半では北海道中・南・東部から東北北部、前期では東北南部を中心に分布し、前期前葉までは一遺跡における保有率が高いことが指摘されている（上條 2015）。

【石皿・台石類】

各包含層における出土点数をみると（表 64）、SX1 のⅢｂ層が最も多く 29%（29 点）みられ、次いで、Ⅲａ層が 26%（26 点）で多くなっているが、Ⅲｃ層が 23%（23 点）みられる。類型別にみると、Ⅰｂ類（無縁で平坦なもの）はⅢａ層が 17 点と最も多くなっているが、Ⅲｂ層も 15 点みられ、Ⅲｃ層も 12 点みられる。Ⅰｃ類（無縁で内湾するもの）はⅢｃ層が多くなっている。Ⅱ類（有縁）はⅢｂ層、Ⅲｃ層がともに 1 点ずつみられる。

石材は、安山岩が 87%（87 点）で最も多く、次いで花崗岩が 6 点（6%）、砂岩が 5%（5 点）みられる（表 100）。

時期的な検討に有効なまとまりのあるグリッドの資料ごとに各類型の出現頻度をみると（表 101）、Ⅲｃ層ではⅠｃ類、Ⅲｂ層ではⅠｂ類が主体的にみられる。

（7）石製品

①主な石製品の特徴

【石錘】

各包含層における出土点数をみると（表 64）、SX1 のⅢｂ層が最も多く 8 点であり、次いでⅢｃ層の 6 点である。

類型別の出現頻度をみると（表 68）、Ⅰ類（剥離が施されているもの）が最も多く 9 点みられるが、Ⅲ類（敲打により凹部が作出されているもの）も 8 点みられ、Ⅱ類（研磨により凹部が作出されて

表 100　石皿・台石類の石材組成

類型	砂岩	安山岩	花崗岩	ハンレイ岩	粘板岩	総計
Ⅰ		1				1
Ⅰａ		3				3
Ⅰｂ	1	48	4	1		54
Ⅰｃ	3	12	2		1	18
Ⅱ		1				1
Ⅱｂ		3				3
-	1	19				20
総計	5	87	6	1	1	100

表 101　石皿・台石類の時期別出現頻度

層	Ⅰａ	Ⅰｂ	Ⅰｃ	総計
Ⅲａ		3	1	4
Ⅲｂ	1	5	2	8
Ⅲｃ			3	3
総計	1	8	6	15

いるもの）も 6 点みられる。

石材は、安山岩が最も多く 17 点みられる（表 70・102）。それ以外には砂岩や凝灰岩、玄武岩質安山岩、千枚岩、ホルンフェルスが 1 ～ 2 点みられる。

類型別の大きさ・形状を比較すると（図版 233）、全ての類型で縦長であり、最大長は 10cm 以上のものが 76.5%（13 点）である。最大厚 / 幅は Ⅰ 類は 0.2 ～ 0.5 の範囲におさまっているため、薄手である。

大別した類型別の重量をみると（図版 234）、Ⅰ類は 125.4 ～ 412.7 g の範囲にみられ中央値は 240.8 g である。Ⅱ類は 109.4 g ～ 340.8 g の範囲にみられ中央値は 208.2 g である。Ⅲ類は 142.3 g ～ 495.1 g の範囲にみられ中央値は 274.9 g である。このことから、全ての類型において中央値が近似しており、範囲もⅠ類にみられる範囲内に収まっていることから、重量の傾向は類似していると捉えられる。

時期的な検討に有効なまとまりのあるグリッドごとに各類型の出現頻度をみると（表 103）、Ⅲ c 層ではⅢ類がみられ、Ⅲ b 層ではⅡ類がみられる。

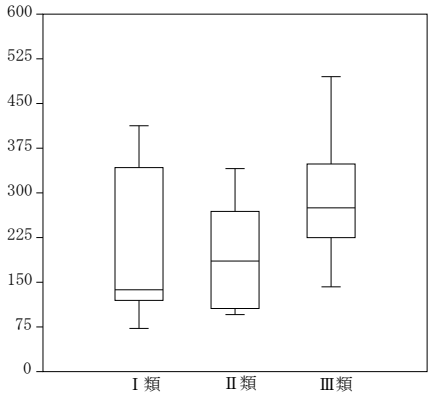
【玦状耳飾】

各包含層における出土点数をみると（表 64）、SX1 のⅢ b 層が最も多く 8 点であり、それ以外の遺構では 1 ～ 2 点確認されている。

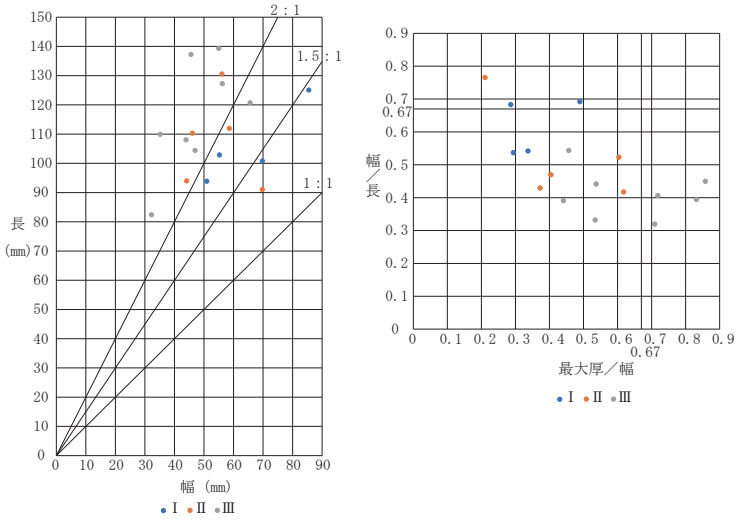
類型別の出現頻度をみると（表 68）、Ⅰ類（平面形が円形のもの）とⅡ類（平面形が長方形のもの）はともに 6 点みられる。それらの包含層別の出現頻度をみると、Ⅰ類は SX1 のⅢ b 層、Ⅲ c 層で 2 点ずつみられるが、Ⅲ a 層からも 1 点みられる。Ⅱ類は、Ⅲ b 層で主体的にみられる。

表 102　石錘の石材組成

分類	砂岩	凝灰岩	玄武岩質安山岩	安山岩	千枚岩	ホルンフェルス	計
Ⅰ		1	1	6		1	9
Ⅱ		1		4	1		6
Ⅲ	1			7			8
総計	1	2	1	17	1	1	23



図版 234　石錘の重量



図版 233　石錘の大きさ・形状

表 103　石錘の時期別出現頻度

層	Ⅱ	Ⅲ	計
Ⅲ b	2		2
Ⅲ c		1	1
総計	2	1	3

石材は、粘板岩が最も多く 7 点みられるが、千枚岩も 6 点みられる（表 70・104）。それ以外には、蛇紋岩 3 点、緑色凝灰岩 1 点がみられる。類型別の石材組成をみると、Ⅰ類は蛇紋岩、千枚岩、緑色凝灰岩がみられるが、Ⅱ類は粘板岩のみである。

表 104　玦状耳飾の石材組成

類型	蛇紋岩	千枚岩	粘板岩	緑色凝灰岩	計
Ⅰ	2	3		1	6
Ⅱ			6		6
ー	1	3	1		5
総計	3	6	7	1	17

残存状況をみると（表 105）、Ⅰ類は破片が 1 点ある以外は全て一部欠損の資料であり、Ⅱ類は全て一部欠損の資料である。

表 105　玦状耳飾の残存状況

類型	一部欠	破片	計
Ⅰ	5	1	6
Ⅱ	6		6
不明	3	2	5
総計	14	3	17

上記のことから、Ⅱ類は、石材に粘板岩のみが使用されており、出現頻度もほぼ SX1 のⅢ b 層に限られている。一方で、Ⅰ類は多様な石材を使用しており、出現頻度も SX1 のⅢ a 層からⅢ c 層まで確認できる。

時期的な検討に有効なまとまりのあるグリッド内で出土し、分類が可能なものは S3290 のみであり、それについては前期中葉から末葉に位置づけられるⅢ b 層から出土しており、Ⅱ類に分類できる。

宮城県内の玦状耳飾を集成し検討をおこなっている相原淳一（2010）による玦状耳飾の分類とその帰属時期についてみると、本遺跡でⅡ類としたものと類似する隅丸長方形状を呈するものは、前期初頭から後葉にみられ、中期初頭には長方形状のものがみられることが指摘されている。図版 92-5（S1379）は、相原（2010）が指摘している中期初頭にみられる長方形状のものに形状が非常に近いことから、それについてはその時期に帰属する可能性がある。

【扁平円形状石製品】

各包含層における出土点数をみると（表 64）、SX1 のⅢ b 層が最も多く 20 点みられ、次いでⅢ a 層が 12 点、Ⅲ c 層が 10 点みられる。

類型別に出現頻度をみると（表 69）、Ⅰ類（全体的に自然面が残存しているもの）はⅢ b 層が 12 点で最も多い。Ⅱ類（周縁に剥離を有するもの）は全ての層で 2 点出土している。Ⅲ類（周縁に研磨がみられるもの）はⅢ a 層が最も多く 8 点であるが、Ⅲ b 層も 6 点みられる。

時期的な検討で有効なまとまりのあるグリッドごとに各類型の出現頻度をみると（表 106）、Ⅲ c 層ではⅡ類が 1 点、Ⅲ類が 2 点みられる。一方で、Ⅲ b 層ではⅠ類が 9 点で多くみられる。Ⅲ類は 2 点みられる。

中沢遺跡では、扁平円形状石製品は玦状耳飾の製作過程に位置づけられる可能性が指摘されている。このことを踏まえ、本遺跡出土の玦状耳飾と扁平円形状石製品の最大厚の傾向をみると（図版 235）、玦状耳飾ではⅠ類（平面形が円形のもの）の中央値が 5.3mm、Ⅱ類（平面形が長方形のもの）の中央値が 6.0mm であるのに対して、扁平円形状石製品ではⅠ類の中央値が 9.9mm、Ⅱ類の中央値が 7.1mm、Ⅲ類の中央値が 7.8mm である。扁平円形状石製品では、Ⅱ類とⅢ類など加工痕がおおきくみられるものについては比較的、玦状耳飾Ⅱ類の最大厚に近い傾向がみられる。最大長をみると、玦状耳飾Ⅰ類の中央値は 37.3mm、Ⅱ類は 59.3mm であるのに対して、扁平円形状石製品のⅠ

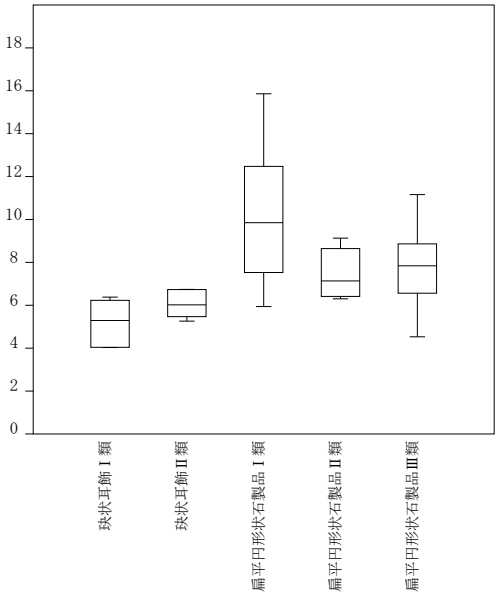
類の中央値は 58.1mm、Ⅱ類の中央値は 44.1mm、Ⅲ類の中央値は 51.1mm である。扁平円形状石製品は全ての類型において玦状耳飾Ⅱ類に近い傾向を示している。

本遺跡では、玦状耳飾の未成品や製作過程に位置づけられるような有孔石製品の出土が確認できないため、中沢遺跡のような玦状耳飾の製作過程を復元することはできない。しかし、扁平円形状石製品の素材が粘板岩であり、形状が玦状耳飾Ⅱ類に非常に近いことを考慮すると、本遺跡においても扁平円形状石製品は玦状耳飾の製作過程の初期段階に位置づけられる可能性がある。

上記のことを踏まえると、扁平円形状石製品にみられる類型の違いは製作過程を反映していると捉えられ、より加工の段階が進むにつれて厚さが玦状耳飾に近づく。ただし、最大長については扁平円形状石製品とほぼ同じであることから、素材選択段階において目的とする長さや幅に近いものを選択していると考えられるものもある。

表 106　扁平円形状石製品の時期別出現頻度

層	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	計
Ⅲa			3	3
Ⅲb	9		2	11
Ⅲc		1	2	3
総計	9	1	7	17



図版 235　扁平円形状石製品の最大厚

【ヘラ状石製品】

本遺跡では、ヘラ状石製品は 1 点のみ確認されており、それは SX1 のⅢb 層からである（表 64）。石材は粘板岩である。上部は欠損していると考えられるが、欠損箇所に穿孔の痕跡がみられ、その下部で両面に線刻がみられる。

本遺跡でヘラ状石製品としたものと類似する資料は、垂飾などの呼称で分類されることが多く、中沢遺跡でも出土が確認されており、大木 2b 式、大木 4 式～ 5a 式の時期にみられる。本遺跡では、帰属する時期を特定できるような出土状況は確認できないが、ヘラ状石製品は前期に特徴的な石器であること（川崎 1996・1997）を考慮すると、本遺跡のものも少なくとも前期に帰属する可能性がある。

【男根状石製品】

各包含層別における出土点数をみると（表 64）、SX1 のⅢa 層が最も多く 3 点であるが、Ⅲb 層も 2 点出土している。また、SX3 のⅢa 層でも 1 点出土している。

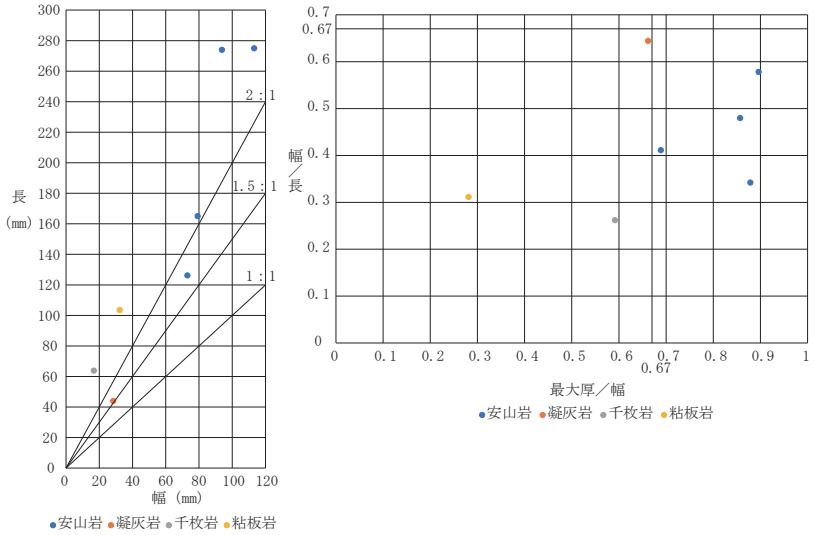
石材は、安山岩が 4 点と最も多く、それ以外には凝灰岩、千枚岩、粘板岩が 1 点ずつみられる（表 70）。

大きさの分布をみると、おおきく 2 つに分かれる傾向がみられる（図版 236）。120mm 以下で比較的幅が狭いものと、120mm 以上で幅広なものである。それらでは、使用している石材も異なって

おり、120mm 以上の大形のものは全て安山岩であり、120mm 未満の小形のものは凝灰岩、粘板岩、千枚岩である。

時期的な検討に有効なまとまりのあるグリッドごとの石材別の出現頻度をみると（表 107）、石材が安山岩のものは SX1 のⅢ a 層のみにみられる。

120mm 以上で安山岩を素材とするものは、いわゆる「大形の粗製石棒」（谷口 2012）に類似するものと考えられ、120mm 未満のものは、縄文時代前期にみられるいわゆる「小形石棒」（松田 2004）に類似するものと考えられる。



図版 236　男根状石製品の大きさ・形状

表 107　男根状石製品の石材と時期別出現頻度

遺構	層	安山岩	凝灰岩	千枚岩	粘板岩	計
SX1	Ⅲ a	3				3
	Ⅲ b		1	1		2
SX3	Ⅲ a				1	1
不明	不明	1				1
総計		4	1	1	1	7

東北地方北部において、「大形の粗製石棒」は前期後葉に出現し、中期中葉から後葉に普及し、後期前葉には消滅することが指摘されている（阿部 2012）。一方、「小形石棒」は東日本に限定的に出土し、前期中葉から末葉まで出土が確認されている（松田 2004）。本遺跡において両者に分類可能なものが出土している SX1 包含層をみると、安山岩製の「大形の粗製石棒」は、SX1 のⅢ a 層からのみ確認されている一方で、凝灰岩や千枚岩製の「小形石棒」は SX1 のⅢ b 層からのみ出土している傾向がみられ、出土層位が異なっている。

阿部昭典（2012）は青森県、秋田県北部、岩手県北部の「粗製の大形石棒」の集成と分類をおこなっており、それによると、本遺跡のものは全て有頭で比較的丸い頭部に沈刻を施すものなどがあるⅡ c 類に相当する。Ⅱ c 類は中期末葉から後期初頭に帰属すると考えられている。

東北地方における「小形石棒」の集成と分類は、松田光太郎（2004）によりおこなわれており、それによると図版 93-8（S6788）は単頭下膨れ形である 1a 類、図版 93-7（S3347）と図版 137-2（S7555）は単頭短身扁平形である 4 類に分類される。1a 類は最も古い例としては大木 3 式期に想定されているが、大木 5 ～ 6 式期でも確認されている。また、4 類は大木 5 式～ 6 式期にみられる。

【石棒・石剣類】

各包含層別の出土点数をみると（表 64）、SX1 のⅢ b 層が最も多く 40.0%（74 点）を占めている。次いで、Ⅲ a 層が 21.6%（43 点）で多い。類型別の出現頻度をみると、全ての類型でⅢ b 層が最も

表 108　石棒・石剣類の石材組成

類型	凝灰岩	安山岩	粘板岩A1	粘板岩A2	粘板岩A3	粘板岩B	粘板岩	千枚岩	計
Ⅰ			10	6		6			22
Ⅱ		1	40	16	1	5	1		64
Ⅲ			7	2		1			10
Ⅳ	1	2	46	28	1	6	1	4	89
-	1		9		1	8			19
総計	2	3	112	52	3	26	2	4	204

表 109　石棒・石剣類の残存状況

類型	完形	一部欠	破片	計
Ⅰ	1	19	2	22
Ⅱ	12	50	2	64
Ⅲ	1	7	2	10
Ⅳ	1	68	20	89
不明		2	17	19
総計	15	146	43	204

表 110　石棒・石剣類の時期別出現頻度

層	Ⅰb	Ⅱ	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅲa	Ⅲb	Ⅳ	Ⅳa	Ⅳb	Ⅳc	計
Ⅲa	1			6				1	3	6		17
Ⅲb	8	1	2	13	1	1	4	1	1	11	1	44
Ⅲc				2								2
総計	9	1	2	21	1	1	4	2	4	17	1	63

多くなっており、次いでⅢａ層が多くなっている。

石材は、粘板岩 A1 が最も多く 54.9%（112 点）である（表 70、108）。次いで粘板岩 A2 が 25.5%（52 点）で多い。それ以外には、粘板岩 B も 12.7%（26 点）みられる。粘板岩以外には千枚岩 4 点、安山岩 3 点、凝灰岩 2 点がみられる。

大別した類型ごとの残存状況は（表 109）、全ての類型で完形のものは 20%以下であり、ほとんどの資料が欠損している。

柄頭の形状がわかるものは図版 160-6（S140）の 1 点のみで、刃先と柄頭の区別が明瞭でないものである。

時期的な検討に有効なまとまりのあるグリッドごとに各類型の出現頻度をみると（表 110）、Ⅲｃ層ではⅡｂ類（扁平で素材面が多く残存するもの）がみられ、Ⅲｂ層においてもⅡｂ類が最も多くみられる。Ⅲｂ層では、次いでⅣｂ類（扁平で全面研磨により成形されているもの）が多くみられ、Ⅰｂ類（扁平で剥離により角棒状にしたもの）も 8 点みられる。

縄文時代前期における石棒・石剣類については、岩手県新田Ⅱ遺跡の出土資料から製作工程の復元がおこなわれている（遠野市教育委員会 2002）。製作工程としては、剥離段階から敲打や研磨段階を経て製品となることが指摘されている。そのような製作工程を考慮すると本遺跡においてもⅠ～Ⅲ類のものは、製作工程を示すものであり、Ⅳ類が製品となる。また、図版 113-5（S5135）のようにⅡ類に分類されるものの中には非常に大形のものがみられることから、素材となる礫を比較的採取した状態のまま遺跡内に持ち込み加工していたと考えられる。またⅡ類に欠損資料が多いのは、製作工程の初期の段階における欠損が多かったことを示していると考えられる。さらに、Ⅰ類でも欠損資料が一定数みられるのは、剥離の段階でも欠損する確率が高かったことを示していると考えられる。これらは、池田（2001）による粘板岩製石剣・石刀の製作実験とも齟齬はない。

【線刻礫】

各包含層別の出土点数をみると（表 64）、SX1 のⅢａ層とⅢｂ層でそれぞれ 3 点出土しており、最も多い。

石材は、粘板岩 A1 が最も多く 4 点みられる（表 70）。それ以外には、安山岩、粘板岩 A2、粘板岩 B、千枚岩が 1 点ずつみられるが、大半は粘板岩である。

表 111　線刻礫の残存状況

器種	完形	一部欠	総計
線刻礫	4	5	9

残存状況は、一部欠損が 5 点で多いが、完形も 4 点みられる（表 111）。

時期的な検討に有効なまとまりのあるグリッドから出土しているものはみられないことから、時期を特定することはできないが、図版 96-4（S2134）と図版 161-3（S5304）のそれぞれの形状は中沢遺跡の大木 2b 式の岩偶に非常に類似している。また、使用石材が粘板岩である点も共通している。さらに、図版 96-4（S2134）は、大崎市東要害貝塚（大崎市教育委員会 2008）の前期前葉の岩偶や名取市泉遺跡（名取市教育委員会 1998、2010）の大木 2a 式期の土偶と形状に共通点がみられる。このことから、本遺跡の土器の出土傾向を考慮すると、少なくとも図版 161-3（S5304）と図版 96-4（S2134）は、前期前葉に帰属する可能性がある。

岩偶は土偶との関係性について検討されることが多く（村越 1974、傳田 2020 など）、本遺跡でも前期前葉に帰属する土偶（図版 68-2）が出土してることから、本遺跡でも両者の関係性について今後さらに検討していく必要がある。また、このような前期前葉に帰属する岩偶と土偶の両者がみられる遺跡は、宮城県内では現状では泉遺跡と本遺跡のみであることから、前期前葉における岩偶と土偶の関係性を解明していく上でも非常に重要である。

【棒状石製品】

各包含層別の出土点数をみると（表 64）、SX1 のⅢ b 層が最も多く 15 点出土しているが、Ⅲ b 層も 11 点で多くなっている。

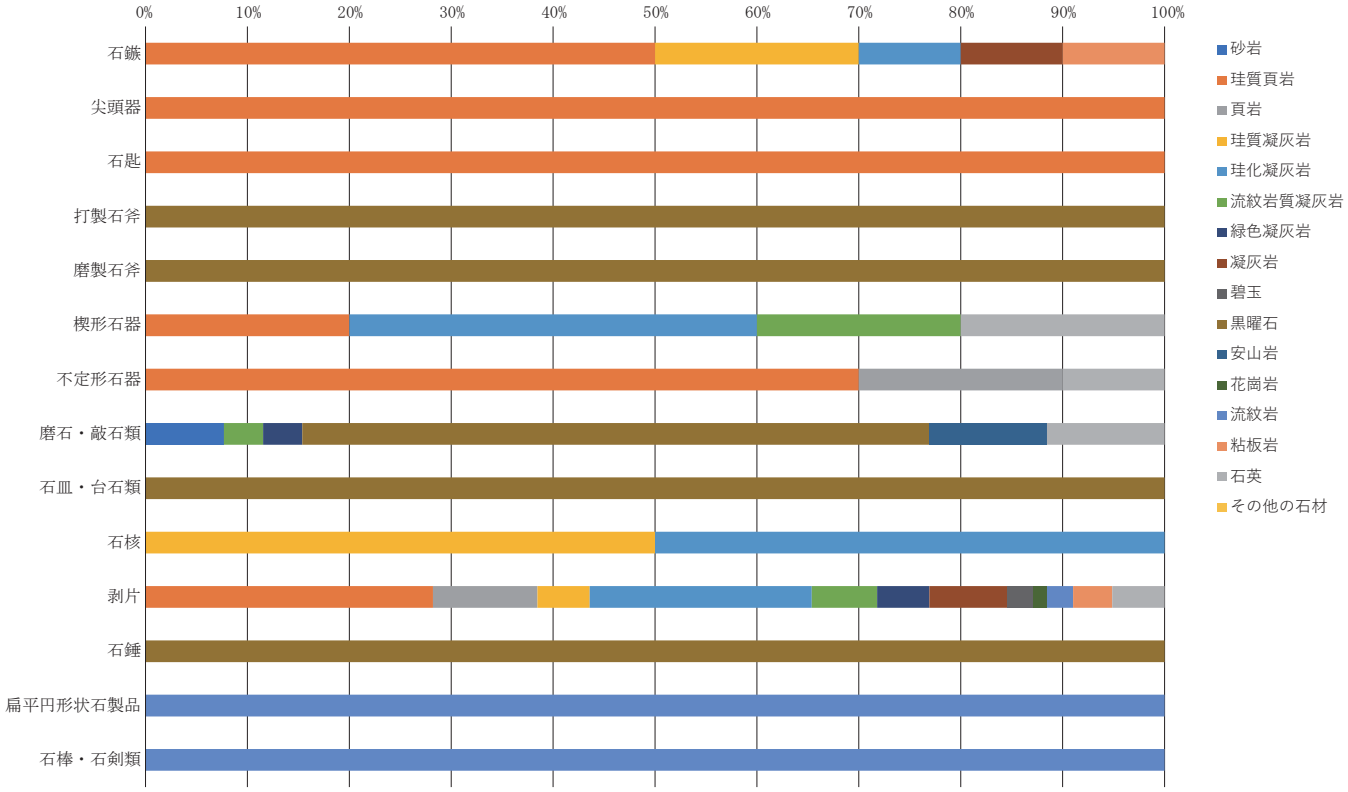
石材は、粘板岩 A1 類が 19 点で最も多く、次いで安山岩 8 点、粘板岩 A2 が 7 点で多くなっている（表 70）。

棒状石製品の端部に平坦面がみられ、鋭利になっているものもあることから、その箇所を使用した可能性がある。このような端部が尖鋭になった棒状の形状をもつ資料の用途の一つの可能性としては、土器の施文工具が考えられる。縄文時代後・晩期で確認される素材が骨・鹿角などである棒状角器や鳥骨製尖頭器については土器の施文工具としての用途が指摘されている（会田 1994・1997）。本遺跡のものとは素材など異なる点が多くあり、時期も異なるため、現時点で棒状石製品の用途を棒状角器や鳥骨製尖頭器に求めることはできないが、棒状石製品の想定される用途の一つとして土器の施文工具も考慮し、今後さらに検討していく必要がある。

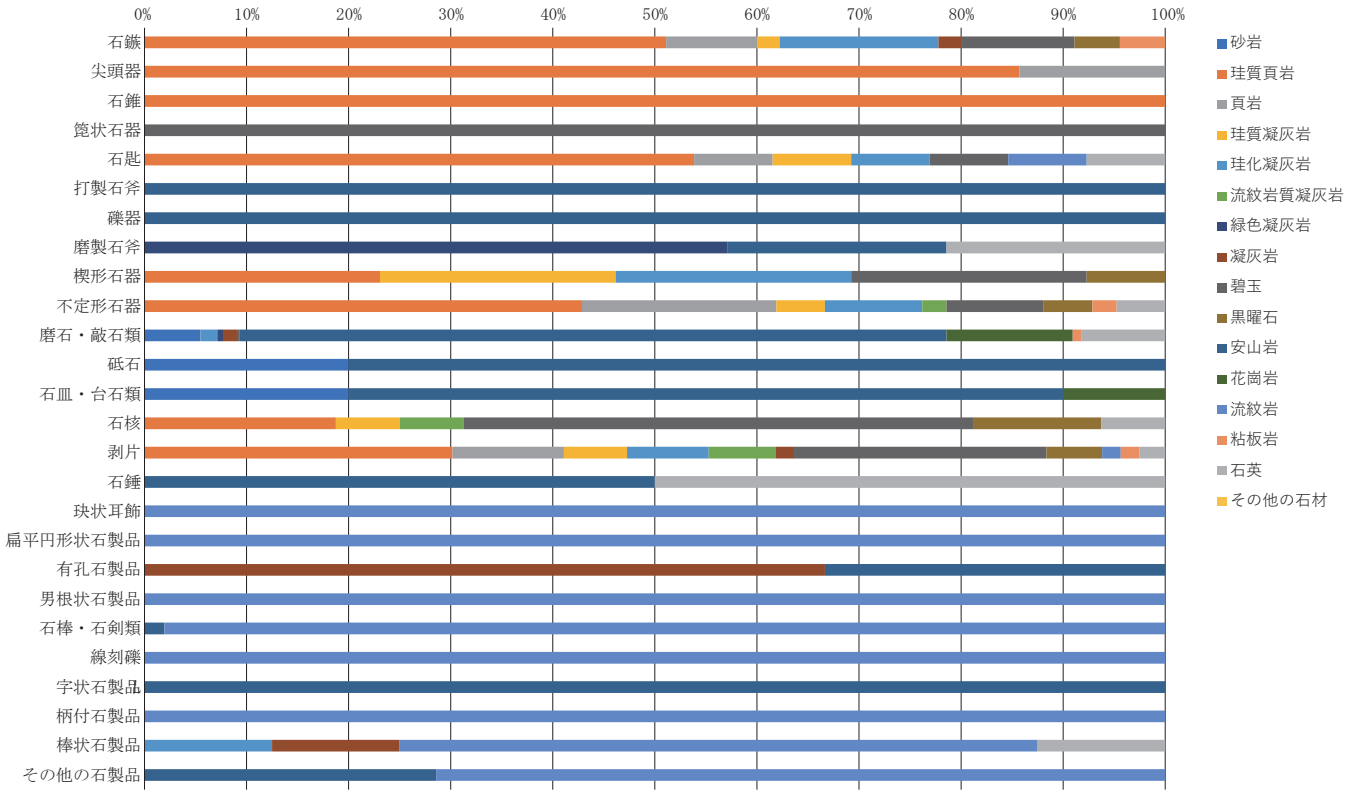
（8）石材の利用

各器種の石材組成をみると、本遺跡での石材利用の傾向性がみられる（表 70）。

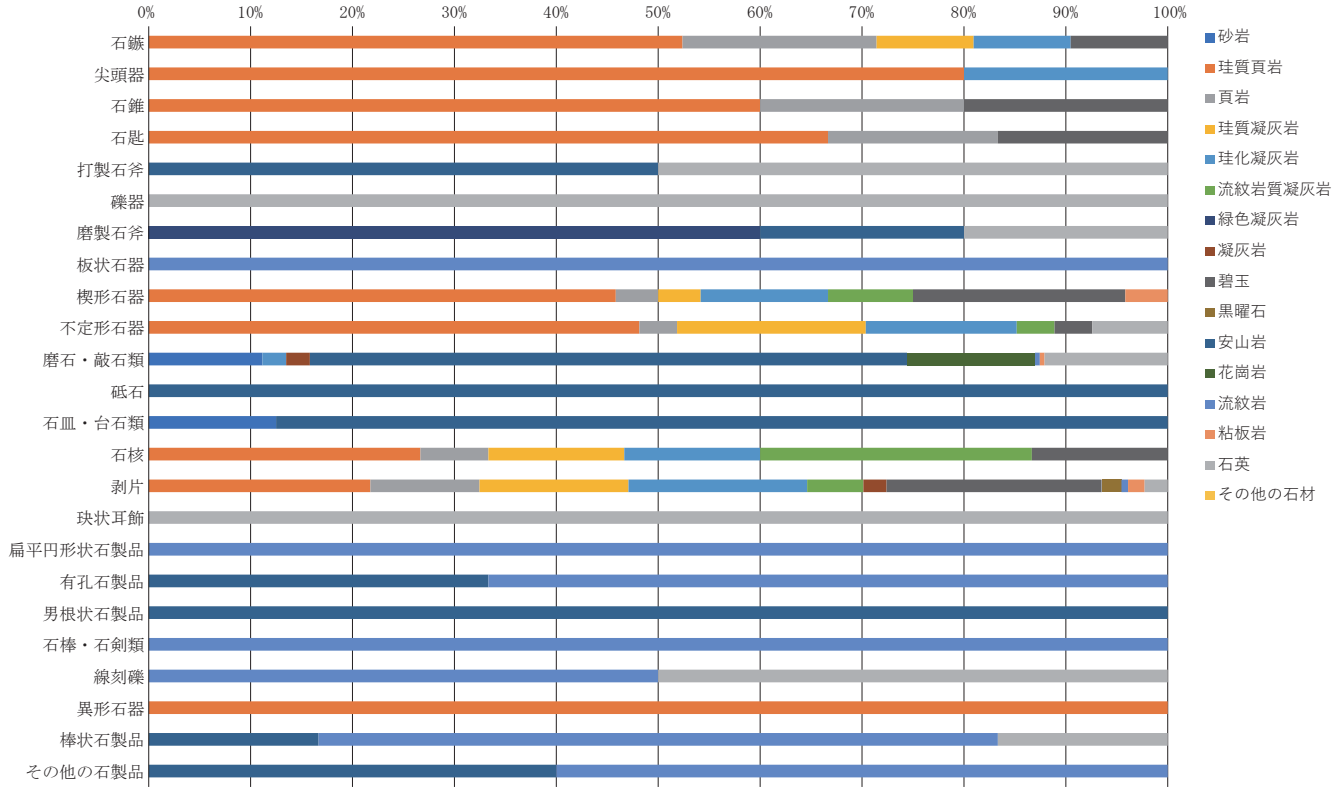
尖頭器は珪質頁岩の占める割合が 70％近くを占め、利用頻度が非常に高くなっている。一方で、石鏃、石錐、篦状石器、楔形石器、不定形石器では、珪質頁岩の占める割合が最も高くなってはいるが、



図版 237　時期別の石材利用（Ⅲ c 層）



図版 238　時期別の石材利用（Ⅲ b 層）



図版 239　時期別の石材利用（Ⅲ a 層）

表 112　中沢遺跡の石材利用

器種	砂岩	珪質頁岩	頁岩	珪化凝灰岩	流紋岩質凝灰岩	緑色凝灰岩	凝灰岩	碧玉	黒曜石	安山岩	花崗岩	流紋岩	粘板岩	その他の石材	総計
石鏃		263	120	157	7		7	28	2	3				20	607
尖頭器		86	25	36		1		2		1				2	153
石錐		36	10	10				4						2	62
石匙		129	30	28	1			11		1		1		1	202
箆状石器		21	3	24	1		1	5		1				1	57
打製石斧										37		7	1	33	78
礫器												1	1	25	27
磨製石斧	2					14	1			15		2		38	72
板状石器													10	4	14
楔形石器		39	6	67				4		3				2	121
不定形石器		290	101	291	3	1	1	40	1	3		1		8	740
磨石・敲石類	22		2		18	2	9			88	33	29	34	1931	2168
砥石	5				2		1			7		2	1	62	80
石皿・台石類	1				2		2			8	5		1	371	390
その他の礫石器										1				5	6
石核		54		703	1		1	13		43		1		10	826
剥片		3172	28	17693	25	6	3	309	12	419		4		203	21874
ヘラ状石製品													2		2
円盤状石製品	1			1			1			2			4	29	38
石錘					1		1			2			1	17	22
玦状耳飾					1		2			1		1	7	19	31
有孔石製品				1									2	6	9
男根状石製品							1							4	5
石棒・石剣類										2		1	108	9	120
岩偶										1			4	3	8
線刻礫										1			10	9	20
異形石器		1												2	3
石器模造品					1								10		11
石製品素材													24	3	27
その他の石製品					1								18	11	30
総計	31	4091	325	19011	64	24	31	416	15	639	38	50	238	2830	27803

50％以下であり、碧玉や凝灰岩なども一定数確認され、多様な石材を利用している状況がみられる。それらの石材は石核や剥片でもみられることから、共通して遺跡内で利用されていたと考えられる。

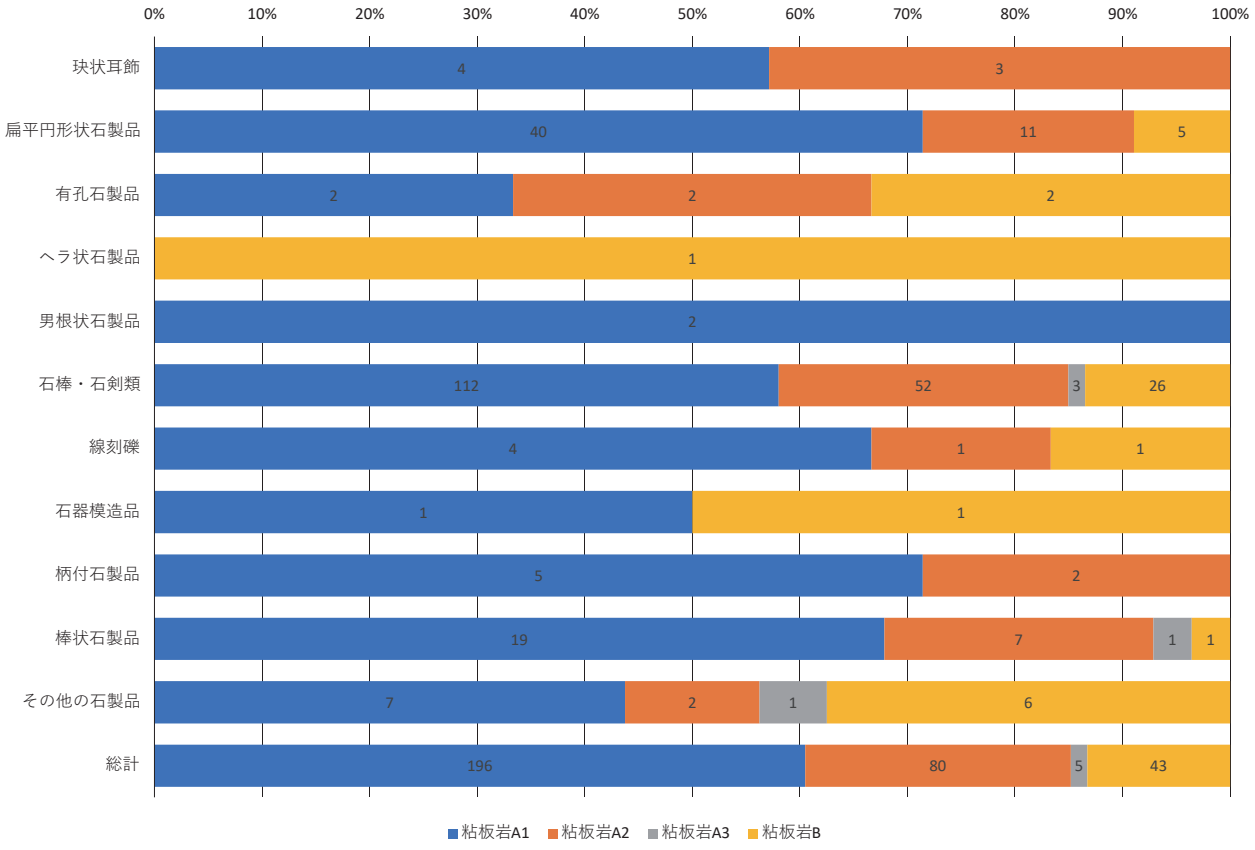
珪質頁岩は、秋田県男鹿半島及び米代川中下流域周辺、山形県最上川中流域の河川沿いや段丘礫中に良質なものが分布することが指摘されている（秦 2007、吉川 2020）。宮城県においては、そのような良質な珪質頁岩の大きな産地は存在しない地域である（秦 2007）ため、それらが日本海側から搬入されている可能性がある。

一方で、縄文時代の石器石材として普遍的に利用されている黒曜石についてみると、本遺跡では剥片や石核以外にみられる黒曜石の割合は 0.4％（18 点）にとどまっている。このような傾向は、中沢遺跡でも同様であり、中沢遺跡においても剥片や石核以外における黒曜石の割合は、0.06％（3 点）である（表 112）。

礫器や打製石斧では安山岩やひん岩などが利用されているのに対して、磨製石斧では緑色凝灰岩の割合が高くなっており、両者で利用する石材に違いがみられた。

石製品では、石錘・有孔石製品・男根状石製品・L 字状石製品では安山岩の利用頻度が高くなっている一方で、玦状耳飾・扁平円形状石製品・石棒・石剣類・線刻礫・柄付石製品、棒状石製品では粘板岩の利用頻度が高くなっている。

上記で示した各器種の石材利用の状況については、時期別にみた場合においてもほぼ同様な傾向性



図版 240　粘板岩の利用状況

を示していた（図版 237 ～ 239）。

本遺跡では、粘板岩の利用が特徴的にみられるため、以下では特に粘板岩を中心に検討をおこなう。粘板岩には特徴が異なるものが観察されたためそれらを細分した。灰色で石灰岩質の砂質粘板岩を A 1 類、暗灰色の泥岩と淡灰色の砂岩の互層になっているものを A 2 類、灰色の砂質粘板岩であるが A 1 類よりも全体的に均一に白色を呈するものを A 3 類、黒色を呈し、堅硬、緻密な黒色粘板岩を B 類とした。

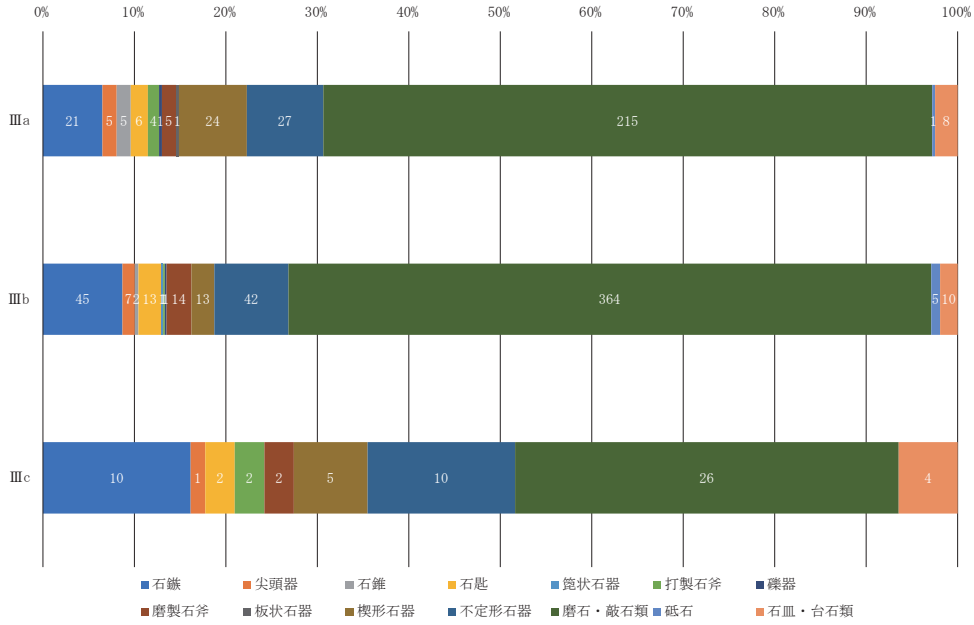
粘板岩の産地については、熊谷（2013、2019）や池田（2001）による石材調査と産地推定がおこなわれている。それによると、宮城県内では石巻市井内や雄勝半島の波板、女川町の御前浜、気仙沼市の唐桑半島の崎浜などで確認されている。本遺跡はそれらの産地に近いことから、容易に入手し易い環境にあったと考えられる。

粘板岩の利用がみられる器種は（図版 240）、石鏃、石匙、磨製石斧、板状石器、磨石・敲石類、石皿・台石類、玦状耳飾、偏平円形状石製品、有孔石製品、ヘラ状石製品、男根状石製品、石棒・石剣類、線刻礫、石器模造品、柄付石製品、棒状石製品、その他の石製品である。ただし、石器についてみると粘板岩製のものは 1 ～ 3 点程度であり、各器種の石材利用の中での割合は非常に低く、主体的な利用の様相は認められない。このことから、本遺跡においては、主に石製品に粘板岩が利用されていることがわかる。石製品の粘板岩の細分類の出現頻度をみると、86％が粘板岩 A 類で占められており、粘板岩 B 類は 13％である。この傾向は、どの石製品においても同様にみられ、10 点以上が確認されている石製品においては、その他の石製品を除くと、粘板岩 B 類の割合は 3.6％～ 13.3％である。その他の石製品においても 37.5％程度である。このことから、本遺跡においては雄勝半島や登米地域で採掘される黒色粘板岩の利用頻度は低いことがわかる。もっとも多い粘板岩 A 類の細分類でみると、A1 類が最も多く 60.1％（196 点）で、次いで A2 類が 24.5％（80 点）で多い。

同様な粘板岩の産地に位置する縄文時代の遺跡に、雄勝半島に位置する縄文時代晩期の立浜貝塚 (石巻市教育委員会 2019) があるが、本遺跡とは異なり、黒色粘板岩が最も多く利用されており、石製品だけでなく石器の素材としても多用されている。一方で、黒曜石がほとんどみられない点は本遺跡と同様であるが、本遺跡で剥片石器の素材の主体となっている珪質頁岩の利用は粘板岩よりも少ない傾向を示している。このような利用石材の違いは、本遺跡とは異なり、立浜貝塚が黒色粘板岩の産地である雄勝半島に立地していることが多少なりとも起因していると考えられるが、広域的にみると同じ粘板岩の産地内にあることから地理的な違いというよりは前期と晩期という時期的な違いとして捉えられる可能性がある。このような傾向は、縄文時代における各時期の石材利用の違いとその要因を解明していく上で重要になってくると考えられる。

（9）石器組成

ここでは、出土量が多く傾向性が捉えやすい SX1 を取り上げ、時期的な傾向性について検討をおこなった。ただし、土器の検討からⅢ a 層は確認される土器の型式の幅が広く、時期のまとまりを捉えられるような出土状況も示していないことから、ここではⅢ c 層とⅢ b 層を中心に検討し、Ⅲ a



図版 241　羽黒下遺跡の石器組成

層は参考として提示した（図版 241）。

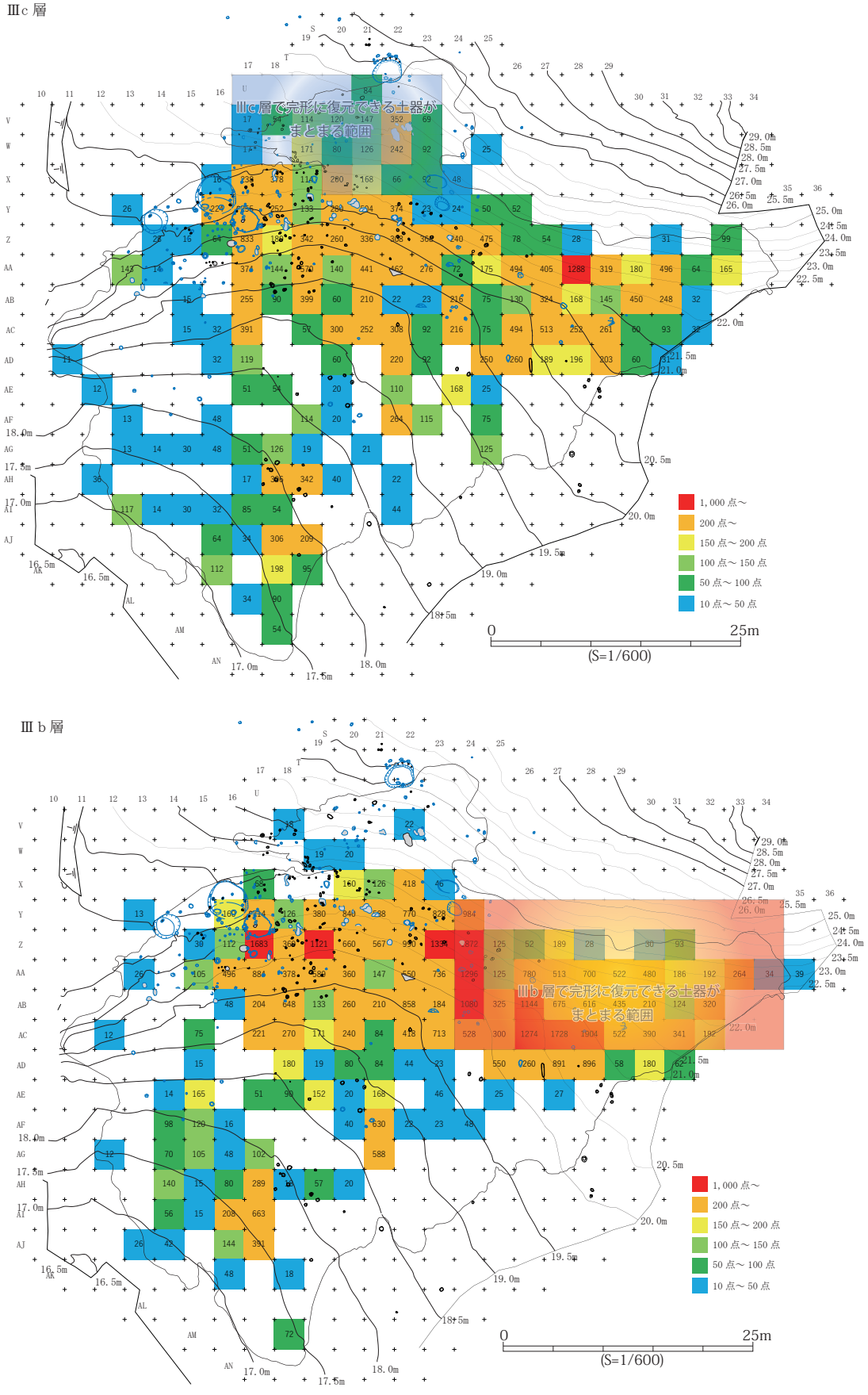
Ⅲ c 層では、磨石･敲石類の保有率が 41.9%（26 点）であるのに対して、Ⅲ b 層では 70.3%（364 点）に上昇している。一方で、石鏃は、Ⅲ c 層では保有率が 16.1%（10 点）であるのに対して、Ⅲ b 層では 8.7%（45 点）に減少している。楔形石器と不定形石器についても石鏃と同様な傾向を示しており、楔形石器はⅢ c 層では保有率が 8.1%（5 点）であるのに対して、Ⅲ b 層では 2.5%（13 点）に減少しており、不定形石器はⅢ c 層では 16.1%（10 点）であるのに対して、Ⅲ b 層では 8.1%（42 点）に減少している。

各層にみられる全体的な石器組成の傾向には違いがみられ、Ⅲ c 層ではどの石器も 50%の保有率を超えているものはないのに対して、Ⅲ b 層では磨石・敲石類が 7 割を占めている。このような石器組成にみられる傾向の違いは、遺跡の機能の違いを反映している可能性がある。それについては今後検討していく必要がある。

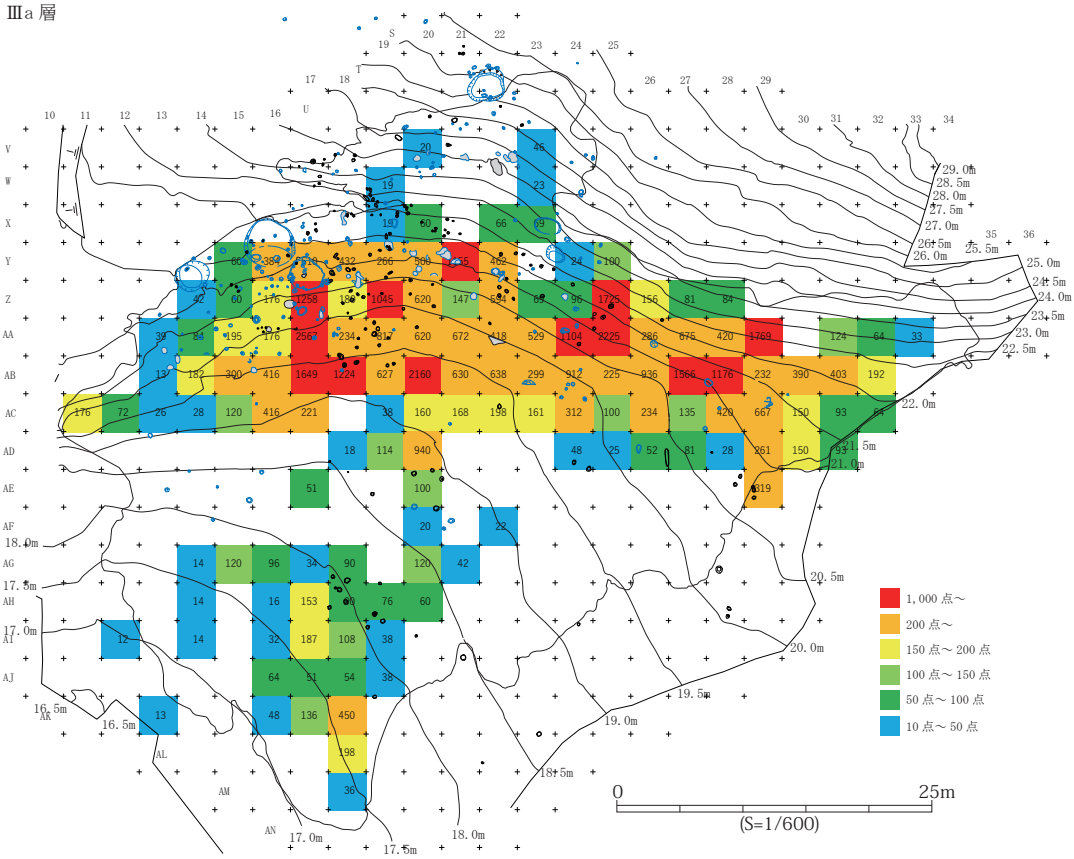
（10）遺跡内での出土状況

Ⅲ c 層とⅢ b 層の平面的な出土傾向について検討するために、石器・石製品のグリッドごとに集計した点数の平面分布状況を図版 242 に示した。また、参考として同様に算出したⅢ a 層の出土傾向の平面分布状況を図版 243 に示した。また、土器の分析から時期の検討に有効なまとまりを示す範囲も図版 206 に示した。

Ⅲ c 層では、出土点数が 200 点以上のグリッドは包含層の中心付近から東側で斜面の中間部にまとまる傾向にある。土器の分析から時期の検討に有効なまとまりのある範囲においては、100 点以上のグリッドがほとんどであり、その範囲の点数は 2,259 点で、全体（2,7087 点）の 8.3%を占めている。



図版 242　石器・石製品の出土状況（1）



図版 243　石器・石製品の出土状況（2）

Ⅲ b 層もⅢ c 層と同様に包含層の中心付近から東側で斜面の中間部に 200 点以上出土しているグリッドがまとまる傾向にある。特に、東側に 1,000 点以上出土しているグリッドがまとまっている。その範囲は、土器の分析結果から、時期の検討に有効なまとまりがある範囲と重複している。その範囲で出土している石器･石製品の総数は、20,573 点であり、全体（5,0129 点）の 41.0％を占めている。一方で、Ⅲ c 層で時期の検討に有効なまとまりを示した範囲には、829 点がみられ、全体の 1.7％にとどまっている。

ちなみに、Ⅲ a 層では、石器・石製品の出土がみられるグリッドはⅢ c 層とⅢ b 層と同様に斜面の中間部付近にまとまっているが、その範囲はⅢ c 層とⅢ b 層よりも東西方向に帯状に広く、比較的限定的に分布している様子がみられる。また、1,000 点以上出土しているグリッドはⅢ b 層と同様に東側に分布がみられるが、中心から西側にも分布がみられ、広い範囲にみられることがわかる。

以上のことから、Ⅲ c 層、Ⅲ b 層では石器・石製品の出土分布傾向には違いがみられ、またⅢ a 層においても、両者と異なっていることがわかる。このような遺物の分布傾向は、土器の検討結果とも整合してくる。このような平面的な分布は自然的要因による改変の影響も受けていると考えられるため、直接的に人間活動と結びつけて考えることは難しい。しかし、各層でみられた遺物の出土傾向の違いは、人間活動による本来の分布傾向の違いを反映している可能性もある。その要因については、今後さらに検討していく必要がある。

第３節　動物遺存体

（１）試料

目視試料と土壌サンプル試料とがある。目視試料は、土中の骨を目視で取り上げたものである。主に遺物として取り上げたものに混じっていた骨でごく少量であった。土壌サンプル試料は、土中に骨や焼土などが認められた際に採取した土壌サンプルを、最小 1mm 目の篩で全量を水洗し分離したものである。縄文、平安、中世のサンプルがあり、縄文時代前期前葉と中世が多い。各種遺構、包含層から 62 サンプル採取した（表 113）。

得られた試料は、魚類の脱落歯を除き全て焼骨で細片化が進む。魚類の脱落歯以外の焼けていない骨は土中で消滅したとみられる。大半が細片であることから、破片であってもある程度形をとどめているものを同定対象として抽出した。なお人骨の可能性があるものは除外した。抽出点数は目視６点、土壌サンプル 472 点で大半が魚類である。サンプル中の試料数は縄文前期前葉の包含層 SX3 のⅢｃ層と中世の廃棄土坑 SK37 からものが大半を占める。

（２）同定結果

魚類を 12 分類群、哺乳類を３分類群同定した。時期ごとの同定試料数の概要を表 114 に示す。集計にあたっては、一部位と算定可能な残存状況の試料と、部位数算定不能な細片や脱落歯をそれぞれ「部位」「破片」として分けて集計した。同定内容の詳細は表 115 に示す。

a. 魚類

板鰓亜綱

SL221 からサメ類ないしエイ類の椎骨を 1 点同定した。椎体幅は推定 8mm である。

ネズミザメ目

SX1 のⅢａ層から脱落歯を２点検出した。いずれもエナメル質部分のみが残存している。ホオジロザメ類似のものは歯冠高 11mm の小型で被熱していない。アオザメ類似のものは歯冠高 17mm で被熱し黒色を呈する。

マイワシ

SK37 から第２椎骨を２点同定した。椎体幅は 1.5 と 3.0mm である。

ニシン科

SK37 から種不明のニシン科の腹椎 11、尾椎 9、椎骨片６点を同定した。腹椎幅は 1.5-3.5mm で 2.0mm 前後のものが多い。前述したマイワシの可能性が高い。

カタクチイワシ

SK37 から腹椎と尾椎を 1 点ずつ同定した。椎体幅はそれぞれ 1.5 と 1.2mm である。

マグロ属

歯骨・歯骨 / 前上顎骨・脱落歯・尾椎・椎骨片・鰭棘片を同定した。一部位として算定できたのは細片化した右歯骨 1 点、尾椎２点である。尾椎の 1 点は椎体幅が推定 42mm である。ほとんどが

SX3 のⅢ c 層の土壌サンプル試料である。

ブリ属

SK37 から腹椎を 1 点同定した。椎体幅は 12.5mm である。

タイ科

いずれも歯骨や前上顎骨から脱落した歯で、他の試料と異なり被熱していない。SX3 のⅢ c 層、平安の焼土層、中世の各種遺構の土壌サンプルから検出された。

ウミタナゴ

SL221 から腹椎と尾椎を 1 点ずつ同定した。腹椎幅は 3.7mm である。

カサゴ目

詳しい分類はできていない。SL221・SK37 などから、第 2 椎骨・腹椎・尾椎を計 7 点同定した。腹椎幅は 3.0-9.0mm のものがある。

アイナメ属

SK37・SK19 から第 1 椎骨・第 2 椎骨・尾椎を 1 点ずつ同定した。椎体幅は 3.0-6.5mm である。

不明

残存状況が良くないことや現世標本の不足から同定できなかったもので、破片や脱落歯が多くを占める。不明 A としたものは上記のいずれの種とも異なる椎骨で、 1 点が SK37 から認められた。椎体幅は 5.0mm である。

b. 哺乳類

イノシシ

SX1 のⅢ b 層から基節骨と手根骨を 1 点ずつ同定した。

ニホンジカ

SX1 のⅢ b 層から中節骨 1 点を同定した。

大型獣

歯やその他の部位の破片で、イノシシやニホンジカ程度の大きさと考えられるものである。SX3 のⅢ c 層のものはニホンジカの歯の可能性がある。

（3）動物遺存体の構成と生業活動

a. 縄文前期前葉

魚類は、マグロ属、カサゴ目・ウミタナゴ、タイ科、板鰓亜綱が認められる。試料数はマグロ属が多く、頭部・胴部ともにみられる。哺乳類は、SX3 のⅢ c 層からニホンジカとみられる歯破片、大型獣の破片が認められた。クロマグロは夏は北上し、三陸地方の沿岸の定置網でも漁獲される。ウミタナゴは岩礁域や藻場に生息する。 カサゴ目も多くが岩礁域に生息し、種によって浅海の藻場から水深 100m までみられる（酒井 1986）。マダイは産卵期は 3 ～ 6 月頃でこの時期に深所から沿岸に回遊する（蒲原・岡村 1985）。

以上から、検出された魚類は岩礁域に生息する種および春～夏に回遊してくる種から構成されていると見ることができ、春～夏を盛期とする沿岸での漁が行われていたと考えられる。また、シカ・イノシシといった大型の陸獣を対象とした狩猟も行われていたと考えられる。なお､遺構ごとにみると、SL221 と SX3 のⅢｃ層とで内容に違いがみられる。カサゴ目・ウミタナゴは SL221 から、マグロ属は SX3 のⅢｃ層から集中的に出土し、大型獣も SX3 のⅢｃ層を主体とする。この違いが何に起因するかについては、それら試料を遺跡にもたらした人間活動に加え、遺構の形成過程や形成期間、埋没後の保存状態などもかかわっており、今回の試料からでは判断がつかない。ここでは指摘するに留める。

b. 縄文時代前期後半

縄文時代前期後半に形成されたものの中世に撹乱を受けた箇所からの試料であるが、SX1 のⅢｂ層からマグロ属・イノシシ・ニホンジカが、SX1 のⅢａ層からネズミザメ目やタイ科の脱落歯が数点出土している。縄文時代前期後半にも前期前葉に引き続き、これらを対象とした猟が行われていた可能性がある。

c. 中沢遺跡との比較

本遺跡に隣接する中沢遺跡は形成時期が本遺跡に近く、大木 1 ・2b ～ 3 式期を中心とする動物遺存体試料が得られており、分析も行われている（石巻市教育委員会 2018）。

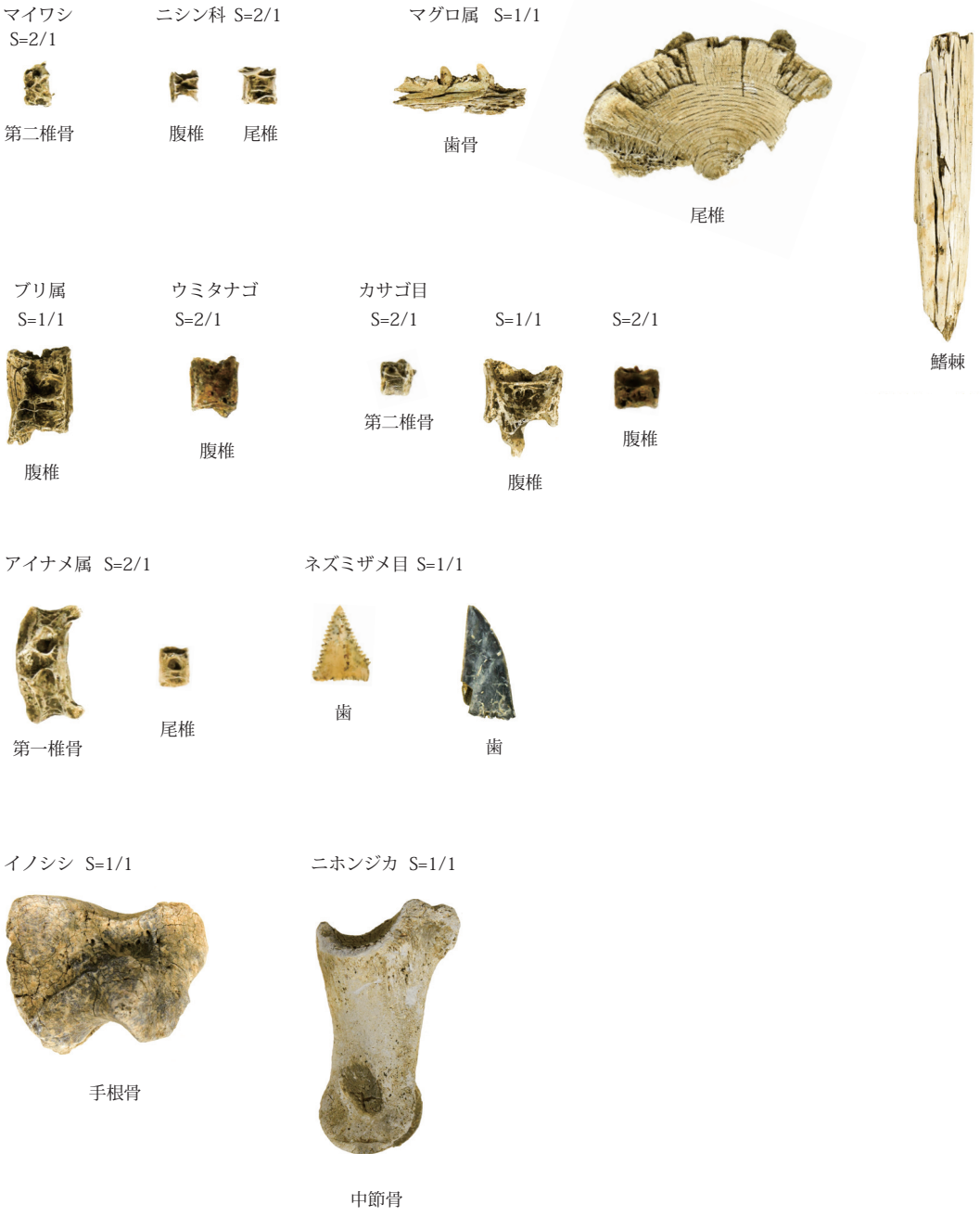
中沢遺跡では、マグロ属は大木 1・2b 式期に、タイ科は 2b 式古段階に多い。カサゴ目は前期前半を通して一定量みられる。これらの種について言えば中沢遺跡大木 1 ～ 2b 古段階までの状況に近い。しかし、中沢遺跡で大木 1 ～ 2b 式期に主要種となっているマサバ・ニシン科が本遺跡ではみられない点が異なる。マサバは 5 月に入ると常磐～三陸の沖合を北上し始め、6 月にかけて分布域を北方へ拡大、11 ～ 12 月に東北沿岸を南下する（落合・田中 1986）。マイワシも春から夏には北上し、秋になり水温が低下すると、南下する（酒井 1986）。これらはマグロ属と同様の時期に回遊してくる種である。

この理由として、漁法の違いや、中沢遺跡で欠落している大木 2a 式期に資源量に変動があった可能性などが考えられるが、試料が不十分なため解釈は難しい。漁期・漁場が共通している点で、両遺跡での漁労活動について大きな違いはないと思われる。

d. 中世

マイワシ、カタクチイワシ、ブリ属、タイ科、カサゴ目、アイナメ属が認められる。ほとんどが SK37 からの検出で、マイワシなどのニシン科が特に多い。また、種不明の椎骨も多いことから上記以外の種も存在するとみられる。なおマグロ属の脱落歯が 1 点あるが、検出した SK37 は SX1 内であり、縄文時代の混入の可能性がある。ブリ属は暖水系の回遊魚で南三陸沿岸には夏に来遊する（酒井 1986）。アイナメ属は沿岸の海藻の多い岩礁域に生息する。

以上から、中世でも縄文時代同様春～夏を中心とした沿岸での漁がおこなわれていたと考えられる。ニシン科の漁獲量が最も多く、その他多様な種が獲られていたが、縄文時代前期とは異なりマグロ漁はおこなわれていなかったか、ごく低調であったようである。



図版 244　出土魚類・哺乳類

表 113　動物遺存体資料のサンプル数

時期	遺構の性格	遺構名	サンプル数
縄文前期前葉 (大木 1-2a)	炉跡	SL173	1
	炉跡	SL221	1
	包含層	SX1- Ⅲ c,SX3- Ⅲ c	15
縄文前期後半 (大木 4-6)			なし
縄文 / 中世	包含層	SX1- Ⅲ a,SX1- Ⅲ b	9
平安	炉跡	SL85	1
中世	火葬遺構	SK19,SK78	25
	炉跡	SL112,SL113	2
	土坑	SK18	4
	廃棄土坑	SK37	4
計			62

表 114　魚類・獣鳥類部位出土状況（1）

綱　種	学名	縄文前期 (大木 1-2a) 部位 / 破片	縄文前期 (大木 1-6) 破片	縄文前期 (大木 4-6) 破片	縄文 / 中世 部位 / 破片	平安 破片	中世 部位 / 破片	計 部位 / 破片	同定部位
軟骨魚綱 Chondrichthyes									
板鰓亜綱	Elasmobranchii sp.	1 /						1 /	椎骨
ネズミザメ目	Lamniformes spp.				/ 2			/ 2	脱落歯
硬骨魚綱 Osterchthyes									
ニシン科	Clupeidae spp.						20 / 6	20 / 6	腹椎 , 尾椎 , 椎骨片
マイワシ	Sardinops melanostictus						2 /	2 /	第 2 椎骨
カタクチイワシ	Engraulis japonicus						2 /	2 /	腹椎 , 尾椎
マグロ属	Thunnus sp.	2 / 136			1 /		/ 1	3 / 137	歯骨 , 歯骨 / 前上顎骨 , 尾椎 , 椎骨片 , 鰭棘片
ブリ属	Seriola sp.						1 /	1 /	腹椎
タイ科	Sparidae sp.	/ 28			/ 1	1	/ 47	/ 77	脱落歯
ウミタナゴ	Ditrema temmincki temmincki	3 /						3 /	腹椎 , 尾椎
カサゴ目	Scorpaeniformes spp.	2 /					6 /	8 /	第 2 椎骨 , 腹椎 , 尾椎
アイナメ属	Hexagrammos sp.						3 /	3 /	第 1 椎骨 , 第 2 椎骨 , 尾椎
不明 A	Indet.A						1 /	1 /	椎骨
不明	Indet.	1 / 87		1			10 / 91	11 / 179	脱落歯 , 椎骨 , その他の部位
哺乳綱 Mammalia									
イノシシ	Sus scrofa				2 /			2 /	手根骨 , 基節骨
ニホンジカ	Cervus nippon				1 /			1 /	中節骨
大型獣	Indet.(Large)	/ 1			1 /		/ 2	1 / 3	遊離歯 , 不明部位
不明	Indet.	/ 9					2 / 4	2 / 13	不明部位 , 長管骨
ヒト							+	+	各部位
不明 破片	Indet.	+	+		+		+	+	
計		9 / 261	+	1	5 / 3	1	47 / 151	61 / 417	

表 115　魚類・獣鳥類部位出土状況（2）

大分類	種	部位	部分	ダメージ	縄文前期 (大木 1-2a)						縄文前期 (大木 1-6)	縄文前期 (大木 4-6)	縄文 / 中世					平安	中世							計
					炉跡	炉跡	包含層			包含層		包含層	包含層	包含層		包含層		炉跡	火葬遺構	火葬遺構	炉跡	炉跡	廃棄土坑	土坑	ピット	
					SL173	SL221	SX1 Ⅲ c			SX3 Ⅲ c		SX1 Ⅲ b	SX3 Ⅲ a	SX1 Ⅲ	SX1 Ⅲ a	SX1 Ⅲ b		SL85	SK19	SK78	SL112	SL113	SK37	SK18	P622	
					土壌	土壌	土壌	目視		土壌	目視	目視	目視	目視	土壌	土壌	目視	土壌	土壌	土壌	土壌	土壌	土壌	土壌	目視	
魚類	板鰓亜綱	椎骨		被熱		1																				1
	ネズミザメ目	脱落歯	ホオジロザメ類似	被熱なし											1											1
			アオザメ類似	被熱												1										1
	マイワシ	第 2 椎骨		被熱																		2				2
	ニシン科	腹椎		被熱																		11				11
		尾椎		被熱																		9				9
		不明	破片	被熱																		6				6
	カタクチイワシ	腹椎		被熱																		1				1
		尾椎		被熱																		1				1
	マグロ属	歯骨 R	細片化	被熱	1																					1
		歯骨 / 前上顎骨	破片	被熱						1																1
			脱落歯	被熱						36												1				37
		尾椎 (前方)	後位腹側 1/3	被熱						1																1
			前位 1/4	被熱												1										1
		椎骨	破片	被熱						79	1															80
		鰭棘	破片	被熱						19																19
	ブリ属	腹椎		被熱																		1				1
	タイ類	脱落歯		被熱なし		5				23					1			1	10		1	8	27	1		77
	ウミタナゴ	腹椎		被熱		2																				2
		尾椎		被熱		1																				1
	カサゴ目	第 2 椎骨		被熱																		1				1
		腹椎		被熱		1																3				4
		尾椎		被熱		1													1			1				3
	アイナメ属	第 1 椎骨		被熱																		1				1
		第 2 椎骨		被熱																		1				1
		尾椎		被熱															1							1
	不明 A	腹椎？		被熱																		1				1
	不明	脱落歯		被熱なし															1							1
		(極小のサメ ?)		被熱？																		1				1
		脱落歯		被熱																		1				1
		第 1/2 椎骨		被熱						1												1				2
		不明		被熱															1			6				7
			破片	被熱		6				1									1				61	1		70
		その他の部位	関節部	被熱															1					1		2
			破片	被熱	1	3				74	2		1						1				24			106
哺乳類	イノシシ	中心手根骨 L	全体	被熱												1										1
		基節骨Ⅱ / Ⅴ	近位	被熱												1										1
	ニホンジカ	中節骨	全体	被熱												1										1
	大型獣	遊離歯	破片	被熱						1																1
		不明	破片	被熱																		2				2
		不明骨端	破片	被熱										1												1
	不明	長管骨	骨幹部破片	被熱															4							4
		不明	破片	被熱						9																9
不明	不明	不明	関節部	被熱															1							1
	中型	長管骨	骨幹部	被熱															1							1
人骨							+	+											+	+						+
破片のみ							+	+				+			+	+	+	+	+					+	+	+
計					2	20	+	+		245	3	+	1	1	2	1	4	+	1	23	+	1	8	163	3	+	478

第４節　縄文時代の遺構

（1）遺構の特徴と年代

竪穴遺構は、Ⅰ区の基本層序Ⅳ層（包含層堆積前の旧表土）上面で 4 基検出された。壁は部分的に確認できる。長軸は 2.7m から 4.0m の範囲内で、円形から楕円形の平面形状を呈している。柱穴は検出されていないが、ほぼ平坦な床面を構築しており、SI217 では炭化物集中がみられた。

SI9、SI211、SI217 の堆積土中からは縄文土器や石器が出土しており、縄文土器は大木 1 式～ 2a 式に位置づけられる。ただし、竪穴遺構は遺物包含層の範囲内で検出されているため、堆積土中に包含層の土が流れ込む可能性があることから年代は特定できない。

周辺遺跡では中沢遺跡において大木３式～ 4 式期の竪穴遺構が 3 基確認できる。それらの規模は長軸が 2.6 m～ 3.3 m以上で、平面形は方形から隅丸方形である。柱穴は確認されていないが、ほぼ平坦な床面とその面に焼面や炭化材がみられることから建物跡と想定されている。本遺跡の竪穴遺構と中沢遺跡の竪穴遺構では規模が類似しており、また平坦な床面や柱穴がみられない点、床面に炭化物の範囲がみられる点で共通している。平面形には違いがみられるが、中沢遺跡の竪穴遺構は 3 基とも半分以上が削平されているため、全体形状は不明である。

このような竪穴遺構は、少なくとも宮城県内の縄文時代前期の集落遺跡である大木 1 式～ 2 式期の名取市今熊野遺跡（宮城県教育委員会 1986a）、名取市泉遺跡（名取市教育委員会 1998、2010）、仙台市三神峯遺跡（仙台市教育委員会 1980）、利府町六田遺跡（利府町教育委員会 1987）、大木 3 式期の大和町中峰 B 遺跡（宮城県教育委員会 1985）、大木 6 式期の栗原市嘉倉貝塚（宮城県教育委員会 2003）、大木 1 ～ 2 式期、大木 6 ～ 7a 式期の七ヶ宿町小梁川遺跡（宮城県教育委員会 1987b）などでは類例はみられないことから、その用途などについては今後さらに検討していく必要がある。

炉跡が 29 基確認された。土器埋設炉が 1 基みられる以外は、全て火床以外に顕著な構造を持たない地床炉である。そのほとんどは包含層中で確認されている。細別層との関係がおさえられているものとしては、Ⅲｂ層上面が 1 基、Ⅲｂ層中が 2 基、Ⅲｃ層上面が 3 基、Ⅲｃ層中が 15 基である。年代測定がおこなわれているのはⅢｃ層上面で検出した SL118 とⅢｂ層上面で検出した SL126 である。それらの年代値は、SL118 が 5430 ± 30yrBP、SL126 が 2900 ± 30yrBP である。中沢遺跡においても縄文時代前期前葉を中心とした時期の地床炉が、斜面に形成された包含層中で 36 基検出されており、それらは建物跡に伴っていない。その中には、平面的な規模が長軸で 3m 程度で硬化深度と被熱深度を合わせると 16cm になるものがあり、繰り返し火が焚かれた可能性が指摘されている（石巻市教育委員会 2019）。大規模集落である中沢遺跡においても、包含層が形成されている斜面が継続的に火を使用するような活動の場として利用されていることがわかる。本遺跡の炉跡においても被熱赤色変化深度が 10cm 以上になるものもみられ、燃焼時間が 6 時間では被熱深度が 7cm になるという燃焼実験の結果（Vera Aldeias et al.2016）も参考にすると、比較的長時間の火の使用が想定される。このことから、本遺跡の地床炉も一時的な火の使用により形成されたものではなく、繰り返し火の使用があった可能性があり、それらの活動が包含層が形成されている斜面上でおこなわれていた

と考えられる。

（2）包含層の特徴と形成について

遺物包含層の出土土器については、すでに第 6 章第 1 節で詳細に述べた。ここでは、各層にみられる土器の傾向を中心に、包含層の特徴と形成について若干の検討をおこなう。

全体を調査対象とした SX1 包含層では、Ⅲ c 層、Ⅲ b 層、Ⅲ a 層に分かれるが、どの層からも複数の土器型式の出土がみられる。ただし、平面的な分布傾向と出土量には違いがみられる。Ⅲ c 層では、大木 1 ～ 2a 式に比定される土器が他型式よりも出土割合が多く、それらのつぶれたような状態の土器が斜面上部に比較的まとまる傾向がみられる。Ⅲ b 層では、大木 4 ～ 6 式に比定される土器が他型式よりも出土割合が多く、それらのつぶれたような状態の土器が斜面中間部の東側にまとまる傾向がみられる。Ⅲ a 層は、出土傾向を判断できなかった。このように、Ⅲ c 層とⅢ b 層では出土割合が多い土器の比定される土器型式が異なり、それらは時期差として捉えられることが分かっている。また、本遺跡においては、その土器型式の間に位置する大木 2b 式～ 3 式の時期に比定される土器は破片資料で数点とごく少量である。

層の堆積過程としては、第 5 章第 4 節で土壌分析からの若干の見解が示されている。それによると SX1 Ⅲ c 層上部とⅢ b 層下部では全炭素濃度に不連続性がみられることから、Ⅲ c 層上部は埋没表層の可能性が高く、その表層を何かしらの堆積物が一気に覆うような状況にあったと想定される。その要因としては、本遺跡の立地を考慮すると、上部の地表面からの堆積物の移動である地滑りや土石流などが考えられる。そのような比較的大規模と想定されるイベントを示す痕跡は、現時点では上記以外に確認することはできていない。中沢遺跡では、本遺跡の上記で想定されたイベントとは時期は異なるが十和田中掫火山灰の降下や大規模な地割れなど複数のイベントの痕跡が確認されている（石巻市教育委員会 2018）。ただし、そのようなイベントが直接的に人間活動にどのような影響を与えたかについては明らかになっていない。

各層にみられた土器型式の傾向と、土壌分析結果にみられたⅢ c 層とⅢ b 層の間の不連続性からは、Ⅲ c 層とⅢ b 層が堆積する過程に断絶があった可能性が考えられる。このことについては、今後さらに検討していく必要がある。

SX2 包含層は大別で 1 層であり、10cm 未満の破片資料が多く、全体的に摩滅している様子がみられた。SX1 包含層や SX3 包含層のような遺物包含層とは違い、遺物の流れ込みにより形成されたと考えられる。

SX3 包含層は、Ⅲ c 層、Ⅲ b 層、Ⅲ a 層に分かれる。部分的な調査ではあるが、他の包含層と比較しても出土量が多い傾向にある。SX3 包含層の調査は一部のみにとどまっているため、本調査で出土した土器のみで主体とする時期を特定することはできないが、土器の装飾類型の検討からは、Ⅲ c 層は大木 1 式～ 2a 式、Ⅲ a 層は大木 4 式～ 6 式が出土割合が多い傾向がみられた。Ⅲ b 層は出土する遺物が少なく、傾向は捉えられなかった。

（3）羽黒下遺跡にみられる各時期の様相

前項までの年代検討を踏まえて、本遺跡における各時期の特徴についてまとめる。ただし、SX2包含層については出土土器の傾向から流れ込みにより形成されたものであることが想定されたため、ここでは、SX1 包含層や SX3 包含層のように人間活動の影響が比較的濃密にみられる遺物包含層とは区別して捉える。

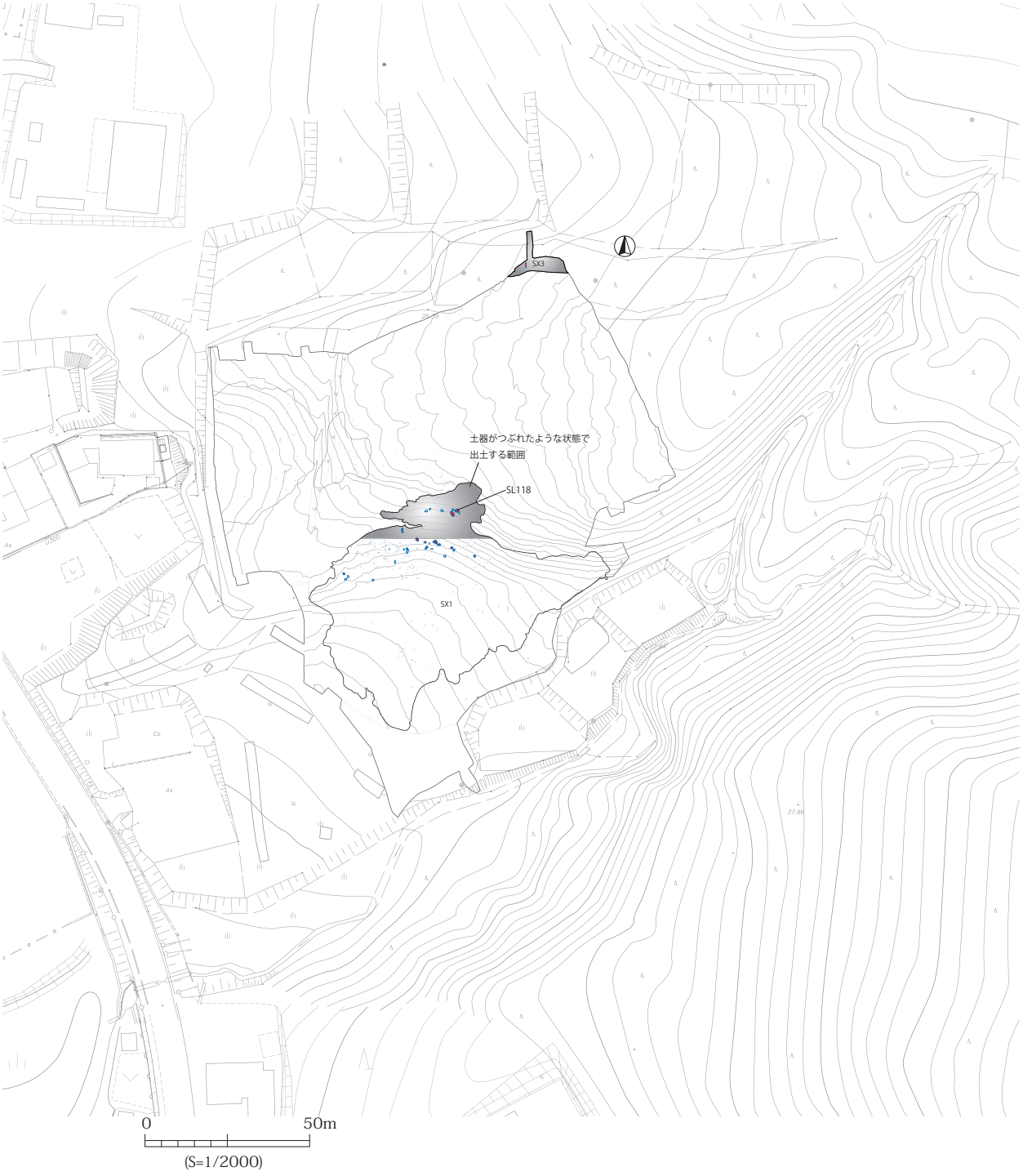
大木 1 ～ 2a 式期では、SX1 包含層と SX3 包含層で遺物の出土がみられる（図版 245）。SX1 包含層では、斜面上部の丘陵に近い位置である 12m × 24m の範囲で、つぶれたような状態で出土する土器が平面的にまとまる傾向がみられた。このことから、その範囲はより捨て場に近いことを示していると考えられる。また、斜面上部を中心に炉跡がみられ、その一つである SL118 の放射性炭素年代値は中沢遺跡で示されている大木 2a 式の放射性炭素年代測定値におおむね収まっている。このことから、少なくとも大木 2a 式期には斜面上部で炉が伴う人間活動がおこなわれていたと想定される。また、中沢遺跡との比較から繰り返し火が焚かれた可能性があるため、一時的な火の使用の場ではなく、継続的に火が使用される場であった可能性がある。

大木 4 ～ 6 式期では、SX1 包含層と SX3 包含層で遺物の出土がみられる（図版 246）。遺物量は多く、本遺跡では主体的にみられる時期である。包含層の東側の斜面中間部の 15 m× 33 mの範囲で、つぶれたような状態で出土する土器が平面的にまとまる傾向がみられた。このことから、この範囲はより捨て場に近いことを示していると考えられる。SX1 包含層の範囲内の斜面上部から西側で確認されている竪穴遺構は、中沢遺跡で確認されている共通した特徴をもつ竪穴遺構との比較から、建物跡と想定され、この時期に帰属する可能性がある。

大木 7a 式～ 10 式期では、全体的に土器の出土量が少なく、遺構も認められない。

上記の大木 7a 式期以降の中期の時期においては、土器以外に時期が判断できる遺物として大形の粗製石棒や土製栓状耳飾がみられる。大形の粗製石棒は住居遺構との関わりの中での儀礼や祭祀における重要な意味・象徴がみられることが指摘されている（鈴木 2012、谷口 2012、山本 2012 など）。土製栓状耳飾は、リング状の形態で、断面形態が「く」の字状になっているものであり、直径は約 5cm である。このような形態的特徴をもつ土製栓状耳飾の地理的分布の中心は、 中期末の大木式文化圏にあることが指摘されている（吉田 2003）。このような形態の土製栓状耳飾で、直径が 4cm 以上になるものには刺突文様が特徴的に施されることが指摘されているが、本遺跡のものにはそのような文様はみられない。

大洞 A 式～ A’ 式期では、土器が数点確認されているのみである。遺構については明確にこの時期として判断できるものはないが、炉跡 SL126 の放射性炭素年代測定値で 2,900 ± 30yrBP の値が示されており、小林謙一による土器型式別の実年代の検討を考慮すると（小林 2017）、この時期よりも若干古い値を示しているが、晩期の時期にはおさまってくる。



図版 245　大木 1 ～ 2a 式期

図版 246　大木４～６式期

（4）他遺跡との関係性

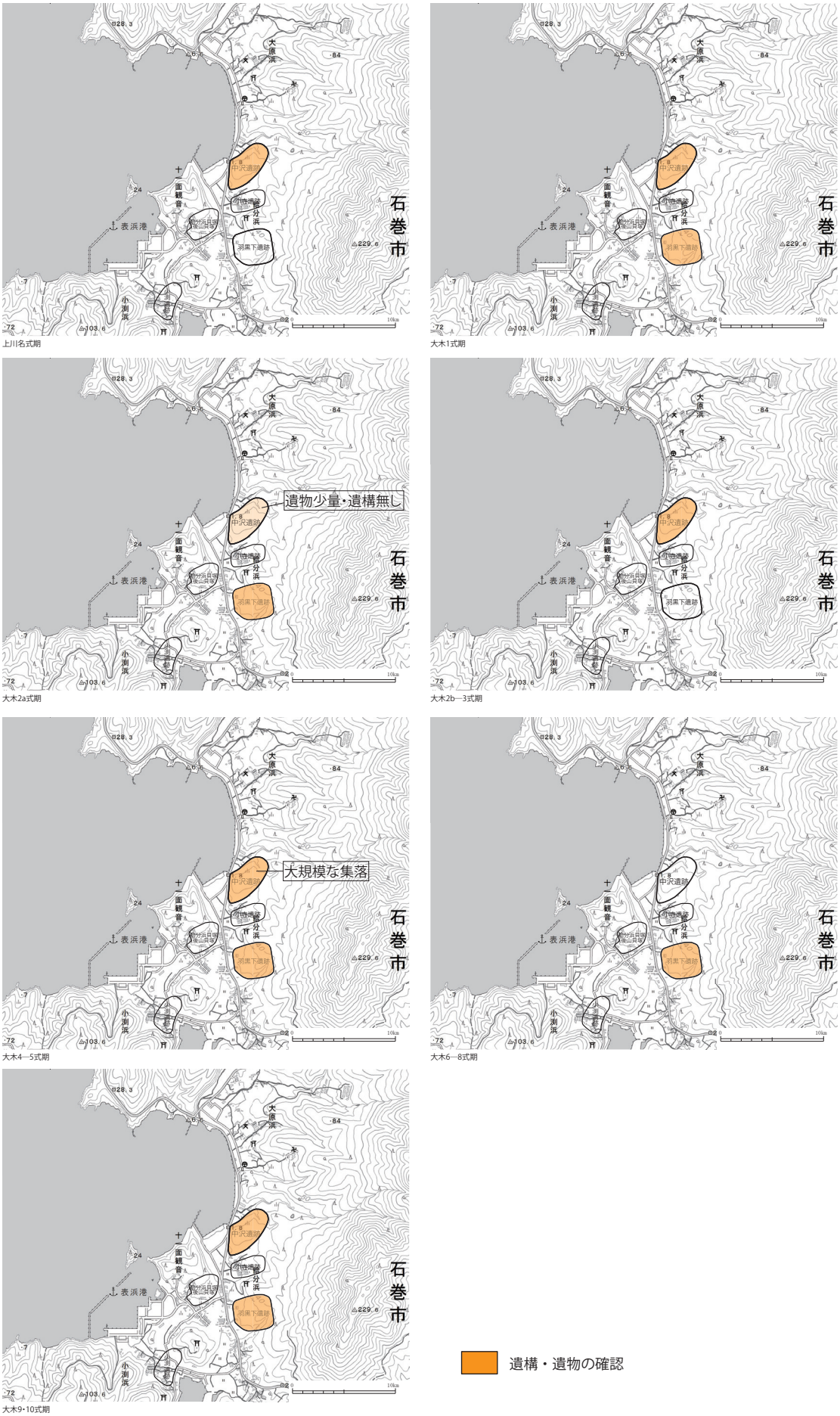
本遺跡は牡鹿半島という特徴的な立地環境に位置している。牡鹿半島で本発掘調査が実施されている同時期の縄文時代の遺跡は万石浦を除くと中沢遺跡（石巻市教育委員会 2018）のみである。特徴的な地理的環境の中において、本遺跡から 400 mの距離にあり、大規模な集落であったことが明らかになっている中沢遺跡と比較検討することは、中沢遺跡とほぼ同時期である本遺跡の様相を明らかにする上でも非常に重要であると考えられる。このことから、ここでは特に中沢遺跡との比較検討を試みる。

中沢遺跡では、大木 4 式～ 5 式期に丘陵上を中心に長軸 10 mを超える規模の大形竪穴建物跡や長軸 22 mの掘立柱建物跡が弧状に並ぶ傾向がみられている。丘陵斜面には大規模な遺物包含層が形成されており、上川名式～大木 5 式までの土器が大量に確認されている。また、時期の違いによって利用する斜面に違いがみられ、その規模も異なっている。大木 3 式期以前においては、包含層が形成されている斜面に炉跡が確認されていることから、斜面も広く生業活動の場として利用されている。

両遺跡間の土器型式を比較すると、共通する点も多くみられるが、違いもある（図版 247）。中沢遺跡では、最も古い時期としては上川名式期の土器がみられるが、本遺跡ではみられない。大木 1 式期の土器は両遺跡でみられるが、大木 2a 式期になると中沢遺跡では土器の出土量が非常に少なくなるのに対して本遺跡では土器の出土量が比較的多くみられる。逆に、大木 2b 式期になると、本遺跡では土器の出土が全くみられないが、中沢遺跡では出土量が多くなる。このような両遺跡の様相は、大木 3 式期でも引き続きみられる。大木 4 式期になると、両遺跡で土器の出土がみられるようになり、大木 5 式期でも同様な傾向を示す。ただし、大木 6 式期になると、今度は中沢遺跡では遺物がみられなくなるのに対して、本遺跡では遺物が多く確認されるようになる。この大木 6 式期の傾向は、少なくとも大木 8 式期までは継続される。

上記でみられた各型式期の土器の出土傾向の違いは、そのまま確認される遺構にも反映されている。中沢遺跡で、極端に土器の出土量が少ない大木 2a 式期と土器の出土が確認されていない大木 6 式期以降には遺構もみられず、逆にそれ以外の土器型式期には、斜面もしくは丘陵上に遺構がみられる。特に、大木 3 式期以降には建物跡と想定されている竪穴遺構がみられるようになり、大木 4 式期には大型の竪穴建物跡や掘立柱建物跡が丘陵上に弧状に並ぶようになることから大規模な集落の様相が明確にみられるようになる。本遺跡でも、大木 1 式～大木 2a 式期には斜面上に炉跡がみられ、大木 4 式～大木 6 式期には竪穴遺構がみられるようになる。ただし、調査範囲が遺跡の一部に限定されていることもあり、遺跡内での他の遺構の有無やその様相については不明な点が多い。

次に、中沢遺跡と本遺跡で共通する型式の土器の特徴について、特に本遺跡で出土量の多い大木 4 式を中心に検討をおこなう。中沢遺跡から出土している大木 4 式期の土器は、古段階と新段階に分けられている。これは、出土した層の新旧関係・連続性から判断されている。この古段階と新段階については、松田光太郎が示した縄文土器の文様帯による細別の大木 4 式古段階・新段階（松田 2017）ともおおむね一致することが分かっている。中沢遺跡の大木 4 式土器に施される装飾は、大きく A 類（加飾のある粘土紐貼付文）、B 類（加飾のない粘土紐貼付文）、C 類（ 1 条単位の沈線文）、D 類（半



図版 247　羽黒下遺跡と中沢遺跡にみられる土器型式別の遺構・遺物

表 116　羽黒下遺跡と中沢遺跡の時期ごとの関係性

<table>
<tr><th>土器型式</th><th>中沢遺跡</th><th>羽黒下遺跡</th><th>各遺跡にみられるイベント痕跡</th></tr>
<tr><td>大木6式</td><td>遺構・遺物無。</td><td rowspan="3">斜面を捨て場として利用。
斜面に小規模な竪穴遺構。</td><td rowspan="7">堆積物が地表面を一気に覆うイベント（羽黒下遺跡）
← 十和田中掫火山灰降灰（大木３式古段階）
← 地割れ（大木３式期の直前：中沢遺跡）</td></tr>
<tr><td>大木5式</td><td rowspan="2">丘陵上に長軸が10mを超える大型の竪穴・掘立が弧状に並ぶ。
ほぼ全ての斜面を捨て場として利用。
大木4古段階には斜面に小規模な竪穴遺構。</td></tr>
<tr><td>大木4式</td></tr>
<tr><td>大木3式</td><td>斜面を捨て場として利用。
包含層内に剥片の集中。
斜面に小規模な竪穴遺構・炉跡。</td><td rowspan="2">遺物・遺構無。</td></tr>
<tr><td>大木2b式</td><td>全時期と同様に斜面を捨て場として利用するがその規模が拡大。
建物跡の有無は不明。
包含層内の斜面に炉跡。</td></tr>
<tr><td>大木2a式</td><td>遺物少量。遺構無。</td><td rowspan="2">斜面を捨て場として利用。
包含層内の斜面に炉跡が有。
建物跡の有無は不明。</td></tr>
<tr><td>大木1式</td><td rowspan="2">斜面を捨て場として利用。
建物跡の有無は不明。</td></tr>
<tr><td>上川名式</td><td>包含層内の斜面に大規模な炉跡。</td><td>遺物・遺構無。</td></tr>
</table>

截竹管状工具を用いた沈線文)、E 類（刻目文・短沈線文）に分けることができ、古段階（Ⅶ群土器）では A ～ D 類が大差なく用いられ、新段階（Ⅷ群土器）では B 類が主体となっている。これに対し、本遺跡では、古段階では B・C 類、新段階では B 類に分けられ、どちらも B 類が主体となっている。中沢遺跡の大木 4 式古段階でみられた A・D・E 類については本遺跡ではほぼ確認することができなかった。ただし、装飾以外の器種・器形などの構成要素をみてみると、本遺跡と中沢遺跡では大きな違いはみられなかった。この大木 4 式古段階の装飾にみられる違いについては、前型式である大木 3 式との関係が考えられ、本遺跡に大木 3 式期の土器がみられないこととも整合する。

次に､両遺跡でみられた遺構とその帰属時期をもとに両遺跡の集落構成について検討をおこなう(表 117)。ただし、本遺跡で調査を実施したのは遺跡の一部に限定されるため、今回の発掘調査からだけでは、遺跡の全体像を把握することは難しい。ただし、北斜面ではトレンチ調査のみにとどまってはいるが大規模な包含層が形成されていることもわかっているため、丘陵先端部とその周囲の斜面についてはある程度状況を把握することは可能であると考える。ここでは、遺跡をほぼ全面的に発掘調査をし、遺跡の全体像が把握されている中沢遺跡を基準として、本遺跡のものも考えることにする。

中沢遺跡は、上川名式から大木 4 式古段階においては、主に斜面を利用しており、斜面を居住域としながらも捨て場としても利用するなど、広く生業活動の場として利用している。大木 4 式新段階になると、丘陵頂部を居住域とし、それを中心に周囲のほぼすべての斜面を捨て場として利用している。

本遺跡においては、丘陵頂部に居住域を示すような遺構は確認されていないが、全ての土器型式期をとおして、丘陵斜面に遺物包含層が確認されていることから、斜面を捨て場として利用していた可能性がある。また、中沢遺跡の上川名式期から大木 3 式期においてみられたように、少なくとも大木 1 ～ 2a 式期においては、包含層中に炉跡がみられ、斜面を人間活動の場としてある程度利用して

いたと考えられる。このように各土器型式において、両遺跡でみられる遺構と遺跡の中でのそれらの位置関係には共通する点がみられる。

上記の結果を考慮すると、各土器型式期における中沢遺跡と本遺跡の関係性がみられる。上川名式期には、中沢遺跡の利用が開始される。大木 1 式期には、前時期と同様に中沢遺跡が利用されているのに加えて、本遺跡の利用も開始される。しかし、大木 2a 式期には、中沢遺跡の利用の様子がほとんどみられなくなる一方で、本遺跡は継続して利用されている。逆に、大木 2b 式期には、本遺跡は利用されなくなり、中沢遺跡の利用が再開され、その状態は大木 3 式期まで継続される。特に、大木 3 式期には、中沢遺跡で竪穴遺構がみられるようになり、居住の痕跡が明確に現れてくる。大木 4 式期には、中沢遺跡で丘陵頂部に大規模な居住域を形成するようになり、そのような集落構成は大木 5 式期まで継続する。本遺跡においても大木 4 式期から利用が再開されるが、集落構成については不明である。また、土器にみられる装飾類型の違いから、中沢遺跡は大木 3 式期から大木 4 式期にかけて継続的に利用されていることが分かるが、本遺跡は大木 4 式期の途中から利用されている可能性がある。大木 6 式期には、それまで大規模集落を形成していた中沢遺跡では利用の様子が全くみられなくなり、それ以降も少なくとも大木 9 式期までは人間活動の痕跡はほとんどみられなくなる。一方で、本遺跡では大木 6 式期になっても継続して利用されており、それは大木 9 式期までは継続する。ただし、遺構が確認されていないため、集落構成は不明である。

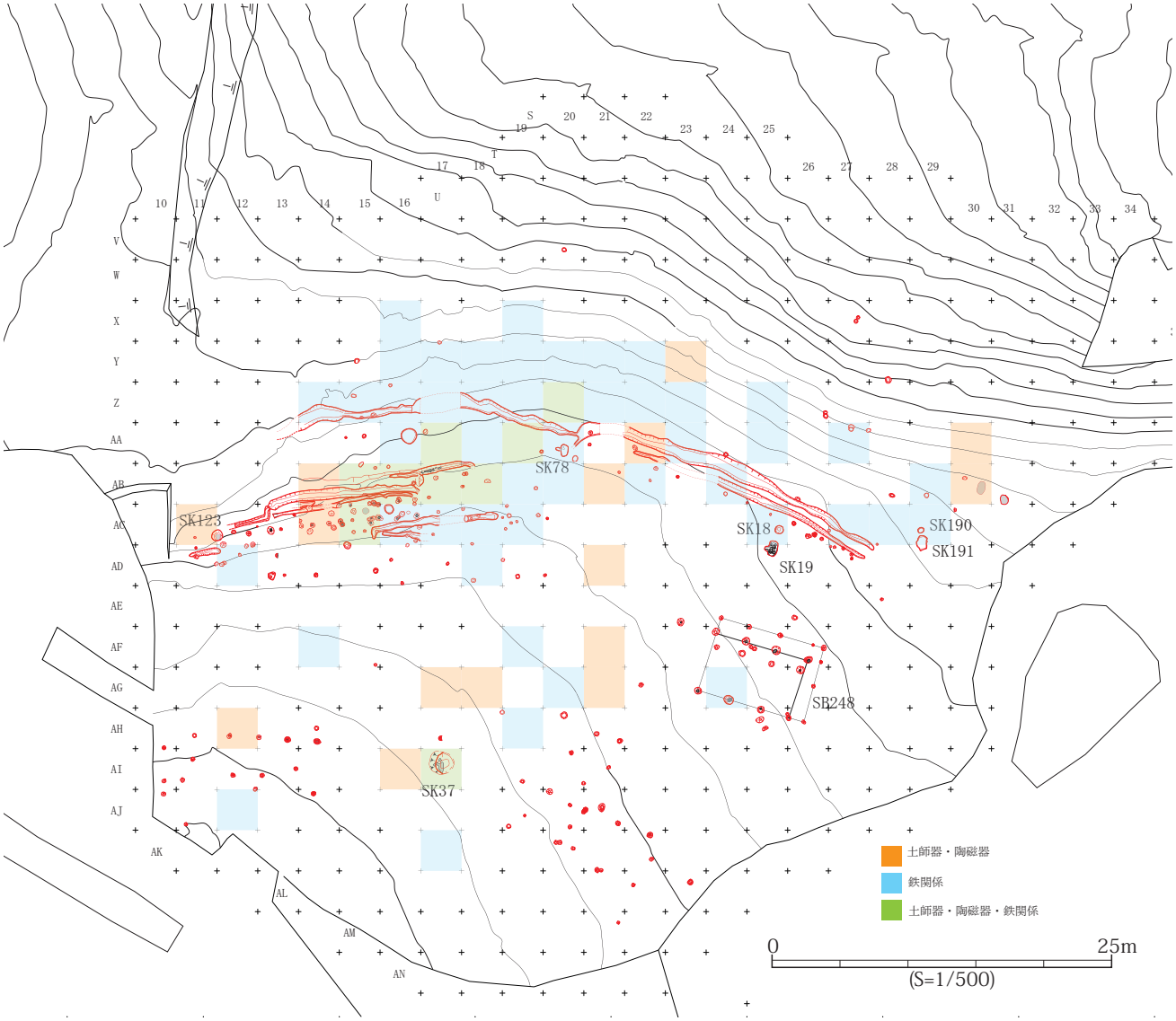
このような両遺跡間でみられる関連性の要因については、両遺跡を含めた現在の大原湾から小渕浦にかけての地域における縄文時代の居住形態（羽生 2000、今村 2017 など）が関係している可能性がある。それについては今後さらに検討していく必要がある。

第５節　古代以降

（１）遺物の特徴と年代

遺構や堆積層から、土師器・陶磁器・羽口・鉄滓・金属製品・貨幣が出土している。ここでは、特に土師器・陶磁器・金属製品・貨幣について検討する。

土師器（図版 176-1）は 1 点のみ出土しており、ロクロ調整の甕である。長胴形で最大径は胴部中央にある。頸部は「く」字状に屈曲しており、口縁端部は内湾気味につまみだされて、縁帯状となっている。胴上部からヘラケズリが施されている。このような特徴をもった土師器は、東北地方南部における土師器編年では表杉ノ入式とされ（氏家 1957）、概ね 9 世紀から 12 世紀とされている（加藤 1989）。村田による 10 世紀前後の土師器甕の分類によれば（村田 1994）、本遺跡出土の土師器甕はＢⅠａ類の範疇に含まれると考えられる。時期としては､9 世紀第 4 四半期以降確認されている。土師器甕は 11 世紀後半には消滅し、中世的土器に変換していくことが指摘されている（飯村 2009）ことから、本遺跡出土の土師器甕は、9 世紀第 4 四半期から 11 世紀後半の間と考えられる。



図版 248　古代末～中世前半の遺構・遺物の平面分布状況

陶磁器は、常滑産、渥美産、瀬戸産、美濃産がみられ、さらに龍泉窯青磁と考えられるものもみられる。それらの陶磁器は体部の一部のみの小破片であり、型式などから時期を判断できるものはない。ただし、渥美産陶器は、13 世紀のうちにみられなくなり、それ以降は常滑産のみになることが指摘されている（藤沼 1991）ことから、少なくとも渥美産片口鉢は、13 世紀以前と考えられる。

鉄鏃は 1 点（図版 165-1）のみ出土している。鏃身形状が長三角形であり、鏃身が 3.75cm、関幅が 1.95cm である。津野（1990）によりおこなわれている古代・中世の鉄鏃の分類を参考にすると、長三角形Ⅱ式に分類される。津野はさらに長三角形Ⅱ式を腸抉・箆被の形状により 4 分類している。それによると、本遺跡のものは腸抉のない関箆被である。津野は、その分類の時期を 9 世紀後半から 11 世紀前半としている。このことから、本遺跡出土の鉄鏃もその時期として捉えられる可能性がある。

貨幣は、聖宋元寶（1101 年）、嘉祐元寶（1056 年）、嘉祐通寶（1056 年）、元豊通寶（1078 年）、淳化元寶（990 年）、治平元寶（1064 年）などの北宋銭がみられる。中世における銭貨の使用については、少なくとも 13 世紀半ば以降に米に代わって銭が主役の経済になり、その頃には全国的に展開していたことが指摘されている（鈴木 2002）。ただし、それらが 12 世紀に遡る可能性も指摘されている。貨幣が少なくともその時期内に遺跡内に搬入された可能性があるが、遺物の性質上時期を特定することは難しいと考えられる。

（2）遺構の特徴と年代

古代以降の遺構については、掘立柱建物跡 1 軒、土坑 9 基、炉跡 9 基、溝跡 7 条、柱穴群がある（図版 248）。

遺構の時期としては放射性炭素年代測定を実施しており、SK18 土坑が 11 ～ 13 世紀、SK19 土坑が 13 ～ 14 世紀、SK123 土坑が 11 ～ 12 世紀、SL102 炉跡が 11 ～ 12 世紀の年代が示されている。これらの年代値と遺物から想定される時期を考慮すると遺構の時期は、概ね 11 ～ 14 世紀（古代末～中世前半[註 1)]）におさまってくる可能性がある。以下では、この年代値を参考とし、各遺構の特徴について検討をおこなう。

掘立柱建物跡は、丘陵の裾部から平坦になる箇所にみられ、規模は、桁行 3 間、梁行 1 間である。北と東に廂が付き、北側柱列寄りに束柱がみられる。この掘立柱建物跡については柱穴などから帰属時期を判断できるような遺物の出土は確認されていない。ただし、近世以降であることを示す遺物などの出土がみられないこと、古代末から中世前半の遺構が周囲に分布することから、ここでは古代末から中世前半と考えたい。中世前半の一般的な集落で検出される平均的な掘立柱建物跡には廂が付かないことが指摘されており（中村 2015）、廂付き建物は公的儀式空間に準じる性格を有していた可能性が考えられている（鹿野 1994）。また、本遺跡の掘立柱建物跡のような 7 尺以上の間尺で建築されているものは社会的に上層に属する造営者と関係があるとする見解もある（高橋 1989）。

土坑 9 基については、年代測定をおこなっている SK18、SK19、SK123 以外にも、SK37 から常滑産甕や椀型滓などの出土が確認できることから、とくに SK37 については同様に常滑産甕が出土し

ている SK123 とほぼ同じ時期に帰属すると考えられる。

SK19 と SK78 は、壁面や底面に被熱を受けた痕跡があり、土坑内からは人骨が出土している。人骨は、分析結果から成人の焼骨で軟部組織に包まれている状態で高い温度で焼成されたことが明らかにされている（第 5 章第 3 節）。これらのことから SK19 と SK78 は、火葬のための施設である「焼成遺構」（田中 2005）の可能性が高い。さらに SK19 と SK78 は遺構内に被熱痕跡の無い大形の石が配置されており、SK19 では成人 1 体分の全身にわたる焼骨片が約 300 点も出土していることから、火葬した場を墓として利用している可能性がある。

それ以外の土坑で特徴的なものには、SK37 と SK123 のように椀型滓や陶磁器が出土し、堆積土中に灰や焼土ブロックなどが多くみられる土坑が確認されている。これらは廃棄土坑と考えられ、土坑の中に遺跡内での作業に伴う不要となったものを一括して廃棄していたと考えられる。廃棄土坑内には椀型滓や灰、焼土ブロックがみられるのに加えて、遺跡内からは鍛造剥片などの鍛冶関連の遺物もみられ、炉跡なども検出されている。このことから、少なくとも遺跡内で鍛冶などの作業がおこなわれていた可能性がある。

（3）古代末から中世前半における本遺跡の位置づけ

本遺跡で確認されている特徴的な遺構に火葬遺構と考えられる SK19 と SK78 がある。SK19 と SK78 のように形状が凸形をしたものは、その形状的特徴から「凸形系火葬遺構」に分類されている（田中 2005）。

凸形系火葬遺構は、宮城県内では亘理町舘南囲遺跡（宮城県教育委員会 1991）、仙台市王ノ檀遺跡（仙台市教育委員会 2000）、仙台市中田南遺跡（仙台市教育委員会 1994）などでみられ、周辺地域では福島県の郡山市音路遺跡（郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 1997）、郡山市荒井猫田遺跡（郡山市教育委員会 1999）、郡山市ニ池遺跡（郡山市教育委員会 1995）保原町大鳥城跡（保原町教育委員会 1992）福島市倉ノ前遺跡（福島市振興公社文化財調査室 1994）、三春町堀ノ内遺跡（福島県教育委員会 1992）などで確認されている。

周辺地域でみられる凸形系火葬遺構の時期は、14 世紀から 16 世紀頃と考えられているため、SK19 の年代はそれらと同時期か若干古いことになる。さらに、陸奥地域では 12 世紀後半から 13 世紀頃から火葬という葬法がとられていたことが指摘されている（山口 2002）ため、本遺跡の凸形系火葬遺構は火葬が始まる時期に比較的近くなる可能性がある。また、地理的分布傾向についてみると、仙台平野から阿武隈川流域の郡山盆地に濃密に分布することが指摘されている（田中 2005）。このことから、本遺跡のものはそれらの濃密に分布する範囲からは外れ、現在想定されている範囲の最も北方に位置することになる。

凸形系火葬遺構の中で、本遺跡のようにそのまま墓として利用しているものは、王ノ壇遺跡や中田南遺跡でもみられる。ただし、本遺跡でみられるような大形の石は確認されていない。逆に、荒井猫田遺跡、堀ノ内遺跡、音路遺跡などでは、本遺跡と同様に遺構内から大形の石が出土している。ただし、荒井猫田遺跡や音路遺跡の火葬遺構内で確認された石には本遺跡のものとは異なり被熱痕跡がみ

られ、主要な火葬骨の部位がみられないことから、墓としては利用しておらず、火葬骨は別な場所に移されたと想定されている。堀ノ内遺跡のものについては大形の石の状態については明記されていないため不明であるが、堀ノ内遺跡のものについても火葬遺構として捉えられており、墓に利用されたような記述はないため､あくまでも火葬の場として捉えられていると考えられる。これらのことから、本遺跡でみられた火葬後に大形の石を遺構内に配置し、墓とした凸形系火葬遺構の類例は周辺遺跡では認められない。

凸形系火葬遺構は、その地理的分布にみられる偏在性から、特定の葬送集団の存在や系統と関係性があることが想定されている（田中 2005)。そのことも考慮し、本遺跡にみられる SK19 や SK78 と周辺地域との関係性については、今後さらに検討する必要がある。

陶磁器については、特定の時期を判断できるものはなかったが、産地としては常滑産、渥美産、瀬戸産、美濃産がみられ、さらに龍泉窯青磁もみられた。瀬戸産や龍泉窯青磁などの輸入磁器は中世以降は奢侈品と考えられていることから（宮城県教育委員会 2006a)、貴重なものが遺跡外から搬入されていることになる。また、本遺跡で出土している陶磁器には、王ノ檀遺跡（仙台市教育委員会 2000）や仙台市中野高柳遺跡（宮城県教育委員会 2006a)、小牛田町一本柳遺跡（宮城県教育委員会 1998）など奥州南部の遺跡で一般的にみられる在地産陶器（高橋 2002）と考えられるものはほとんどみられないため、在地産の陶器が流通してくるような地域ではなく、直接的に常滑産や渥美産、瀬戸産、美濃産が搬入されるような地域であったことがわかる。東北地方における常滑産や渥美産の分布は太平洋側の地域にかたよって分布することが指摘されており（藤沼 1991)、それらは太平洋沿岸の海上交通によって東北地方まで運ばれたと考えられている（脇田 1986、藤沼 1991、綿貫 2002、小川 2015 など)。

上記で検討した本遺跡の火葬遺構や陶磁器にみられた他地域との交流・交易を示す要素は、本遺跡の古代末から中世前期における位置づけを解明していく上で非常に重要な要素になってくると考えられる。これらについては、今後さらに検討していく必要がある。

註 1）中世の時期区分については、吉岡（1995）を参考とし、Ⅰ初期（11 世紀後半～ 12 世紀前半)、Ⅱ前期（12 世紀中葉～ 13 世紀前半)、Ⅲ中期（13 世紀後半～ 14 世紀前半)、Ⅳ後期（14 世紀後半～ 15 世紀中葉)、Ⅴ末期（15 世紀後葉～ 16 世紀末）で、Ⅰ～Ⅲ期を中世前半、Ⅳ・Ⅴ期を中世後半とする。

第6節　まとめ

羽黒下遺跡は、宮城県北東部にある牡鹿半島に所在し、仙台湾に面する大原湾に沿って連なる複数の小丘陵の一つに立地している。遺跡の時期は、縄文時代前期から晩期、古代末から中世前半まで断続的に確認できる。特に遺物の出土量が多いのは縄文時代であり、とりわけ前期前葉（大木1式～2a式期）、中葉から末葉（大木4式～6式期）が主体的にみられる。以下に、要点をまとめる。

1. 調査の結果、縄文時代では、前期前葉から晩期までの土器型式が断続的にみられる遺物包含層3か所、竪穴遺構4基、土坑14基、炉跡29基、ピット多数を検出した。古代末から中世前半では、掘立柱建物跡1棟、溝跡10条、土坑10基、炉跡8基、ピット多数を検出した。
2. 遺物は、縄文時代の土器、土製品、石器、石製品、動物遺存体、古代末から中世前半の土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品、鉄滓、貨幣、人骨、動物遺存体が出土している。
3. 縄文時代の遺物包含層や遺構は、主に丘陵の北斜面、西斜面、南斜面にみられ、古代以降の遺構は、主に丘陵の南斜面裾部およびそこから続く平坦面にみられる。
4. 南斜面の上部から中間部でみられる竪穴遺構4基は、縄文時代前期中葉から末葉に帰属する可能性がある。
5. SX1遺物包含層内では縄文時代における複数時期の炉跡が検出されていることから、縄文時代を通して斜面が火を使用する活動の場として利用されていたとみられる。
6. 南斜面のSX1遺物包含層では下層のⅢc層で縄文時代前期前葉の大木1式～2a式土器の出土割合が多くなり、それよりも上層のⅢb層では前期中葉から末葉の大木4式～6式土器の出土割合が多くみられる。
7. 縄文時代の石製品の石材の一つには周辺で獲得可能な粘板岩が主体的に利用されている。
8. 縄文時代の石器組成を土器型式期の幅ごとにみた場合に、出現する各器種の割合が異なっている傾向がみられ、それらは遺跡の機能差を反映している可能性がある。
9. 本遺跡の400m北側に位置する縄文時代の大規模集落である中沢遺跡との比較から、両遺跡でみられる土器型式期には若干の違いがあり、そこには両遺跡を含めた地域における縄文時代の居住形態が関係している可能性がある。
10. 中世前半に帰属する火葬遺構2基が南斜面の裾部でみつかっている。
11. 火葬遺構は、凸形系火葬遺構に分類でき、これまでみつかっている凸形系火葬遺構と比較すると、本遺跡のものは地理的分布範囲で最も北方に位置しており、時期が若干古くなる可能性がある。
12. 陶磁器は、常滑産、渥美産、瀬戸産、美濃産などがみられる一方で、在地産陶器はほとんどみられないことから、直接的に常滑産、渥美産、瀬戸産、美濃産などが搬入されるような地域であったと考えられる。

引用・参考文献

会田容弘 1994「棒状骨角器考－宮城県里浜貝塚台囲地点出土の縄文後・晩期土器の沈線施文とミガキの技術」『考古学研究』41 巻 3 号　pp.39-59

会田容弘 1997「東北地方縄文時代後期から晩期の土器装飾文様に見られる 2 種のキザミ」『古代』第 104 号　pp.19-41

相原淳一 2010「宮城県における玦状耳飾」『東北歴史博物館研究紀要』11　pp.1-12

相原淳一 2015「宮城県登米市糠塚貝塚の縄文土器」『東北歴史博物館研究紀要』16　pp.43-52

相原淳一 2018「縄文時代前期末葉から中期初頭の土器編年－宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡を中心とする層位学的再検討－」『東北歴史博物館研究紀要』19　pp1-20

赤石和幸・光谷拓実・板橋範芳 2000「十和田火山最新噴火に伴う泥流災害－埋没家屋の発見とその樹木年輪年代－」『地球惑星科学関連学会 2000 年合同大会予稿集』 pp.9

阿子島香・古田和誠 2009『東北文化資料叢書第 4 集　縄文土器基準資料　石巻市梨木畑貝塚出土資料』

阿部昭典 2012「東北北部の大形石棒にみる地域間交流」『縄文人の石神－大形石棒にみる祭儀行為－』pp.183-208

飯村均 2009『中世奥羽のムラとマチ　考古学が描く列島史』

池田淳子 2001「粘板岩製石棒の製作地－製作実験と地質状況からの推定－」『新潟考古学談話会会報』第 23 号　pp.78-84

石巻市教育委員会 1976『沼津貝塚保存管理計画策定事業報告書』

石巻市教育委員会 2002『沼津貝塚隣接地－沢田地区農業農村整備事業に伴う発掘調査報告－』石巻市文化財調査報告書第 9 集

石巻市教育委員会 2003『梨木畑貝塚－梨木畑 3 号沢砂防ダム事業に伴う発掘調査報告－』石巻市文化財調査報告書第 10 集

石巻市教育委員会 2004『梨木畑貝塚－（主）石巻鮎川線祝田道路改良工事に伴う発掘調査報告書－』石巻市文化財調査報告書第 12 集

石巻市教育委員会 2018『中沢遺跡－小寺地区防災集団移転促進事業に係る発掘調査報告書－』石巻市文化財調査報告書第 14 集

石巻市教育委員会 2019『立浜貝塚－石巻市雄勝町立浜地区防災集団移転促進事業に係る発掘調査報告書』石巻市文化財調査報告書第 15 集

石巻市史編さん委員会 1995『石巻の歴史』

今村啓爾 1985「五領ヶ台式土器の編年―その細分および東北地方との関係を中心に―」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』 4　pp.93-157

今村啓爾 2006「大木 6 式土器の諸系統と変遷過程」『東京大学考古学研究室研究紀要』20　pp.37-69

今村啓爾 2017『考古調査ハンドブック 17　縄文文化－入門から展望へ』

入間田宣夫 1996「第四章　中世の民衆生活」『石巻の歴史　第一巻　通史編（上）』 pp.560-626
氏家和典 1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第 14 輯　pp.1-14
近江哲 2015「獣面突起の地域的展開～諸磯式における突起の出現と清長～」『考古学論攷Ⅱ－柳澤清一先生退職とともに－』千葉大学文学部考古学研究室　pp125-140
大河内隆之 2008「年輪年代調査」『胡桃館遺跡埋没建物部材調査報告書』北秋田市埋蔵文化財調査報告書第 10 集　pp.66-70
大崎市教育委員会 2008 『東要害貝塚』大崎市文化財調査報告書第３集
小川弘和 2015「六　東アジア・列島のなかの平泉」『東北の中世史 1　平泉の光芒』pp.188-211
牡鹿町教育委員会・牡鹿町文化財保護委員会 1977『ふるさと牡鹿－牡鹿町文化財第一集－』
牡鹿町誌編纂委員会 1988『牡鹿町史』上巻
落合 明・田中 克 1986『新版魚類学』(下)　恒星社厚生閣
加藤道男 1989「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』pp.277-329
鹿野里絵 2004「平泉遺跡群における 12 世紀庇付き建物」『岩手考古学』第 16 号　pp.171-184
鹿又喜隆 2009「押出遺跡の石器の機能」『日本考古学協会 2009 年度山形大会研究発表資料集』pp.263-272
鹿又喜隆・木暮圭哉 2018「第 1 節　中沢遺跡の石器の機能と評価」『中沢遺跡－小寺地区防災集団移転促進事業に係る発掘調査報告書－』pp.86-116
上條信彦 2015『縄文時代における脱穀・紛砕技術の研究』
神村透 1999「特殊磨石・折損特殊磨石・スタンプ形石器－視点　文献考古学的－」『信濃』51-10 pp.643-658
川崎保 1996「『の』字状石製品と倉輪・松原型装身具セットについて」『長野県の考古学』 pp.27-48
川崎保 1997「縄文時代の箆状垂飾について－福井県坂井郡金津町桑野遺跡出土資料を中心に－」『信濃』49-4　pp.361-377
興野義一 1967「大木式土器理解のために（Ⅰ）」『月刊考古学ジャーナル』13　pp.16-18
興野義一 1968a「大木式土器理解のために（Ⅱ）」『月刊考古学ジャーナル』16　pp.22-25
興野義一 1968b「大木式土器理解のために（Ⅲ）」『月刊考古学ジャーナル』18　pp.8-10
興野義一 1968c「大木式土器理解のために（Ⅳ）」『月刊考古学ジャーナル』24　pp.17-19
興野義一 1969「大木式土器理解のために（Ⅴ）」『月刊考古学ジャーナル』32　pp.6-9
興野義一 1970「大木 5b 式土器の提唱　―宮城県長者原遺跡出土資料による―」『古代文化』22-4 pp.97-102
興野義一 1981「糠塚貝塚について」『迫町史』迫町史編纂委員会　pp.1105-1136
興野義一 1984「大木式土器について」『宮城の研究 1　考古学篇』清文堂　pp.173-190
興野義一 1996「山内清男先生供与の大木式土器写真セットについて」『画龍点睛－山内清男先生没後 25 年記念論集－』山内先生没後 25 年記念論集刊行会　pp.215-224

楠本正助 1973「石巻市田代島仁斗田貝塚」『石巻地方の歴史と民俗』 pp.5-24
熊谷常正 2013『南部北上高地における粘板岩系石器の研究』平成 22 ～ 24 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書
熊谷常正 2019「東北後晩期のスレート製石剣類」『季刊考古学』第 148 号　pp.29-33
郡山市教育委員会 1999『荒井猫田遺跡（Ⅲ区）－第 11 次発掘調査報告―』
児玉大成 2002「くびれ石考－縄文人の好奇心をくすぐる自然石－」『海と考古学とロマン』pp.193-207
小林圭一 2007「押出遺跡出土の縄文時代前期の土器」『押出遺跡』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 pp.87-102
小林圭一 2016「宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡出土の大木６式土器」『研究紀要』第８号　公益財団法人山形県埋蔵文化財センター　pp21-50
小林謙一 2017『縄紋時代の実年代－土器型式編年と炭素 14 年代－』
財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 1997『音路遺跡－伝蓮花谷太子寺跡発掘調査報告－』郡山市教育委員会
財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 1995『二池遺跡』郡山市教育委員会
財団法人福島市振興公社文化財調査室 1994『（仮称）福島市東部学校給食センター建設関連埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告』福島市埋蔵文化財報告書 63
酒井敬一 1986『南三陸の沿岸魚』
佐藤憲幸 2012「興野コレクションの土偶―糠塚貝塚」『東北歴史博物館研究紀要』13　pp.21-48
佐野勝宏・大場正善 2014「狩猟法同定のための投射実験研究（2）－背付き尖頭器－」『旧石器研究』10　pp.129-149
七ヶ浜町教育委員会 1979『大木囲貝塚　―昭和 52 年度環境整備調査報告』七ヶ浜町文化財調査報告書第 4 集
七ヶ浜町教育委員会 2013『大木囲貝塚　―災害復旧に伴う東貝層発掘調査報告書―』七ヶ浜町文化財調査報告書第 10 集
紫桃正隆 1973「観音館」『史料 仙台領内古城館　第二巻』 pp.925-927
白鳥良一 1974「仙台市三神峯遺跡の調査」『東北の考古・歴史論集』平重道先生還暦記念会編　宝文堂 pp.1-54
白鳥良一 1989「前期大木式土器様式」『縄文土器大観』1　pp.315-318
鈴木公男 2002『銭の考古学』
鈴木素行 2012「大形石棒が埋まるまで－事例研究による「石棒」（鈴木 2007）の改訂－」『縄文人の石神－大形石棒にみる祭儀行為－』pp.108-134
仙台市教育委員会 1980『三神峯遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 25 集
仙台市教育委員会 1987『山田上ノ台遺跡－昭和 55 年度発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第 100 集

仙台市教育委員会 1994『北原街道 B 遺跡―仙台市宮城地区―』仙台市文化財調査報告書第 181 集
仙台市教育委員会 1994『中田南遺跡－古代・中世の集落跡の調査』仙台市文化財調査報告書第 182 集
仙台市教育委員会 1995『高柳遺跡調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 190 集
仙台市教育委員会 2000『王ノ壇遺跡』仙台市文化財調査報告書第 249 集
仙台市教育委員会 2010『上野遺跡　第 6 ・ 7 次調査』仙台市文化財調査報告書第 365 集
高橋博志 2002「第 11 章　陶器生産と陶磁器流通」『鎌倉・室町時代の奥州』pp.228-249
高橋与右ヱ門 1989「掘立柱建物跡の間尺と時代性－民家の間尺と比較して－」『紀要』Ⅸ　pp.25-48　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
田中則和 2005「東北地方中世墓の様相と画期」『東北中世史の研究　下巻』pp.51-119
谷口康浩 2012「縄文人の石神－「行為」と「コンテクスト」による大形石棒の研究法－」『縄文人の石神－大形石棒にみる祭儀行為－』pp.1-25
田村隆 2011「旧石器時代から縄文時代の狩りの道具」『貝塚』67　pp.1-31
千葉直樹 2007「宮城県における縄文時代前期後葉の土器に関する一考察」『考古学談叢』東北大学文学研究科考古学研究室・須藤隆先生退任記念論文集研究会　pp.183-213
津野仁 1990「古代・中世の鉄鏃」『物質文化』54　pp.59-75
傳田惠隆 2020「縄文時代前期前葉における岩偶の遺跡間変化とその要因－宮城県内の事例を中心に－」『考古学研究』第 67 巻第 1 号　pp.69-81
東北大学文学部 1982『考古学資料図録』
東北歴史博物館 1989「牡鹿町 02 －きゅうぶんはま（給分浜貝塚）」『宮城県の貝塚』　pp.144-145
東北歴史博物館 1994『里浜貝塚Ⅸ　―宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚梨木東地点の調査―』東北歴史資料館資料集 36
遠野市教育委員会 2002『新田Ⅱ遺跡』遠野市埋蔵文化財調査報告書第 13 集
中島誠 2002「群馬県における縄文時代早期から中期初頭の打製斧形石器」『石斧の系譜－打製斧形石器の出現から終焉を追う－予稿集』pp.57-62
中村達雄 1965「諏訪市明星屋敷・ハタ河原遺跡調査報告―高原地帯における縄文早期遺跡の様相」『信濃』17-4　pp.59-71
中村隼人 2015「南部諸城の研究」『紀要』第 34 号　pp.25-42　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
名取市教育委員会 1998『泉遺跡〔宮城県警察学校建設関係発掘調査報告書〕』名取市文化財調査報告書第 39 集
名取市教育委員会 2010『泉・前野田東・北台遺跡他』名取市文化財調査報告書第 59 集
奈良国立文化財研究所 1990『年輪に歴史を読む』
箱崎真隆・坂本稔・木村勝彦・佐野雅規・奥野充・中塚武・中村俊夫 2018「1-14　榛名山 5 世紀噴火（Hr-FA）と十和田カルデラ 10 世紀噴火 (To-a) の年代学的再検討の必要性」『国際火山噴火史情

報研究集会講演要旨集 2018-1』 pp.13-20
秦昭繁 1991「特殊な剥離技法をもつ東日本の石匙－松原型石匙の分布と製作時期について－」『考古学雑誌』76-4 pp.359-387
秦昭繁 2007「珪質頁岩の供給」『縄文時代の考古学 6 ものづくり－道具製作の技術と組織』pp.196-224
羽生淳子 2000a「縄文人の定住度（上）」『古代文化』52-2 pp.29-37
羽生淳子 2000b「縄文人の定住度（下）」『古代文化』52-4 pp.18-29
早川由紀夫・小川真人 1998「日本海をはさんで 10 世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日－十和田湖と白頭山－」『火山』43-5 pp.403-407
早瀬亮介 2017「仙台湾周辺における前期初頭縄文土器の変遷と空間変異」『物質文化』97 pp.35-57
早瀬亮介・菅野智則・須藤隆 2006「東北大学文学研究科考古学陳列館所蔵大木囲貝塚出土基準資料―山内清男編年基準資料―」『Bulletin of Tohoku University Museum』No.5 pp.1-40
福島県会津高田町教育委員会 1984 『冑宮西遺跡』福島県会津高田町文化財調査報告書第 5 集
福島県教育委員会 1992『東北横断自動車道遺跡調査報告 17 堀ノ内遺跡』福島県文化財調査報告書第 284 集
藤沼邦彦 1991「東北地方出土の常滑焼・渥美焼について」『知多半島の歴史と現在』№ 3 pp.29-56
藤沼邦彦 1992「宮城県の土偶」『土偶とその情報』国立歴史民俗博物館研究報告第 37 集 pp.112-13
保原町教育委員会 1992『大鳥城発掘調査報告』保原町文化財調査報告書 4
町田洋・新井房夫 2003『新編 火山灰アトラス－日本列島とその周辺－』
松田光太郎 2004「縄文時代前期の小形石棒に関する一考察」『古代』116 pp.1-17
松田光太郎 2006「大木 6 式土器の変遷とその地域性－縄文時代前期末葉の東北地方中・南部の土器編年－」『神奈川考古』第 39 号 pp.1-30
松田光太郎 2009「東北日本における縄文前期の接触構造―前期大木式文化圏の土器変遷と関東・北陸との関係―」『日本考古学協会 2009 年度山形退会研究発表資料集』日本考古学協会 pp.203-209
松田光太郎 2017「縄文時代前期土器書型式の系統関係―文様帯の視点から―」『物質文化』97 pp.1-34
丸山浩治 2020『火山灰考古学と古代社会 十和田噴火と蝦夷・律令国家』
御堂島正 1991「石鏃と有舌尖頭器の衝撃剥離」『古代』92 pp.79-97
宮城県教育委員会 1969『埋蔵文化財緊急発掘調査報告書概報―長根貝塚―』宮城県文化財調査報告書第 19 集
宮城県教育委員会 1978『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第 52 集

宮城県教育委員会 1980「宇賀崎貝塚」『金剛寺貝塚・宇賀崎貝塚・宇賀崎 1 号墳他』宮城県文化財調査報告書第 67 集　pp.55-182
宮城県教育委員会 1984『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅸ』宮城県文化財調査報告書第 99 集
宮城県教育委員会 1985『中峰遺跡発掘調査報告書』宮城県文化財調査報告書第 108 集
宮城県教育委員会 1986a『今熊野遺跡Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第 114 集
宮城県教育委員会 1986b『小梁川遺跡遺物包含層土器編　七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第 117 集
宮城県教育委員会 1987a『中ノ内 A 遺跡・本屋敷遺跡他　東北横断自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第 121 集
宮城県教育委員会 1987b『小梁川遺跡　七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第 122 集
宮城県教育委員会 1988『七ヶ宿ダム関連遺跡調査報告書Ⅳ　大梁川遺跡・小梁川遺跡　石器編』宮城県文化財調査報告書第 126 集
宮城県教育委員会 1991『舘南囲遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 144 集
宮城県教育委員会 1998『一本柳遺跡Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第 178 集
宮城県教育委員会 2003『嘉倉貝塚』宮城県文化財調査報告書第 192 集
宮城県教育委員会 2006a『中野高柳遺跡Ⅳ－宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関連調査報告書Ⅳ－』宮城県文化財調査報告書第 204 集
宮城県教育委員会 2006b「浦宿 B 遺跡」『東山官衙遺跡周辺地区ほか』宮城県文化財調査報告書第 208 集 pp.47-84
宮城県教育委員会 2007『山居遺跡（縄文時代編）ほか』宮城県文化財調査報告書第 214 集
宮城県教育委員会 2014「８）羽黒下遺跡」『平成 24 年度 東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告Ⅰ』pp.29-32
村越潔 1974『円筒土器文化』雄山閣
村田晃一 1994「宮城郡における 10 世紀前後の土器」『福島考古』第 36 号　pp.47-72
八木光則 1976「いわゆる「特殊磨石」について－中部地方における縄文早期の石器群研究への問題提起－」『信濃』28-4　pp.298-315
山内清男 1961『日本先史土器の縄紋』（1979 年刊行）
山形県教育委員会 1990『押出遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 150 集
山形県埋蔵文化財センター 2017『押出遺跡第 6 次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 227 集
山口博之 2002「第 12 章　陸奥の中世墓－火葬と納骨－」『鎌倉・室町時代の奥州』pp.250-271
山元町教育委員会 2010『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第 4 集
山本暉久 2012「住居跡出土の大形石棒について－とくに廃屋儀礼とのかかわりにおいて－」『縄文人の石神－大形石棒にみる祭儀行為－』pp.135-151

吉岡康暢 1995「東国の都市と物流をめぐって」『中世東国の物流と都市』pp.47-81
吉川耕太郎 2020「３東北地方」『縄文石器提要』pp314-352
吉田泰幸 2003「縄文時代における土製栓状耳飾の研究」『名古屋大学博物館報告』19　pp.29-54
米山一政・森嶋稔 1964「長野県更埴市桑原池尻遺跡調査報告」『上代文化』34　pp.7-25
利府町教育委員会 1987『菅谷 六田遺跡』利府町文化財調査報告書第３集
脇田晴子 1986「中世土器発掘と商品流通　素描」『岩波講座　日本考古学月報 7』 pp.3-6
綿貫友子 2002「中世陸奥国の海上交通と陸上交通」『鎌倉・室町時代の奥州』pp.179-208
Shea,J.J.2006 The origins of lithic projectile point technology: evidence from Africa, the Levant, and Europe. Journal of archaeological science,33,823-846
Vera,A.,Harold,L.D.,Dennis,S,.Paul,G.,Shannon,J.P.M. 2016 How heat alters underlying deposits and implications for archaeological fire features: A controlled experiment. Journal of archaeological science,67,64-79

報　告　書　抄　録

ふりがな	はぐろしたいせき
書名	羽黒下遺跡
副書名	小渕浜地区防災集団移転促進事業に係る発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	石巻市文化財調査報告書
シリーズ番号	第16集
編著者名	佐藤佳奈、傳田惠隆、西村力
編集機関	石巻市教育委員会
所在地	〒986-8501　宮城県石巻市穀町14-1　TEL：0225-95-1111　FAX：0225-22-5160
発行年月日	西暦2021年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	世界測地系 北緯	世界測地系 東経	調査期間	調査面積	調査原因
はぐろしたいせき 羽黒下遺跡	いしのまきし 石巻市 きゅうぶんはま 給分浜 あざはぐろした 字羽黒下	04202	74007	38度 19分 26秒	141度 28分 30秒	2014.11.04 ～ 2015.3.27 2015.4.3 ～ 2015.11.13	9,113㎡	小渕浜地区防災集団移転促進事業

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特　記　事　項
羽黒下遺跡	集　落	縄文時代 前期 中期 古代末～中世	竪穴遺構4基 掘立柱建物跡 1棟 土坑13基 炉跡51基 遺物包含層 3か所	縄文土器・土製品 土師器・陶磁器 石器・石製品 鉄滓・鉄製品 人骨・獣骨・魚骨	(1) 縄文時代前期から中期にかけての大規模な遺物包含層や竪穴遺構。 (2) 古代末～中世前半の火葬遺構。

要約

羽黒下遺跡は、宮城県沿岸部の牡鹿半島中部に位置し、仙台湾に面した舌状丘陵に立地する集落遺跡である。東日本大震災からの復興事業（高台移転）に伴う発掘調査の結果、丘陵斜面から縄文時代前期の竪穴遺構、土坑、炉跡、遺物包含層、古代末～中世前半の土坑などを検出した。

縄文時代の遺物包含層は大規模であり、丘陵の北側・西側・南側斜面に形成されており、縄文時代前期から中期にかけての遺物が大量に出土した。また、下層からは十和田中掫火山灰が検出された。遺物包含層内からは炉跡などが複数検出され、斜面上で火を使用する活動がおこなわれていた可能性がある。

遺物は、多量の土器や土製品、石器や石製品が出土している。特に縄文時代前期前葉から末葉にかけての土器は出土量が多く、その中でも中葉から末葉の土器は本市では類例が少なかったための良好な資料を蓄積することができた。

古代末～中世前半では、丘陵裾部に火葬遺構が配置されていた。火葬遺構は凸形状であり、県北域で確認されたのははじめてである。

石巻市文化財調査報告書第 16 集

羽黒下遺跡

― 小渕浜地区防災集団移転促進事業に係る発掘調査報告書 ―

第 1 分冊　本文編

令和 3 年 3 月 26 日印刷
令和 3 年 3 月 31 日発行

編集　発行　石巻市教育委員会
〒 986-8501
石巻市穀町 14 番 1 号
☎ 0225-95-1111（代）

印刷　株式会社　松弘堂
〒 986-0850
宮城県石巻市あゆみ野三丁目 2-18
☎ 0225-96-5555